

ふる里のむかし

# あじろ

2006

和白郷土史研究会

# 和白地域全景 昭和49年（1974年）



「国土画像情報（カラー空中写真）国土交通省」より合成

# 和白地域全景 平成17年（2005年）



平成17年4月撮影

# 序

私たちの古里和白（和白・美和台・和白東・奈多・三苦校区）の平野は約千年前までは大部分が博多湾の遠浅の干潟であり、高地の山野は、明治・大正のころまでは草刈り場であり、緑肥・薪炭、イカ付け柴の採取場でもありました。

そのうち草原は開墾され、遠干潟には汐止めの土堤を築いては土砂、堆肥、緑肥を運び入れて水田や畑地を作り、又その一部は良質と評判の「和白塩」の塩田を開くなど、ただ一筋に只今の生活のため、更には子のため、孫のため、国のためとの田畑の作り出しが、今日の平野部の姿であります。

学校の社会科に「先祖の苦勞を知ろう」という学習の一場面があります。今日郷土和白の地は急速な都市化により、上述のような父祖の苦勞並びに史跡、伝承の数々がまさに埋没しようとしております。「自分たちの郷土の歴史を知らずには本当の郷土愛は生まれまい、郷土愛なしでは地域社会、ひいては国家への愛情も生まれまい、更に根本的には家庭の融和も浅いものになろう」こうした想いから今のうちにと、当時の和白公民館長 岩崎三男先生（初代会長・故人）、歴史研究家 末信源蔵先生（二代会長・故人）を中心として志を同じくする者が相集まり、公民館の協力のもとに「和白郷土史研究会」を結成し今日に至りました。

和白郷土史研究会の結成後は

第一集 郷土和白の「筑前竹槍一揆」（明治6年）

第二集 ふるさとの昔「石像物語」

第三集 ふるさとの昔「和白塩」

以上三冊を印刷製本し配本希望の方々におわけして参りましたが、第四集は集大成する趣意から、私ども研究会はそれぞれ校区毎の研究班（大字 上和白、下和白、塩浜、三苦、奈多）に別れ、研究の成果を製本し更に以上の五大字を合本製本し発行することに致しました。

この冊子は私どもの雑学と口碑などに基づき編集致しましたので、誤説や失礼な箇所もあることと思います。皆様がたのご叱正とご指導によりまして、更に良きものにして頂きたいとお願いいたしますと共に、この冊子が多少なりとも郷土の皆様方のご参考になればと念ずる次第でございます。

最後に編集発行にあたりましては、各校区自治協議会の格段の御高配、御支援を賜り、又各公民館の並々ならぬご協力を頂きましたことに心から深く感謝申し上げ、厚くお礼申し上げます。

平成18年2月吉日 和白郷土史研究会  
会長 堺 憲一

## ふる里のむかし本文目次

第1章 上和白村の歴史 .....	1
上和白の氏神 大神神社 .....	2
大神神社造営記念碑 .....	2
宮前一号古墳（高美台2丁目） .....	3
上和白 古墳時代（6世紀後半～7世紀） .....	4
香椎廟創建 .....	7
立花城をめぐる攻防戦 .....	8
龍華山 明覚寺（浄土真宗） .....	11
湯谷山薬師堂 .....	13
上和白の石像物のお話 .....	14
貴船神社（貴布祢宮） .....	15
棟札（裏面文） .....	15
上和白村の溜池の古記録 .....	17
上和白村に塩田 .....	17
上和白村略年暦（1） .....	19
筑前竹槍一揆 .....	25
上和白明細書上 .....	26
御免用出夫状況 .....	27
地 券（土地所有権証書） .....	28
西南の役 .....	29
参戦記念奉納額 .....	30
国道更生路築道と感謝状 .....	31
大蔵溜池に係わる紛争 .....	32
和白高等小学校創立 .....	36
上和白略年暦（2） .....	37
高藤溜池増築工事 .....	40
豪雨のため高藤溜池堤防大決壊 .....	40
高藤国有林払下げ .....	42
上和白耕地整理事業 .....	42
上和白の農業 .....	45
上和白大水害及び大蔵池余水 .....	46
終戦前後 .....	46
和白ゴルフ場 .....	47
和白東校区 .....	48
史伝、口伝、風物詩 .....	51
上和白古墳 .....	53
上和白少年団 .....	55

めいらん（螟卵）採集の思い出 .....	55
蛭狩り .....	56
春の小川 .....	56
和白の晩春 .....	57
<b>第2章 下和白村の歴史</b> .....	<b>59</b>
下和白の地名 .....	60
下和白の遺跡と古墳 .....	60
神功皇后 船繋ぎ松 相ノ浦の地名 .....	62
唐ノ尾の地名 .....	63
さやの神 .....	63
長楽山円相寺と相ノ浦 .....	63
安河内虎昌、下和白を領有 .....	64
下和白・大神神社 .....	65
殿様道 .....	66
相ノ浦越し（道天越し） .....	66
四十ヶ浦 .....	67
安河内家邸内の不動明王 .....	67
相ノ浦香椎神社 .....	67
若宮様 .....	68
下和白の庚申堂 .....	68
蒲池開 .....	69
安河内家八十婆さん .....	69
下和白の六地藏 .....	69
和汐小学校 .....	70
和白村の役場 .....	70
和白駅 .....	71
道天池 .....	72
許斐硝子工場創業と和白駅前地区 .....	72
筑前新宮駅 .....	73
和白駅前大師堂 .....	74
福岡特殊ガラス工場創業 .....	74
下和白の文教施設 .....	75
美和台の誕生と名称の由来 .....	76
<b>第3章 塩浜村の歴史</b> .....	<b>79</b>
塩浜ことはじめ .....	80
桂 潟 .....	80
塩浜の歩み .....	82
桂ヶ崎山（塩浜の裏山）での戦 .....	82

個人による製塩始まる。 .....	82
久保田家先祖塩浜に來住 .....	82
塩浜村の発足と五丁の名の由来 .....	83
元禄築堤工事始まる。 .....	83
黒田新續家譜 .....	84
塩釜の歌 .....	84
龍王祠 .....	85
和白小学校旧正門東側の庚申塔 .....	86
中村南軒先生寺小屋を開く .....	86
大暴風雨 .....	86
御達の写 .....	87
(欠略)取行心得 .....	88
大水害 .....	90
大暴風 .....	90
沖の堤防着工 .....	90
堤防大事業完了 .....	93
和白塩 .....	94
我が国初の全国戸籍調査 .....	94
観瀾小学校開校 .....	95
朝鮮蕪臺(菜種)の先駆者 太田和平 久保田伊七 .....	95
塩浜「かねんて」 .....	96
五丁川の「塩浜橋」 .....	96
和白村発足 .....	97
博多湾鉄道株式会社発足(宇美～西戸崎).....	97
奈多～土井間、奈多～西戸崎間着工 .....	97
和白小学校第1号校舎新築 .....	98
塩浜唯一の池(道天池)竣工 .....	98
和白小学校 第2号校舎増築 .....	99
製塩業終る。 .....	99
和白小学校 第3号校舎増築 .....	99
宮地嶽(津屋崎)線着工。 .....	99
海の中道道路着工 .....	100
新開(一ノ開)に試験飛行場開設。 .....	100
7月末 大暴風雨 .....	101
新開にキャバレー開業 .....	101
九世 大山忠平翁の慶辞 .....	101
新開築堤記念碑 .....	102
県道改修 .....	103
宗教・民俗・文化 .....	104
四社神社 .....	104

弘法大師像祭らる。	106
地藏堂の建立	106
波切不動尊	107
神理教神功教会発足	108
観世音堂の建立	109
口伝、風物雑記	110
久保田市右工門氏の話、二題	110
大正、昭和初期の「塩浜青年会」	111
青年宿	112
共同風呂のこと	113
江切り	114
競犁会	115
<b>第4章 三苫村の歴史</b>	<b>117</b>
・三苫の概要	118
1．三苫の由来	118
2．三苫和泉守基宣と森の屋敷	119
3．権宮司三苫氏と三苫郷	120
4．三苫の現代	121
遺跡と古墳	124
1．三苫永浦遺跡	124
2．三苫京塚古墳	127
3．轡水の由来	128
神社・寺院・史跡石造物	129
1．三苫綿津見神社	129
2．竈戸神社	132
3．須賀神社（舞神社）	132
4．黒津神社	132
5．若宮社	133
6．稻荷社	133
7．三寶大荒神碑	133
8．轡納山託乗寺	133
9．般若寺	135
10．久野貞右衛門重時（圓嶺宗覺居士）の墓	135
11．三苫虚空蔵菩薩	136
12．観音堂	138
13．文珠菩薩	138
14．青面金剛碑	139
15．唵縛日羅夜叉吽碑	139
16．七橋	140



17. その他史蹟石造物 .....	140
綿津見神社の仏像群 .....	142
三苦水道・三苦島 .....	144
三苦に塩田を開く .....	146
三苦の溜池 .....	148
三苦宮の下護岸工事 .....	150
三苦の農業 .....	151
1. 水田 .....	151
2. 養蚕 .....	152
3. 苺 .....	152
4. 足踏式脱穀機と唐箕 .....	154
5. 競犁会始まる .....	154
6. 三苦の耕地整理事業 .....	155
7. 三苦土地改良事業 .....	156
博多湾鉄道汽船株式会社 宮地岳線 .....	158
<b>第5章 奈多村の歴史</b> .....	159
古代、中世、近世 .....	160
1. 奈多の地名の由来 .....	160
2. 奈多に伝わる古歌 .....	161
3. 丸瀬山 .....	161
4. 海の中道 .....	162
5. 三郎天神御縁起抜書 .....	163
6. 志式神社 .....	164
7. 海印山 西福禅寺 .....	168
8. 奈多の漁業・農業 .....	171
9. 奈多の七不思議 .....	172
10. 筑前八所松原 .....	172
11. 博多八景 .....	173
12. 奈多の宝塚 .....	174
13. 奈多落雁 .....	174
近代～現代 .....	180
奈多の小字 .....	180
<b>資料編</b> .....	203
和白塩 .....	204
ふるさとの石像物.....	217
歴史比較年表 .....	229
和白郷土史研究会のあゆみ .....	232



## 上和白の氏神 大神神社

鎮座地 福岡市東区高美台二丁目式十四番号

御祭神 おおものぬしのかみ  
大物主神

大和の国一の宮、おおみわ大神神社の御祭神、かんじょう大物主神を勧請し奉る。

御由緒 仲哀天皇（14代）の皇后、じんくう神功さま、御征西の節、大和（奈良）の将兵この地に、兵をとどめた時、奈良からお迎えした神様。

永禄10年9月8日、宗像大宮司氏貞、このみ許斐左馬大夫氏備の軍勢が和白に討って出て近辺を放火した。立花城代、ぬるゆ怒留湯入道は馳せ向かって攻め合い、両方共二百余人討ち死にしたという。夕方になって、宗像の軍が許斐岳へと引きとると、怒留湯は夜営し、翌9日、立花たじまのかみあきとし但馬守鑑載と共々立花城へ帰陣したという。この時、怒留湯が宿陣した所が、和白の山上に陣所の跡として残っているとのこと。[筑前国続風土記による]



大神神社の参道正面

## 大神神社造営記念碑

鎮座地の和白町大字上和白字宮前四九五番地は、福岡市の町名変更により、福岡市東区高美台2丁目24番1号となったが、その周囲は団地化し昔の面影を留めない。この時、神



造営記念碑

住の森蔵を保持するために氏子一同赤誠の浄財をもって神域の一大整備を行った。

神域の境内は当初291坪であったが、明治41年、国有林300坪の払下げを受け、更に隣接地を入手し、神社有地総面積約2056坪（6799平方米）となった。

古来度々再建または修理して今日に及ぶが、昭和39年拝殿東側に埋立て工事を施工し、鉄筋コンクリート流れ造り、瓦葺神殿

1.5坪、中殿2.5坪、渡殿5坪、内陣、更に拝殿の移転新築等々、氏子一同赤誠の浄財をもって殆ど完備した。翌昭和40年4月18日、厳粛且つ盛大裡に御遷宮奉祝の儀が執り行なわれた。

『...右の趣旨に基づき氏子120名の氏名を刻し、大神の御前に奉る。氏子繁栄 昭和51年10月吉日 大神神社 氏子中』



大神神社の御神殿

## 宮前一号古墳（高美台2丁目）

位 置 大神神社境内、旧神殿跡地のうしろ

この古墳は、西暦6世紀末に作られた墓と推定され、今から約千四百年前に築造された横穴式古墳である。昭和45年、高美台団地造成に先立ち福岡市文化課の手で発掘の結果、かつての昔、盗掘されたものの、今もなお古墳内部に残された品物から、武人の墓と想像され、馬具、直刀、黒曜石の矢じりの他、金環、土器の出土品やガラス玉、水晶の切子玉等38個が発見された。

更にまた、団地内には登り窯、古代製鉄所跡、古墳8基も発見されたことから「大和の将兵が駐在の折、大和の国一の宮大神神社を勧請したるものと伝う」の御由緒と機を一つにする。



宮前一号古墳

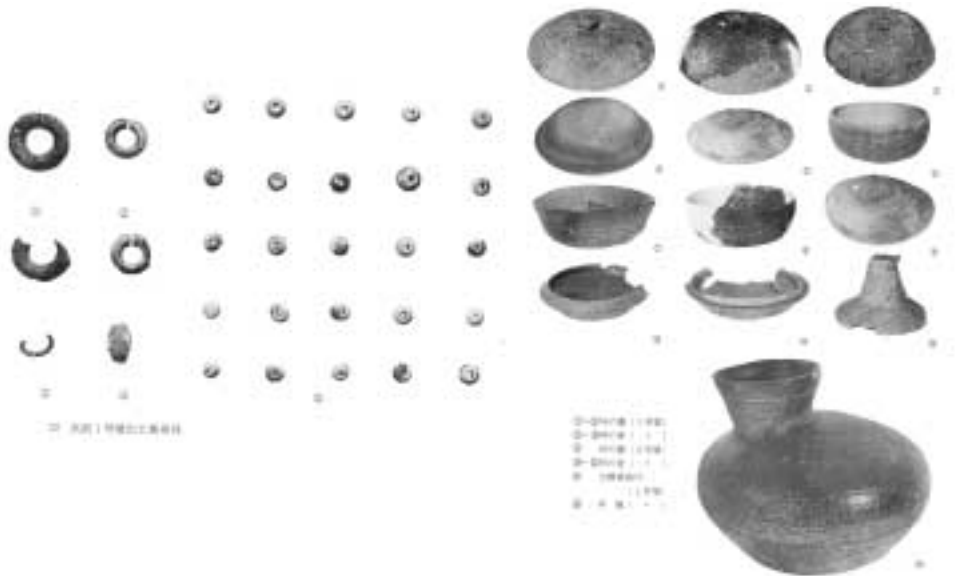
この1号古墳の位置は、旧神殿跡地に係っていることから、当地の氏神様に関係ある古墳ではないかと思われる。(宮前古墳の碑文より)

## 上和白 古墳時代（6世紀後半～7世紀）

上述の1号古墳を加えて宮前古墳（3基）高見古墳（4基）猿塚古墳（1基）及び和白ゴルフ場内の3基を加えて11基発掘されている。

### 当古墳の特長

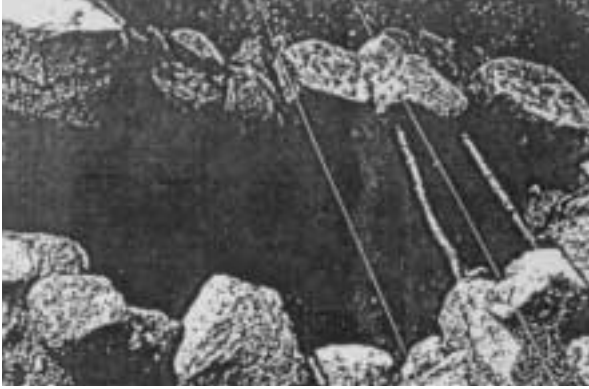
古墳についての福岡市文化課の報告によると、他地区に比し、馬具類が多数出土していることから、武人の墓と考えられ、然も世襲の武人の軍団ではなく、軍事的な目的を持った集団であり、発掘された武器類は誠に簡素で実戦的である。年代的には、6世紀の後半から7世紀までの約150年間の遺跡であり、さらに今から約1500年前の古墳でもある。



宮前一号古墳の出土品（金塊、まが玉、なつめ玉、土器）



高見古墳玄室、第三号墳



高見古墳玄室



宮前第三号古墳案内板



古墳の終期か、製鉄跡地の発掘始まる（昭和46年6月）

## この時代の日朝関係

「神功皇后、御征西の節、大和の将兵、この地駐屯の折、御祭神を勧請し奉る」との御由緒を頭に思い浮かべながら、今から約1400年前ごろの日本と朝鮮半島の間を見れば、

- 527 継体天皇、近江毛野臣、衆6万を率いて、新羅に破られた任那<sup>みまな</sup>を救おうとする。筑紫の君、磐井は近江臣の兵をさえぎり、筑紫の御井に於いて戦いに敗れる。[古事記・日本書紀]
- 528 その子葛子、死罪を免れるため、粕屋屯倉<sup>みやけ</sup>を奉る。[古事記・日本書紀]
- 532 任那の金官国、新羅に降る。[三国史記]
- 536 （宣化）諸国の屯倉の穀を筑紫那の津に運ぶ。[日本書紀]

562 新羅、任那官家（加羅諸国）を支配する。[三国史記]

591（崇峻4年） 新羅討伐に派遣された2万の軍隊は筑紫に滞留。595年、推古朝になると約5ヵ年駐留の上引き上げる。

600（推古8年） 再び新羅攻撃を計画し、境部臣（馬子の弟）を大將軍とし、万余の兵力で遠征。新羅は白旗を揚げ、南加羅等六城を返還した。[日本書紀]

602（推古10年） 来目皇子（<sup>くめののみこと</sup>聖徳太子の弟）軍衆2万5千人を率いて筑紫の島部にいたる。渡海準備中発病、翌603年2月ご逝去。

603（推古11年） 聖徳太子の異母弟、<sup>たいま</sup>当麻皇子を派遣するが、渡海中止となる。[日本書紀]

623（推古31年） 新羅の調（みつぎ・税法の一種）を催促するため、日本軍渡海。



朝鮮半島 任那の金官国（532年）

662（天智1年） 8月、阿曇比羅夫、豊璋に兵力5千人、矢10万、糸500斤以上の多量な軍需品を送る。

663（天智2年） 3月、上毛野君、<sup>はしひと</sup>間人連巨勢、阿部引田臣、大宅臣計2万7千の出兵。8月27日～28日、日本の水軍は唐の水軍と<sup>はくすきのえ</sup>白村江に戦って大敗する。

664（天智3年） 対馬、壱岐、筑紫に<sup>さきもりとぶひ</sup>防人烽を置き、更に筑紫に水城を築いて外敵に備える。

以上を概観すると、6世紀後半は任那の回復に、7世紀は百済の救済に併せて任那（加羅諸国）の奪回を図り、特に7世紀に入れば、次々と万余の兵力を博多湾沿岸に集結、出動するも、遂に大敗、敵国の侵入に備えて防備を固めたが、敵は常に新羅国であった。



筑紫の水城（堤防）

## 香椎廟創建

723（養老7年） 神功皇后の御神託により聖武天皇の724（神亀元年）に香椎の地に、香椎廟を創建する。

### 和白郷 大神大明神

香椎ノ宮旧記（730頃か）に、和白郷70町、三苦郷70町、三代郷30町、原上郷40町等々があり、その後、龜上天皇の文永5年（1268）4月4日、詔ありて当宮の修復料として豊後国豆田に200町の田地を給った。「和白」の地名、古文書に初めて見える。

「神祇記聞」に、香椎の末社として古宮大明神、武内大明神、大神大明神、志賀大明神、六所権現、二神大明神等々13の末社名あり。

737（天平8年） 香椎宮に新羅の無礼を奏上、筑紫人に壱岐、対馬を守らせる。

759（天平宝宇3年） 6月、太宰府に新羅討伐の用意をさせ、9月、新羅征討のため、諸



香椎宮本殿



国に船500艘を造らせる。博多大津と、博多の名がはじめて正史に見える。

761 船393艘、兵4万7千人を動員し、訓練する。

762 11月、香椎宮に奉幣し新羅征討軍を訓練する。

768 (神護景雲2年) 2月、筑前に怡土城をつくる。

774 (宝亀5年) 3月、新羅大使、太宰府に着くも無礼のため退ける。4世紀以来、8世紀に至るまで、なお新羅国を敵国視し、上京を許さず。

804 (延暦23年) 第11回遣唐使に従い、空海、最澄の二僧侶入唐。翌805年、最澄(伝教大師)花鶴ヶ浜に上陸し、立花山に独鈷寺を創建。彦四郎の上府に滞在中、その間に三苦を訪れて、般若寺を建て木佛を残されたと伝う。



最澄と千年家(横大路家)

## 立花城をめぐる攻防戦

1330 (元徳2年) 豊後の大友家6代目、大友貞宗の嫡子左近将監貞載、立花に城を築い

て立花を氏とする。二代目左近宗匡、三代目山城守親直、四代目因幡守親政、五代目兵庫頭宗勝、六代目左近将監鑑光、七代目但馬守鑑載(道雪)[戸次軍談による]



立花城の石垣

1567 (永禄10年) 9月8日 宗像氏貞、許斐左馬大夫氏備も大友に叛き、毛利に心を寄せて立花城を攻め、立花鑑載、怒留湯融泉と団の原にて戦うが、敗れて赤間城に退く。[筑前国続風土記]

## 和白の戦い

1567（永禄10年） 上下両村に分かれる。永禄10年9月8日「宗像大宮司氏貞、許斐左馬大夫氏備が勢、ここに打ち出で、近辺を放火す。立花の城代、怒留湯入道、馳せ向かって攻め戦う。双方討ち死にの土雑兵共に二百余人あり。黄昏に及んで宗像、許斐岳を目指して引とりければ、怒留湯はその夜、和白に陣取って、翌9日、立花但馬守鑑載と同道し立花城も心もとなしとて、帰陣しける。この時、怒留湯が宿陣せし所にや、和白の山上に陣所の跡残りり」[筑前国続風土記]

1568（永禄11年） 2月、立花但馬守鑑載は大友に反し毛利に通じた。「西の大友」と重視されながらも、大友宗麟の悪逆無道なことを怨み、反大友の高橋鑑種に付いた。4月6日、更に毛利軍の清水、怡土の原田、鑑種の衛藤尾張守の援軍を得た総勢一万余の軍勢は立花山の東西両城に溢れた。山中の各所に兵力を分散させ、周辺の村落にも防御の陣を布いて大友の攻撃に備えた。[筑前戦国史]

4月24日、戸次、吉弘の大友軍は兵力三万余を以って、3ヵ月に亘って攻め立てたが、その守りは強固であった。鑑載は策を立て、立花方の重臣、野田右衛門大夫の裏切りを得て城中になだれ込んだ。無念の鑑載は従者十数名と共に、新宮方面に逃れようとしたが果たせず、遂に青柳の孤崎で自害して果てたという。



筑前戦国地図

1569（永禄12年） 毛利軍の軍勢は宝満の高橋鑑種の救援も兼ね、立花城攻略のために三万余の陸上軍と四百艘の兵船をもって、4月、赤間、青柳方面及び香椎ヶ浦、和白淵、新宮浦、花鶴浜より続々と上陸して立花城へ進撃包囲を開始した。立花城の三城将からの急報を受けた大友軍は、佐嘉の龍造寺と急遽、和を結び、急ぎ反転。四万の兵力をもって博多付近に集結し、立花城を占拠した毛利勢と多々良川をはさんで対戦すること6ヵ月に及んだ。（中略）11月、突如、本国の毛利元就の命「全軍、急ぎ本国へ」の報を受け（詳細省略）曇まじりの11月5日、寒風下に毛利全軍決死の退却をしたが、追撃の大友勢に討ち取られた首級は3,491に及んだという。[筑前戦国史]

上和白の大神神社は、永禄10年の戦いの時、兵火にあったという説もあるが、もし兵火にあったとすれば、永禄12年若しくは永禄11年が正しいのではないか。

## 立花道雪、立花城督となる

1571（元龜2年） 正月、戸次鑑連<sup>あきつら</sup>、筑後赤司城より立花城に着任し、この後、立花姓を名のり、号名と合わせて「立花道雪」と称す。所領、表粕屋（48ヶ村）裏粕屋（38ヶ村）<sup>むしろだ</sup>筵田郡（8ヶ村）<sup>あじさか</sup>三井郡鱒坂、山鹿郡小坂、三池郡新開、玉名郡小島 与力衆21組、麓衆・院内衆・奈多衆・三苫衆・池田衆・土井衆・多々良衆・八田衆・薦野衆・西郷衆・筵田衆・三代衆・原上衆・山田衆・上下府衆・米多比衆・江辻衆・猪野衆・久原衆・筥崎衆。

うち、麓衆とは立花城をとり巻く下原、平山、和白を指し、立花口は立花氏の菩提所、養老院（梅岳寺）があるため院内衆と呼ばれた。

## 道雪公、大神神社に燈明田奉納

1571（元龜2年） 「城主立花道雪公より燈明田二反八畝十歩御寄付ありたりと」[大神神社碑文より]

[上和白村文書] 明和9年（1772）の名寄帳に「とふる田1反4畝5歩」「とうろう田1反4畝5歩」とあり。現在、神社の東南約300mの所にあり、但し終戦後の法改正の結果か、現在ゴルフ場敷地となる。

## 大友勢、耳川の戦いに敗退

1578（天正6年） 11月10日、大友勢は耳川の戦いで島津軍に惨敗する。そのため、大友の大將11人、三老七族ことごとく戦死、島津軍の得た首級3,500余級に及んだという。[西国盛衰記より]

## 道雪、止むなく龍造寺と和議を結ぶ

1579（天正7年） 耳川の大敗を知ると、龍造寺、早良郡を侵し博多に今にも迫らんとする勢いとなり、道雪は止むをえず、博多筥崎の浜において和を取り交わし、筑前15郡のうち西南部の9郡を龍造寺領に、東北部の9郡を大友領とすることで、和議成立した。[筑前戦国史より]

冬、志摩の柑子岳城督、大友の木付鑑実、城を開き立花城下の角の坊に入る。志摩の小金丸氏（虎政）も、木付鑑実氏と行を共にし立花城に入城したと思われる。

参考 「立花道雪公に仕えて大功あり」の文にはじまる家系図は誠に多い。事実、道雪公、立花城に入城は、元龜2年1月（1571）である。

## 立花、大塚、五重塔、立花井

1581（天正9年） 「立花と申す所に、古き大塚あり、その脇に、五重の塔あり。何某の墓と知らず。古老の言い伝えに、中国勢、立花城に攻め寄せんとて山に陣どる。立花道雪公も又、ここに陣をとり城を構え給う処、今も立花<sup>りゅうげ</sup>と<sup>い</sup>伝<sup>は</sup>なり。この下に井土<sup>いど</sup>あり。その時、大石を持ち寄り築き上げ、陣屋の用水にとり給う。それ、立花の井土と申し伝う。立花の下に勢を整えたる故に、ここを陣造りと申し伝う」[小金丸 古文書より]

小金丸友吉氏懐古談 1926（大正15年）頃までは、立花の出兵跡の高台に、古墓二十数基が並び、その西下に、大正6年建立の「字高藤溜池増築記念碑」も立っていたが、昭和初年の耕地整理の際、この高台を切り崩し耕地用土に使ったので、記念碑は氏神様へ、五重の塔は明覚寺へ奉納・移転し、その跡地には現在の「上和白公民館（現、和白東1丁目、2丁目公民館）」が建築された。

1587（天正15年） 「小早川隆景公、名島を居城とし給う後は、和白の出兵は畠となる。慶長5年（1600）黒田長政公、入国遊ばされ、翌6年9月、江良久左衛門殿御検使の結果『百姓居屋敷』と仰せつけらる」[小金丸氏文書]

1588（天正16年） 6月15日、立花宗茂公は立花城を離れ、6月17日、全員柳河に入城した。「立花<sup>むねとら</sup>統虎公、柳川に御移封に当たり、虎政、請うて農人となり、姓を改め小金丸と称す」[小金丸氏家歴伝による]

## 龍華山 明覚寺（浄土真宗）

（寺地）東区和白東一丁目36-6

（宗派）浄土真宗 本願寺派

（由緒）1588（天正16年）立花城主 立花宗茂公が柳川に移封されると、家臣の小金丸主税之丞虎政は請うて和白の地に下野（農人）した。その子の久左衛門（宗白）は、当時、小字立花<sup>りゅうげ</sup>にあった一草堂を再興し自ら開基となる。1647（正保4年）寺号、木佛を許され、立花に因んで龍華山・明覚寺と称し、仏堂、方三間半と<sup>い</sup>伝<sup>は</sup>えられる。現本堂は、1888（明治21年）4月、第十世圓乗師の代に再建されたもので、六間四面、<sup>くり</sup>庫裡も相前



明覚寺本堂

後に建てられた。[福岡県寺院沿革史による]

思わざる敗戦に茫然自失、敗戦後の混乱の中に、明覚寺の住職第十二世 釈仁性師は、和白公民館運営審議委員として、更にはすすんで青少年育成連合会長として青少年の非行防止と健全育成に地域活動をされた。



明覚寺正門

1958（昭和33年） 時代の要請に応じ、境内墓地として納骨堂を、第一棟、第二棟と建設された。

1975（昭和50年） 親鸞聖人御生誕八百年祭をよき式典として懸案の庫裡くりの改装を行い、聖人ご尊像、梵鐘等の寄進を受け建立整備された。

1980（昭和55年） その都度の修理では最早や無理といわれている本堂は、1888（明治21年）建立されてから百余年を経ており、この修復を門信徒と共々に努力された。

1990（平成2年） 明覚寺の隣接地に団地造成の市計画があることを聞き、この機会こそと、境内内貫通の里道購入 明覚寺の正門確定の必要を痛感し、境内拡充整備を完成した。

故岩崎三男氏の参拝記 「筆者、一日納骨堂にお参りした時、納骨堂ならず涅槃堂ねはんどうとの正式の名を知り、涅槃とは『生死の因果を離れ、すべての煩惱を滅し、如来の法身に帰一する』の語、誠に誠に、佛縁の有り難きを味合い得た一日であった」

2000（平成12年） 前住職 第十二世 釈仁性師は1951（昭和26年）から2000（平成12年）まで約50年間にわたり、若年より法灯を受け継がれ、門信徒の教化に、また数々の事業を成し遂げられ、明覚寺を守ってこられた。平成12年5月14日、継承報告法要式典により第十三世住職 釈英明師に引き継がれた。



納骨堂

## 湯谷山薬師堂

御本尊 薬師如来（行基の御作と伝う）



湯谷山薬師堂

1592年 文禄年間（1592～1596）「盗人、夜もすがら、歩み、最早十里も行かんと申ししに、宮の森をめぐるのみ、遂に村人に取押さえられしと相伝う」薬師堂の横に「一字一石塔」があり、安永3年（1774）の年号が刻まれている。表には「奉納丈乗一部一字一石塔」と記され、裏には「還山自休居士謹書 俗名 当村在安河内孫右衛門」の刻書が入った自然石

もある。明治5年（1872）上和白村抱、薬師山御林〔薬師山 三反 60本（庄屋）安河内孫三〕とあり、薬師堂の手洗鉢に安永6年（1777）当村若者中との刻名がある。

更に薬師堂棟札二葉、一つは再講薬師堂一字（文政11年）庄屋 孫次 大工 小金丸善七 木挽 安河内喜六とあり、もう一枚には、再々講薬師堂一字（昭和29年3月吉日）（部落長）岩崎親雄、（大工）相場愛喜とある。



一字一石塔

地蔵堂（薬師堂の隣）

もと、故船越博氏宅の北側に祭られていた由。

弥勒（ミロク）菩薩堂

筑前国続風土記拾遺に「村の西にありミロク田という田字あり」とある。現在、和白東一丁目30-18の岩崎巖氏宅前に祭られている。

地蔵堂（小金丸清氏屋敷内）

「たちえ」「延命」「ひぎり」地蔵尊三体は、現在、和白東一丁目32-18の小金丸清氏（故人）の屋敷内に祭られている。

## 上和白の石像物のお話

詳しくは資料編を参照

### 和白東二丁目（中和白の西より）の石像

庚申尊天（和白東二丁目）

1750 [寛延3年3月7日刻名]

和白東一丁目より、この集落に入る三叉路に「大木戸」と言われる道幅の広い道路がある。その傍に、明治末年まで、祭られていた庚申尊天である。現在は「明治40年3月、安河内邑次郎建立」の石塔と共に、旧より3m程の安河内鹿良氏（故人）塀内に安置されている。



観音堂（和白東二丁目）

観音堂（和白東二丁目19）

聖観世音菩薩が祀られ、粕屋郡北部新四国千人祭り、第71番札所とあり、御堂前の奉寄進の石灯籠には、天保13年（1842）の年号が刻まれている。

観音堂前は、南向きで風光明媚の広い台地があり、更には、御堂近くに下和白等へ通ずる山道があること、「大木戸」「三叉路でない場所に庚申塔」「観音堂」など、考え合せる時、我々の知らない昔に、纏まりのある集落があったのではないかなどと想像する。

六地藏（和白東二丁目21-18）

現在、安河内 勝男（故人）氏の邸内に、祀られてあるが、お話によると、以前は、字古賀堀におられた由、先代の安河内外蔵さんがお話しておられた。



安河内勝男氏邸内の六地藏

### 和白東二丁目（中和白の東端）の石像

庚申塔「享和三年（1803）八月吉日中和白若者中」とのように、約200年前は、中和

白の東端、は大蔵池（原上方面）へ、には、大神神社經由下原へ、には、「中和白の山道」經由下和白への三叉路に祀られてあった。同じ位置に建立の日清日露戦記念碑（明治43年11月建之）も、建立されていたが、現在は大神神社の境内に移築されている。

幸神天〔寛政12年（1800）庚申10月連中〕さんは、故安河内八郎氏の邸内の庭にひっそりと祀られている。



庚申塔

## 貴船神社（貴布祢宮）



貴船神社

貴船神社の再建は早く、古くから「藤の森」「西の宮」と称され、同境内の自然石の庚申尊天（享和3年）、手洗鉢には宝暦2年（1752）の銘の外、文政元年（1818）貴布祢宮御神殿再建（大工）三橋利右衛門、安政5年（1858）の棟札（高さ95cm、幅20cm）木版の裏面には、御祭神の御威徳記載のほか、以下長文を紹介すると

## 棟札（裏面文）

「そもそも、貴船宮と申すは、人牛馬守護の御神なり、（中略）村人私ども、神を尊び毎月ツイタチ、十五日の日、お汐井をとって参詣します。先年、拝殿のうちを調べましたところ、お汐井砂のため柱根が埋まり、『ウンゾウ』という虫が家の上迄上がり、くち果て候に付き、新規に板張り終わり、年末に六貫十六文支払終わりました。

同年の春 大野畠においてご免踊り、興行仰付。

同年三月 池尻、長裏、免田の三個所の堤（ツツミ）水漏る。普請仰付。

同年八月より、九月半ばまで、戌辰の方に、ホーキ星出で、又、夜の八時頃、丑寅の方にも出



同年秋頃より、長崎、江戸、大阪あたり、コロリ（コレラ）という病はやり、死人が多く出ました。当国ばかり、死人一人もなく、誠にまれなことでした。

同年十月半ば頃、オランダ人博多に参り、太宰府、箱崎に参詣いたしました。

同年霜月廿九日夕、大地震四、五度あり、十二月ツイタチ（一日）夕、四、五度あり、恐縮次第。前代未聞のことであります」

安政5年（1858）の日本歴史年表に「コレラ、長崎に始まり、大阪、江戸と伝播し大惨害となる」とあり、和白の片田舎ながら情報入手は誠に見事。



棟札

## 上和白村の溜池の古記録

文政元年（1818）7月、御免用普請袖帳〔裏粕屋郡上和白村〕記載の一部では

1. 高見堤 [寛文10年（1670）水掛り12町余]
2. 大蔵堤 [寛文12年（1672） " 504町歩]
3. 松原口堤 [延宝年中（1673～1681）] " 1町余水面積450歩]
4. 宮ヶ浦堤 [延宝年中（1673～1681）水掛り1町余水面積210歩]
5. 高藤堤 [天和元年（1681）水掛り12町余水面積1500歩]
6. 後野堤 [寛延年中（1748～1751）水掛り5町余水面積150歩]
7. 高藤堤 [宝暦年中（1751～1764）水掛り8町余水面積600歩]
8. 薬師ヶ浦堤 [安永年中（1772～1781）水掛り5反水面積40歩]
9. 薬師ヶ裏堤 [安永年中（1772～1781）水掛り6反水面積100歩]
10. 免田堤 [天明8年（1788）水掛り4反水面積30歩]
11. 池尻堤 [寛政12年（1800）水掛り5町4反29歩水面積300歩]
12. 大根ヶ浦堤 [文政8年（1825）水掛り10町余水面積970歩]
13. 免田堤 [天保6年（1835）水掛り5反]
14. ほき堤 [不相知（？）水掛り5反余水面積150歩]
15. 永浦堤 [不相知（？）水掛り3反水面積30歩]

以上書き上げた通り、間違い有りません。以上

文政元年7月 上和白村組頭（嘉吉、藤平、利市）

同村庄屋 孫次

旧和白町で最も古い池は、大字下和白（現美和台）にある四十浦池で、今から約350年前（1650年頃）の古池。二番目、三番目は、大字上和白（現高美台）に現存する高見池で約325年前（1670年頃）、大蔵池は高見池より2年おくれの（1672年）で、四番目は三苦の釘浦池（クギノウラ）。（粕屋郡誌より）

## 上和白村に塩田（約330年前）

「塩銀上納」と言い、藩に税金を納めていた約330年前ごろの塩田の面積は1町3反7畝歩であった。

自分のうちの塩は自分でとの自給自足の心掛けか、上和白の「汐入、浜久保、浜田、唐の尾」などの水田から、塩釜に使用した「焼け石」が多数出土している。ところが事実、

製塩し納税した確かな証拠として、小金丸種尚氏所蔵の古文書の中に「塩税上納書」が12枚、34ヶ年に亘り保存されていた。その「塩銀上納済証」は、万治4年（1661）に始まり元禄7年（1694）までの34年間は、確実に「塩作り」をしていたが、元禄7年をもって、塩田を水田に造りかえた。

塩田を水田に御成り候之事

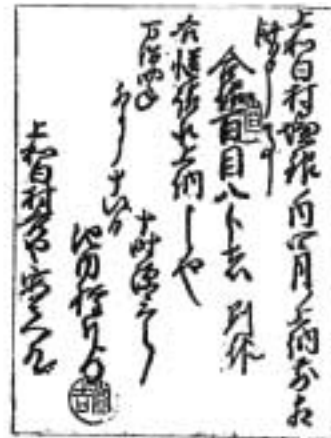
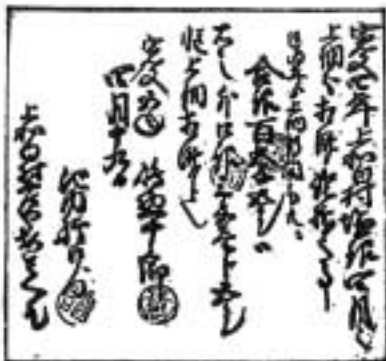
田	数	一町三反七畝歩
浜田内田	数	八反三畝二十三歩
浜田古川開田	数	一反八畝十九歩
沖むた田	数	三反十歩

右は元禄七年戊の七月七日

田尻 彦右衛門様代  
伊藤 安之丞 様庄屋 彦三郎



万治、元禄時代の塩田の位置図



寛文四年上和白村塩銀買  
上納分相済証之事  
但書是書上納新州書  
合銀百五十五分  
右ノ外御銀三交本五厘  
左ノ上納相済也  
寛文五年 嶋 勝十郎  
買十石 池田屋 上門  
上納分相済 伊藤 彦三郎  
\* 伊藤 彦三郎 (和川家系)  
\* 寛文五年 (六六五年)  
一 抄 百五十年前

上和白村塩銀買上納  
相済申す事  
合銀百八十分  
右ノ外に請取上納申す也  
万治四年 十野 源三郎  
買十石 池田屋 上門  
上納分相済 伊藤 彦三郎  
\* 万治四年 (一六六二年)  
\* 小金丸彦右衛門 (伊藤)  
(別名 彦右衛門)

この文書は、上和白村の庄屋、小金丸彦三郎さんが、黒田藩の役人、田尻氏と伊藤氏に提出した書類で、場所は位置図のように和白川の中流周辺及び下流で、現在の浜田、浜久保、二反田の一部に相当する。更に、沖むた [現在の和白3丁目 (和白駅周辺)] 水田は元禄7年（1694）頃は、上和白分であり塩田であった。

## 上和白村略年暦（1）

古文書、諸記録中、上和白村に係る重要と思われる事項を記載する。

- 1567（永禄10年）9月5日団の原に戦い、宗像勢敗れ退く、  
9月8日宗像勢、和白に進み戦い、夕刻引き退く、
- 1568（永禄11年）立花鑑載<sup>あきとし</sup>大友に反し戦うも敗れて自刃す、[筑前戦国史]
- 1569（永禄12年）毛利軍、立花城を占拠し、反撃の大友軍と立花城下、多々良川周辺に戦うも、11月本国に変あり、毛利軍寒風下引き退く、[ " ]
- 1571（元龜2年）1月、立花道雪、立花城に入る、  
立花道雪、大神神社に燈明田[2反8畝10歩]を奉納す。
- 1578（天正6年）大友勢、島津軍と耳川に戦い大敗す。
- 1579（天正7年）龍造寺の諸軍に対し、道雪公止むなく博多箱崎に於いて和議を結び筑前15郡のうち、西南部の9郡と龍造寺領に、東北部の6郡を大友領とすることに決定、[筑前戦国史]
- 1585（天正13年）立花道雪、三井郡北野の陣中で没す（73才）
- 1586（天正14年）7月、島津軍、岩屋城を攻め、高橋紹運大いに戦い、自害し果つ（39才）  
7月、島津軍、立花城下にせまり香椎廟を焼き、秀吉の諸軍来るの報により退く、立花宗茂、秀吉の命により柳川城に入る、
- 1587（天正15年）小早川隆景、名島城に入り立花城を端城とする、
- 1602（慶長7年）黒田長政、江良久左衛門を検使とし来たり、立花出城を百姓居屋敷とする、
- 1644（正保元年）大神神社の御神殿を再建す、[小金丸文書]
- 1647（正保4年）小金丸久左衛門（宗白）龍華山、明覚寺を開山すという、この時、寺号・木佛を授かる[福岡県寺院沿革史]  
11月御遷宮（壹貫五拾目）奉納額（十五匁）
- 1661（万治4年）上和白村塩銀上納金たしかに上納候也の領収文書が、この年から34年間、12枚保管されてある、（小金丸文書）
- 1670（寛文10年）旧和白町内、四十ヶ浦池に次ぐ第二の古池[高見池、池面積4反]を構築す、（上和白事績綴）
- 1672（寛文12年）上和白村字大蔵の古田をつぶし、下府村、下和白村、上和白村三ヶ村養水のため溜池を築立（中略）以降三ヶ村は、この養水により生活す、[大蔵溜池築立古文書]

上和白村、下府村、下和白村三ヶ村共同の大蔵池をつくる。裏粕屋第一の大池なり。



大蔵溜池の見取図

- 1672 (寛文12年) 獅子・猿田彦 奉納 (小金丸文書)
- 1681 (天和元年) 高藤池構築 (池面積5反歩) [上和白村古記録]
- 1694 (元禄7年) この年まで34ヶ年間に亘り、納税を果たした上和白塩田の記録あり
- 1695 (元禄8年) 弥勒堂、古くは浜久保の大石の傍に有り、この年に建立すと 施主奈多浦 蔵の名あり、
- 1706 (宝永3年) 大神神社拝殿再建 (大工) 末松九兵衛清久、薬師堂再建 [境内に湯池あり、石佛を番地藏と言ひ伝う] とあり (大工全上)
- 1707 (宝永4年) 旧拝殿手洗石 (若者中) 自然石
- 1718 (享保3年) 庚申尊天 (初期は小字立花の貴船社の境内に創築、現在は大神神社の境内に移設) 昭和2年耕地整理により大神神社の境内に移設する、



神社境内に移設の庚申尊天 2体

- 1720 (享保5年) 大神神社神殿再建 (庄目) 小金丸勘平外6名  
貴船神社神殿再建 (庄目) 小金丸勘平外5名
- 1732 (享保17年) 天和2年 (1616) より五代に亘り小金丸氏は庄屋役を相勤め、享保17年 (1732) より明治初年まで安河内氏、庄屋役を相勤むという [小金丸文書]
- 1748 (寛延元年) 大神神社御遷宮祭 (鹿子ふき替) 清原相模守

- 1750（寛延3年）庚申尊天像（3月建立）和白東二丁目大木戸にあり、
- 1752（宝暦2年）貴船宮手洗鉢に宝暦2年の銘あり
- 1755（宝暦5年）高藤池構築（池面積2反歩）
- 1777（安永3年）薬師堂隣に「当村住安河内孫左衛門」の謹写の「一字一石塔」あり
- 1800（寛政12年）幸神天「10月若者中」の銘の庚申天和和白東二丁目東端、故安河内八郎氏邸内にあり、
- 1803（享和3年）庚申尊天「中和白若者中」和白東二丁目東三叉路ありしを氏神様の境内に移す、
- 1783（天明3年）絵馬奉納（氏神様へ）
- 1791（寛政3年）鳥居「施主氏子中」奉献とあり（庄目 安河内直助）
- 1794（寛政6年）大神神社御遷宮（新宮浦 稲光 長門）
- 1798（寛政10年）弥勒堂再建（大工）下和白藤原伝平
- 1807（文化4年）3月、石燈籠（大神大明神）2基（施主）小金丸〇〇〇貞、
- 1812（文化9年）3月、石燈籠（施主）  
（施主）小金丸佐吉種久
- 1813（文化10年）3月、石燈籠寄進2基  
（施主）安河内〇〇〇資（施主）  
安河内利〇〇〇、

以上、文化4～10年の間の5基は、昭和39年御神殿の移築まで、御神殿の周囲にあって守護された石燈籠である。

本文中の は、早や約150年以上の野ざらしのため、判読不能を示す。



大神神社 御神殿周囲の石燈籠

- 1817（文化14年）大神神社井土（井戸）並び、家屋建立（庄目）安河内孫次（大工）三代村三橋利右衛門
- 1818（文政元年）大神神社拝殿再建（庄目）安河内孫次（大工）三橋利右衛門
- 1822（文政5年）大神神社石燈籠
- 1824（文政7年）大根ヶ池構築（池面積3反2畝歩）  
2月、石燈籠奉納（大神大明神）2基（施主）船越利平、船越與平

造成作業開始前（昭和44年）までは、拝殿は参道より約13mの高台にあり、その拝殿の前の階段両側に石燈籠を建立。

註)

写真中、2基の石燈籠の間に高低差約13mの石階段があった。また、写真右端の箱型の位置が「井戸」である。



現在の大神神社境内



大神神社見取図（造成前）

1846（弘化3年）石燈籠、（大神大明神）（施主）安河内八〇利〇

1858（安政5年）貴布祢社再建〔氏子中（庄屋）安河内孫三〕再建にあたり、奉納文を棟札に記し奉る（本文P15、16参照）

1873（明治6年）拝殿改築

1875（明治8年）御神殿葺替え奉賛

1876（明治9年）絵馬奉納（石橋山の戦）参宮同行8名

1879（明治12年）拝殿再建（施主）村中（祠掌）稻光稔（棟札裏面文一後記）（大工）秦 喜作

1880（明治13年）1月絵馬奉納二面〔厳島神社、合戦図〕（奉納者）戦地軍夫中43名列記

1883（明治16年）1月絵馬奉納〔四国五台山〕参宮同行3名

1887（明治20年）一の鳥居 奉納（産子中）

1888（明治21年）大蔵溜池築堤（1）紛争経緯（2）嘆願（3）約定6ヶ条〔詳細は本文P33参照〕

1890（明治23年）大蔵溜池の取魚事件9月23日上和白有志取魚のところ、異論あるに依り和白村駐在所原田巡查に訴う。[詳細は上和白事績綴参照]

1899（明治32年）編入願い（大神、貴船両社）

当社土地山林、左記事由により再び境内地に編入  
許可下さるよう、実測図を相添え願上候也

（社掌）稲光 稔

（氏子総代）安河内利三郎、小金丸六郎、

小林乙吉、

内務大臣候爵 西郷従道殿

農 商 務 大 臣 曾根荒助殿

[詳細は上和白事績綴参照]

1902（明治35年）大神神社御神殿葺替え（要費用134円71銭）

1903（明治36年）和白尋常小学校新設

2月5日付（発農34号）蚕室、蚕具の件

1904（明治37年）博多湾鉄道株式会社による開通

1905（明治38年）幟奉納（日露戦勝記念8名）

1906（明治39年）薬師ヶ浦山へ日露戦勝祈念林を造林

[明治36、37、39年は本文P35を参照]

1908（明治41年）大神神社境内地拡張（300坪）明治当初の境内面積291坪、明治41年  
国有林300坪の払下げを受け、更に隣接地を入手し神社有地総面積6,799平方米  
（2,056坪）となる。大神神社の報告文による

1910（明治43年）日清日露戦役記念碑、11月建立

1911（明治44年）新橋架記  
念碑（進農会）3月建  
立

神社合併願い 貴船神  
社を大神神社境内地に  
移設



上和白位置図



- 1912 (明治45年) 和白高等小学校跡碑文 [詳細は本文 P 36を参照]
- 1913 (大正2年) 4月拝殿前石段 (16段) 奉納 (初老賀7名)
- 1917 (大正6年) 字高藤溜池増築記念碑 10月吉日 (当初) 上和白公民館玄関附近
- 1919 (大正8年) 拝殿、御神殿葺替え、遷宮際 戦役記念碑 [大正3年～9年 (1922)]  
高藤国有林払下げ記念碑 (1923)
- 1921 (大正10年) 宮の前石橋架設記念碑、4月、上和白青年支会、(当初) 氏神に一番近い和白川上流
- 1925 (大正14年) 貴船神社、大神神社境内地へ  
庚申塔 (字立花1089)(中和白木戸より) 二体、境内地  
遙拝台建立 (61才以上16名)  
石燈籠奉納 (小林大右衛門)
- 1926 (大正15年) 6月 縄掛石 (八尋 弘次郎 (旧姓小林))
- 1927 (昭和2年) 7月手洗鉢大石奉納 (安河内宗吉)
- 1928 (昭和3年) 村社へ昇格 (神饌幣帛料受領)
- 1933 (昭和8年) 御神殿葺替 (社掌 稲光種麿)  
二の鳥居、4月建立 初老賀 (小金丸重三、三六外8名)  
獅子台座、10月、六十賀 (大吉、邑次郎)
- 1942 (昭和17年) 神社裏階段 (コンクリート) 初老賀 (7名) [紀元二千六百二年]

## 筑前竹槍一揆

1873（明治6年） 福岡県の人口約43万人中、一揆参加者約30万人

当時の上和白の戸数62軒、一揆参加者73人

明治6年6月16日、嘉麻郡高倉村から発生した農民の一揆は、筑豊を初め宗像、粕屋と全県下30万人を巻き込み、博多・福岡部、県庁になだれ込む大紛争となった。「上和白事績綴」の中から上和白の一揆のことを一部紹介する。

### 上和白の保長からの報告書（その1）

明治6年7月 十七小区 粕屋郡上和白村

「今般、党民一揆を相おこし、附和随行しました人々を報告します。

農 安河内利市（当29歳）	農 安河内喜代吉（当14歳）
〃 安河内利吉（〃46歳）	〃 安河内 惣三（〃23歳）
（中略）	（中略）
農 小林 藤六（当31歳）	農 相場 茂三郎（当32歳）
〃 船越 友吉（〃17歳）	〃 小金丸兵次郎（〃35歳）
〃 杉谷 市平（〃26歳）	〃 西ノ宮 小七（〃48歳）

自分の儀、附和随行いたしましたこと間違いありません。（以上41名）」

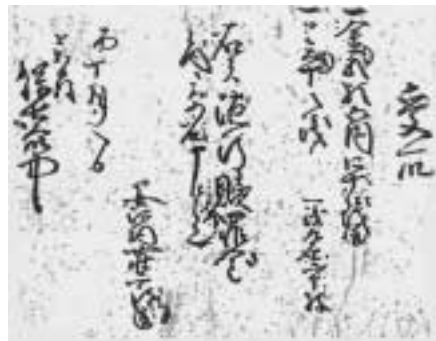
附和随行（フワズイコウ）=あまり深い考えもなく、ただ、他の人と共に行動すること。「大変よく考えて行動した」と報告したら罰が益々重くなる。

農 船越 與蔵（当46歳）	農 小林 次助（当50歳）
〃 安河内権平（〃56歳）	〃 杉谷 弥助（〃58歳）
保長 安河内準七（〃45歳）	保長 小金丸三郎（〃43歳）
農 黒木和一郎（〃18歳）	山見回役 森伴七（〃51歳）

自分の儀、村の火の用心取締りのため、外に出ていません。（以上32名）」

以上、一揆に加わったらしい者、計73名の氏名・年齢・職業だが、当時の上和白村戸数62軒に対し一揆参加者は73人と多い。

調査の結果、県下の処罰者6万3千余人のうち、罰金刑5万2千余人、「尻たたき刑」の体罰1万1千余に決定したという。「上和白事績綴」によると、計133円45銭以上を上和白村が罰金として支払うことになったという。



証書

参考 明治6年頃の米一俵(3斗3升)代は1円30銭。  
大人(15才~59才)1人分の罰金は2円25銭、15才未満は75銭。  
一金 百参拾貳円七拾五銭 16歳より59歳まで(59人分)  
一金 七拾五銭 15歳未満(1人分)  
計 百参拾参円五拾銭  
体罰は「尻たたき」で、一人当り70回であった。

## 上和白明細書上

1875(明治8年)

○戸数62軒(農業168人)

○人口293人(15歳~59歳181人)(14歳以下、60歳以上112人)

明治8年の上和白の区域を、今に直してみると「高美台、和白東1.2丁目」「和白二区」「和白三区」「和白四区の3/4」の広い区域内に昔は戸数62軒だけだった。

○俗 10年以前より善

○村中 盛 10年以前より勤勉

○作方(下) ○患(難)

他村よりの作方(田)10町4反歩(畑)1町6反歩

○他村抱作(田)これなし(畑)なし

○1日貢租米大豆274石2斗4合

○牛馬数(牛)64疋 (馬)これなし

○民林旧反別(14町4反5畝)秣場(8町8反歩)

○餘楽 ○小学校(盛、これあり)

○水源川(これなし)養水溜井水(9歩)出水(1歩)

○福岡里程(4里)博多里程(3里15丁)

○産物 棉(一千斤、15石)

右の通り書上申候也

明治8年4月

第三大区上和白村

(保長) 小金丸三郎

(副戸長) 安河内莊二郎

## 御免用出夫状況

郡役所、村役場などの申し出に、人夫をさし出した状況（回数、人数、場所）

1876（明治9年） 3月の御免用出夫（公用のため人夫出し）觸帳に記載の三十数回のうち12月までの主要出夫を書きだすと、

3月 / 21日	上府村、炭かぶり	54人
4 / 4	立花口村、裏谷普請	54人
4 / 13	立花口村、裏田溜池	54人
4 / 16	志賀嶋村、焼岸除	54人
5 / 13	下府村、間道筋土橋材木 [官林より]	
5 / 30	青柳町、楼泉寺	57人
10 / 22	大蔵溜池井樋	58人
11 / 4	人夫50人内30人縄持参 [明5日6時]	
	20人同上 [明6日6時]	
11 / 29	三代村、新堤堀除に午前6時	64人
12 / 3	下原村、池田	58人

以上のように、田植え時期・収穫時期を、はずした外は、毎月の出方は月に2～3回、しかも他村への奉仕作業が大変だったと思われる。更に明治10年から御免用人夫届出しは、一段と念を入れた報告をしている。

1877（明治10年）

面役名簿を作成し提出、雛形の通り氏名、年齢を記入ありたし。

安河内久市	44	安河内与吉	37	小林長兵衛	28
安河内善兵衛	29	安河内孫左門	28	小林 栄蔵	30
安河内虎吉	18	安河内利三郎	25	小林 藤六	36
相羽 安蔵	45	相羽百太郎	17	船越 利助	49
船越 幸助	44	小金丸三郎	48	小金丸甫三郎	50
小金丸六右衛門	27	小金丸作次郎	46	岩崎兵次郎	41
花房熊五郎	25	杉谷 市平	32	小金丸大淳	27
栗生 弘	42	本田 馬吉	18	小金丸 暢	30
… … …		… … …		… … …	
… … …		… … …		… … …	

以上 計81人 出夫できる人数68人

差引き 13人 (出夫より除外の人々の内訳は次の通り)

(保長) 小金丸三郎 (伍長) 藤三郎、利三郎

(使夫) 小金丸勝蔵 (痲疾) 2人 (割愛)

[僧 = 他府県へ] 暢、大淳 (教員) 熊五郎、馬吉

(他町村へ) 徳松、作太郎、利八

五小区役所御中 明治11年9月20日

上和白村(保長) 小金丸三郎

## 地 券 (土地所有権証書)

「地券」を辞典などで調べると

「明治5年、地祖を改正し、以後、土地所有者を検査の上土地所有権を証明した証券(地券)を交付す」とある。

1. 約110年前の「上和白記録綴」を調べた結果、「上和白村分」地券が31枚保管されている、以下一部を報告する。

秣場(マキバ)として8枚 [長浦、ベフンノ、竈土、左山、野辺]

稲干場として8枚 [岡田、大蔵、六反間、高見、高田]

池、(8枚) [高見、大根ヶ浦、宮ヶ浦、松原口、池尻]

耕地として6枚 [左山、竈土、白浜、薬師ヶ浦、宮ノ前]

林、(5枚) [薬師ヶ浦、白浜、宮ノ前]

墓地として3枚 [竈土、長畑、梅ヶ崎]

他 ア、境内 [薬師ヶ浦] イ、野原 [新開]

以上、31枚の地券は下掲の通り、

更に「上和白の農業」の文と併せ一読、比較検討していただきたい。



地 券



上和白事績綴

## 西南の役

史実では、明治10年（1877年）2月15日 西郷隆盛ら、兵を率いて鹿児島発

2月22日 熊本城を包囲

3月20日 田原坂の戦い、

3月28日 福岡県士族越智彦四郎ら反乱、

9月24日 西郷隆盛自刃（西南の役終る）

となっているが、明治12年10月の大神神社拝殿再建の棟札には「明治10年1月、薩摩、日向、大隅三国の賊たち、西郷 桐島を大将として肥後の国まで出張朝敵す。鎮台多数繰り出し討ち死に数知れず」とある。

## 参戦記念奉納額

大神神社の参籠殿に2枚の絵馬が掲げてある。川中島の合戦かと思われる絵馬と巖島神社の絵馬で、明治13年（1880年）1月奉納、「戦地軍夫中」と奉納者は書かれ、額縁の下段に43名の氏名が刻まれている。

その氏名は次の通り、

安河内仁三郎、船越与藏、安河内勝平、安河内市藏、小金丸茂藏、相場宗兵衛、相場安藏、安河内与吉、小林藤六、安河内利右衛門、船越与平、小林栄藏、安河内恵吉、安河内重藏、安河内和藏、安河内惣三、小林長兵衛、安河内孫兵衛、安河内徳藏、小金丸宅兵衛、小金丸六右衛門、杉谷喜助、安河内伊藏、安河内八平、小林勘三郎、安河内利三郎、小林栄次郎、小金丸圓、安河内伊十郎、安河内伊三郎、安河内利兵衛、安河内喜一郎、小金丸嘉一郎、小金丸徳三郎、小金丸菊三郎、安河内源三郎、小金丸吉三郎、杉谷弥助、船越久左衛門、岩崎安平、安河内甚三郎、安河内藤次郎、小金丸勝藏、

これらの人は、明治10年（1877年）西郷隆盛の西南戦争の際、食糧、弾薬等の輸送に当たる軍夫として上和白から「軍夫募集」に応募された我々の先祖の方々である。

戦争も一応終わり、共に軍夫として戦場で働かれた人々が、氏神様に絵馬を奉納して無事の帰還を祝い、戦場での手柄話に花を咲かせたことだろう。



参籠殿の絵馬（1）



参籠殿の絵馬（2）

## 国道更生路築道と感謝状

1878（明治11年） 10月20日郡役所開設

郡長（権藤貫一氏）着任

1879（明治12年）国道第三等更生路築道

[明治12年9月13日付 役所の觸（出方）文書

明9月14日午前第6時、古賀町中川までに、寸志夫（志ある者）69人、唐鍬、平鍬、払籠及び斧（オノ）を3～4挺持参のこと。

更に9名増、計78名

大神神社拝殿再建（明治12年10月）の棟札に「（中略）明治12年8月頃より、濱男以東赤間駅まで更生道を築造するので、上和白の寸志夫、三交替で土木しました。上和白地域のうち、潰（ツブレ）田、畑、林の面積5反7畝22歩は、地価で買上げとなり、明治13年落成致しました」と、上和白の先祖の方々が再三にわたり、つとめて土木された姿がうかがえる。

1881（明治14年） 感謝状

赤間駅以西、更生道路築造費として、金四拾壹円四拾銭寄付候段奇特に付き、その賞、木杯壹個下賜候事

明治14年12月26日

粕屋郡上和白村 殿

福岡県

1883（明治16年）1月絵馬奉納（四国五台山） 参宮同行3名

1887（明治20年）一の石鳥居奉納（産子中）

1888（明治21年） 感謝状

上和白有志 参拾壹名 殿

粕屋郡青柳高等小学校新築費として寄付候致殊勝に候事

明治21年9月28日

福岡県知事 安場保和



## 大蔵溜池に係わる紛争

1888（明治21年）

知事、区長にも面会の機会の少ない100年以上の昔、バス・電車はもちろん、汽車もない時代（鹿児島本線開通は明治23年）に代表の方々はワラジ、股引き姿で、区役所までの3里（約12km）を歩き、正服に着替えて、区長に4回、県庁には6回の陳情、嘆願をおこなうというのは、今では想像のつかない大変なことだった。

### 請願・嘆願

福岡県知事宛	3/28 4月 5/15 6月 8月 8/31	6回
粕屋郡長宛	3/28 仮約定取消願 8/14	
	復旧不可の由につき嘆願	4回
戸長並びに戸長役場	4/9 5/1 5/2 5/17 5/20 5/27 5/29 7/4 7/7 10/6 10/21 10/22 10/22 10/30 11/1 11/8 11/8 11/20 12/15	19回
合 計		29回

### ○知事にまでも嘆願しなければならない理由とは

#### 1. 大蔵溜池完成時の三か村の申合せ

寛文12年、上和白村字大蔵の古田を潰し、下府村、下和白村、上和白村三カ村養水のため溜池を築立、その換地として、下府村、下和白村の古川地内の田、4町2反24歩の飛地を上和白村の抱地とし、以降三カ村は、この養水により生活することになった。

#### 記

筑前国粕屋郡上和白村字大蔵

（潰地）溜池敷地5町7反25歩 田畑7反13歩

（換地）上和白村潰え分を下府村、下和白村の古川の地、水田4町2反22歩とす。

以上のように、上和白村字大蔵は三カ村の養水として共有となっていたのだが、明治8年（1875）地祖改正の際、共同で管理していた大蔵溜池が、上和白村が知らぬ間に、下府村抱官有地となっていた。さらに明治10年（1877）内務省乙第104号の通達に、「町村に点在する飛地、錯雑地は、その所在する町村への組替のことあるも、今尚、組替え進まず、早急に解決のこと、明治20年2月7日 郡長小野隆助」と訓示された。

明治21年3月28日、郡書記の山路圓、渡辺桂一郎らが新宮村矢山権次方に出張、該当

三カ村人民総代を召集の上、錯雑地、飛地の組替えを急ぐべきだと説諭し、捺印を強行したことが発端となった。

## 嘆願書

福岡県知事

安場保和殿

明治21年8月31日

筑前国粕屋郡上和白村

人民惣代

安河内利三郎 安河内孫右衛門

小金丸六右衛門 小林長兵衛

安河内藤次郎 船越 伊吉

知事への嘆願書（最終嘆願6回目）の全文は、候文、墨書であるので判読は如何かと考え、以下に要点を列挙する。（詳しくは神社書庫を利用）

寛文12年（1671年）溜池完成時の申合せにより「三カ村養水供用」としてこれまで仲良く今日に至ったのに、

1. 明治8年地租改正の際、上和白村に全然連絡なしで「下和白村抱官有地」と書き替えていること、
2. 明治10年以降「地券証」授与のことも、迫っていて一大事であるというのに、
3. 以前の通り養水利用は三カ村供用だと要請したが回答もないので、知事の方で何卒.....

明治22年二カ村（下府村、上和白村）の嘆願書は却下された。明治30年8月7日、郡長吉田佐七郎の面前において郡主任、書記及び三カ村長、村惣代立会いの上で約定を取結び、後日、「異変これなく、証書三通をつくり... 更に約定6ヶ条を手交す」こととなった。

以上、明治21年3月より10ヵ月にわたり県庁、郡役所のみでも10回の陳情・嘆願したが、残念ながら両方共陳情書却下され、それから約8年後、下記のような約定書で終わった。

## 約定書

粕屋郡新宮村大字下府字大蔵飛地溜池、和白村大字上和白字古川と地所交換し、大蔵溜池の件につき、すぐる明治21年3月28日仮約定取結び居り候処、今般下府及び上和白、下和白各人民立会い仮約定書に基づき、本約定を取結ぶこと下記の如し、

第一条 上和白地内にある字大蔵溜池は下府において従来通り諸事取締り扱うとも上和白にては聊かの苦情之れなき事

第二条 大蔵溜池の下に係る字大蔵浦田の水路は将来下府に於いて単独に相当の修繕

を施すといえども、上和白においては聊かの苦情之れなき事

第三条 溜池に係る工事は下府において出願するときは、従来の通り上和白の意見を伺うこと要せざるを以って、下府において直ちに相当の手續きを経て出願をなす事

但し、場合においては、その都度、上和白において諾否を申立ての権能なき事

第四条 溜池余水吐きの石張工事は下府において出願の上許可を得、工事に着手するも上和白にては毫も故障申出、申すまじま事

第五条 溜池下に係る上和白地内字大蔵、浦田、高松の田地は従来の慣例により該溜池、分水するも下府及び和白村大字下和白に於いて聊も苦情之なき事

但し、該溜池工事に係る費用は従来の例により上和白地主よりは出金せしめざる事

第六条 和白村大字下和白への分水は従来の慣行により別に約定を取結ぶべき事

右各条は郡長吉田佐七郎の面前において、主任郡書記及び両村長立会約定取結び候間、後日異変これ無きため、証書三通り作り、双方村長並びに惣代各署名捺印し互いに之を交換し、尚書通は郡役所へ差出し申すべく依って約定書

如件

明治三十年八月七日

福岡県粕屋郡新宮村

村長 安武永太郎

福岡県粕屋郡和白村

村長 堺千代吉

全県全郡新宮村大字下府人民惣代

有光荘十郎

森幸助

井上卒三郎

富永與蔵

高野文蔵

全県全郡和白村大字上和白人民惣代

小林長兵衛

安河内藤次郎

安河内虎吉

小林乙吉

全県全郡和白村大字下和白人民惣代

安河内惣三

以上が、明治30年8月締結の「約定6ヶ条」。誠に残念な結果ではあるが、先輩諸氏のご苦労と骨折りには心より感謝申し上げたい。

1890（明治23年）9月大蔵溜池の取魚の事件

1891（明治24年）早魃、雨乞いの申合せ

- 1.豊後の国への雨乞いに行く人の外は氏神様へ籠ること。[6月21日より25日まで]
- 2.その間の費用は、田反別割とする。
- 3.申合せにより田の草取りは当分の間中止すること、従って協議に違反した者は、田地に分水せず、溜り込んだ水は切り落すこと。

1899（明治32年）大神、貴船両社の編入願（詳細は上和白事績綴参照）

1902（明治35年）大神神社御神殿葺替え

1903（明治36年）和白村和白尋常小学校新設

小学校新築には、各区の拠出金が必要だったのか、「明治34年に始まり明治37年に精算す」と書き、役場に81円也を払い込んでいる。36年竣工。

1903（明治36年）2月5日付（発農34号）として「蚕室、蚕具本日より、自己負担に付き報告のこと」との文書が和白役場にある。養蚕の始まりは明治何年頃のことだろうか？

1904（明治37年）「和白駅、奈多駅共、明治37年1月1日より営業開始す」。博多湾鉄道株式会社によって西戸崎＝須恵間が開通し、石炭列車が走る。

1905（明治38年）幡奉納（日露戦勝記念8名）

1906（明治39年）日露戦勝記念林

薬師ヶ浦山に日露戦争の戦勝記念林として二反歩の松の植林を行う。

1908（明治41年）大神神社境内拡張（300坪）

競犁会、青年夜学校、めい卵採集

競犁会はいつ頃から開始されたのか、明治41年11月競犁会へ6円64銭の支出がある。青年夜学校への油代2円補助とあるのは、明治41年12月のこと  
明治43年7月の採卵、捕蛾成績調査簿が有る。

上和白事績綴には6/5、6/12、6/19、6/30、7/6の5回にわたる螟虫採集の統計もある。

## 和白高等小学校創立

1900（明治33年）

和白高等小学校は青柳高等小学校の分校として発足した。その当時の校区は和白、立花、原上三代、下府、湊、新宮で上和白の大名地内に設立された。

### 和白高等小学校跡記念碑

記念碑が設立されている位置は、当時の高等小学校の正門に当り、当時は高さ3m、径40cmの花崗岩の石柱（2本）で造られた標札であった。

### 裏面碑文

「この地域は私たちの母校、和白高等小学校の跡地である。本校は、明治33年（1900年）に和白、香椎、新宮の各村と、立花村のうち原上、平山との組合立学校として創設され、当初は「大名」にあつたが、校運の発展に伴い梅ヶ崎山の北麓に移築されたものである。（現和白3丁目13番地内）

当時は、付近に人家も少なく白砂青松に囲まれ真に学園に相応しい環境であつたが、明治45年の教育制度の改革により、廃校になったものである。当時は粕屋郡に属し、郡内の高等小学校は、本校の外、青柳、久原、大川、宇美、箱崎の五校に過ぎなかつた。本校の存続期間は、僅か十三ヶ年に過ぎなかつたが、初代<sup>あお</sup>栗生、二代<sup>あお</sup>下川の両校長を初め諸先生の懇篤な薫陶により当校に学んだものは地域の先達として、其の発展に寄与し、又国家社会の有用な人材として活躍した者も少なくは無い。

廃校以来、ここに五十年、当地方の発展は特に目覚ましく当時を偲ぶ情景は全く消えうせ、うたた寂寥の感に堪えない所である。時あたかも明治百年の意義ある年を迎え、明治未年に姿を消した母校の存在を後世に伝えると共に、師恩に報い、失亡同窓の霊を慰め、併せて世人の学校教育に対する関心を喚起するため、ここに同窓生一同相謀り本記念碑を建設する所以である。

昭和43年11月11日 竣工

和白高等小学校卒業生 北畠菊蔵撰書」



和白高等小学校跡記念碑

## 上和白略年暦（2）

1913（大正2年）4月旧拝殿前石段奉納（初老賀7名）

1915（大正4年）5月高藤溜池増築工事開始

1916（大正5年）7月高藤溜池堤防大決壊

1917（大正6年）高藤溜池増築記念碑（10月吉日）

記念碑は当初、現在の和白東町内公民館の玄関あたりに建築されたが、昭和時代に神社境内へ移築。

このみ  
許斐ガラス工場 創業

所在地 和白4丁目海岸通り

製品 ラムネびん、サイダーびん、一升びん

青松白砂の地で、原料も十分であったが、労働争議のため廃業となった由。



神社境内の祈念碑

1919（大正8年）大神神社御神殿、拝殿葺替（遷座祭）

1913～1920（大正2～9年）戦役記念碑

青島攻略（第一次世界大戦）、シベリヤ出兵等

1921（大正10年）上和白も点燈するか

和白駅前も点燈されていたことにつき、5月8日、明覚寺に集合して協議されたが、賛成少なく中止となった。上和白事績綴に電柱敷地料10ヵ年分18円也の記録があるが、その意味は不明。

1921（大正10年）「筑前新宮」駅名誕生

国鉄鹿児島本線、香椎駅まで複線工事が完成し、従来の呼称であった「信号所」を改め、待望の筑前新宮駅となった。（8月1日付）

1921（大正10年）宮の前橋架設記念碑（奉納上和白青年支会）

当初、氏神様に最も近い和白川上流に架設されていた石橋は、造成時に撤退。記念碑のみ境内地へ移設された。

1922（大正11年）貞島炭鉱売買 詳細は上和白事績綴を参照

1924（大正13年）5月22日新博多＝和白間開通

大正12年6月起工の和白＝宮地嶽間は、大正14年7月1日営業を開始。蒸気機関車が煙を吐いて走る。

1924（大正13年）消防創立。会計簿によると寄付金（大正13年5月）878円38銭（ハン

テン外)。

- 1925 (大正14年) 貴船神社、大神神社境内地へ  
字立花1089と中和白大松よりの庚申塔二体を、境内地内へ。  
61歳以上16名により遥拝台を建立  
小林大右衛門、石燈籠を奉納  
上和白少年団創立(4月)
- 1926 (大正15年) 6月しめ縄掛石(八尋弘次郎)
- 1927 (昭和2年) 7月手洗鉢大石奉納(寄進安河内宗吉)  
上和白耕地整理事業  
第一期工事完工(昭和2年9月)  
第二期工事完工(昭和4年8月)  
上和白耕地整理記念碑(昭和51年11月)建立
- 1928 (昭和3年) 村社へ昇格(神饌幣料受領)  
御大典 記念祝賀会(11月15日)  
渡殿修理・奉祝門・日籠り
- 1929 (昭和4年) 上和白公会堂建設  
小学校旧校舎を購入(440円)収入計1,347円60銭也
- 1933 (昭和8年) 大神神社御神殿葺替  
宮前畑地購入、宮鳥居前石段工事
- 1941 (昭和16年) 大水害及び大蔵溜池余水
- 1942 (昭和17年) 奈多新開堤防大決壊
- 1945 (昭和20年) 大神神社拜殿修理



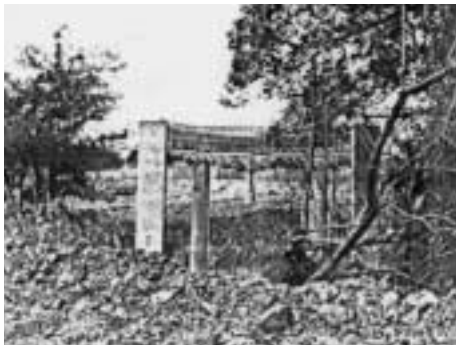
大正時代(1913~1920)頃の氏神様



大正2年奉納の16段の石段



大正2年4月建立の記念碑



造成で埋没し始めた（昭和45年）



造成工事完工後の井戸跡、階段跡

1913（大正2年）奈多大火事（義損金）  
4月旧拝殿前石段奉納（初老賀7名）  
御影石16段、高さ3.2mの石段の  
奉納。

それより約60年後の昭和45年に始まる  
団地造成工事では、神社の里道（平山  
みち）小金丸友吉氏の畑地を埋め、  
更に参道、井戸、十六段の石段を埋め  
尽くし、神社境内は平地同様の姿とな  
った。



大神神社境内地



## 高藤溜池増築工事

1915（大正4年）

5月よりの増築工事を始め、翌大正5年2月28日に堤防土盛り終了。1荷（男4銭、女3銭）

堤防土盛り終了祝では、酒5升、干鰯2束、手拭25筋（婦人へ配布）

和白村 宛	粕屋郡長 廣辻信次郎
大正四年五月十八日	
（土第七十六号）大正四年五月三日付ヲ以テ伺 ヒ溜池増築工事請負随意契約ノ件聞届ク。	

## 豪雨のため高藤溜池堤防大決壊

1916（大正5年）豪雨のため高藤溜池堤防大決壊

「私が数え年7歳の時、大正5年は、6月22日には、田植えが終わり、青々と苗が元気になりかけていました。7月2日は俗に云う『ハゲ雨（半夏至）』の日で朝からドシャ降りの大雨でした。その真夜中、区長の安河内虎吉さん（和白東二丁目和彦氏の祖父）のおうちから、早太鼓がドンドンと鳴り渡りました（当時は、放送器具もサイレンも無い時代です）。『高藤の池が崩れた、大水ぞー』夜中のこと、大人の人だけで鍬やスコップ、唐鍬を持ち走って行かれました。7歳の私は翌朝、母について高藤の池まで行きましたが、高藤池の灌漑区域十数町歩は大海原と化し、池の堤防は切れて底が見えていました。『利右衛門さん（安河内英男氏の祖父、駄菓子屋さん）の家は、どうなっとるだろう』『流されとろう』の口々。利右衛門さんのお家は、只今の旧3号線とJR鹿兒島線の間、和白川の横でしたが、幸いにも国鉄の土堤のお陰で無事でした。

上和白の水田は、田植えのあとだけに、苗は流失、冠水ですし、今更に田植えの苗は無く、灌漑水路等の復旧作業と仕事が倍増しても、倒れて役に立つ苗は起こさねばならないので、和白小学校の上級生も先生と一緒に加勢して下さいました。

現在の上下の二段になった高藤の池は、高美台団地の造成のため、最早灌漑の要も無く、祖先の苦労も知らぬ気に、満々と水をたたえ、微風にさざ波を立て、静かな姿を見せています。」

[ 和白東一丁目在 小金丸友吉氏（故人）提供 ]

## 復旧へのご尽力下さった方々

- イ．空俵 80俵（下和白）182俵（三苫）93俵（塩浜）70俵（平山）90俵（奈多）
- ロ．加勢 唐原青年、下和白青年、塩浜青年、……。
- ハ．苗おこし 下和白、和白小学校、

## 復旧作業は困難を極める

- 1．大正6年4月30日より、土が無いために岩を持ち寄って砕いた。
  - 2．同年5月8日より、岩割作業人男女計39人とし、他は地搗き人とした。6月末になってやっと工事は終わった。
- 1917（大正6年）10月「字高藤溜池増築記念碑」<sup>りゅうげ</sup>字立花の高台に建立。

その後、昭和2年耕地整理用に「字立花の高台」を切り崩したので、止むなく大神神社境内に移築。



底樋（そこひ＝溜池の水を放流するための管）

この木製の底樋は樹齢約70年の松の原木を縦割りにして、通水断面を箱状にくり抜き、替折釘（かいおれくぎ＝和釘の一種）を使って元の丸太に組み合わせた構造になっている。コンクリートパイプなど無い時代に、先人たちの底樋製作に対する工夫と溜池を大切にしてきた苦勞がうかがわれる。

2002年（平成14年）10月、福岡カンツリー倶楽部ゴルフ場内の高藤下池改修工事で取り替えられた一部。

（上和白大神神社境内に展示）

## 高藤国有林払下げ

1920（大正9年3月）

### 陳情書

従来、当上和白区の田畑灌漑用水に充当してしました処、年々土砂の崩壊によって溜池の底土高まった結果、用水量次第に不足し、本村三十町余の田畑への用水不可能につき、高藤国有林の払下げ下されば……云々

熊本大林区長 殿

上和白区民総代

以上、経緯のみ

### 名義変更

大正12年12月4日、国有林野法第8条第2号により、和白村名義に売却許可あり、更に、監督官庁の売払い処分許可の暁は、上和白に変更可の由。

### 経理関係

（国有林払下げ分）6町5反3畝歩 価格 壹万壹千八拾八円也

（支 払） 大正15年3月まで第3回に亘り納入のこと 上和白分8,304円30銭 平山分2,783円70銭

（植 林） 松苗4,900本を3期に亘り植え付け

高藤国有林払下げ記念碑建立 大正12年12月

### 1927（昭和2年）上和白耕地整理事業

1927（昭和2年）米価下落に関し（村農会）米価、予想以上の下落の原因を解説し、この暴落の対処の方法は「我々農家自身の自重の外なし、この度、念のためご考察願いたく云々」

昭和2年8月13日 和白村農会の文書あり

## 上和白耕地整理事業

### 耕地整理に関し事前協議

大正14年、県耕地課より、耕地整理実施の奨めがあった。当時は農道も水路も曲がり

くねって、農地の形も悪く道路に副っていない水田もあり、交通や耕作に苦勞も多かった。以上の事もあり、明覚寺の本堂で数回の協議の結果、関係農家の多数が賛成し、反対者は3人であったので実施することに決定した。[ 組合長 小金丸 鶴吉 ]

実施計画

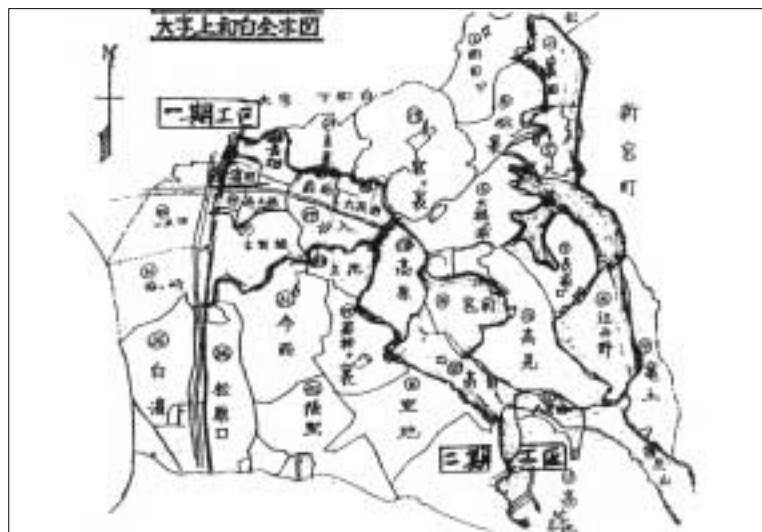
施工期間 [ 昭和2年9月～昭和4年8月 ]

耕地面積は45町5畝歩で、出来るだけ、農作に影響しないように、地区を二工区に分け、第一期を国鉄線路から東方とし、字汐入、六反田、前田、長畑、浜田、浜久保、古賀堀、小田までとして工事着工、昭和2年9月工事完了。

第二期工事区を残りの字高原、宮前、裏田、大蔵、辺分野、佐山、高藤、八反田、高田とし、昭和4年8月、全て完工した。工事費は総額17,272円65銭。

工事現況

工事は、箱崎の藤原勝太郎氏が落札請負われ、毎日50人位の人夫が作業していた。作業は冬期に行われるので、菜種や麦の作付けが出来ないため、地元の人も作業に出て働いた。男子の日給は1円30銭、女子は1円であった。工事完了後は道路は直線、水路もそれに沿って、交通も耕作も非常に便利になり、百姓も皆喜んだ。



耕地整理の工事小字図

精 算

関係農家の負担は、直接工事費や借入金を合計して次の通りとなった。

工 事 費	17,272円65銭
借入金利息	7,839円94銭
計	25,112円59銭

農家に負担金が通知されたが、工事完了後の所有面積が減少した人、裕福な人は一時に

納入したが、現金の少ない人は、勸業銀行から借金して納入した。

借入金は10年賦償還で、毎年2月と8月に一定の元利金を償還する契約である。

時は既に、昭和初期の世界的大不況に突入していた。世の中は不景気になり貨幣価値は下がって、農家の収入も当然激減して生活も苦しくなったが、負担金の償還にも当てねばならず、上和白の農家は貧富の差が益々大きくなった。そのために没落した農家が数軒あったといわれている。

当時、他地区の人が「上和白は耕地整理をしたために村が枯れてしまった、果たして立ち直ることが出来るだろうか」と心配していたという話もあった。事業そのものは大成功したが、負担金の支払には大変苦勞をしている。

昭和14年12月償還完了

三苦区は耕地整理が終わってすぐに記念碑が建ったが、上和白区は資金欠乏で遂に記念碑は建たなかった。その記念碑も昭和51年11月に上和白農事会が主体となって、記念碑建設の計画が起こり、上和白財産組合が後援し、助成して、大神神社の境内に建設された。漸く上和白区の耕地整理事業が完遂された感じである。

なお、事業を始めた大正15年当時は45町歩あった農地も、現在は僅か7町歩余りに減少している。今も農地に点々とビルや住家が建てられているが、何れも道路に面した有利な宅地となっているのも、耕地整理が完成していたお陰である。先祖様や親のご恩に感謝すべきである。

参考（昭和初期の物価）

農地の価格	.....坪当り6円～3円平均4円50銭
人夫の労働賃金（男）	.....日当り 1円30銭
米 価	.....1俵（60kg）当り 5円80銭
清 酒	.....1升 当り 1円50銭



大神神社境内地の耕地整理記念碑

## 上和白の農業

上和白地区における水田の総面積は45町5畝歩であったが、字古賀堀付近の約3町歩が砂質壤土で、残り42町歩は粘土質壤土である。

粘土質水田の田鋤（牛馬で耕耘）や鋤仕事には随分苦勞があった。特に田鋤は、雨降りの後の足跡型に水が溜っている時くらいが耕耘しやすいので作業をしたが、午前中は作業ができて午後には乾燥して耕耘することが出来ないことが多かった。鋤先や鋤に付く粘土を落とすために板や竹で作った篋へらを腰に差していた。これを他所の人が見て「腰が痛くならないように尻に差しているのだろう」と笑っていたという。この粘土質の水田で収穫された米は品質が良く、味も美味しく、砂質田の米とは比較されぬほどの違いがあった。

粘土質の水田に植える稲は「三井神力」と云う品種で、収量は多かったが欠点としては草丈が伸びて人の身長くらいに長いことと、籾が落ちやすいので丁寧にやさしく扱わねばならないことであった。

古賀堀や二反田は、砂質土であっても粘土分が半分くらい混じていたので、米の品質が良く、農作業も仕易いので上和白の一等田として地価も高かった。

全くの砂地は字白浜で、ここでは「愛徳」と云う品種の稲を作っていた、この品種は見かけは良いが、食味は「三井神力」に較べ少し劣るようであった。

稲を作るのが表作といい、麦や菜種を作るのを裏作という。麦を蒔くには、土塊を細かく砕かねばならないので、粘土質の田では重労働となり、菜種ばかりを植えていた。

春、4月半ばになると見渡す限り菜種の花盛りとなり、黄金の籾を敷き詰めたように美しかった。明治から大正の初期の童謡に「田舎の四季」と題して次のような歌詞がある。「道を挟んで畑一面に 麦は穂が出る菜は花盛り 眠る蝶々飛び立つ雲雀 吹くや春風袂も軽く」

……上和白平野の春はまさしくこの歌の通りであった。

また、農耕作の外に「養蚕」も盛んで、農家にとって最高の収入源であったが、非常に労働力を必要とした。なかでも蚕の上蔭期かいに じょうぞくきが菜種や麦が熟れて収穫の時期と重複するので、蚕の上蔭期は家族全員が不眠不休、数時間眠るだけの多忙なときであった。

休む暇もなく、すぐに田植えの準備にかかるので、麦、菜種を収穫した後の田返し、畝戻し、田植えのための代掻き、粘土質の土塊は「まが」で四回掻かねば田植えが出来なかった。このように上和白の農家は、和白村の中では一段と多忙を極めたのである。

（和白東一丁目 小金丸友吉氏（故人）提供）

参考 上蔭期じょうぞくき……十分に成長いた蚕を繭を作らせるため蔭に入れる時期

## 上和白大水害及び大蔵池余水

1941（昭和16年）

（上申）

4月以来、降雨連続し、6月に至っては降雨一層激しく、各溜池満水となり、加えて大蔵溜池のアマシ（余水）流れ来て、一時は水が鹿児島本線の路線に及び、列車が運行出来ず、田植えも不可につき、来駕指導方よろしく、

県耕地課に上申、県池浦技師指導の下、

字高原の河川（和白川の上流）改修 工事支出計1,241円13銭也

大蔵溜池の余水について

平山、夜臼、下府との交渉（5ヶ条の覚書交換-昭和17年3月5日）

植林 松苗4,900本、杉苗650本

1942（昭和17年）大風高潮による新開堤防決壊

9月 大風に高潮も加わり新開の畑地一面海と化す、上和白からも奉仕活動に出勤する。

## 終戦前後

1944（昭和19年）

9月 雁の巢勤労奉仕、

10月 馬糧荷造り

12月 ヒマの栽培

1945（昭和20年）

5月 公会堂へ（海軍施設部駐屯）

9月 罐詰、特配米の分配、食料払下げ（赤城工兵隊）……終戦直後の月

10月 進駐部隊へ人夫 66人 19回

11月 " 106人 26回

12月 " 30人 15回

"月 米供出割当て（278石2斗）

1946（昭和21年）

2月 進駐部隊へ人夫 12人 7回

## 和白ゴルフ場

1951（昭和26年）

所在地 福岡市東区上和白1318-1

名称 株式会社福岡カントリー倶楽部 和白コース

面積 約20万坪（67ヘクタール）

コース

COURSE	HOLE	LENGTH		PAR
		YARD	MATER	
アウト	9ホール	3293	2994	36
イン	9ホール	3367	3086	36
計	18ホール	6660	6080	72

戦後ゴルフが復活すると、上和白の山林原野がゴルフ場の候補地となり、開拓団入植地をも含め1951年（昭和26年）7月地主代表である和白村長白石三平氏と用地買収の妥結をみた。

大成建設（株）福岡支店が建設工事を担当し、同年9月1日着工、翌52年11月10日に、アウト9ホール（現在のインコース）が仮オープンした。この日は現天皇陛下の立太子礼（すなわち成人式）が行われた日で印象深い日となった。

1953年（昭和28年）11月3日にはイン9ホール（現在のアウトコース）が完成し、18ホールオープンの開場式典が挙行された。元来、雑木林であった上和白の土地は、戦後のゴルフ場としては立派なゴルフコースとなった。

現在では住宅団地に囲まれ、交通の便は非常に良く豊かな自然が温存されている。場内は人為的に多様な樹種が植栽され、四季にはそれぞれの樹相を飾っている。また、和白干潟やアイランドシティ（人工島）、海の中道大橋など眺めはすばらしく、都会のオアシス的存在となっている。

1973年（昭和48年）からはKBCオーガスタゴルフトーナメントが実施され、1982年（昭和57年）まで10回開催された。国内はもちろん国外にまで「和白」の名を高めたチャンピオンコースである。



和白ゴルフ場



## 和白東校区

### 1976年（昭和51年）

福岡市の最東部に位置し、西は博多湾と玄海灘をのぞみ日本有数の渡り鳥の飛来地の和白干潟を埋め立てて401haの人工島（アイランドシティ）の計画が進行している。東は歴史を綴る筑前の名山の一つとも云われる立花山（標高367m）があり丘陵地を含む水田農業地帯であった。

JR博多駅が大博通り祇園町から現在地点に移転した昭和38年頃から、高度成長の波に乗り和白地域にも企業の進出と共に高美台団地の宅地振興が進んだ。急速な人口増に伴い1976年（昭和51年4月）児童増により和白小学校から分離し、福岡市の102番目の小学校として開校、同時に自治連合会も発足した。

#### 1. 世帯数、人口

「高美台の宅地造成」について

1959年～1974年（昭和34年～49年）にかけて（地権者60名）買収が行われた。

1963年（昭和38年）世帯数：657戸 人口：1,158名

1973年（昭和48年）高美台団地第一次計画建設～昭和62年 第六次計画建設

1978年（昭和53年）世帯数：2,678戸 人口：7,891名

2000年（平成12年）世帯数：4,836戸 人口：12,581名

2004年（平成16年）世帯数：5,009戸 人口：12,517名

2005年現在、18町内、202組 一戸建てと高層住宅が混在した地域である。

#### 2. 「和白東」の名称由来

1976年（昭和51年4月）和白小学校より分かれ、福岡市立和白東小学校として開校した。

小学校の校名をどうするかについて、色々な意見が続出し、「高美台」と「和白東」に意見が分かれたが、最終的には、知名度が高く歴史のある「和白」の地名を生かし、その東に位置するという意味で「和白東小学校」の名が誕生した。

#### 3. 「高美台」の名称由来

この地域は「大字上和白字高見」であったので、この「高見」をとって「見」を「美」に変えて高美台となった。

#### 4. 町名

和白東校区自治連合会（当初は12町内、現在では18町内）

1979年（昭和54年）頃の町名

上和白1区・東和白2区（後に東和白2区と3区に分かれる）・下和白2区（和白台）・福工大寮・高美台1丁目1区・高美台1丁目2区・高美台2丁目1区・高美台2丁目2区・高美台3丁目1区・高美台3丁目2区・高美台4丁目1区・古賀掘

#### 1989年（昭和59年）2月、町名と住居表示の変更

上和白1区（和白東一丁目1区と和白東二丁目に分かれる）古賀掘（和白東一丁目2区）エメラルド（和白東一丁目3区）和白台（和白東三丁目1区）福工大寮（和白東三丁目2区）東和白2区（和白東四丁目）東和白3区（和白東五丁目）

#### 2005年現在18町内

上記のほかに、和白東一丁目4区、高美台一丁目3区、高美台二丁目3区、高美台四丁目2区

福工大寮（和白東三丁目2区）は校区外に移転し削除。

#### 和白東の沿革

1976. 4.（昭和51年）福岡市立和白東小学校開校（市内130番目）

和白東校区自治連合会 発足

1978. 4.（昭和53年）福岡市和白東公民館 開館（市内83番目80坪館）



昭和53年4月 開館当時の和白東公民館

2001. 7. (平成13年) 新公民館150坪館竣工

2001. 9. (平成13年) 和白東「公民館・老人いこいの家」複合施設 落成式



平成13年「和白東公民館・老人いこいの家」複合施設



昭和46年10月(上和白団地造成決る)



昭和54年10月26日の和白東地区

## 史伝、口伝、風物詩

### 千丁松明

[ 小金丸文書・塩浜古老の話 ]

永禄11年7月、立花城落城、立花鑑載自刃。原田、斎藤、清水は辛くも脱出して中国に渡り、再起を謀った。大友方は立花城に三将を置いて守らせ、各将を各所に配して高橋に味方する付近の土豪を討伐した。

永禄11年8月、敗戦の将、原田、衛藤は立花城を奪回しようと攻めかかる。[ 中略 ] 毛利勢各所で敗られ、同年8月、毛利の清水左近将監は辛うじて新宮の浜より船で長門（山口県）へ落ちのびた。（筑前戦国史より）

「立花城と申すは、筑前第一の要害の城なり。駒の足立悪しき故、攻め寄せ難きにより、この海辺、下和白の内、桂ヶ崎山へ立籠るによって、これを陣の山と云うなり。しばらく見合いのうち、道雪公、大きに怒り給い、桂ヶ崎に籠りたる中国勢を退散させんと、所々の風上へ、ハトタ水を流し、上和白海辺要害の良きところに出城を築き、勢を引き連れ討ち取らんと立花勢討って出る。ここを今に立花屋敷と云うなり。

また、中国勢、桂ヶ崎山より山麓の地蔵森浜の廣野にて合戦となり、立花勢、粉骨碎身戦かえば、中国勢数百人討ち死に、この跡、塚多し、之によりて塚原山と云うなり。

今に至るまで、秋雨降る夜、一カ年に、一、二夜も桂ヶ崎山の麓より塚原山まで『千丁松明（センチョウタイマツ）』と申して所々火多く続くなり。この火近くより見えず、この立花屋敷より能く見え候なり。誠に、その時の中国勢の念火と云う」

吉永正春氏の筑前戦国史によれば、毛利方の清水の率いる水軍は、新宮の浜より上陸し、相の浦山より立花城をうかがったと思われる。平成の今日でも尚、怪事件ありと聞く。

### りゅうげ（立花）

真夏の昼下がり、玄界灘から吹き渡る汐風、三苦、塩浜、下和白の稲田を波打ちながら吹きあがる「リュウゲ」坂。大正10年（約70年前）ごろの私ども農家の人達は、大樹の下に三々五々集まってきて、午後2時半ごろまで、寝ころび又は語り合った懐かしい思い出の高台であった。

小金丸友吉氏懐古談にあるように、昭和初年には出城の姿殆どなく立花井のみ残っていた。

慶長5年（1600年）黒田長政、和白の地も検使させ、立花の地を「百姓居屋敷」と認められる。

この間、1600～1861（文久元年）の約260年間、宿陣のところ、出城は私どもの、所謂、

リュウゲ坂ではなく、「小金丸重三氏邸（文久元年〔1861年〕新築）」「小金丸三六氏邸（文政5年〔1822年〕組頭役）」の高台上、及び正保4年（1647年）移転造営の明覚寺地の台地と想定すべきと思われる。

正しくは「字立花」は要害と見られるか、今西の谷池 立花（重三氏居宅地） 龍華山明覚寺 貴船神社地は、殆ど「字立花」の地である。



東区上和白立花（リュウゲ）位置図



- A 和白東1,2公民館
- B 立花井
- C 小金丸重三氏宅
- D 小金丸三六氏宅
- E 明覚寺
- F 貴船宮跡

東区上和白字立花（リュウゲ）坂周辺図



和白東1.2区公民館、右小金丸宅

## 上和白古墳

### 特徴

磐井の反乱後、設置される粕屋屯倉の外縁部に当たる上和白古墳群の被葬者は、世襲の家父長集団ではなく、何らかの軍事的性格をもつ武人の墓と判断される。あたかも対朝鮮交渉の深まる6世紀中葉を境にして、和白地域の後期古墳群の造成が始まり、然も古墳出土の馬具は簡素で、より実戦的である。(市文化課報告)

### 上和白製鉄遺跡

#### 位置

旧大神神社(団地造成前)正面参道左側畑地。

古墳時代終末期から奈良時代にかけての鉄生産段階を示す製鉄機構が発掘され、精錬炉外スケール、砥石、鑛滓も発見された。更に、製鉄機構に隣接して竪穴住居が認められ、当時の工人の居住場が同一場所にある遺跡は珍しい由。



製鉄跡の位置図、右上大神神社



製鉄跡地の発掘

## 和白出土の青磁

中世の時代になると、大陸との盛んな交流を物語る資料がある。上和白包合地及び古墳出土の青磁類は、南宋諸窯（同安、龍泉、越州）が数多い。中世の一時期、大宰府官人層の暴挙が目立ち、那津から今津へ貿易港を移すの時期、香椎から和白の入江にも宋船の出入りがあったのかも知れない。

## 寛弘5年（1008）宋銘の貨幣出土

宋（中国）銘の貨幣「祥符元宝」が字古賀堀の畑地から発見された。更に団地造成の際、発掘の「製鉄跡」からも、9世紀頃の青磁が発見された。少なくとも西暦1000年の頃までは、海岸線が大神神社の近くまであり、宋船が古賀堀近くで交易していた。市の文化課も、そう考えたい由。

（以上、福岡市教育委員会発行の「和白遺跡群」の本から）

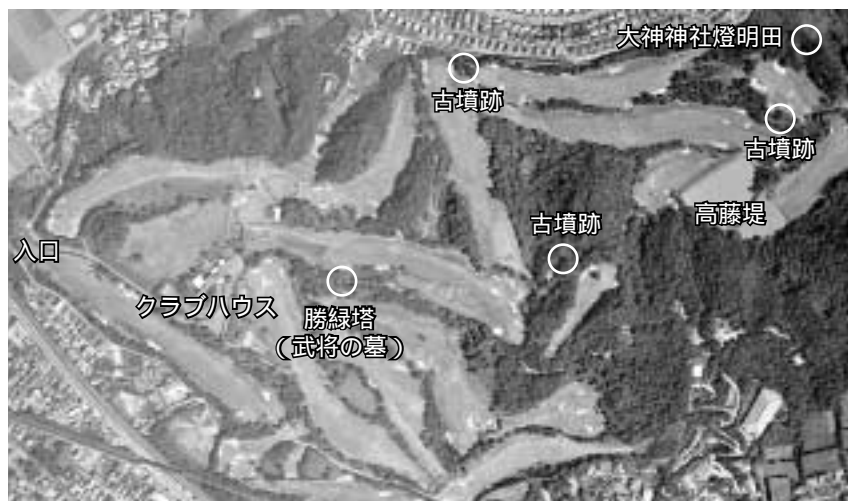
市文化課の話では、今から約700年から1200年までの「上和白付近の様子」がわかるとのこと。

## 和白ゴルフ場内の古墳

ゴルフ場造成前の地番は大字上和白字高藤といい、高藤山連山の左端山頂に一基現存しており、ゴルフ場8番コースのティーランド横に古墳の標示がしてある。

大字上和白字野地地内（旧字名）現在は、3番コースのグリーン付近に一基と野地の南側山頂、2番コースのグリーン手前右側の山に一基、以上計3基の古墳が発見されている。

ゴルフ場では、古墳に関わる武将の御霊を祀る「勝緑塔」を昭和58年4月1日建立し、毎年春の彼岸に供養祭が行われている。



福岡カントリー倶楽部 和白ゴルフ場

## 上和白少年団

パッパカーパー・パッカアパッパーと高声、奇声のラッパ声。早くも日曜日というのに、今なお暗い上和白の空に鳴り渡る。

「今日は松原（和白1.2区）組ばい！早よう起きなあ」松原から氏神様まで約1.5キロメートル。全員拝殿に座りご神殿に拝し終っても、未だ午前4時。暗やみでは掃除も出来ぬと、例の通り、拝殿の板張りで「馬のり」「馬けり」「陣取り」。寝不足よりも、この面白さ、平成の今日尚思い出すも懐かしい限り。

われわれ、上和白少年団の創設は大正14年、時の高等科二年生の最上級は、船越幹一（フミエさんの叔父）さん、小金丸寛二（鶴視氏の父上）さんは早や故人。相場金次郎（ツネキさんの兄）さん、船越信一（ミツエさんの主人）さんの4人。毎日曜日はお宮、ひと月一回はお寺の庭掃除、時には道掃除と後輩を楽しませながらの指導、誠に有難うございました。そのお陰か、上和白村事蹟綴に、昭和28年まで「少年団へ300円補助金」の記録がある。

創設年の大正14年（1925年）より昭和28年（1953年）までの約30年、終戦時にもめげずの努力、誠にうれしく筆にしてみた。

## めいらん（螟卵）採集の思い出

6月10日ごろになると、稲の苗が10センチ以上に伸び、その苗に、蛾がめい卵を生み付ける。田植え前に大急ぎで取ってやらないと、稲に大被害を与える。

そこで私たち4年、5年、6年生の上級生は、一週間に必ず一回、午後の勉強を取り止めて農家の応援に、奈多、三苦、塩浜、下和白、上和白の苗床へ、組分けして全員採集に出かけた。

**螟卵** 螟虫（メイチュウ）の卵。螟虫は昆虫で、蛾が稲の苗の葉に卵を生みつける。卵から螟虫が生まれると、稲の茎の中に入って、中から喰い荒らし、米を取れなくする。

農家では5月に米の種子（籾）を、長方形に作った苗床に蒔いて苗を作り、6月10日過ぎになると10センチ以上の苗が、数十万本に育つ。

螟卵は1000～2000本のうちの1本位の割合であり、見つけるのは大変だが、私どもは竹さお等で工夫して探し出していた。

苗床には水がたっぷりあり、メダカ、カエル、ヒルがいる。知らぬ間にヒルが足に吸いついて、私どもの足の血を吸うと大変。特に女子は泣かんばかりにキャキャと騒いでいた。





## 和白の晩春

桜の花が散る4月半ばから5月への一ヵ月間、和白平野（約15町歩）は、見渡す限りの千畳敷、万畳敷の黄色の絨毯におおわれる。花から花への蜜蜂さながら、菜種（カラシ）の花のトンネルを花粉にまみれながら、畝溝を走り抜けた小学生のあの頃、詩情豊かな田園風景が良く見られたものである。

それから間もなく、5月末から6月にかけて菜種の収穫期を迎える。和白平野の作付けは、カラシ畑が2/3、麦畑、レンゲ畑が1/3位であった。

刈り倒されて畝に干されたカラシ粗朶は、子供の背丈以上はあり、田圃一杯に干される。その後、はじけるようになった頃、田圃の一部に箆を何枚もつなぎ広げて、その上にカラシ粗朶を担ぎ集めて一気に実を揉むようにして、或いは、叩き落すようにして取るのである。

陽が西に落ち暗くなる頃、カラシ揉みは終わる。そのカラシ殻は小山のように田圃の中に集められ、それに火をつける。パリ、パリ、パリと激しい音を立てて燃え、梅雨の曇り空を焦がすような感じで燃え上がるのである。

和白の詩情豊かな田園風景は、梅雨の空を焦がしつつ田植えの時期に入る。

参 考 文 献

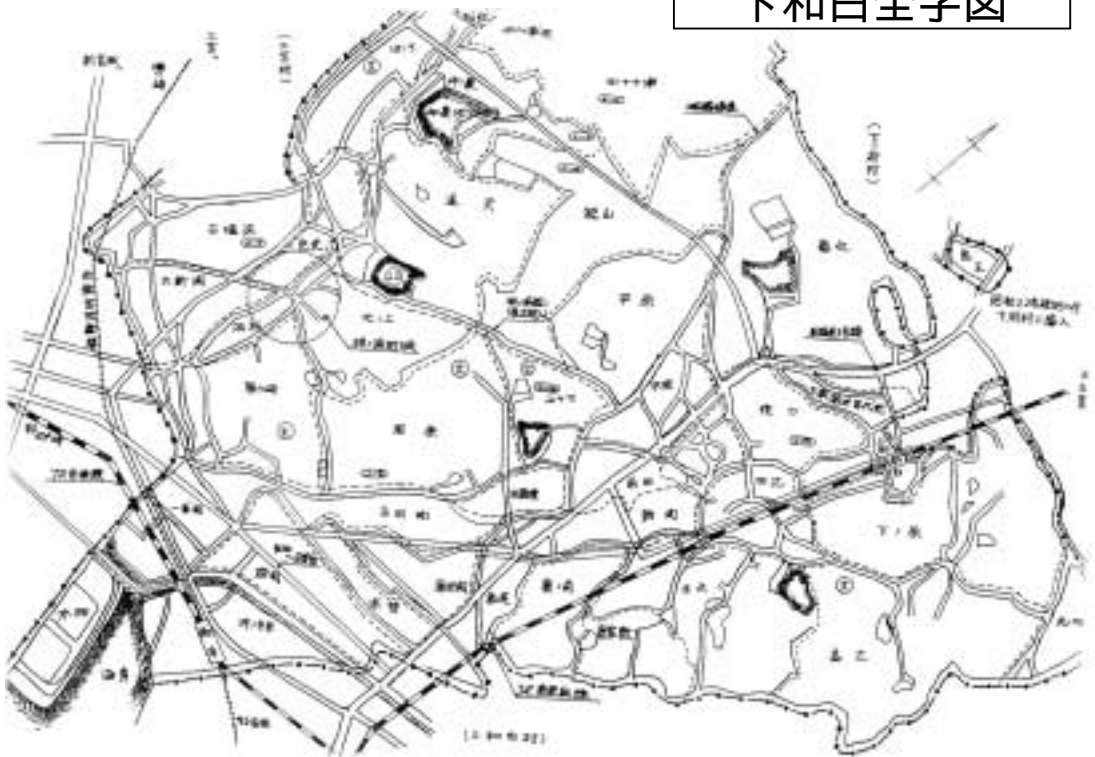
1. 上和白事蹟綴り (27冊)
2. 地 券 (上和白村、30枚)
3. 大神神社事蹟綴り (20冊)
4. 小金丸文書
5. 和白遺跡群 (福岡市教育委員会)
6. 郷土の社寺物語
7. ふるさと和白 (郷土の竹槍一揆)
8. ふるさとのむかし (第二集) 石像物編
9. ふる里のむかし (第三集) 和白塩編
10. 粕屋郡志
11. 筑前戦国史 (吉永正春)
12. 戸次道雪・高橋紹運 (九州出版社)
13. 大神神社 (中山和敬)
14. 筑前国続風土記 (貝原益軒)
15. 日本書紀 (神功皇后、齋明天皇)
16. 太宰管内志 (伊藤常足)
17. その他

---

## 第2章 下和白村の歴史

---

下和白全字図



## 下和白の地名

まず和白の地名について考えてみる。

東洋言語学者の話によると、『和白は神功皇后新羅出兵の時の軍の評議場であった。和白は会議、議会などを意味する』とあり、神功皇后新羅出兵の時、天皇は熊襲征伐を主張、皇后は神託によって新羅出兵派であったが、議論が分れて仲々まとまらず、天皇の発案で高き所に登り会議が開かれた。その場所が和白の島見山であった。この時から『和白』の地名が生まれた。

次に下和白の地名であるが、「安河内安宏家の古文書」に次のように書かれている。

『九代延昌、後に三郎左衛門虎昌と改む。筑前国立花山城主戸次丹後守鑑連入道道雪の幕下に附属し、忠勤を励んで戦功多し。道雪養子立花左近将監宗虎より諱の一字を授く。のち虎昌と改め、粕屋郡下和白村を領す（1570年、元龜元年）。是に於て屋形を下和白の里に建つ』

前記のように、それまで和白郷と呼んでいた一帯が、この頃上和白、下和白と分れたものと考えられる。

## 下和白の遺跡と古墳

### 四十ヶ浦遺跡

出土品.....先土器時代の石槍 縄文時代の石鏃（1） 弥生式土器（2）

和白地区で一番古い遺跡である。

### 仲ノ裏遺跡

出土品...縄文時代の石鏃、石匙（各1）

### 後口古墳

下和白大神神社の裏手にある古墳。これはまだ発掘されていない。

### 飛山古墳

二カ所で発見された。

1号墳 460～530年頃と思われる。和白で一番古い古墳と考えられる。

出土品...ガラス玉、滑石製孔円板、直刀、剣刀子、勾玉その他。

2号墳 堅穴式石室

出土品...鉄鏃（1）1号古墳と同じ頃のものと思われる。

3号墳 破壊されて跡だけ残っていた。

## 相ノ浦北岸一帯

出土品...縄文中期三稜尖頭器、弥生中期から終末期の土器等が出土。

## 塚原古墳群

地名が示すように一番古墳の集まっていた地域である。昭和9年から10年に亘っての雁の巣飛行場建設の際、この山を崩して土を持ち出したため、古墳群は消えてしまったが、鉄刀や人骨が出土し、九大に持ち去られたという。

尚、前公民館長小金丸種尚氏家所蔵の古文書には、次のように書かれている。

『此の夏（1568年）中国山口に聞ける、毛利多勢を以て立花へ責め下る由。

立花城と申すは筑前第一の要害の城也。駒の足立悪しく攻寄り難き故砦を作り、此海辺下和白の内、桂ヶ崎山（勝ヶ崎 塩浜の裏山一帯を含む）へ立籠る。これにより陣の山とも云う也。暫く見合居る処、道雪公大いに怒り給う。桂ヶ崎へ籠りたる中国勢を追散らさんと、所々の川上より田水を流し、上和白海辺要害能き所に出城を築き、勢を添え押寄せ討取らんと立花勢打って出る。此所今に立花屋敷と云う也。又中国勢桂ヶ崎山より麓へ打ち出る。地蔵森浜の広野にて合戦あり。立花勢四百ばかり中国勢数百人討取る。

此の辺塚多し、之により塚原山と云う也。

今に至る迄秋の頃雨降る夜、1カ年に1、2度も桂ヶ崎山の麓より塚原山まで千丁松明と申して城の火多く続くなり。これ大沼からは見えず、これ立花屋敷より能く見える也。誠に其時の中国勢の念火と云う也』

この古文書の表記から考えると、塚原古墳群はこの立花と山口の毛利勢との合戦で倒れた毛利方の武将の墓ではないかと考えられる。

## 山ヶ下古墳群

昭和54年、和白丘中学校建設に伴う事前調査で発掘された。550年～600年頃の横穴式後期古墳。

### 1号墳

出土品...須恵器、土師器、耳輪環

### 2号墳 1号墳と同じ。

### 3号墳

出土品.....鉄直刀

## 神功皇后 船繋ぎ松 相ノ浦の地名

相の浦の由来は、神功皇后征韓の際、船が香椎の浦を離れると急に南風が吹き出し、海が時化ることが予想されたため、博多湾を出ることを見合わせ、勝ヶ崎を廻ってこの浦に船を繋いだことから、後に浦人達が「南風」ノ浦と呼んでいた。これが訛って『相ノ浦』と呼ぶようになったという。



神功皇后御繋船記念碑

下和白相の浦（和白五丁目地内）の入口に、神功皇后ゆかりと伝えられる八角のコンクリート壁の大きな井戸がある。傍に記念碑があり、碑の表には『神功皇后御繋船遺跡』と刻まれ、裏面には次のように記されている。



神功皇后ゆかりの八角壁の井戸

### 紀元2600年、昭和16年記念碑建立

『この地はその昔神功皇后三韓御征討の際船を繋ぎて陸に上り、暫く休ませ給ひ、釣魚の遊びを為し給ひし旧蹟として、後世に社殿を創立、神功皇后を奉祀せりと言ひ伝う。明治維新の頃までは、この山下に船繋の松と称する老松あり、枯死して後、明治37年村民相計りて稚松を補植し、更に境域を拡大し、社殿を改築せり。謹んで按ずるに、神功皇后三韓御征討の御遺蹟は幾多の星霜を経て殆ど煙滅に帰せんとするもの鮮からず。この時にあたり、村民同心戮力、祭祀を嚴修すると共に、遺蹟を顕彰し、後世子孫をして矜式するところあらしめんとす。寔に嘉みすべきなり。』

茲に由縁を略記して、後世に伝ふと云う。』

注) 相ノ浦の位置は「定光、北ノ上、勝ヶ崎、飛松」の字が接する地点で図示した地域と思われる。

## 唐ノ尾の地名

鹿児島本線、香椎から和白を経て筑前新宮駅へ大きくカーブする丘の突先を『唐ノ尾(トオノオ)』と呼ぶ。その昔、伝教大師と共に立花山へ登った二~三の人が、大師が修行された唐の国の方角を尋ねた折、大師が指差された原野から多くの鶴が飛び立ち、中和白の丘の端に降りたことから、この原野を『唐原』、鶴の降りた附近を『唐ノ尾』と呼ぶようになったと伝えられている。

## さやの神

福岡工業大学(和白東三丁目)前の道を挟んで、同校の運動場側の小高い丘に小さな祠がある。塞の神と称し願いごとをかなえてくれるという。云伝えによれば、百日咳、寝小便、歯痛など、子供の病気に駿ききめがあるとして地元は勿論、近郷からもお参りがあったようだ。

また、花柳病、陰萎になやむ人々の祈願をかなえてくれるということで、昔は奉塞の木製、石製の陽物で飾られていたという。



さやの神

## 長楽山円相寺と相ノ浦



長楽山 円相寺

浄土宗鎮西派 長楽山 円相寺

所在地 和白丘一丁目十番四八号

開祖は博多一行寺住職四世応誉といい、元和元年(1615年)に創立された。

初め相ノ浦(現和白五丁目地内)に在ったが元禄年間に現在地に移転したと伝えられている。

古老の話によれば元和元年浄土宗円相寺が相ノ浦に建てられ、その後下和白に移転、『北ノ上』の円相寺跡地に二代目の住職の墓があ



り、安貞様と呼ばれ、円相寺より祭りに来られていたという。

相の浦は和白地区随一の良港で、博多～裏粕屋郡を結ぶ船の泊り場となっていた。このような環境から神功皇后磯遊びの船繋ぎ伝説も生まれたと考えられる。

この相ノ浦へ応誉和尚が布教に船で通われ、相ノ浦に小さな寺を建て住まわれるようになったと伝えられている。

相ノ浦の太田 武氏邸左側の道を上がっていくと、一寸した石段があり、その右側が円相寺二代目安貞大徳の墓、石段を上った正面の広場に相ノ浦観音堂（裏糟屋郡千人参り77番札所）、その傍らに不動尊石像がある。



観音堂

波切不動尊碑

二代目安貞大徳様の墓

円相寺跡碑

相ノ浦観音堂（裏糟屋郡千人参り77番札所）

## 安河内虎昌、下和白を領有

下和白の地名の所で書いたように、安河内虎昌は1570年（元龜元年）頃、立花道雪から下和白を拝領し、移り住んで来た。これは文献にはないが、次のように推測される。

1567年9月8日宗像大宮司氏貞の軍勢が新宮浜より上陸、和白郷に乱入して民家を焼き払う戦闘が起きた。

宗像勢は陸路と海路の双方より立花城を攻撃した。為に道雪は新宮浜より敵の侵入に備えて、安河内三郎左衛門虎昌に下和白を与え、海への備えとしたものと考えられる。

## 下和白・大神神社

祭神 おおものぬし 大者主神（大己貴命）  
おおなむちのみこと

由緒 『産神なり 祭る所・大己貴命なり 祠は村の東、林中にあり 上和白村より勸請せり 年歴つまびらかならず 社内に田神社あり』【「筑前国続風土記附録」より】



下和白・大神神社

### 地元古老の話

慶長五年（1600年）より以前の創建、すなわち立花城の家臣、安河内延昌（下和白安河内氏の祖）が下和白を領して、この地に移り住んだのが元龜二年（1571年）ごろとすれば、今より四百数十年前の昔、上和白村より勸請、祭祀されたものと判断される。以下同神社境内の奉納物を記す。



安河内正七氏奉納の石灯籠

1653年、安河内正七氏石灯籠奉納

この灯籠は和白地区第一号の灯籠である。

1714年7月 鳥居

額には、「大神明神」他に「発起、安河内善六氏子中」と刻されている。大人が頭を下げてやっと通れる程のミニ鳥居。和白地区一番の小鳥居である。



下和白大神神社のミニ鳥居

1801年、1812年、1841年、1848年に夫々石灯籠が奉納されている。

下関市紅屋源蔵が1861年に狛犬、同65年に「幟」、同67年に「横幕」を夫々寄進している。

紅屋源蔵は安河内家の出で下関へ行って成功した商人であろうと思われる。

大正2年5月 鳥居及び境内へ登る石段が寄進された。

発起人には『参宮司同行』安河内文作、善三郎、善兵衛、助吉、辰次郎、惣三の名がある。安河内一門で伊勢詣りをした後、その御祝の意味での奉納であろう。

## 殿様道（1640年頃）

将軍が代わると、新将軍就任の御祝に『朝鮮通信使』が日本へ渡ってきた。そのお世話は通過する藩が全般的に行うこととなっていた。福岡藩は『相ノ島』に接待殿を作り、そこで全般の世話をした。その為藩の重臣、学者、時には殿様もお出ましになった。

初めは唐津街道を通過して津屋崎に出て、船で相ノ島に渡る道程だったが、甚だ不便のため、検討の結果、新道を通すこととなった。即ち唐津街道の新宮町原上附近から上和白へ下り、大神神社の前へ出て、海浜をめぐり中和白から唐ノ尾。唐ノ尾の先は博多湾が入り込んでいて通れないため、対岸へ向けて防波堤を築き、山ヶ下へと上る。そこから和白丘三丁目を通り、人丸神社前をぬけて新宮浜へ出る。このため新宮浜から相ノ島へと、大変便利になった。

この道を『殿様道』と呼ぶ。博多湾を仕切った殿様道のメリットとして『新開』『前田』が後に水田となった。

## 相ノ浦越し（<sup>どうでこ</sup>道天越し）

相ノ浦越し、又は「道天越し（ドウテン越しが訛ってドウデ越しになったといわれている）」とも呼ばれた。玄海灘ぞいの粕屋、宗像の人々が博多へ出る大事な道であった。玄海灘ぞいに松原を通り新宮町下府へ出て、下府から人丸神社道を通して『殿様道』へ。美和台公民館長佐藤悦路氏邸附近から右折、急坂を上り飛山を越えて相ノ浦へ至る。

相ノ浦から舟で博多へ向うというのが当時最も便利な道であったようだ。

## 四十ヶ浦池（1650年）

四十ヶ浦池は『殿様道』築堤工事によって干拓された土地、今の「新開」「前田」の灌漑用として構築されたものであり、この土地も新田として農耕地にするためには十年の歳月を要した。和白地区で最初に造られた溜池である。

干拓地近くに適地がないため2kmも離れた四十ヶ浦を池地に選定し、この池から延々水を引いた。当時としては大変な難工事であったと推定される。池の周囲は当初280mであったが、現在は約1kmである。



四十ヶ浦池

その他の下和白地区溜池

龍化池 1687年竣工 周囲 315m

仲裏池 1901年竣工 周囲 242m

## 安河内家邸内の不動明王（1698年）

下和白安河内元邸（和白丘一丁目）には、その昔殿様の休息用に豪邸を建てた記録が残されている。そして殿様のご来遊の時の安全を祈って邸内に「不動明王」が祭られていた。

## 相ノ浦香椎神社（1707年）

相ノ浦北ノ上に鎮座。

古い記録として「筑前続風土記附録」の中で『拝殿九尺四方。祭祀陰曆九月九日、十一月六日の両度。奉仕武内高間、桂ヶ崎（勝ヶ崎）北方村中にあり、宝永年中に勧請せり。相ノ浦八戸産神なり』とある。

その後は毎年11月6日大祭には官幣大社香椎宮より神官出張のうえ祭典執行せらる云々と記録されている。



相ノ浦香椎神社

## 若宮様

昔まだ和白平野が海だった頃、<sup>とんまつ</sup>飛松（旧塩浜集落裏山）の麓をめぐる、幅1mくらいの路が走っていた。

それが当時唯一の下和白 塩浜 相ノ浦 新宮への道だった。

塩浜を出て相の浦に向ってすぐ、少し坂道を登った所に頓松（飛松）といって5～6本の素晴らしい松の大木があって、遠くから眺めてもうっそうたる森をなしていた。

その老松の下に『若宮様』の小さな御堂がある。若宮様は牛の守り神である。大正頃ま



牛の守り神 若宮様

で牛は農家の宝物、農耕の大切な中心的力であった。この大事な牛を護ってくださる神様が若宮様だった。

大正頃までは下和白や塩浜の農家は年に一度、農耕の宝である牛を和白潟へ連れて行き、きれいに海水で洗い着物等で着飾らせて、この若宮様へお詣りし、牛の健康をお祈りしたものであった。

この丘下に大きな井戸があって、白味をおびた美しい飲料水が湧き、塩浜中組などは大方この井戸水で生活をしていたが、今はその影もなくなっている。

## 下和白の庚申堂（1711年）

下和白安河内和三氏（和白丘三丁目）の邸の傍にあり、昔は殿様道を守ってこの街道筋に立っておられたのであろうが、今日では裏道になってしまっただけで庚申堂も忘れられそうになっている。1714年の建立。

当時は地元の主婦達の『庚申待ち』という信仰と親交の中心となっていたようである。



下和白 庚申堂

## 蒲池開

大蔵池構築の発案者 蒲池重広は、郡奉行として非常に有能な人だったらしく、下和白現在の「和白丘三丁目」附近まで、博多湾の入海を堰き止めて干拓し、水田二町四反ばかりを造成して、自分の名をとり『蒲池開』とした。

博多湾の入江も段々沖へ押しやられてゆく。此の事業の現地指導者は、安河内本家十四代、庄屋九郎右衛門と考えられる。数次の干拓によって田も沢山頂戴したのであろう。安河内家は和白海岸まで出るのに、ずっと自分の土地が続いて他人の土地は通らなかったと伝えられている。

## 安河内家八十婆さん

安河内安宏氏家の古文書に次のようなものがある。

『裏粕屋郡下和白村

八十歳 惣次郎母

殿様、老人御恵養の思召を以て、名元御覧の極、先程御帯府中に付、追而御下国箱崎松原御通駕の節御目通可申、仰出の事』

安河内正七妻寿子は働き婆さんとして四隣に響ていたが、遂に藩庁の役人の耳に入り、殿様が江戸より御帰りの際、箱崎松原において御言葉をくださったという。

## 下和白の六地藏 (1798年)

和白丘二丁目、県道26号線（旧国道3号線）の傍にある。附近的字名を『地藏後』と称するので、干拓堤防の守護神だったかもしれない。



干拓堤防の守護神・六地藏

## 和汐小学校 明治15年（1882年）

奈多鯨学校が明治14年に開設され、それに刺激されて下和白二軒茶屋（旧国道3号線沿い）に和汐小学校が開設された。古老の話では生徒はみな素足で登校、学校横の農業用水で足を洗って教室に入っていたという。

当時、小学校は4年制で、教室が一つしかなかったため、上級生は奈多や三苦で借室して学んでいた。



昭和33年頃の和汐小学校跡附近

## 和白村の役場 明治22年（1889年）

明治22年町村制が施行され、上和白村、下和白村、塩浜村、三苦村、奈多村の5カ村をもって和白村が発足し、下和白地内（現在の東消防署和白出張所所在地）に和白村役場が建設され村政の中心となった。

明治22年の当初予算が1,781円33銭8厘で、戸数は536戸、人口2,584人（男1,356人、女1,228人）の静かな農漁村であったと記録されている。



昭和30年頃の和白町役場

昭和29年11月町制施行により和白町となる。

昭和35年、福岡市に合併し旧和白役場庁舎は福岡市役所の出張所として利用されていたが、昭和47年に解体された。

## 和白駅 明治37年（1904年）

粕屋郡内外の石炭開発に伴い、鉄道を敷設して出炭を集約する考えから、博多湾鉄道株式会社が発立された。明治35年用地買収を開始、土井～酒殿間の鉄道敷設工事に着工するとともに、明治37年1月には西戸崎～須恵間が竣工し運転営業を開始した。同時に奈多駅も開駅したが、和白駅は当初はなかった。安河内千吉氏（和白丘一丁目）が自分の土地を提供するなど、駅開設の運動を行い、同年12月にやっと開駅した。



昭和20年代の和白駅構内と新開公営住宅

開駅当時の和白駅は堀立小舎であったという。また、大正13年には現在の西鉄宮地嶽線新博多～和白間、大正14年には和白～宮地嶽間の営業も始まった。

昭和2年、宮地嶽線和白駅落成。

昭和4年、宮地嶽線電化完了。

昭和41年、和白香椎線と宮地嶽線は立体交叉となり現在に至っている。



現在の和白駅・左...西鉄宮地嶽線



和白駅のポイント切替風景



## 道天池 明治39年（1906年）

塩浜地区は池を持たず、下和白から池の水を分けてもらうなど、水田の水には困っていたが、何とかして自分達の池がほしいとの悲願から、ようやく道天池の構築にこぎつけ、明治39年3月着工した。

水面面積4反2畝の溜池の記念碑が残されている。（現在は四社神社境内にのこされている）



道天池記念碑

## 許斐硝子工場創業と和白駅前地区 大正6年（1917年）

許斐友次郎氏が和白海岸にてガラス工場の営業を開始する。

ラムネびん、サイダーびん、酒の一升びん等を主として製造した。最盛期にはラムネびん日産3万本の、ラムネびん工場としては日本屈指の大工場であったが、その後、労働争議が激しくなり、昭和5年2月21日の火災で遂に工場廃止に至った。

駅前地区は和白駅の開設や許斐硝子工場の発足などによって急速に発展し、運送店、白雪雑貨店、割烹旅館、会社の従業員住宅、床屋、飲酒店などが次々と出店され、当時の和白村では一番の発展地域であった。



和白駅前割烹旅館おたふく屋

## 筑前新宮駅 大正10年（1921年）

大正4年6月、鹿児島本線「古賀～香椎」間に列車運行調整のため信号所が設置され、大正10年10月1日には信号所を廃止して新たに駅が設置された。

所在地は福岡市東区和白丘一丁目22番27号（旧粕屋郡和白村大字上和白無番地）で、新宮町との境界にあり、駅舎は福岡市、ホームの一部は新宮町となっている。

「新宮駅」は和歌山県新宮市に現存するため、混同を避けて『筑前新宮駅』となった。その後、駅前の広場や道路が整備され、現在では乗降客数も九州で上位を占める駅となっている。

駅前の一角に、当時の駅前整備に協力した道路用地寄附者の芳名碑が建立されている。



現在の筑前新宮駅ホーム



道路用地寄附者の芳名碑



筑前新宮駅前よりの標元（距離）

## 和白駅前大師堂 大正12年（1923年）

和白駅裏通りに小さな大師堂がある。正面の板額に粕屋北部新四国千人詣り第五十四番霊場とあり、弘法大師像、十一面観音像、不動明王像の三体の石仏が祀られている。

これらの石仏は大正12年、姪ノ浜で造られ「カネンテ」（かつての博多湾岸、船つき場）まで船で運ばれ、和白駅前住民が「ハッピー」鉢巻姿で、紅白の綱で車力に乗せて引いて来たという。以来地域の人達の信仰の場となっている。



和白駅前大師堂

## 福岡特殊ガラス工場創業 昭和14年（1939年）

昭和14年、筑前新宮駅前に中島広吉氏によって設立された。非常に皇室に愛されたガラス会社で、皇族も次々と来訪され、昭和33年には昭和天皇、皇后両陛下の行幸啓の光栄に浴し、町を挙げての大騒ぎであった。

昭和61年社名を「マルティグラス株式会社」に改め商標を統一した。



昭和33年頃のマルティグラス（株）手前は旧3号線



昭和64年頃のマルティグラス（株）

## 下和白の文教施設

下和白は文教地区ともいえる。以下に学校名を記す。

### 福岡無線学校

昭和28年西戸崎に開校。昭和30年2月現在地へ移転。

昭和33年に電波学園となり、昭和38年福岡工業大学の発足により附属高校となる。



昭和34年頃の風景

### 明林高校

昭和32年発足。昭和40年立花女子高校として再出発した。

### 朝鮮学校

昭和48年4月開校



造成中の朝鮮学校用地

## 美和台の誕生と名称の由来

昭和35年8月、和白町が福岡市に合併されると、市の大都市圏意識が急速に高まり、県道26号線沿道に進出する企業が増加した。西日本鉄道株式会社の西鉄宮地岳線沿線の分譲宅地開発計画を端緒として、福岡市においても、昭和43年に下和白・四十ヶ浦・飛山一帯の開発計画による現地調査の結果、約600万平方メートルの団地開発計画が決定された。市議会にも説明承認され、福岡市住宅供給公社の事業として施工されることとなった。

昭和44年から土地買収交渉に入り、地元地権者の協力によって翌45年買収契約が成立。昭和47年8月の入居が開始されると48年には222戸、49年、50年度には563戸と急増し、当初計画の建築数1,274戸に対し1,185戸の大集落が完成しつつあった。この間行政からの連絡調整のため町界町名整理にある町名毎に、その設置指導がなされ、各町に自治町内会が結成発足された。

地域の名称について三苦側と下和白側の意見が対立したが、関係者一同思案の末、三苦の三を“美”と読み替え、下和白の“和”と結んで「美和台」という美しい町名で意見が一致した。

### 美和台小学校の開校

当初、小・中学生は和白小・中学校に通学していたが、昭和48年度には和白小学校が満席となった。団地内には小学校用地が確保されていたので、教育委員会も緊急対応で新設校建設に着手され、昭和49年4月に美和台小学校が開校した。

### 美和台公民館の開館

美和台校区を住み良い地域とするため、お互い共通の社会活動について学び、社会教育振興のリーダー育成を目的として、昭和52年に美和台公民館が開設され、活発な公民館活動が展開されるようになった。

### 美和台校区自治連合会の発足

昭和48年に若干の自治町内会が結成され、和白校区自治連合会に所属していたが、昭和57年7月に校区全区域の町内会を以て美和台校区自治連合会が発足した。

### 和白丘中学校開校

昭和55年4月、和白丘中学校が開校したことにより、それまで和白中学校に通学していた美和台校区、和白東校区の中学生は和白丘中学校に通学することになった。

美和台校区世帯数・人口・町内数

	世帯数	人口	町内数
1972年（昭和47年）	1,018戸	3,162人	6町
1984年（昭和59年）	3,614戸	11,161人	13町
1999年（平成11年）	5,167戸	13,738人	17町
2005年（平成17年）	6,236戸	15,620人	20町

幼稚園・保育園・いこいの家

- 1973年（昭和48年） 美和台幼稚園開園
- 1975年（昭和50年） 老人いこいの家完成
- 2003年（平成15年） 同 改築
- 1975年（昭和50年） 静ヶ丘保育園開園
- 1976年（昭和51年） ツルタみとま幼稚園開園



昭和52年 開館当時の美和台公民館



平成16年 改築後の美和台公民館



開発前の美和台（昭和42年）



昭和54年の美和台地区

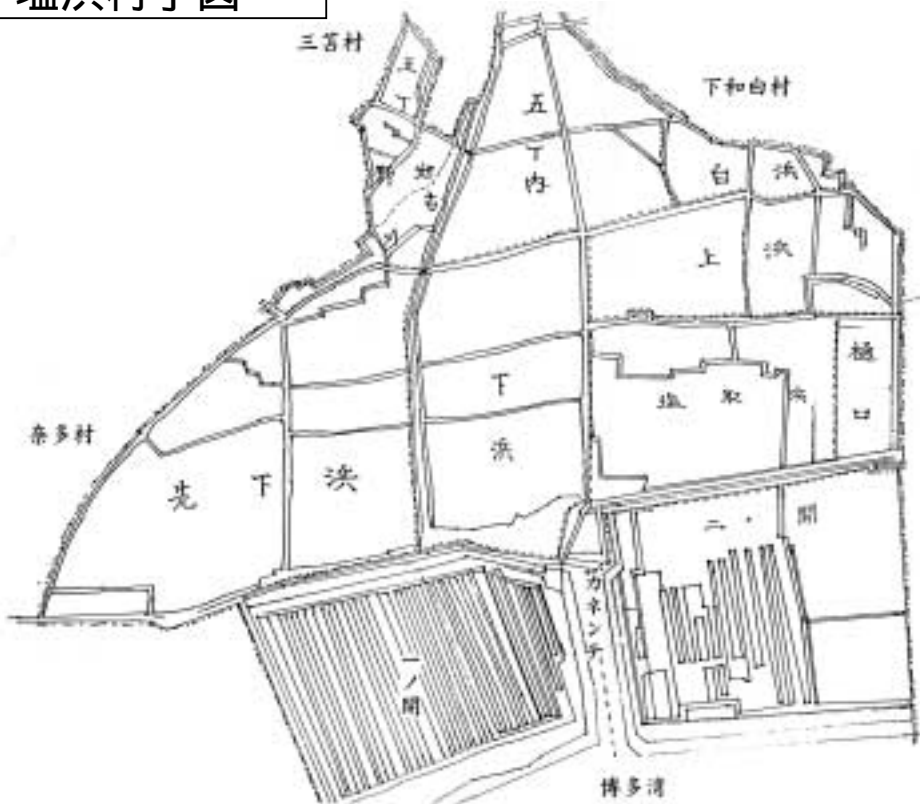


---

# 第3章 塩浜村の歴史

---

塩浜村字図





# 塩浜ことはじめ

## 桂 潟

藤原純友の乱の時、大和朝廷の追討軍と純友の叛（反）乱軍が、天慶四年（941年）6月6日に箱崎沖、つまり博多湾で決戦した。追討軍は大勝し、塩浜沖から香椎沖を航行して、索敵しながら箱崎沖に至る。その時の記録に桂潟が出て来る。

『福岡県地理全誌』には、下和白の勝地として桂崎のことを、次の様に述べている。

『相の浦の西、出崎の遠干潟なり。里民は勝浦崎と呼べり、一説にこの海辺をすべて桂潟と言う』

この桂潟が塩浜の原形となる。

後九条内大臣の歌（1310年）

“ 秋の夜の潮干の月のかつら潟  
山までつづく海の中道 ”（読人不知）（夫木集24）

とある。

しかし、『筑前國續風土記 卷之十七 宗像郡下』で、貝原益軒は前掲の古歌を取り上げて、異説を称えている。

以下原文のまま、

『名所方角抄日 神の異國をしたがへて かつらだけと言う 山にのぼりてかつらとのたまふより 勝浦と言としるせり 今里人のいひ伝ふるも 神功皇后新羅にかちて帰り 此浦にあがらせ給ふ 故にかつらと名付くと言う

勝浦潟は名所也 古歌あり 勝浦村の西にありし遠干潟也 一説糟屋郡那多濱及和白の濱を勝浦潟といへり

されども古歌にあはず むかしは津屋崎より勝浦村まで 入海にて潮みち来り 潮干ぬれば 干潟と成しが 寛文十一年（1671年）潟を新田に開きて八十六町歩となる 此外塩濱二十六町歩あり 皆勝浦村に属す 其の長さ南北二十三町（2,0507m）あり 今は潟なし 勝浦の上の高き山を勝浦嶽と言う

海の中道は勝浦村と梅津の間の海中の道をいふなり 其の長き事十町許あり むかしは勝浦と津屋崎の間は 皆入海なりし故 此所は両方に海有りて 海中にある道なれば 海の中道とはいへるなるべし

宗祇法師が指南抄日、海の中道 桂潟 宗像にあり 養生の浦よりも北なりとかけり

又糟屋郡那多濱を海の中道と言説有 されど 山までつづくと言歌にはあはず 宗祇が説を是とすべし

前掲の古歌 此歌名寄には後京極良經の歌とす 良經の歌集に無之 山までつづくとよめるは 勝浦嶽につづけるにあらず 梅津の薬師山につづけり』

桂潟が津屋崎と和白と、どちらが正しいということではなく、2カ所あったとしても、塩浜のあたりを桂潟と呼んでいたのはまちがいない。景勝地桂潟が人工の堤防によって次第に陸地化し、今日の塩浜集落が出来てゆくのである。

以下その跡をたどって行く。

# 塩浜の歩み

## 永禄11年（1568年） 桂ヶ崎山（塩浜の裏山）での戦

和白駅前的小金丸種尚家の「文書」に次の様な記事がある。

『……中国勢桂ヶ崎山より麓へ打ち出る。地蔵森浜右の広地にて合戦あり。立花勢四百ばかり、中国勢数百人を討ち取る。此の辺塚多し。之により塚原山と言ふ也。今に至る迄秋の頃雨の降る夜、一ヶ年に一、二度も桂ヶ崎山の麓より塚原山まで「千丁松明」と称して、城の火多く続くなり。これ大沼より見えず、これ立花屋敷より能く見える也。誠にその時の中国勢の念火と言う也……』

昭和4年頃、県失業対策事業として、道路新設（現県道志賀島線、通称飛行場道）事業が行われた時と、昭和9年から11年にかけて雁ノ巣飛行場建設のため、この塚原山の土砂を道路用と飛行場用に使用したが、その発掘の中から『塚原古墳6～7個、中から甲冑、刀剣等6～7組』が出土した。故に1万立方メートル土砂を採る毎に地鎮祭が行われた。（久保田巖隆氏談）

## 明応9年（1500年頃） 個人による製塩始まる。

終戦後（昭和20年）の調査によると、昔の桂潟の海岸に今日の字名の、古田開、古塩浜、郡開、浜替、唐尾等に、昔塩を焼いたと思われる塩焚きの遺跡が残っていた。

この頃から塩浜集落の主流である久保田家の先祖は、相の浦裏山に居住し、丘を下って前記の箇所附近で製塩をしていたものと推測される。

## 万治3年（1660年頃） 久保田家先祖塩浜に来住

昭和39年3月、九大教授が塩浜に来訪、久保田秀男（現益満）家及び久保田益次郎（現清司）家を、県文化財として指定の件で調査した。

その折、教授はこれらの家は250年から300年以上は経っていると語られていたが、残念ながら秀男家は、各所に近代風な手を加えられていた為、又益次郎家は、文化財指定を嫌って翌年解体されたので、県文化財の問題は立ち消えとなった。（福岡県教育委員会発行「民家」より）

以上から考えると、久保田の先祖が相ノ浦の裏山に居を構えて数十年経ち、生活も漸く落ちついたので、新しく家を建てられたと考えると、久保田の先祖が塩浜の現在地に移住されたのもこの頃と考えられる。これが塩浜の始まりである。



久保田益満家の解体された梁

## 寛文元年（1661年） 塩浜村の発足と五丁の名の由来

「筑前国続風土記拾遺」に次の様に記されている。

『塩浜村 本村及五町 西 五丁川 三苦より来る小川也 昔は下和白三苦両村の海濱にて広き斥也 元禄十六年当国の権臣 大野貞勝地理を察し公財を用ひて塩浜三拾町を開けり 寛文元年六月台廳を經給ひ新田と成 猶其内塩濱も五丁二反は今に在 因て村を立て名とす』(原文のまま)

又、「筑前国続風土記附録」には、『塩浜村 寛文元年六月台廳を經給ひ新田となる 塩浜五丁二反あり 其餘は田地也 塩浜の土手堤にあり』(原文のまま)

塩浜村という地名と発足は、拾遺に書いてある通りだと思われるが、五丁という小字名は、塩田が5町2反あったので、そこから五丁という地名がついたという説がある。その記録は未だ見つからないが、その説の通りであろう。

## 元禄11年（1698年） 元禄築堤工事始まる。

## 元禄16年（1703年） 黒田新續家譜

「黒田新續家譜」巻之十二，綱政記五には次の様に記されている。

『今年（1703年）糟屋郡奈多浜に鹽濱三十町計り初めて開かせらる 去年江戸に伺い御ゆるし有り 初 大野忠右衛門執權此地を見立て 鹽をやかせて然るへきを申しければ 綱政是をゆるして忠右衛門に其事掌らしめたまふ 鹽浜の地は奈多の隣村三苫 和白の海濱にあり 此地を開くに民力をからず 吾人の役使を用す 公財を以て貧民を傭て嘗作しほとなく功終わりにて民間の利用甚多くなれり 多々良湯並 和白鹽濱の邊 猶壘地あるに依て 此冬又 新田及鹽濱壘關の事を江戸にうかがひたまふ』（原文のまま）

この様に元禄16年の築堤の後も塩浜地区には、塩焼きに適した土地が多くあるので、塩浜を開く事を参勤交代で江戸在勤中の綱政公に、この年の冬に許可を願う。と記されている。それで、塩浜から奈多方面への何本もの道筋は、県道志賀島線を除いた他はすべて、汐留めのための土手であったものと思われる。

この当時の塩田（現在の字塩取浜）には直径二間（3.84m）もある大井戸を掘り、此を「エナ」と呼んでいた。この「エナ」に周囲に引いてある海水の溝からしみ込んでくる潮水を、タゴ（桶）に汲んで塩田に撒布し、濃い塩水を作っていた。その濃い塩水を塩釜（五右衛門釜）で煮詰めて食塩をつくるのである。

人間は米がなくても生きて行けるが、塩がなければ生命を維持することは出来ない。古代から山と海をつなぐ道は、この塩を運ぶためのものでもあった。

## 宝永2年（1705年） 塩釜の歌

元禄築堤の功労者 大野忠左衛門貞勝は、糟屋郡塩浜で塩釜の栄えるのを、遠く荒津山（今の西公園）から眺めて、次の様な歌を詠んだと伝えられている。

『海の中道に続きたる和白浜という所は 人家も無かりし荒磯なるに 近き頃より塩釜をうつして ほどなくにぎはふ煙の躰を荒津の山より見渡しはべりて われが作りし所なれば悦びの余りに

“ みちのくもさながら近き塩かまの  
けぶりにつづく海の中道 ”

又、貞勝の子孫、大野昌次郎氏の話によると、「貞勝が塩浜の塩田からたち昇る塩釜の煙を、西公園に登って眺めるのを楽しみにしていた」と語り伝えられている由。

## 宝永3年（1706年） 龍王祠

「筑前國續風土記」によると『永世まで風波の荒廃なからん事を願ひて 此所守護のため 宝永三年龍王の祠を南方の海濱に 新に造立せり』(原文のまま)

その龍王の祠は、塩浜の人達は龍宮様と呼んで、中二組の久保田茂氏の稲屋から南側の道をはさんで、田圃の中にあり、その境内は田圃よりも1m以上も高く、大きな梅檀せんだんが一本生えていて、まわりを竹藪に囲まれていた。その四角い境内地に向かって南にまっすぐな道が一本、参道として盛り土でつくられていた。

そこでは毎年、塩浜中の人が集って“おこもり”をしたり、子供達が相撲をとるのを、大人達はまわりをとり囲んで見物していたそうだから、かなり広い面積があった(中一組久保田政幸氏の母堂、久保田コマさん談)

いつの頃か御神体が四社神社に遷されて、その後境内にあった井戸の囲石も昭和18年に久保田常雄氏(東2組、故人、隆氏の父君)の初老賀の時、同年輩の人達の奉仕で同神社に移された。その跡地は、交換分合や耕地整理で、現在では久保田茂氏の田圃の一部になっている。



昭和18年頃までこの地に龍王の祠があった

## 宝暦7年（1757年） 和白小学校旧正門東側の庚申塔

和白小学校の正門を出るとすぐに、学校の赤い煉瓦塀に沿って東西に道路がついていた。

正面に向かって東側の塀と道路との間の空地に大きな松がそびえていて、その根方に庚申塔が祀られていた。

庚申塔は道標の役目と、通行人の安全及び道路の荒廃のないことを願って建立されたにちがいない。したがって塩浜集落から小学校までの通称学校道は、この時に造成されたか、又は大々的な補強工事があったものと思われる。

この庚申塔は昭和55年に四社神社境内に移設された。



四社神社にうつされた庚申塔

## 寛政12年（1800年） 中村南軒先生寺小屋を開く

中村歯科医院の始祖、南軒先生（医師）は諸国遍歴の後、塩浜に住居を定めて、自宅の一室で“寺小屋”を開いた。その後、塩浜に人家が増えるにしたがい、一室では足りなくなったので、塩浜の四辻に二間と三間の「寺小屋」を建てた。「寺子屋」は明治の初め迄続いたが、南軒先生は天保2年（1831年）に亡くなられた。

明治初年 塩浜寺小屋 中村先生 生徒三十人

寺小屋科目 実語教 庭訓往来 農業往来 大学 小学 孟子 論語 中庸

## 文化2年（1805年） 大暴風雨

沖の土手数ヶ所が大破損し、為に博多湾の海水が侵入、三苦附近まで一面の海と化した。この時、中村南軒先生は塩浜一区旧公民館のあたりに住んでおられて、海水が引いた後の家の鴨居に蛸が吸いついていたという話が残っている。この大水に懲りた南軒先生は、久

保田益満氏宅の裏山と、久保田隆氏の稲屋の裏山との中間の小高い所に転居された。現在、そのあたりは竹藪になっているが、使用済みの薬の空きビンが落葉の中に埋もれているのを見ることが出来る。

## 文政元年（1818年） 御達の写

久保田茂氏所蔵の藩の「通達令の写」だが、文化文政は江戸時代の文化の爛熟期で、太平ムードに浸っていたといわれる。それでも一般庶民は制約にしばられた生活の様相がうかがえる。

- 一、お年貢の皆済まぬ間は 寺社の寄付を進める人 又商人等村内に入込まぬ様 村の入口に札を立てる様申しつけ置き候 万一まぎれ入り候えば 村人申し合せ 早速村内より追立て申すべき事。
- 一、鉄砲獵の儀 御留場近辺は 別て念を入れ申す可く候 村々の庄屋 組頭共には札目付より申しつけ置き候儀につき その旨相心得 御法度の趣相守るべく候事。
- 一、大庄屋を初め末々妻子に至るまで 案駄（山駕籠の日覆のない物）乗りの儀は停止に候へ共 他所に行った折病気にかかり 馬に乗せられぬ節は 庄屋 百姓は大庄屋へ通知し 案駄に乗せ連れ帰ること 差し許し候 極老又は長病の者 よんどころなく 他所に出立つの節 案駄乗りの儀は大庄屋吟味の上 申し出候はば 差し許し申す可く候こと
- 一、医師など馬医共は 俗にまぎれ申さざる様 剃髪 惣髪に致すべく候 俗容にてまかりある者は 村並の面役へ申しつくべき候事
- 一、他国と養子縁組取り結び候儀 よんどころなき次第あれば 願い出で 手続きふむべく候事 自己勝手に相きめ候はば 曲事となすべき事。
- 一、村々へ入り込み候旅人 旅日雇共に改め方の儀 かねて庄屋 組頭に通達の通り その身元を入念に改めて 雇い置き申すべき事 手続き作法を違えて 出所不確かな者を村内に差し置き 日雇同然に召し仕え申すまじく候事
- 一、通りがかり旅人等 たとひ物もらい体に候とも わずらい候者は かねて 申しふれ置きし公儀触れの通り 早速医師をかけ 右病人の飢 寒さ等致さざる様いたわり 従来寺証文等持ちをり候儀をたしかめ 右病人の在所へ帰りたき旨を望めば その旨口上書き致させ 申し出でて後送り出し候筈に候へども 遠郡は征き帰りに隙を取り 病人のためよろしからず 送り出して後早速申し出ず可く候 御国内の者が 行きがかりにわずらい候はば 申し出でにおよばず 病人の望むままに送り歸し勝手次第 若しまぎらわしき者に候はば その段申し出る可く候



- 一、出所のうたがわしき品 買取候儀はもちろん質物にも取り申すまじく候 すべて質物は証人を立てて取りおき申すべし 証人のない品が盗品であれば 質屋が損失致すべし 証人のある品で盗品であれば 証人の弁償に申しつくべく候

## 天保4年(1833年)11月 (欠略) 取行心得

天保4年は諸国に飢饉があり、江戸や各地で飢民の一揆、打こわしが起り、幕府は5カ年間の儉約を布令した。その儉約令を福岡藩も藩内に通達した際のものと思われる。(久保田茂氏所蔵の古文書より抜萃)

郡奉行久門八郎太夫 岡本権太夫よりの指令書

- 一、本来 金ぶちのおぜん お椀 沈金を彫したお箸 又は金銀絵入 綿 手焼物 今様風流な箸物は用いてはならない
- 一、婚礼 養子引越しの節 持参してよい品々は 長持壺棹 つづら壺荷 たんす壺棹 これをすぎてはいけない 又夜具の外 衣類等は 風呂敷包につつめる程と心得ておくべし
- 一、婚礼その他、慶事弔事につき、親族が集った時、料理むきは随分手軽く、一汁二菜、吸い物一つ、取肴一つ出し、祝会の節も身近き親類ばかり、その外は遠慮致すべく候。但し、本分の婚礼養子等の節、餞別、土産等、身近き一族たりとも、とりかわし致すまじく候。
- 一、当時外見をつくらう時節にて(欠略)とりおこないの件を 悪しきように申しとなえる風俗と相成り...(欠略)の道 その時々庄屋 組頭共届けをし 尚組合の者よりお互いに吟味しあうよう とりはからうべきこと。
- 一、破魔弓 羽子板 カブト 雛飾り等の祝いに 一族 近所の者を呼んではならない 又木綿で作ったとは伝え のぼり ふきぬき等停止申し候事 但し 右祝儀用の品で値段の高いものは とり扱い申さざるよう申し付け候
- 一、伊勢参宮又は旅行等の節 送り酒 むかえ停止 親子兄弟たりとも 餞別 土産停止 申付け候
- 一、年始 五節句 盆等 郡村しきたりの通り ただ是を忘れぬ程度に しるしばかりにつかえべく候 大勢うち寄り浪費せず 飲食致さざるべく取り計うべし
- 一、衣類一切木綿を用いべく候事 真綿 絹糸入停止 小児のつけ紐も同様と心得べし
- 一、すべて めだち候染模様 又は鹿子入 どんす染の類 花しぼり等に至まで すべて高価の品停止
- 一、御免の染色

黒茶 なんと茶 ろこう茶 千草 空色 紺 麻黄 こほり山 ねずみ茶 萌黄  
うこん 花色 藍引き 唐黒 あかね 紅花染 うすがき 土色 右染色の中で 縞  
模様 又は返し物に染候儀 女子十才以下は軽きちらし入りに染ても勝手次第 えり  
そで ふち等も同様 その他一切停止

- 一、右染色の外 決して仕立てざる様 紺屋どもへ達し申すべく候
- 一、十歳以下の小児たりとも 振袖停止のこと
- 一、帯は木綿帯あい用い申すべきの事。くし こうがい かんざし共へ使うせつ 銀にて  
つくり候分は停止
- 一、女子の髪かざり しぼり 木綿 金銀紙にてつくり候分 その他 目立ち候品は相用  
いさせ申すまじく候こと
- 一、じゃの目張の傘相用い申すまじく候  
大庄屋 村役人たりとも なるだけ「みの」を用い申すべく 「みの」に飾りがま  
しき儀これなき様 相心得べく候こと
- 一、ぬり下駄 おもて付き下駄停止申しつけ候こと
- 一、すげにて作り候日傘は相用い申すまじき事 女は用い来り候粗品のすげ傘は 相用い  
候儀勝手次第に候事
- 一、前によりありきたり候まるづきん かくづきんの外 面ていをかくし候づきん かぶ  
り申すまじく候事
- 一、村の医師 帯 下着にかかるきちぢみ相用い候様は 御免に候へども 相なるべく粗ふ  
く相用い 妻子は百姓の家内同様相心得 衣類染色等 くわしく申し聞くべく候こと
- 一、日傘は医師たりとも すべて停止申しつけ候こと。
- 一、子添婆 これ又 村の医師に準じ候ことに候えども 別して あいつつしみ 粗ふく  
相用い候様 申しつくべく候事



久保田茂氏所蔵の古文書

## 嘉永2年（1849年） 大水害

福岡地方は非常な厄年であった様で、「この歳大飢饉、大洪水大暴風続出し、為に転伏  
流亡家屋6,800戸 減収実に407,000石であった云々…」と記録されている。

この大洪水のために、奈多～下和白を結ぶ沖の土手も所々決壊した。

## 嘉永3年（1850年） 大暴風

この年も又大暴風が起り、沖の土手は非常な被害を受けた。当時この海岸一帯を支配し  
ていた矢野六太夫は応急処置にあたり、非常な苦勞の末、各方面と検討の結果、「沖の土  
手の補強では長持しない、この沖にもう一つ新しい堤防を構築する外には、この地方の安  
寧は得られない」との結論に達した。

しかし、矢野氏は長崎警備のため当地へ出張を命ぜられ、藩も財政難でそんな余裕はな  
い。計画倒れに苦しい日々を送るうち、遂に着工の日がやって来た。

## 嘉永6年（1853年） 沖の堤防着工

（『夕刊フクニチ』昭和27年11月23日「勤労感謝の日に贈る」に記載された記事から引用  
する）

「幾度かの潮止め工事も大自然の力には打ち勝てず、放置されていたが、嘉永年間、糟  
屋、宗像郡奉行肥塚次郎右衛門が、堤防大修築を思い立ち遠賀の請負、土分松本平内と相  
談して、当時博多で『一（市）は川端、二（荷）は茶忠』とはやされ、古小路の一角に茶  
の卸問屋を手広く営んでいた豪商七代目大山忠平に話を持ち掛けた。

大山はさらに侠商として名を売っていた浜小路の石橋七蔵（鳥羽屋、酒醸造業）と官内  
町の藤崎貞次（菊野屋、醤油醸造業）とに話し、ここに松本氏を仲介者として、肥塚氏と  
三侠商の会談を行った  
結果、金策と工事計画  
がまとまり、嘉永6年4  
月工事着手の準備が整  
い、同月15日朝もやを  
ついて行なわれた。

西口総勢380人、東  
口総勢270人、小船90



西口、東口の鍬入式の行列の記録（福岡市博物館蔵）



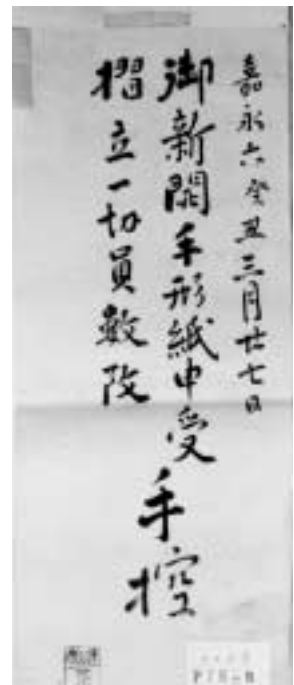
西口、東口の鍬入式の行列の記録



西口、東口の鍬入式の行列の記録



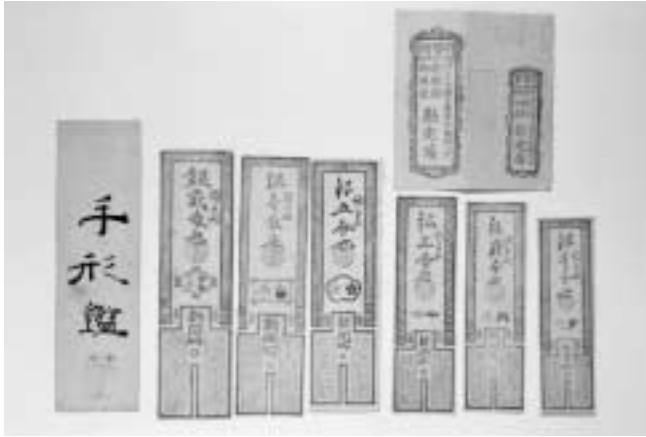
新開手形発行願い (福岡市博物館蔵)



新開手形発行願い (福岡市博物館蔵)



新開手形発行願い (福岡市博物館蔵)



新開手形（福岡市博物館蔵）

仮小屋を建てて、徹夜工事に移った。

大山氏は特に工事に対して、通貨便法として新しい『新開手形』を発行し、これを現場の引換所で現金と換えさせた。彼がこの工事にどんなに金をつぎ込んだかは『和白好況』話が遠近に伝わって、幕末の不況の折柄、西は島原、天草、東は中国筋からどっと求職者が押し寄せたのでもわかる。築堤工事をめぐる景気の豪華版は、まさに黄金の春であった。

延々1,350間（2.34キロ）に及ぶ広大な海岸で作業班1,000名が入り乱れて働いている現場は壮観を極めた。工事は砂浜のため非常な難工事であったが、安政2年（1855年）には基礎の護岸工事を終わった。

その2月には特に大山忠平氏に褒章が下されたが、その表彰のかけには費用のやりくり等から遂に無一文となった大山忠平氏が、親族からは狂

隻からなる鍬入式の二組に別れた行列絵巻は、豪華絢爛たるもので、遠く小倉、肥前からも希有の大工事の起工式を見に来たという。

当時は32歳の御用達、総後見大山忠平氏は、松本平内氏を監督に人夫長8名、石方頭領8名を配し、更にその下に石工300名、砂船方200名、陸人夫600人が



弘化2年（1845年）沖の堤防着工より8年前の大山忠平旅日誌の一部、観光旅行等ゆったりした生活がうかがえる

人扱いにされて、出入りを禁ぜられていた悲話が秘められていた。

もともと350町歩の田畑を守り、4,000人の活路を開いてやろうと云う義狭心から、自ら買って出た工事ただけに、裸一貫になるくらいは彼にとって問題ではなかったが、更に第2期工事を思い立ったのには、世人は驚いた。

同年7月、藩命を受け、資金調達のため大阪へ旅立ったが、不調のまま12月に帰国、ここで大山氏は長年の無理がたたって病床に伏してしまった。

安政4年（1857年）2月、季節外れの暴風雨が博多湾を襲った。“堤防如何に”と病をおして和臼に急行した大山氏は、狂う高潮の飛沫を浴びながら見事に高潮を食い止めた堤防で、声をあげて男泣きに泣いたという。

しかしこの日から大山忠平氏の病状は悪化、ついに3月12日、駆け付けた和臼、奈多農民にみとられながら大往生を遂げた時、わずか37歳の若さであった」

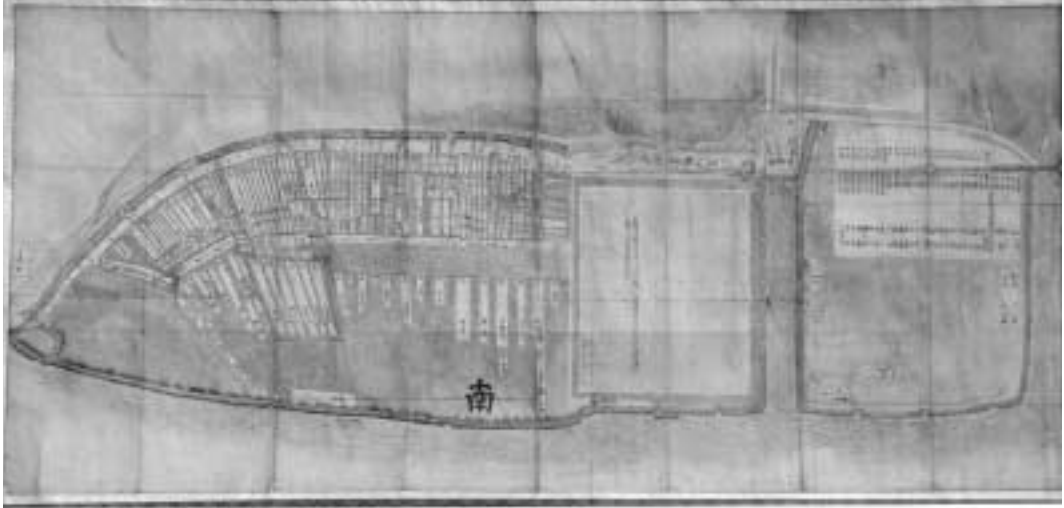


第2期工事の計画設計図（福岡市博物館蔵）

## 安政6年2月（1859年） 堤防大事業完了

（朝日新聞記者永島節郎氏の「博多と福岡」より引用）

「かくて築堤は出来上がった。築堤が出来上がると、築堤内の一大整地が行なわれ、これに水路を特設した新しい塩浜が出来、先に中国、九州から流れ込んだ労働線上の人々は、安政6年2月、全事業の完成と共に、互いに懐を豊にして郷里に帰郷したが、帰り得ない人々は新居を構え、多望なる奈多、塩浜で塩を焼いたり、甘藷を作ったりして土着したと云う事で……永年に亘り暴風、洪水被害に悩み抜いた和臼、奈多、塩浜の三ヶ村も、初めて安堵の喜び、生活の潤いを神に感謝したに違いない…」



沖の堤防完成後の古地図（久保田茂氏所蔵）

## 和白塩

明治初期頃の話だが、製塩の時期は田植えがすんだ頃から始まり、11月いっぱいぐらいで一応終わったようである。冬は塩つきが悪いので休んだ由。

和白塩は、幅40cm平方、高さ20cmくらいのカマスに入れ、梅の花の型に荒縄でしばっていた。梅花型のカマスが和白塩のトレードマークであった。

カマスがこの様に小型であったのは、塩浜でとれる稲が秋落ち型で短かったためである。しかし小型とは言え、梅花型カマスの塩は質が良いので評判であった。

## 明治5年（1872年） 我が国初の全国戸籍調査

戸籍調査の結果、この年3月8日現在での塩浜の数字は次の通り。

戸数	34戸（本村21、五丁10、西2、新開1）
人口	172人（男90人、女82人）
農業人口	79人（男43人 女36人）
牛	28頭
馬	1頭
大縄田畑	28町歩
生産	塩、木綿

明治6年（1873年） <sup>かんらん</sup> 観瀾小学校開校

上和白、下和白、塩浜、三苫の子供達を対象として、<sup>かんらん</sup> 観瀾（波を見る）小学校と言うむずかしい名の小学校が、塩浜集落の四辻（中央付近）、久保田与十郎氏方を借りて開設された。校長は小林興先生、生徒数男36名女1名、この小学校は、中村南軒先生の始めた「寺子屋」の跡を引継いだものであった。そして明治8年には公立塩浜小学校と改称。明治9年には下和白の安河内寿氏の納屋に移転し、塩浜から小学校は消えた。

明治10年（1877年）頃

朝鮮<sup>うんだい</sup> 雲臺（菜種）の先駆者 太田和平 久保田伊七

「糟屋郡是」に次の様な事が書いてある。

「青柳村小竹、中野嘉七なる者、明治十年頃参宮の途次、讃岐及び備前に於て始めてこの菜種を栽培したるを見、土地の人に就き種子の分与を乞ひしも、時節<sup>すて</sup>己に遅くして、其の種子なかりしかば、空しく帰国したり。

然るにその年八月、筵内に於て宗像の人と出会い、偶然その種子少し許りを手にする事を得たれば、之をその親族たる和白村大字塩浜の太田和平、久保田伊七等に分与し、共に播種したるを糟屋郡北部方面に於ける朝鮮<sup>うんだい</sup> 雲臺（菜種）試作の始とす。然れども小竹地方は地質の関係上この蓮華の栽培に困難を感じ、一、二年試作の後久しく中止したりと言う。然るに大川村江辻、松永和助は塩浜の久保田伊七より種子を分与せられ、之を試作せしに、成熟期の遅きにかかわらず収穫量は頗る多さを以て、熱心に試作を継続せし結果、漸次風土に慣るるに随い、種子の分与を請求し来る者続々生じたり、これ実に明治十三年、十四年の事なり」



菜種植付前、五丁内から相浦を望む



菜の花のさかり、上浜から西鉄踏切小屋と立花を望む



## 明治13年（1880年）頃の 塩浜「かねんて」

当時、博多との往来は道路も殿様道ぐらいで、陸上交通が非常に不便であった。そのため博多行きは殆ど小舟を利用していた。その小舟の溜り場が新開の通称「かねんて」、今の五丁川が博多湾に流入する付近であった。

昭和の初め頃迄、「かねんて」の北側に舟の溜り場（今は畑になっている）があり、その小舟で塩や裏粕屋の米の一部が積み出されたり、農業用の糞尿を博多に米と交換に貰いに行く等、和臼～博多の交通の要所であった。又、塩田で働く人々が仕事が終わって帰る時、暫時休憩して一杯呑むため、呑み屋も1、2軒、現在の「新開築堤記念碑」の所に建っていた。当時はちょっとした盛り場だった訳である。この年、小学校前の「塩浜橋」が板橋より石橋へと改良された。

## 五丁川の「塩浜橋」

明治13年板橋が石橋になったが、昭和27年に取り壊される



東側より奈多方面を望む

昭和28年3月、交換分合事業により竣工した「塩浜橋」



久保田政十郎氏一家（現政高氏）の渡り初め式

## 明治22年（1889年） 和白村発足

この年、上和白村、下和白村、塩浜村、三苦村、奈多村の五村が合併して和白村が発足した。

初代村長は下和白の安河内荘次郎氏。当時の状況は次の通り。

	面積				戸数	人口
	町	反	畝	歩	戸	人
上和白	240	0	0	15	64	336
下和白	181	5	5	3	49	262
塩浜	49	3	3	4	35	188
三苦	190	5	4	22	92	490
奈多	1,068	6	9	14	262	1,363
和白村計	1,730	1	2	28	502	2,639

親子同居、子沢山の時代、戸数に比して人口が少ないのは、子供は14歳～15歳になると、他家へ出稼ぎに出されていたのではないかと思われる。

## 明治33年（1900年） 博多湾鉄道株式会社発足（宇美～西戸崎）

2月1日、博多湾鉄道株式会社創立総会が開催され、翌34年6月10日、資本金2,075,000円、株主204名で株式会社を発足した。

このため鉄道用地買収交渉が始まり、塩浜では線路が塩田用地を分断して通るために大騒ぎとなった。すったもんだの交渉の末、線路の買収用地南側に一間幅の道路を作り、製塩作業用地として地元で使用させることで漸く交渉がまとまった。

## 明治35年（1902年） 5月21日 奈多～土井間、 12月24日 奈多～西戸崎間着工

この鉄道敷設作業には、塩浜からも大勢の男女が作業に雇われたようで、賃金は一日に男17銭、女15銭位だったと伝えられている。

しかし、この工事に他県から請負業者の親方や土方人夫が多数塩浜附近にも入り込み、喧嘩口論はもとより刃傷沙汰も起こり、それが工事現場だけでなく村内各所で“ドス”等を振り回すので、純朴な村人達は戦々競々としていたという。

## 明治36年（1903年）3月 和白小学校第1号校舎新築

塩浜二丁目6番（現在地）に、奈多、下和白を併合し、新校舎竣工。

## 明治40年（1907年） 塩浜唯一の池（道天池）竣工

万延元年（1860年）の記録によると、塩浜は年に米14俵を提供して、下和白から四十ヶ浦池の水を農業用水に使わせて貰っていた。それが漸く明治39年、長年の夢がかなって道天池の構築へと、下和白の了解を得て着工、翌40年、水面面積4反2畝（4200㎡）の池（美和台二丁目60番）が完成した。全住民歓喜の中にその記念碑が建てられ、それには次の様に記されている。

工期	自 明治39年3月	至 明治40年5月竣工	
建立	塩浜区		
郡長	新納 久	郡書記	藤井 宗一郎
郡土木吏員	松永 久一郎		森 万吉
前村長	堺 千代吉	村長	安河内 利三郎
前区長	末信 兵右衛門	区長	久保田 為吉

この記念碑は初め塩浜地藏堂の西側に建立されていたが、塩浜公民館拡張のため、現在は四社神社境内へと移設されている。

尚、この道天池は、塩浜地区の都市化が進み、水田の宅地化によって水の需要が減ったため、昭和55年11月福岡市へ売却された。又、売渡金より諸費用を差引いた残金113,938,440円は塩浜財産組合で保管した。



四社神社境内にうつされた道天溜池記念碑

## 明治42年（1909年）10月 和白小学校 第2号校舎増築

義務教育年限延長のため、教室不足に依り120坪の新校舎を増築。

## 明治43年（1910年） 製塩業終る。

明治42年、塩が専売制となり、そのため政府は不良塩田の取り潰し、優良塩田の買収等の検討に入った。

この年、当時熊本専売局長官だった浜口雄幸（後の有名なライオン首相）が塩浜の塩田調査に来村。その結果、塩造りは政府に賠償されて廃止、ここに糟屋郡唯一の製塩業はその歴史をとじる事となった。塩浜の製塩が完全に止んだのは、翌43年9月のこと。

## 明治45年4月（1912年） 和白小学校 第3号校舎増築

和白尋常小学校に修業2カ年の高等科を設置し、和白尋常高等小学校と改称。

## 大正12年（1923年） 宮地嶽（津屋崎）線着工。

第一期工事（和白～新博多間）は大正10年5月着工、同13年5月開通。

第二期工事（和白～宮地嶽間）は、大正12年6月から和白～三苦間の工事着工、大正14年に和白～宮地嶽間の営業開始。

三苦の堺駿策氏（故人）は次の様に、当時の思い出を話されていた。

「私が和白高等小学校を卒業して間もない頃、工事の始まるのを待って、人夫（土方）として働きに行きました。日給は70銭でした。

仕事は託乗寺裏山の切り取り工事で、土の運搬作業、道具は土方用の『トロッコ』並びに『エビジョウケ』でした。『エビジョウケ』でトロッコに土を積み込み、ドロンコの坂道を2人で、それこそ人力で押したものです。本当に重労働でした。

昼食が待ちどうしくて、腹はペコペコでした。昼食はアルミニウム製の弁当箱山盛りの麦御飯に、大羽鯛の焼いたもの、それでも私にとっては最良の食事でした。

食事が終わるともう午後1時。或る時は、和白駅から新宮湊方面に、レール7本積んでトロッコを押したり、枕木を積んでの運搬であったり、今尚、頭にこびりついております。」

尚、新博多～和白間の汽車運転が大正14年7月1日から新博多～宮地嶽間に延長運転開始。今日のように電車運転に変わるのは、昭和4年8月からであった。

## 昭和4年（1929年） 海の中道道路着工

駐在所沿革簿に次のように記されている。

『4年5月28日失業対策事業として、「海の中道」道路着工。竣工11年11月。工費153,823円。労働延人員42,756人。延長15,168m。幅員5.8m』

塩浜から奈多に至る田園地帯は、下和白字塚原の山の土を崩して、トロッコで運んで道をつ造ったものであった。

昭和10年1月、雁の巣飛行場建設が始まると、ダイナマイトで塚原山の土を崩してトロッコに積み、雁の巣飛行場まで複線のレールを敷いて、何両ものトロッコを小さな機関車が引いていた。そこで働く人々の



県道志賀島線にトロッコのレールが見える

の様子は、開戦が近いことを意識してのものか、緊迫した雰囲気があった。そして、その労働者の中には、大勢の朝鮮の人達がいて、朝鮮語まじりのたどたどしい日本語が飛び交っていた。飛行場は昭和11年6月6日に竣工している。

## 昭和15年（1940年） 新開（一ノ開）に試験飛行場開設。

九州飛行機（株）渡辺鉄工所の飛行機試験場が新開に開設され、格納庫と飛行機を水上に押し出すための滑り台が出来た。工場で組立て終った海軍の零式三座水上偵察機（乗員3名）が搬入されて、試験飛行が行われ、博多湾内に爆音を響かせた。



いちのかい  
一ノ開にあった九州  
飛行機の格納庫  
（昭和33年頃撮影）

## 昭和17年（1942年） 7月末 大暴風雨

大暴風雨で「沖の堤防」5ヶ所で決壊し、中でも「二の開」は4m以上海水が冠水して耕作不能となり、復田に1年以上を要した。

## 昭和22年（1947年） 新開にキャバレー開業

新開（一ノ開）飛行機試験場の格納庫を利用して、米軍（進駐軍）専用のキャバレー（通称、博多ベイ・サイド・キャバレー）FMクラブ開業。このため、博多湾鉄道では、奈多と和白駅の間の「かねて」の所に、米軍人やホステスの日本人女性のために、臨時停車場を設けて、夕方から夜になると、腕を組んだ男女が建物の外まであふれ出て来て、大盛況であった。

そのキャバレーでは、日本では全くお目にかかれないビールがふんだんにあり、飲み残しのビンの中味をバケツに集め、廃ビールと称して、当時の大人達はそれを貰っていた。アルコール類欠乏の時代、町内行事や宴会に重宝したのである。

昭和25年（1950年）

## 新開築堤「木製記念碑」建立時の、九世 大山忠平翁の慶辞

「慶辞 本日この意義ある記念式に、ご案内をいただきましてありがとうございます。

私はこの栄えある日の来ることを、久しい間待つて待つて居りました。

幸い病中老衰の私も、今年夏は御覧の通り元気で、御当地に皆様方もこのよき日を迎えることができまして、ほんとに嬉しうございます。お互いのご先祖様の残されました、大事業の跡を永久に追慕して、この努力のお姿にあやかりたいと、私も及ばずながら長い間心を励まして参りましたが、皆様方の村のご有志の御方々もみなみなならぬご尽力をなされまして、遂に記念碑が出来ることになりまして、誠に欣快に堪えませぬ。

8月28日この日こそ、お互いに毎年とこしえに忘れ得ない日で御座います。

今から百年前のここ塩浜に立ちて、この築堤の大難工事を努力竣成されました皆様のご先祖や私の祖父も、今日の盛なる式典を地下から眺めて、深く深く喜んで居られると思います。

私は祖父の名代として、新開堤防築造假記念碑を仰ぎ感謝感激の気持ちいっぱいでご挨拶を申し述べます。

昭和25年8月28日

当時御用達 茶忠七世 大山 忠平  
九世 大山 忠平」

## 昭和34年（1959年） 新開築堤記念碑

『下和白沖ノ畑より奈多宝塚に連なる延々2.5kmの築堤は、黒田藩士松本平内を吟味役、博多の俠商大山忠平、鳥羽屋七蔵、菊野屋貞次を御用達とし、中国の人長尾増平を総棟梁として、嘉永六年四月に着工、その後六年の歳月を費やし、安政四年の末に完成せる一大土木事業たり。是による干拓地三十一町歩は、かつて塩田として和白塩の名声を馳せ、今日に於ては蔬菜園其の興隆を招来せり。更に此の築堤の恩恵は、約二百五十町歩の農地を保全し、本町永世発展の礎となれり。

依て茲に全町民感謝の誠を籠めてその業績を頌する。

昭和三十四年勤勞感謝の日 和白町建之

この除幕式は11月25日に挙行され、来賓として九世大山忠平の三男石田多津雄氏、大山家の親戚代表として、前代議士の石田徳久次氏、友人代表博多にわか平田汲月氏等が列席され、除幕の綱は九世の孫娘（当時4才）さんによって引かれる盛会さであった。

唯残念なのは、築堤の大恩人大山家は九世を以て断絶し、その跡を絶ったことである。



新開築堤記念碑



新開築堤記念碑

## 昭和39年（1964年） 県道改修

通称三苦県道の改修工事鍬入式が、1月10日に実施された。

旧三苦県道は塩浜の集落内を抜け、田圃の中を三苦轡崎のお寺（託乗寺）の前に出て、更に三苦火の見前から集落内に入り、集落を抜けて湊へ通じていたが、昭和39年の改修工事によって路線変更され、新宮湊から三苦集落前の田圃の中央部を走り、耕地整理によって新しく出来た新道の幅員を拡張、ゆるいカーブで五丁川堤防へと結び、さらに字五丁内の田圃に道路を新設し、浜境の旧道と結んだ。この旧道も幅員拡張され立派な2車線の県道となった。



昭和三十九年、新宮湊から塩浜迄の道路改修拡張工事。右側の田圃は現在、スーパーマーケット「ドット」の駐車場になっている。

平成7年には県道湊・塩浜線の拡幅工事が計画され、新宮湊より三苦パークウェイ入口まで、4車線の県道がすでに完成しており、近いうちに塩浜地内へと拡幅が進捗し発展することとなる。

平成6年には塩浜は1区と2区に分かれ、更に平成8年には2区が二分されて、塩浜は3区に分かれて大きくなった。そして又、平成10年4月20日から新開地区の嵩上げ事業が始まり、現在実施中である。この工事が終り次第土地区画整理が行われる予定で、塩浜地区は町の様相も一変することであろう。

塩浜地域の町名と現況、国勢調査速報より（平成12年12月現在）

町内名	世帯数	人口	男	女
塩浜1区（和臼5丁目）	576戸	1,562	792	770
塩浜2区（塩浜1丁目）	439	1,258	615	643
塩浜3区（塩浜1丁目） （奈多1丁目の一部）	539	1,677	809	868
計	1,554	4,497	2,216	2,281



# 宗教・民俗・文化

## 四社神社（所在地・福岡市東区塩浜一丁目37-16）

『御祭神、神功皇后、志賀三神、住吉三神、塩土翁神。塩浜の地は昔、塩釜の浦、塩焼の浜と称し、陸地深くまで海水が押し寄せた島の一部であった。

当時の人々は遠浅の海岸を漸次開き、田畑となし又塩田として生活していた。ここは筑前屈指の産塩地であり、その品質も秀れていたという。記録に残るものでは、慶安3年神殿 - 宇屋根葺替之、明治五年村神に被定』（四社神社由緒の石碑の抜粋）

以下その歩みを年代順に辿ってみよう。

慶安3年（1650年）の四社宮棟書

慶安三年八月吉日

天下泰平 国家安全

五穀成就 産子繁栄の所

社主 新宮浦惣之市

寛文9年（1669年）の棟書

奉葺替四社宮 大御殿一字

天下泰平 国家安全

三月吉日 社主 新宮浦惣之市

1700年頃

四社宮、松原の中にあり、神殿石祠方三尺五寸許、拝殿九尺二間（福岡県地理全誌）

天保14年（1843年）境内に「若宮様」一字建立

大野正左工門与吉、一錢二十八匁四合を筆頭に51名の寄附者芳名が残されていた。

明治5年（1872年）11月社殿改築落成

昭和55年（1980年）10月

この年に初めての御遷宮（神興祭り）を執行され、神殿建替、末社の整備、境内の植樹、玉垣新設、東側に道路の新設等が行われて、面目を一新。

境内の社

恵比寿神社（事代主神）

若宮神社（仁徳天皇）

猿田彦神社

龍王社（大綿津見神）



四社神社旧拝殿

#### 鳥居の奉納

第一の鳥居 文政10年（1827年）

素材が津屋崎石で、石屋仲間では非常に貴重品扱いされている。

第二の鳥居 大正6年（1917年）

「子供に至るまで、揃いの半纏はんてんに揃いのタオルで鉢巻きをして、新開の“かねんて”で、舟から陸揚げされた石材を車力に積み込み、綱引きの様に住民総出で前引きし、沖の土提を水門口（下水処理場前踏切）～出来町（高浜）入口～三苦道を三苦方向へ、そして四社神社前へと運んできました。」（末信源蔵氏談）

第三の鳥居 平成12年（2000年）1月

第二回目の御遷宮（神興祭り）と拝殿建替え落成を記念し、総代、世話人で奉納。



四社神社 平成12年新拝殿落成

### 絵馬奉納

宝永8年卯年（1711年）

奉納六歌仙

讚 日野中納言資茂卿

尽 衣笠氏守高

宝永8年卯年卯月吉日

前権職 大野貞勝

安政5年（1858年）「弁慶勸進帳」

沖の堤防の大工事の順調な進捗を祈願し、且つは感謝し塩浜氏子連中より、「弁慶勸進帳」の大絵馬奉納。当時の喜びと苦しみを知らない人々によって、この絵馬は処分されて今は無い。

明治26年（1893年）「義経一の谷合戦」

この年、旧暦の盆頃から塩浜で赤痢が大流行した。このため他村との交流も遮断され、多数の死者も出た由。この赤痢のおさまるのを祈念して、氏子一同から絵馬を奉納。

## 安永8年（1779年） 弘法大師像祭らる。

前年（安永7年）の大雨や病気の流行に苦しんだ塩浜の人々は、洪水が起らぬ様に、又病気が塩浜に入って来ない様にと祈って、塩浜（本村）の西の端に弘法大師像を創って、塩浜の安泰を祈った。

## 文化3年（1806年） 地蔵堂の建立

災害や伝染病が多発したので、今まで野立ちしてあった野地蔵を丁重に祭ろうと、集落の西端（大師像の所）に地蔵堂が建築され、弘法大師像と地蔵の二体をお祭りすることとなった。

この時、三苦海岸から、玄海の清涛に清められた親指大の小石を俵に入れ、牛七駄ななだに運んで来て、その小石に一字一石経文を僧侶に墨書して頂き、大師像の下に埋めたと伝えられていた。

昭和32年、塩浜旧公民館を西側に拡張、支度部屋と炊事場を増築した時、観音堂も西側へ移動させた。その工事の時、聞き伝えていた「一字一石経」のことが話に出て、ひとつ真偽を確かめてみようという事になった。すると言い伝えの通り、ザクザクと小石の入ったカマスが、14表出てきた。その小石にはお経の文字らしい墨書があった。驚いた

人々は、これに又三苦の浜から拾って来た小石を加えて、地蔵堂の下に埋めたとのことである。



塩浜観音堂

### 慶応2年（1866年） 波切不動尊

この不動尊像には「慶応二年丙寅四月、保正 幸右衛門、組頭 藤治郎 源蔵、願主 村中、世話人 正吉 弥蔵 和年外数名」と刻されている。

干拓による製塩事業が始まってから8年経過、製塩も軌道にのり、『二の開』の方は余り塩付きがよくないため製塩を止め、『一の開』に製塩の主力を注いだ。そこで『一の開』の堤防上に「波切不動尊」を祭って、堤防の安全を願ったのであろう。

祭り日は、4月、9月の28日で、その日には対岸の名島の弁財天のお使いとして、白蛇が博多湾を泳ぎ渡ってお詣りに来ていたと伝えられている。（現在は7月28日夕刻に変更）



一の開の波切不動尊

## 別の波切不動尊

安河内光俊氏（東1組）の裏庭の山下に、高さ1メートル程の古い波切不動尊の石像がある。苔むして、古色蒼然とした石は、永い年月と風雨にさらされて、裏面の文字は判読不能で、残念ながら設立年月日や願主の氏名等は不明。石の風化の具合から、数百年を経ていると思われる。



安河内光俊氏の裏庭の山の麓にある塩浜でも古い波切不動尊

## 明治26年（1893年） 神理教神功教会発足（東区和白五丁目14）

神道という言葉もない古代から、日本人の心の中にある、神や自然を敬う気持、これが日本の古い神道の心である。平安時代から江戸時代まで、殆どの神社が神仏混淆であったが、江戸時代中期から後期にかけて、本居宣長、賀茂真淵、平田篤胤、等の復古神道を唱える人達が出て来て、神仏分離と本来の日本に帰れという考えが、明治維新の精神的な原動力となった。やがて明治になり、北九州市小倉南区徳力に住む巫部佐野経彦は、先人の考えに共鳴して、古神道の復活を願い、日本人の心呼び戻そうとして神理教を開いた。

明治13年（1880年） 神の啓示を受けた久保田恵以は、京都の伏見稻荷大社より、神霊を受けてお祀りしていたが、明治26年（1893年）に巫部佐野経彦に賛同して、神理教に所属した。

以来、神理教神功教会として、内務省の承認をも得て、塩浜の地に百余年の活動をしている。会員制でも会費制でもなく、誰れでも、いつでも参拝は自由。

祭神は古事記の最初に出てくる<sup>あめのみなかぬしのかみ</sup>天之御中主神、<sup>たかみむすひのかみ</sup>高皇産巢日神、<sup>かみむすひのかみ</sup>神産巢日神の造化の三神から<sup>いざなぎのかみ</sup>伊邪那岐神、<sup>いざなみのかみ</sup>伊邪那美神、<sup>あまてらすおおみのかみ</sup>天照大神、までの万物創造の神の18柱、これを総称して、<sup>あがにますもるもののかみ</sup>天在諸神と唱えて祭祀されている。また、配祀神として、衣食住、産業、商業の神である<sup>うがのみたまのかみ</sup>宇賀之魂神、<sup>とようけひめのかみ</sup>又の名を豊受媛之神が祭られている。



神理教神功教会

### 明治32年（1899年） 観世音堂の建立

観世音堂は現在、石像仏と同居してあるが、塩浜旧公民館が建設される以前は、別の観世音堂に安置されていた。その観世音堂がこの年に建立された。施主は「当村中」とあり、世話人は久保田利右衛門、今林直三郎と記されている。

# 口伝、風物雑記

## 久保田市右卫門氏の話、二題

### 鞘の神

慶長5年頃（1600年）から、久保田篤美家の庭に祭られている鞘の神は、武士が勝負を祈願した神様で、御願解きには大草鞋おあわらしが吊された。その草鞋を借りて来て百日咳の子の枕にすると、たちまち平癒する。平癒したら新しく草鞋を作ってお返ししたと伝えられている。

### 塩浜の民話「与三兵衛物語」

「昔、寛文10年頃（1670年）のこと、唐の尾一円は塩焚き場でありました。この塩浜に雇われた与三兵衛というお爺さんは、山を開いて野菜を作ったり、貝や魚を取ってきて自炊しながら、唐の尾で塩を焚いておりました。或る夜のこと、小雨がしょぼしょぼと降り、しんしんと更け渡り、独り淋しく釜に沈んだ塩を掻き取り、薪をくべ添えて一眠りしようとして、“どんざ”（重ねた上に重ねて、さしこのように縫った着物）を着てうとうとしていたら、何処からともなく『与三兵衛はドンギラギン』という声がする。与三兵衛さんは『誰か！この夜更けに』と叱りつけました。それでも二三度同じことを言っても消えうせませんでした。ところが、あくる晩もその次の晩も『与三兵衛はドンギラギン』とあざ笑うような声で言うのです。与三兵衛さんは少し気味が悪くなって来たので、『狐か狸に違いない、正体を見破ってやろう』といつも来る丑の刻（午前2時）を今か今かと“どんざ”を被って眠ったふりをしていました。すると果たして『よそべ - いはドンギラギン』と呼んだ。与三兵衛さんは『そういうもんくさドンギラギン』と言い返しました。こうして言い合う事10日余りもたったが、なかなか正体が分かりません。『人間を馬鹿にするのも程がある』とかんかんに怒られたが仕方がない。ところが与三兵衛さんの胸に『狐ならこうしてやろう、狸ならばああしてやろう』と名案が浮かびました。

その晩は“どんざ”は着らず、蓆の上うつ伏せて眠ったふりをして居たが、じーっと顔を少しもたげて塩釜の焚口の方を見ると、けものらしい両足が見えました。その股の間に“金玉”が下がっている。その“金玉”が釜の火明に段々大きくなって土間一杯に広がってゆくのです。大ていの者なら気絶するのですが、『ははあ...狸だ。大きな古狸だ。取り組めば負けるにきまっている』と思ったとたん『よそべ - いはドンギラギン』と言っ

た。与三兵衛さんは隠し持っている十能で火をすくうが早いから、破れ鐘のような声で『千も万もドンガラギン』と言って、その十能の火を電光石火、狸の“金玉”を目掛けて投げつけました。

さしもの古狸も“金玉”を焼かれてはたまらない、あくる朝は、ぐんなりと最後の息を引き取って居りました...とさ」

この与三兵衛さんの話は、多少違った筋で幾つか語りつがれているが、ここでは久保田市右工門氏（塩浜月報、昭和27年5月号）の話を記載した。又、与三兵衛さんのお墓は、相ノ浦の北側の山の久保田氏と太田氏の旧墓地の境にあって、墓碑銘は与三左衛門と刻され、美和台団地の造成によって、下和白の円相寺に移されるまで、太田武家でお世話をされていた。又、その位牌も久保田与三左衛門で、故久保田清司家で今もお守りされている。

## 大正、昭和初期の「塩浜青年会」

8月に入ると、“にわか”の練習が始まる。

8月13日は塩浜の初盆の家の庭で“にわか”を演じ、その後は青年会の幹部の人が自転車で、場所と時間を決め、他集落の青年との交渉に出かけて、20日頃まで奈多、三苦、和白駅前（当時は停車場といていた）上・下和白と和白校区内はもちろん、下原、唐ノ原、上府等と近隣の村々へ、車力に道具小道具を積んで、三味線、鉦、太鼓で囃しながら夕方から出かける。

目的の集落につくと、チンチンチャンチャン・チンチャンチャンと囃す三味線・鉦・太鼓の音を聞きつけて、先づ子供達が大勢集まって来て、車力の周囲について回る。その“にわか”も、『塩浜のは垢抜けしていて面白い』と大変な人気だったらしい。それはその筈、久保田孫蔵氏（中1組）、太田金作氏（同）、末信八十吉氏（5丁1組）、仲田磯雄氏（同）等は、芝居のグループを作って、衣装を借り、お囃子方や芝居の先生を博多から雇って本格的に練習した人達（皆故人）である。夜12時過ぎて塩浜に帰り、祝儀を開くのも楽しみで、それも青年会の資金になった。

塩浜に青年会が結成されたのは明治の頃で、その会員は15・6歳から25歳まで、女子は処女会と言っていた。それに世話役という名の顧問が2名いて、青年の取り締まりをするのである。それは30歳から40歳位の年齢の人で、会員にとっては非常に怖い存在の人であったそうだ。

当時の青年は質実剛健で、平常の日の飲酒、又は飲食店に入った者は会から除名。表付き下駄、夜の放歌高吟も禁止。秋の農繁期は、起床の合図の太鼓を打って早起き会。腕時計等持つ人が少い時代、塩浜四つ角に面した太田金作氏の稲屋（今は解体されている）の



壁に柱時計が掛かっていたが、それは『時間励行は青年から』と、青年会の資金で買った。

また、道路修理や、二年に一回敬老会を開いて演芸会を演ったり、西瓜、いも畑の夜警、農繁期には病人の家の農業の手伝いもした。今、香椎宮の参道の楠の大木は、その苗木を植えに塩浜青年会を代表して、今林重郎氏（西二組）、太田金作氏（中二組）が行かれた。その後、塩浜青年会はその活動に対して郡から表彰され、四社神社のコンクリートの参道は、その記念である。

大正10年頃から昭和初期にかけては軍縮の時代で、甲種合格しても籤引きでほんの数人しか兵隊にとられない。そこで塩浜の青年が兵役をのがれますようにと、姪ノ浜の愛宕神社まで、全員歩いて参拝するのも年中行事の一つで、娯楽の少ない時代の楽しみでもあった。

## やど 青年宿

大正の中葉頃から昭和の初めにかけて（塩浜一区旧公民館が出来るまで）、青年宿が塩浜にもあった。それは久保田彪史氏の宅地の四つ角に面したあたりで、藁葺きの一戸建ての家であった。その家は久保田和年氏（東一組）の親戚の家で、空き家になったのを幸いに、時の青年会の幹部の人達（久保田政雄氏、中二組、政幸氏の父等）が和年氏の祖父、松三郎氏に無償で借り受けて青年宿にした。

家の中は六畳敷の畳の間と広い土間に炊事場があって、裸電灯が一つ下がっていた。仕事が終わって夕食をすませると、青年達は宿に集まって雑談したり、将棋や金銭をかけない花札をしたり、いわば、当時の青年の憩いの家であった。そこには布団がたった1枚だけあり、毎晩泊る常連が何人かいて、布団の方々から足をつっこんで寝る。明け方寒くなると引っ張り合うから布団はひどく痛んでいた。中には正月も家に帰らず、そこに泊まったという猛者もいた。しかし青年宿は遊びの場というだけではなく、8月下旬から9月の稲刈り前まで、宿の土間に集まって藁細工をする。藁細工は燃料にする松葉を束ねる縄やワラジ、草履、牛の手綱、犁に取り付ける綱等と、いろんな細工物を先輩から後輩に伝える場所でもあった。そして小学校の講堂で行われる品評会に作品を出したり、千尋といって、千メートルにもなる長さの小縄を巻いて、大人が二人で抱きかかえる程の大きな松毬（まつかさ）の形に作ったり、星形に作っては、自分の家の稲屋の壁にかけて、日常その縄を使うのである。

また、藁細工の期間の途中と終わってからの打上げの時の、ぜんざい会が楽しみで、精をだしたものだ。当時は精米所がなく、各家庭で「<sup>だいがら</sup>台唐」を踏んで米をついていた。それは大体、主婦か娘さんの夜の仕事であったという。「<sup>だいがら</sup>台唐」はテコの原理を応用した

もので、柄の長い杵を台に取りつけて、その柄の端を足で踏み、踏んだ足を素早く離すと、先の方が重いので、ドスンと杵が臼の中に落ちる仕掛になっている。米をつき上げるまで長い時間がかかるので大変な労働であった。白米になるまでに、2000回以上ついたといわれている。

夜遅くなると腹がへる。そこで「台唐<sup>だいがら</sup>」の音を聞きつけては、“米貰い”と称して若い娘さんの手伝いに行く、実際に米を貰ってきて宿で炊いて食べていただろうが、そこはそれ「男女七歳にして席を同じくせず」の時代でも、若人の心理は変わらない。先ず手伝うふりをして、娘さんと会って話を楽しむのが目的ではなかったか、と思われるふしもある。

当時、新聞は各家庭までは普及してなく、青年宿では福日新聞をとっていた。だから塩浜の青年宿は近隣の情報交換の場でもあり、世の中の動きを見る窓でもあったようである。



台唐（だいがら）

## 共同風呂のこと

日露戦争（明治37・38年）を境に、塩浜に共同風呂が出来た。現在のように各家庭に風呂が出来たのは、共同風呂が廃止になった昭和も戦時中のことで、それまで風呂のある家庭は少なかったという。明治、大正時代には、めったに風呂には入らず、夏はたらいで行水をつかい、冬は何日も身体を洗うことはなく、学校に行く子供達もよごれて、あかにまみれていたそうだ。

共同風呂が塩浜で最初に出来たのは、東二組の久保田秋太氏の門前で、現在小島秋利氏の家があるあたりである。脱衣場は男女別々に別れていたが、浴槽は造り酒屋でつかう大きな酒桶を横半分に切ったものが一つで、目かくしとして浴槽の真中と流し場を板塀で仕切られていた。しかし、湯の中にもぐると、底の方は自由に行き来ができた。また、女性の脱衣場の方には要所要所に穴があいていて、特にそののぞき穴が繁盛する日は、近くに花嫁さんがこられた時だったという。

風呂炊きは共同風呂に加入している家まわしだったが、その日は風呂炊き手伝いの青年が多く集まって、賑やかだったらしい。時には気風のよい年増のおばさんが、「あんた達、見しょうか」と風呂炊きの青年達に声をかけて、風呂に入って行かれることもあったそうで、脱衣場では殊更ゆっくり着物を脱がれる。湯気のコモった中に30～40ワットのうす暗い裸電灯の下では、はっきりと見えないにしても、ほんのりとそのプロポーションくらいわかっただろう。

のぞき穴の客達は、黙って見ていては失礼と思い“ありがたく拝見させて戴きました”という合図に、石炭の炊きガラをのぞき穴からポンと投げ入れると、そのおばさんは安心したように浴場の方に行かれたそう。全くのどかで、何やら万葉の時代を思わせるような大らかさがあって、お年寄りの方からこんな話を聞かされると、時代への郷愁を感じさせるものがある。

東組の次に中組にも共同風呂が出来た。中組は塩浜一区旧公民館前の、久保田節代さん宅の屋敷の内側のあたりに瓦葺きの建物があった。旧公民館の内に炊事場が出来るまで、その炊事場として使われていたのが、中組の共同風呂の跡である。西組は安河内一芳氏宅の横にあって、大人が二・三人肩を寄せ合って入れる程の四角い木風呂で、男女混浴だったそう。

今、我々が考えると、はずかしくなかつたろうか、と思うのだが当時はそれが習慣でもあり、明るく健康的なものだったようである。

## 江切り

青年会の資金作りの一つに、毎年一回夏に新開の「江切り（イナ取り）」がある。それは近隣の各町村にピラを貼って広告し、新開に人を集め、入場料をとって魚をとらせるのである。

これは明治の頃から始まったが、末信嘉平氏（西二組、故人）が幹部の時（昭和6年）入場料に対する税金問題が起こり中止となった。それが昭和22年頃から塩浜青年団によって復活し、戦後の食糧難の時期と炭鉱の盛況のおかげで、宇美、志免、須恵あたりからは「江切り」のための五・六両編成の国鉄臨時列車で、鈴生りになってやって来た。和白駅から新開まで、それぞれに魚取り道具を持って、小走りに急ぐ人の行列が続く、やがて太鼓の合図で一斉にイナ取りが始まった。

「江切り」が近づくと、塩浜青年団は近隣の町村へ広告紙を貼りに、手分けして自転車でかけまわり、塩浜一区公民館では、毎晩おそくまで入場札造りや準備で忙しかった。因に、昭和30年頃の入漁料金は、流し網300円、投網180円、大叉手（網の枠が三角形の

もの)80円、叉手60円、ウザ(竹で編んだ蓋と底のない円筒形のもので、地元の人が持っている)は無料。昭和29年にも税務署とひと悶着あったが、それにめげず、昭和33年頃までつづいた。その後は塩浜農事会主催で地元の人だけの江切りになって、昭和40年代の中葉で終わりを告げた。(久保田茂氏、久保田隆氏談)

## 競犁会

塩浜では商家や職人やサラリーマン等は、まことに数が少なく、殆んどが農家であった。その農家の若者達の腕のみせどころであり、男の晴れ舞台が競犁会である。

毎年11月末になると、会場になる田園の畔に十数本の長い幡が翻り、開始の合図の太鼓の音で一斉に田鋤大会が始まる。牛の角に締めた日頃の汚れたハチマキは新しいものに取り替え、犁を引く綱も、牛馬をあやつる口綱も、鞍の下に敷く畳表もすべて新調して、数日前から牛に元気をつけるために米を食わせたりして、日頃鍛えた田すきの技を競い合うのである。

それは、緊張感につつまれた中にも、華やかな一種独特の雰囲気があった。もし優秀な成績でもとると、鶏をつぶしてご馳走をつくり、親戚や知人を招いて祝宴を張った。

競犁会は初めに塩浜だけの字競犁会があり、次に和白村主催の村競犁会、そして和白村から一人～数人が選ばれて、郡競犁会に出場する。大体、年齢に制限はなかったようだが、字や村の競犁会では、甲乙丙と3段階にわかれていて、丙組は高等小学校2年頃から年令は13歳以上で、乙組はそれから2～3年上の16歳以上、甲組は乙組を終えた19歳前後の人達であった。

当時は鎌で一株一株刈る手刈りだから稲刈りも日数がかかった。だから収穫がすんだ田圃から順に、乙組や丙組の人達には青年会の年長の人達が付添い、鋤の要領を教わりながら田鋤きの練習をする。塩浜から和白村を代表して、郡競犁会に出場した人は幾人かあるが、昭和12年に久山町猪野で開かれた大会に出場された久保田清輔氏(和白6丁目、故人)の思い出によると、現地の土質になれるために、大会の数日前から知人宅に泊り込みで練習し、その間、附添の指導者によってきびしくしごかれたそうだ。

大会当日、塩浜の家では早朝から近所の人や親戚の人達が集まって、ご馳走作りに忙しく、青年会や壮年の人達は応援にかけつけ、処女会は応援の人の弁当作りで賑わった。そして勝っても負けても家に帰ると、皆が集まって祝賀会があったという。それは本当に名誉ではあったが、家では経費の負担が大変であった。

その郡競犁会の歴史は古く、明治19年に始まる。その褒賞費は郡費をあてていたが、明治41年に粕屋郡進農会競犁会が、多々良村にあった郡農会の模範農場で開かれてから

益々盛んになった。

以来、出場者が毎回100名を越すので、大正11年に郡競争会の概要が定められた。

#### 概 要

- 一、審査員 各町村及び粕屋郡農学校より一名宛。
- 二、審査方法 出来方30点、深耕20点、技術30点、審査簿には、審査員記名調印をなす。
- 三、出場人員 総人員を100名とし、農学校10名をのぞき、残り90名を農家戸数にて、各町村に割り当て、出場者を定めるものとす。
- 四、優勝旗 採点の結果、出場者の得た点数を各町村別に集計し、一人当りの平均点数を取り出し、最も成績の良好なる町村に優勝旗を授与す。
- 五、鋤上時間 8株畦、1間に付き6分宛とし、所要時間より遅れたものは2分毎に1点の減点とす。

その頃、大川村、多々良村、山田村の業者の年間の犁の製造数5,700余挺。競争会は終戦後も数回開催されたが、やがて耕耘機の時代になり幕を閉じた。



昭和2年頃のけいりかい競争会風景



牛馬に引かせた犁（すき）

---

# 第4章 三苦村の歴史

---

## 三苦村字図



# ．三苦の概要

私たちのふる里三苦は、その地名の由来のとおり、古代に源を發し、玄界灘の荒波・寒風の厳しい自然にさらされながら、先人たちの嘗々とした努力によって築かれてきた集落である。

古代から中世、近世のころは、文献によってもよく分からないが、近世も後期（江戸時代）になると、農をもって生活の糧とし、神社の祭や営農のための沼・溜池などの構築がなされ、はっきりとした村の形態ができていたようだ。

古書には裏糟屋郡かすやごうり三苦村と記されているが、その範囲は広く、現在の美和台三・四・五丁目や美和台新町はもちろん、西は遠く志賀島村と境していた時期もある。

明治維新から昭和20年（1945年）の終戦までを区切りとすれば、明治22年（1889年）に上和白村、下和白村、三苦村、塩浜村および奈多村の5ヵ村が合併して糟屋郡和白村が發足し、それまでの三苦村は和白村大字三苦となった。この時期は農地の耕地整理や耕作の技術改良などがなされ、大いに農業振興がなされた時期であったが、大戦中は労働力の不足を家庭の主婦や老人・子どもで補って、食糧増産に邁進した時代でもある。

昭和20年以降を現代とすれば、昭和29年（1954年）に町政が布かれて和白町となり、昭和35年（1966年）8月に福岡市と合併し、和白地区に近代的な発展の兆候がみえてきた。美和台（三・四・五丁目）の開発にあわせ昭和44年（1969年）に農地の用途指定がなされ、三苦地区の農地は、そのほとんどが市街化区域に指定された。以後、三苦の様相は変貌し、平成8年（1996年）4月には三苦小学校の開校とともに三苦校区が誕生した。

## 1．三苦の由来

三苦の地名の起源は4世紀の神功皇后の物語に始まる。

神功皇后が御西征のとき、対馬の沖で暴風雨に遭い、それが鎮まるようにと海神である志賀三神を祭って祈りを捧げ、その供物と苦を一緒に海に投じて苦の漂着した所に社を建てて祀ることを誓ったといわれる。そのときの苦が三枚、今の三苦の海岸に流れついたことから、その地を三苦と名付けられた。

また、古書に『往古香椎宮神幸の所なり 神功皇后御西征の神助報贄の遺風なりと言う  
また中臣鳥賊津臣命西征に供奉して龍船対島府中を離れ 雷雨甚だしく風濤強かりしに  
命は海神に誓い 苦を三枚とりて海底に沈めしに 其の駿にや風濤は穏やかになりぬ の

ちにその苦流れ寄る処に社を建つ 是三苦綿津見神社なり』と記されている。

ある古老の話では「神功皇后の西征軍は姪浜の膳立の付近から船出した模様ですが、玄界灘に出ると大波に遭ったため、龍神を祭り平穩を祈りました。この祭壇に使った苦に供物を包んで海に投げ入れたところ、4枚は長州（山口県）萩の近くに流れつき、ここを四苦村と言い。他の3枚は三苦に流れ着いたので、ここを三苦と言うようになった」とも語り継がれている。

これら大同小異の伝説を要約すると、三苦付近一帯は4世紀当初の頃は、灘あるいは灘の津と呼ばれていたが、神功皇后の西征によって一躍時代の脚光を浴び、人口も増し発展し始めた。そのころから、いつとはなしに三苦と呼びならわすことになったものらしい。西暦700年を過ぎるころには三苦郷として和白郷と共に香椎宮旧記にハッキリと記載されるに至っている。

また、『香椎宮の神領としては 和白郷（70町）三苦郷（70町）』とあり、その後『龜山天皇文永五年（1268年）四月四日詔ありて云々……』と、三苦郷の名称が記録されていて、天正年間（1573～1591）の『<sup>てんしょう</sup>指出前帳』には三苦村と記帳されているともいわれている。

元禄16年（1703年）福岡藩士 大野忠右衛門貞勝によって三苦村と下和白村の海浜が埋め立てられて新田開発が行われ、塩浜村が誕生した。また、三苦村のうちであった奈多は、幕末のころ分村して奈多村となったようだ。

明治初期は戸数82戸・人口385人で、主な職業は農業であり、人家は本村（三苦六丁目一帯）64戸・山ノ内（三苦二丁目北側）5戸・北原（塩浜一丁目小学校付近）3戸・西（塩浜一丁目四社神社付近）6戸に分れていた。

## 2 . 三苦和泉守基宣と森の屋敷（綿津見神社の飛び地境内）

永禄7年（1564年）、一夜の火事で丸焼にされた宗像神社宮司の氏貞は、火事から7年を経過しても宮再興の財源が集まらず、日夜思案に暮れていた。ところがある日、山の様な大船が一隻難破して津屋崎浜に漂着した。検使に調べてもらおうと、この船は唐へ行った貿易船で、木綿を始め種々の宝物を積んでの帰途、難破したものと分かった。

古来、難破船は芦屋津から新宮湊までの海岸に打ちあげられたものは、積荷ごと宗像神社の所有になるとの慣習法が存在していた。従ってこの難破船の積荷もごっそり宗像神社のものとなりそうだった。ところがこの難破船は京都の聖護院門跡の貿易船であったため、門跡から異議が出され、しばらく紛争が続いたが、結局は古来からの慣習法が勝ち、すべて宗像神社の所有となった。この財をもとにして氏貞はこの年の10月に仮殿を作り、よ



うやく宗像神社の再建に着手することができたと伝えられている。

この年（1564年）の正月、三苦郷を領有していた香椎宮四党の一つ、三苦家33代基宣が香椎大宮司に就任している。現在「森の屋敷」と呼ばれているところ（三苦小学校西側丘陵地）は、この基宣のころの屋敷跡であろうと想像される。

昭和20年代、この地に地元の人々によって建立されたコンクリートの祠と鳥居があり、お稲荷様が祀られている。この稲荷様は一時「綿津見神社」の境内に祀ってあったのだが「わしはお宮には住まん。もとの森の屋敷に帰えしてくれ」とのお告げが村人であって、再び現在地へ移したと伝えられている。

大正のころまでは、近郷の漁師たちが自分でとった新鮮な魚を持って、豊漁を祈りにお詣りしていたという。また、ものを無くしたときに、ここのお稲荷様に祈願をすると、無くしたものが出てくるというので、参拝する人も多かったといわれている。

別の伝えによると、西暦800年ごろ、香椎宮の神官として和氣重春という方が京都から下って来て、三苦重春と姓を変え、以後31代、代々三苦に居を構えていたので、その屋敷跡を「森の屋敷」と呼ぶようになったという。



森の屋敷の稲荷神社

### 3 . 権宮司三苦氏と三苦郷

天分6年（1537）大内義隆は少式を征伐して筑前に一応の平和を確保していた。この頃、三苦郷を領有していた香椎宮の大宮司三苦家では内紛が起こっていた。旧香椎町史によると三苦家を次のように紹介している。「権宮司三苦家の家系によると、三苦氏はあまこやねのみこと天兒屋根命の後裔、なかとみいかつおみのみこと中臣鳥賊津臣命から出たといわれている。鳥賊津大連は神功皇后に従って西征の折、対馬付近で大暴風雨が起り御船も危くなったとき、三枚の苦をとって船舳に立ち出で、海神に祈り、苦を海中に投入したところ、風雨直ちに止み治まり、苦は東方に流れて行った。凱旋後その苦は灘に流れついていたので、その地に社を建て苦を神体として奉祀した。故にその地を三苦といい、社は志賀三神を祭っている八大竜王社（綿津見神社）である。

さて、香椎廟がなると天兒屋根命あまこやねのみことから24世審樂朝の右大臣大中臣清磨公の孫、今磨の子重春を大膳紀氏連宿弥と共に廟司とすることとして三苦郷を与え（神官は同時に領主）かつ三苦の姓を賜り香椎に下向した。それで重春が神職として三苦家の祖であり、往古は香椎四党の一として大宮司家であった。

重春から31代目の親宣に二男があって長男を八郎匡基、弟を六郎清宣といったが、兄は家を継ぐことができずに弟清宣が襲ぎ、正嫡として大宮司となり別所に住んでいた。兄匡基は悶々とした日々を送り、父の死後弟を退けて所領を横領しようとしたが、一社中許さず、天分6年てんぶん（1537年）9月には大内氏に通じて所領を分領し自ら権宮司となった……」

これによって当時の三苦は、領主として兄匡基が居を構え、立花城主（三代目）立花親貞の庇護下にあった香椎宮一門を離れ、大内の庇護の下にあったことがうかがわれる。

## 4 . 三苦の現代

集落と海岸との間の松林に広がっていた墓地は、玄界灘の荒風と松喰虫の被害にあって荒廃した。集落の近代化、生活環境の改善を図る必要性から共同墓地化を図るため、昭和31年（1956年）共同納骨塔建設委員会 委員長 堺藤三郎氏（故人）を設置して建設に着手、昭和33年（1958年）11月に落成した。昭和41年（1966年）以来、三苦駅東側の丘陵地の開発、また、三苦駅西側の田園地帯や奈多に続く松林なども宅地化が進み、昔日の面影は一変した。



三苦共同納骨塔

### 美和台団地

1965年（昭和40年）、三苦駅東側の丘陵地帯（山林、畑、水田）を西日本鉄道（株）が買収し、宅地開発計画が地元にて提案された。三苦町内会は委員会（委員長 堺 徳氏）を結成して対応にあたり、翌昭和41年に売買契約を締結した。

昭和44年～45年、西鉄本社の直営事業で造成工事がなされ、昭和47年3月より建売住宅及び住宅地が発売された。工事は（株）松本組、（株）鹿島建設によってなされ、高級住宅地が出現した。また一方、大字下和白の山林・水田は福岡市住宅供給公社の開発によ

って、一大住宅地が形成され、美和台団地と名付けられた。西鉄造成地区は美和台三丁目、四丁目、五丁目である。昭和49年、美和台小学校の設立に伴い、美和台校区として分離独立することになった。



美和台開発前の三苫駅周辺（右側が美和台）

平成7年（1995年）8月6日には三苫浜地区の土地区画整理準備組合が結成され、この工事が完了すると、この地区一帯の様子は一変することであろう。

平成8年（1996年）4月、和白小学校が児童数増加でマンモス校となったため、三苫地区全域を校区とする三苫小学校が開校された。

三苫集落の住環境や農作物を海の強風から守り続けていた玄界灘防風林の中で、唯一300年を超える黒松の林があり、その貴重な緑地が自然資源となっていたが、第2次世界大戦終結後から蔓延した松食い虫によって全滅した。この黒松の防風林を再生させ、次世代に残すために松林再生会が結成され、平成9年（1997年）3月、三苫小学校開校記念植樹とあわせて、行政の支援のもと、三苫校区一丸となって黒松の苗を植え付した。

三苫小学校が開校されて以来、公民館は福岡市の一小学校区一公民館設置の方針に従い、平成11年（1999年）4月に設立開館（東区三苫三丁目3-31）された。これと同時に三苫老人いこいの家も隣接して新築設立された。

#### 三苫校区誕生時の世帯数及び人口

世帯数	人口		
	男	女	合計
4,096	5,266人	5,220人	10,486人

三苦小学校設立時の児童数

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	計
クラス数	3	3	3	3	3	3	18
児童数	115	107	91	117	82	108	620



三苦小学校



三苦公民館



三苦老人いこいの家

# 遺跡と古墳

## 1. 三苦永浦遺跡

永浦遺跡群は福岡市東区と糟屋郡新宮町との境界に接する丘陵地帯に広がり、博多湾と新宮浜の分水嶺となっている。丘陵の標高は10～40mで、同じ丘陵の西側には三苦京塚古墳、東側には新宮町人丸古墳などの大型古墳がある。この丘陵一帯に区画整理の計画が出たため、福岡市教育委員会が造成工事の前に埋蔵文化財の調査を行った。

この地内には11カ所（A～K）の遺跡があり、弥生時代の溜井（古代ダム）や弥生から古墳時代の集落や墓地などが多数発見された。

弥生時代のものとしては、弥生時代中期後半（紀元前1世紀～紀元初頭）から後期初頭とみられる溜井9基、溝3条などや竪穴式住居が発掘された。

溜井は谷頭付近に集中して作られ、規模は大小あって、最も西側の溜井は長さ53m、幅13m、深さ約6m。溜井のうち、西側の2基に暗渠が確認されている。北側の暗渠は幅0.3～0.8m、深さ0.5m、長さ10mあって溝底に拳大円礫（こぶし大の玉石）を多く詰め、埋土で覆ってあった。

石組のすき間に水を通すことで溜井にたまった大量の水を少しづつ水田に流す仕組みで、水の大量流失を防ぐため溜井と溜井をつなぐ水路も作られていた。溜井群全体で水量調節ができていたのではないかと見られている。「出土した暗渠は、これまでの例よりも約3百年さかのぼる国内最古のもので、溜井から水を水田に送るかんがい用とみられます。かんがい用暗渠は弥生時代のものとしては初めての出土です。考古学関係者は、弥生時代に想像以上に高度な農耕土木技術があったことを示す貴重な発見」と注目されている。「溜井はわき水や雨水をためて農業や飲料水用に使った施設であり、溜井の周囲に大規模な集落があったことは確かで、弥生時代は稲作が本格化し大量の水が必要になったため、今日と同じように水源確保に苦労していたのかもしれない」と説明してある。

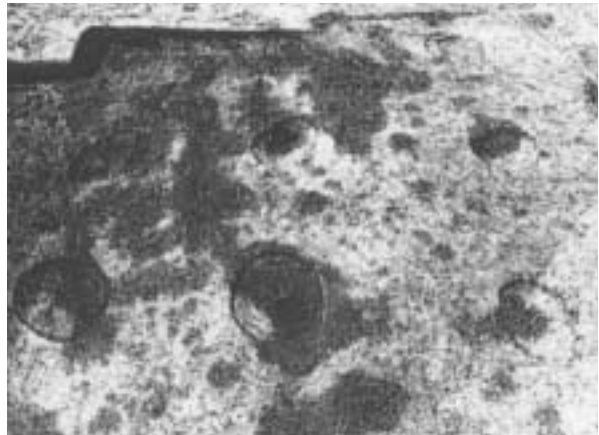
溜井の内部からは多数の遺物が出土し、土器類には甕<sup>かめ</sup>、壺、高杯、鉢、器台、支脚や石斧、砥石、石包丁などの石器。また、鉄斧、鉄鍬<sup>ぞく</sup>



弥生時代の溜井（古代ダム）

(鉄製の矢じり)などがあつた。竪穴式住居は谷頭を囲むように分布し、径3～4mの不整形円形であつた。

また、弥生時代中期前葉の竪穴式住居2棟、<sup>どこう</sup>土壇(洞穴)4基、柱穴多数、中世から近世の埋め糞、土壇、柱穴、溝なども発掘されている。竪穴式住居は直径7.5mの円形で、住居内から土器類やナイフ型石器などが多く出土し、この他に縄文時代の遺物も出土している。調査地内11ヵ所(A～K)の各遺跡にわたって40棟近くの竪穴式住居跡、掘立て柱建物跡、柱穴、土壇などが多数発掘されている。この竪穴式住居は弥生時代中期後半から古墳時代初頭までと古墳時代後期に二分されるが、前者では円形住居から次第に方形住居へ変化しているとのこと。その住居などからは多くの土器類、石器類、鉄器類などが出土している。鉄器には釣針、ヤリガンナ、鉄斧などが、また、石器には魚網錘、釣り用錘などがあつて、他に碧石、水晶、ガラス玉、滑石製品などがある。



掘立柱建物跡

この遺跡群の中には、いくつかの古墳があり、「永浦1号墳」とされた古墳は前方後円墳で、規模は後円部径約20m、全長約30m、主体部は後

円中央部にある単室両袖の横穴式石室で、南西に開口している。内法は長さ2.9m、幅1.9mである。石室内の敷石上から武器類(鉄鏃、弓金具)や工具(鉄刀子)装身具(管玉、ガラス小玉)などが出土している。また、周構内から須恵器・土師器が出土していて、築造時期は6世紀中頃と見られる。古墳の周辺からは前後する時期の建物跡や、土器、石器類が出土して、その中には縄文時代晩期の石器や勾玉もある。

「永浦2号墳」とされた古墳のまわりからは井戸1基、溝などが発掘された。この古墳は破壊が著しく墳丘は全く残っていないが、北側の周溝痕跡などから前方後円墳と判断された。大きさは、後円部が径約19m、全長約27mと推定されている。石室は後円部中央にあり、南西に開口する単室両袖の横穴式石室である。内法は長さ2.7m、幅約1.5m。敷石上から武器(鉄鏃)や装身具(管玉、ガラス小玉)などが出土した。他に石室の周辺から須恵器などが出土し、築造時期は6世紀初頭から前葉頃と見られている。他に小型古墳1基、焼土壇1基、柱穴多数があり、直径約10mの円墳で、単室両袖の横穴式石室、石室全長5m、須恵器類、鉄器などが出土し、築造時期は7世紀中葉と見られている。

また、本調査区の丘陵最高所に立地する竪穴式住居は、円形で直径6～7mもあつて、

弥生時代中期後葉（紀元前1世紀～紀元初頭）頃のものともみられ、立地条件などから「高地性集落」と考えられている。この「高地性集落」は、弥生のクニ、奴の国成立に伴う争乱で造られた砦ではないかとみられ、玄界灘糸島半島をはじめ博多湾を含めて周囲約30km圏内が一望に見渡せる高台にある。中国後漢から金印を授かり、強大な権力を誇った奴の国の誕生のなぞを解くカギになると期待されている。一辺が70cm程度で深さ約15cmの四角い穴も2カ所確認され、用途ははっきりしないが、炭のかけらが出ていることからオオカミのフンを燃やして「のろし」を上げたあとではないかとの見方もある。最も注目しているのはその立地の良さで、集落跡地からは金印の出た志賀島や奴国の本拠地とされる須玖岡本遺跡（春日市）、伊都の国の拠点とされる前原市周辺などが見渡せる。このため外敵の侵入を監視したり他のクニと通信する役割を持った集落と判断され、出土した土器には奴国系統以外のものもあるため「小さな国が争乱を繰り返しながら奴国にまとまっていったのだろう」とみられている。

福岡市教育委員会は、本遺跡調査報告書を次のようにまとめている。

「永浦遺跡群では、旧石器、縄文、弥生、古墳時代において重要な成果があった。

旧石器、縄文では当該資料の少ない市内東部地域を補填するものである。弥生時代は5地区に住居群を検出した。中心集落はA地区 I地区と移動し、他は中期後葉に一時的に分村したものとみられる。このうちJ地区は高地性集落である。

古墳時代はD、I地区に集落があり、丘陵上に3基の古墳が造られている。永浦1・2号



永浦遺跡群分布図（黒印は古墳）

古墳は小型の前方後円墳であり、隣接し、規模、主軸方向、石室の開口方向がほぼ一致する。6世紀前葉～6世紀中葉頃に造られた2代の累代墓とみられる。本地域の首長墓であり、同じ丘陵上の他の大型古墳と系列が推定される。

また、L地区の古墳は小規模であり、古墳終末期の様相をもつ。弥生～古墳時代の集落からは農耕具以外に漁業、交易関連遺物も多く含まれ、集落立地と共にこの集落の経営基盤の様相を示唆している」

## 2 . 三苫京塚古墳

三苫遺跡群は東区三苫の玄界灘に沿って連なる南斜面に展開し、その範囲は東西450m、南北950mにもおよぶ。三苫京塚古墳はこの遺跡群の北端部に位置し、標高20m位のところにあった。

福岡市の人口の増加に伴って最近では近郊の丘陵部の開発が中心となっていて、大字三苫字京塚（三苫七丁目）157の宅地造成に伴い埋蔵文化財の事前調査が行われた結果、予定地は過去に大規模な削平を受けており、古墳の他に遺溝は認められない。古墳の現地保存

は計画上困難であることから発掘調査を行い記録保存をはかることに決定された。

発掘調査は平成元年（1989年）2月18日に着手し約1ヵ月半を経て平成元年3月31日に終了した。

この調査には三苫や奈多から十数名の人が発掘に協力された。調査では弥生時代中期後半より後期初頭の竪穴住居址1棟、古墳時代後期に築造された古墳1基を発見したが、どちらも大規模な攪乱や削平を受けており良好な状態で遺存していたとはいえない。発掘品としては、住居址から石器（石包丁、石斧）などと土器（高杯、甑）などが出土した。一部は古墳墓道からも出土している。その他鉄製



京塚古墳の発掘品



品（太刀、柄頭飾弓、馬具）や装身具（ガラス玉、琥珀耳飾）等が出土している。なお、この発掘調査に係わる遺物記録類の全ては福岡市立埋蔵文化財センター（博多区井相田二丁目）に収蔵されている。

今後の問題点として、今回の調査では三苦遺跡群の一端を知り得たにすぎず、三苦丘陵地における弥生時代集落の規模やその生活基盤等是不明のままである。6世紀を中心とした集落が調査地の近辺に存在していたことは明らかであることから、生活の場、葬送の場の両面から解明する必要があるだろうと思われる。なお、近く施工予定の三苦浜地区区画整理に伴う遺跡調査によって前記の解明の足掛かりが得られるものと期待される。

### 3. <sup>くつわみず</sup>轡水の由来

伝説によると、神功皇后の西征軍は帰途清水（飲料水）の欠乏に悩まされながら、ようやく粕屋郡古賀の花鶴浜にたどり着いたが、ここにも飲み水が無かった。その時、皇后の乗馬が轡を噛み切って走り出し、後を追ってついて行くと、三苦の轡崎「鏡ヶ井戸」と呼んでいる所まで馳せて来て、前脚で盛んに大地をけた。昔から馬が前脚でける場所には水が湧くと言われていたのでそこを掘ると、果たして珍しい清水が湧き出てきた。そこでこの付近の出崎一带を轡崎と呼び、その井戸を轡水、また、その馬の轡を埋めたのでその裏山を轡納山と呼ぶようになったという。

今この「鏡ヶ井戸」は轡納山託乗寺の中庭に在り、深さ9尺（約 2.7m）位の井戸が一日中汲んでも水が渴れることはなかったそうだが、大正12年（1923年）6月に起工された和白～宮地嶽間の電車線路が轡納山を掘り割ったのちは、渴れることはないが湧水量は少なくなっている。



鐘ヶ井戸

# 神社・寺院・史跡石造物

## 1 . 三苫綿津見神社

所在地は福岡市東区三苫六丁目21番の海岸近くにあつて、神社境内の由緒石碑にはつぎのように記されている。

### 綿津見神社由緒

祭神 <sup>しが</sup>志賀三神（現在は綿津見三神） <sup>とよたま</sup>豊玉姫命  
 境内社 <sup>かまど</sup>竈戸神社 <sup>すが</sup>須賀神社（舞神社） <sup>くろつ</sup>黒津神社 <sup>いなり</sup>稲荷神社  
<sup>さんぼうだいこうじん</sup>三寶大荒神社 <sup>わかみや</sup>若宮社 <sup>こくうぞうぼさつ</sup>虚空蔵菩薩 <sup>だいにちによらい</sup>大日如来

### 鎮座由来

香椎宮旧記に 神功皇后征韓御渡航の際 对馬を発船された時 <sup>にわか</sup>俄に大雷雨大風濤  
 起こり 御船危殆（あぶない）に瀕す

此の時 御船の<sup>とま</sup>筈三枚を海中に投入し 何れの時何れの処にあれ此筈の流れ寄らん  
 地に社を建て拜祭せんと海神に祈られし処 <sup>たいどころ</sup>立処に風濤治り 征韓の大業を易く終え  
 給い 凱旋後筈の漂着せし地に三枚の筈を神体とし社を建て 海神を拜祭された 此  
 の神社なり 又此の所縁により地名を三筈と言う

古来香椎宮神輿渡御報の儀あり 中古より神使の神祭となり現在に至る

香椎宮宮司 木下祝夫 識

筑前の国風土記によると『中にも九月九日 <sup>しんよ</sup>神輿（みこし）を浜男の頓宮に御幸なし奉  
 り（中略）十日には大宮司職の人 明神の御使いとして 原上村におわします川上大明神  
 に詣で（中略）十一日には三苫の竜王社（綿津見神社）に参りて拝す これ皆 海神なれ  
 ば西征の時保護の御徳をむくわせ給う儀式なり云々 この祭りには 太宰の帥 大伴旅人  
 部下と共に参拝す（728）』と記録されていて、以来、定期的に香椎宮から神官の参拝が  
 行われている。

当初は、八大竜王社と呼ばれていた。当時の面影を示すものとして「八大竜王社」と彫  
 られた石の額がある。また、参道には一對の「八大竜王社」と彫られた石灯籠がある。

この神社には、鎌倉末と室町時代（1392～1573）の作といわれる二対の木造<sup>こまいぬ</sup>狛犬が保  
 存されている。



三苦綿津見神社

平成8年3月から半年間、福岡市博物館で開催された「ふくおかの文化財展」では、綿津見神社の木造狛犬が展示された。

その「ふくおかの文化財展」で...獅子・狛犬...について次のように解説がなされている。

「今まで神社に安置され一般に狛犬と呼び慣らされている一対の獅子・狛犬は、もともとはインドで佛の<sup>しんい</sup>神威を象徴的に

示すために一対の獅子（ライオン）形を仏像の台座に刻んだのが起源とされています。

それが仏教とともに中国・朝鮮半島そして日本に伝わっていくうちに、しだいに墓域などを護る想像上の守護獣としての性格が加わり、角のある狛犬、角のない獅子の組み合わせになったといわれています。日本でも飛鳥・奈良時代など初期には獅子と狛犬の違いは必ずしも明確ではありませんが、しだいに多くの獅子・狛犬が作られ寺院や神社の境内に安置されてきました。

それはここ九州でも例外ではなく、福岡にも優れた獅子・狛犬が残されています。特に和様（日本風）の狛犬にまじって宋風獅子と呼ばれる中国風の獅子がこの地方に集中して残されているのはわが国の獅子・狛犬の展開を考えるうえでも興味深く、また福岡と大陸との交流の歴史を示す貴重な証拠といえるでしょう。これまで彫刻として顧みる機会の少なかった獅子・狛犬ですが、本展示ではその多彩な表現と展開をご紹介します。」

綿津見神社の木造狛犬<sup>こまいぬ</sup>については次のように解説してある。

「木造狛犬<sup>もくぞうこまいぬ</sup> 一対

福岡市東区<sup>わだつみ</sup> 綿津見神社

像高（阿形<sup>あぎょう</sup>）29.7cm

（吽形<sup>うんぎょう</sup>）30.0cm



綿津見神社保存の狛犬

吽形の頭部に角の跡があることから本来は獅子・狛犬の一対として作られたものと思われます。やや大げさにもみえる表情や体躯のプロポーシオンは室町時代（1392～1573）の狛犬にしばしばみられる特徴ですが、誇張された表現は像の小ささとともに逆に愛らしさを感じさせます。材質はクスで、全身を1本から彫り出しています。」

つぎに、当神社に現存する江戸時代の御遷宮などの記録をたどってみると次の通り。

八大龍王宮葺替の棟書に

社主 新宮浦惣之市・寛文10年(1670)

奉葺替八大龍王宮宝一字五穀成就村中安生之处

4月吉日 元禄2年巳歳(1689) 社主 新宮浦惣之市

前回の葺替えより19年目で定例葺替のようです。

きょうほう  
享保11年(1726)

えんきょう  
延享元年(1744)

ほうれき  
宝暦13年(1763)

神主 新宮浦惣之市

あんえい  
安永9年(1780)

神主 稲光宮内種久

かんせい  
寛政10年(1798)

神主 稲光主計種実

ぶんか  
文化13年(1816)

神主 稲光主計種実。庄屋、堺茂助

てんぽう  
天保2年(1831)

神主 稲光山城正藤原種久

こうか  
弘化3年(1846)

神主 稲光長門正藤原種臣

庄屋 久次郎

ぶんきゅう  
文久3年(1863)

神主 稲光長門正藤原種臣

庄屋 喜三郎。

組頭 小四郎・弥三郎・卯七

なお、明治以降の御遷宮は次のとおり。

明治13年(1880)

明治29年(1896)

大正7年(1918).....新築

昭和8年(1933)

昭和29年(1954)

本来は昭和28年の予定だが大水害のため1年延期された。

昭和48年10月10日(1973)

平成5年10月10日(1993)



平成5年10月10日の御遷宮風景

## 2 . 竈戸神社

綿津見神社境内にあって、太宰府の竈戸神社から分社されたものだが、その経緯は不明。

## 3 . 須賀神社（舞神社）

『<sup>かみのやま</sup>神山（美和台三丁目10番付近）という所<sup>まつ</sup>にあり うまし茸芽彦兎命を祀る 相殿に祇園を祀る 故に今は専ら祇園とのみ称す 古しえは神官 奈多浦三郎天神（志式神社）の祭礼を行う時 先ずこの社に詣でて 舞をかなでて後 かの社に参りし故に 舞神社といえるとなん』[筑前続風土記拾遺・青柳種信著・天保年中（1830～1844年）の書]とある。

また、粕屋郡史には『疫病防禦の為祀る』と書かれていて、大正12年（1923年）この地綿津見神社境内に移設された。

奈多志式神社では、お供日の11月19日の日没から伝統「夜神楽」が氏子によって奉納されている。昔は、粕屋郡内の神社の神官がこの須賀神社に集まり、舞をかなでて（リハーサルではないか？）後に奈多志式神社にて「夜神楽」を奉納していたらしいが、次第に神官の集まりが悪くなったので、今日のように氏子によって奉納されるようになったのではないだろうか。



須賀神社（舞神社）



黒津神社

## 4 . 黒津神社

土器山（神山か響崎では？）に祭神武内宿禰命が祀られていた。正保年間（1644～1647）託乗寺が響崎（三苦四丁目3番）への移転に伴って黒山（三苦六丁目7番の西方の小高い丘）へ遷座され、大正12年（1923年）にこの地綿津見神社境内に移設された。

福岡県地名辞典には『昔香椎宮の神籬（神様の食物）を蒸したというこしき嶺からは土器が出土し、

一名土器山ともいう』とあることから、この土器山の所在について香椎宮に問い合わせたが分からなかった。

古老の話によると、子供のころ黒津神社が祀つられていた黒山の西側約150m先の同じ黒山の小高い丘の上で地面を掘ると、土器の破片が出ていたとのこと。もしかするとここが土器山かも知れないが、今後の研究課題としたい。現在も氏子中でお座が行われている。

## 5 . 若宮社 わかみや 綿津見神社境内

祭神は仁徳天皇（4世紀 第16代天皇）で、民の窮乏をみて3年間税の免除をしたり、農耕の神様として有名。毎年3月農業従事者によって駄祭りの神事が行われている。

## 6 . 稻荷社...綿津見神社の飛び境内地の森の屋敷に鎮座

## 7 . 三寶大荒神碑

竈の神、一般に火の神として家庭の竈の近くに祀られ、主として西日本では屋敷神として、同族で祭祀されていることが多かったようである。

裏面の文字は不明だが、以前は綿津見神社参道の入り口付近にあったのを綿津見神社境内に移された。

## 8 . 轡納山託乗寺 ひのうざん

寺 地 三苦4丁目3-23

宗 派 浄土真宗 大谷派

いわれ

文禄3年（1594年）秀吉の陣中見舞いに西下してきた教如上人は、帰りの途中たまたま青柳村に在る良泉寺に宿泊した。そのとき住職「唯念」から京都への随行を懇願され、断りきれずに許した。

唯念は尊崇する師匠の許で数年間修業に励み、「本尊阿弥陀如来」二体を戴いて帰国し、良泉寺を従来の天台宗から浄土真宗（浄土真宗本願寺派）と宗派を改め、寺号も託乗寺と変えた。そして、高齢だったためかこの寺を琳伽に譲った。

阿弥陀如来に「筑前国糟屋郡青柳町・願主託乗寺琳伽」の添書があるといわれている。

粕屋郡史には『開祖琳伽、天文年間（1550年前後）創立 初めは青柳町に在りしを正保三年丙戌（1646年）ここに遷し同時に寺号・木佛を許さる（境内295坪檀徒61戸）』とある。琳伽には長男願寿と次男願入の二人の息子がいた。次男の願入と共に正保3年（1646年）5月15日、当時粕屋・宗像の郡奉行であった久野貞右衛門重時の計らいで三苦に移り、名称だけが残っていた般若寺を再興して託乗寺と改め開基した。これは父唯念が戴いた「本尊阿弥陀如来像」のうち一体を戴いて分家してきたものと思われる。



託乗寺本堂

#### その後のあゆみ

貞享2年（1685）久野清左衛門重時「木魚」寄進

貞享5年（1688）4月26日（当時旦那衆122人）

一如上人下附「祖師聖人御影」1幅 久野重時寄進

元禄6年（1693）5月5日

常如上人下附「琢常如上人御影」一幅 久野重時寄進

宝永7年（1710）久野重時「のみ」一口寄進

時代関係からみて、新開築堤工事（1703年）に使用された「のみ」ではないだろうか。

寛政3年（1791）庫裡建立

当時、寺運が非常に盛んだったと伝えられている。

文化14年（1817）七世願念が死没したのち、博多妙行寺（現在南区野間）の掛け持ちとなり、次第に門徒が離散してしまったと伝えられている。

天保3年（1832）のころ再興されて今日にいたっている。

昭和26年（1951）吊鐘および鐘楼が工費49万円で落成した。

昭和44年（1969）庫裡改築

昭和60年（1985）3月本堂新築

平成10年（1997）10月庫裡新築

## 9 . 般若寺

再興したと伝えられている般若寺は、延暦5年（805年）最澄（伝教大師）が中国からの帰途、新宮町上府の千年家に滞在して布教中、立花山麓に独鈷寺、三苦にも草堂（般若寺）を建て、立花山の樟の木で虚空蔵菩薩像・阿弥陀如来像・薬師如来像の三像を刻んで納めたと言われている。

その後、薬師如来像は行先不明、阿弥陀如来像は三苦六丁目の堺博行氏宅で祭られていたが火事で消失した。

般若寺は最澄の上京後、やがて荒廃してしまった。場所は永吉政昭氏宅（三苦六丁目16番）の裏側付近で、立花城の祈念所として栄えていたが大友氏に焼かれ、以後荒廃したとも伝えられている。



般若寺跡の太師堂

その跡地と思われるところに、1720年ごろ建立（現在のお堂は1929年7月改築）と伝えられる青面金剛像を祀った太師堂があり、祀られた二体の像の左側の像には安永8年（1779年）正月と刻字されている。この付近は当時、三苦の第1号幹線道路の入り口に当たっていて、村の北入口を守護される石仏であったのだろう。

昔は、ここに大樹があって、昼でも暗いので、夜独りで歩くと「馬の足が下がってくる」とよくいわれていた。

## 10 . 久野貞右衛門重時（圓嶺宗覺居士）の墓

正徳5乙未年（1715）8月13日逝去

三苦黒山（三苦三丁目27番北側の山林内）にあって、古い記録によると久野氏は黒田の重臣（久野清左衛門重時とは親子ではないかと考えられる。清左衛門の墓は「山の内」にあったそうだが現在は見当たらない）で、当時粕屋・宗像の郡奉行をしていたと伝えら



れており、託乗寺のため非常に尽力された人であって、三苦付近に別荘を持っていたのではないかと考えられる。

また、三苦南方にある博多湾の築堤に貢献した人物と思われる。今はすっかり環境が変わってしまったが、当時の三苦～奈多唯一の貫道沿いの三苦の丘陵上から、久野氏は開発の進み行く三苦一帯を眺望していたのではないだろうか。



久野貞右衛門重時（圓嶺宗覺居士）の墓

## 11 . 三苦<sup>こくうぞうぼさつ</sup>虚空蔵菩薩

正月13日は三苦<sup>こくうぞうぼさつ</sup>虚空蔵菩薩のお祭り日である。虚空蔵さまといえば、かの日蓮上人が「我を日本一の智者となし給え」と幼少の時から願いを立てていた佛様のことだという。

虚空蔵菩薩の御堂は綿津見神社境内に大分古ぼけて建っており、そのお祭りの日には珍しい貸借契約がされる。

参拝者は、先ず昨年の今日借りた金を倍額にして返済する。そして今日も又新しく借金



虚空蔵菩薩像

して、来年の今日、倍額にして返済する。この虚空蔵さまから借りた金を身につけておくと、金に不自由しないといわれている。また、大金儲けをすともいわれ、面白く、かつ珍しいお祭りである。

福岡市政だよりの「東区再発見」に、「……拝殿のわきのお堂に、木造の菩薩像がある。1mほどのクスを彫ったものだが、かなり老朽、顔だちも定かでない。この像が知恵の神、虚空蔵菩薩だ。三苦では財宝の神として『縁日（1月13日）に菩薩から金を借りると、1年間は小遣いに不自由はしない』という数百年の信仰がある。小銭は地元で用意。お守りとして金銀の紙でくろみ、世話人が参拝客に手渡す。小銭を借りた

参拝客は1年後、感謝の意で借りた金額の倍額を返しに訪れる」と紹介してある。

先に般若寺の項で説明したように、<sup>さいちよう</sup>最澄（<sup>でんぎょうだいし</sup>伝教大師）が中国から帰り、刻んだ三像のうちの虚空蔵菩薩像のお祭りである。

現在の虚空蔵菩薩像は明治初年に盗まれて古道具屋に渡ったこともあったが、無事に保存されており、非常に貴重なものである。



虚空蔵菩薩の縁日（1月13日）風景

日本地名大辞典には『この木像は、崇徳院の時（1123～1141年）海中から取り上げたものであるが、天正年間（1573～1592年）に堂舎が焼失した為八大竜王社（綿津見神社）に移したとも伝える』と書かれている。

この虚空蔵堂の鰐口に「奉施人、筑前州香椎郷北庄三戸摩村虚空蔵堂鰐口永享7年（1435年）<sup>きのとう</sup>乙卯月（4月）吉日大壇那施主 次郎四郎敬白」と刻んであったと太宰管内志に記録されている。また、「<sup>きょうほう</sup>享保10年（1725年）10月、三苦の農夫某、偶然にも畑地から掘り出した鰐口に永享7年（1435年）銘の鰐口がある」とも伝えられている。

またの伝えによると、「享保10年（1725年）三苦の農夫が竹林の中（現在の三苦六丁目永吉政昭氏の家の前に建っている青面金剛碑の付近）から青銅鰐口を掘り当て観音堂に納む…」とあるが、戦後盗難にあって紛失したとのこと。

しかし、三苦の観音堂は1870年の建立であるから、鰐口も転々として最後に観音堂に納められたのではないかと思われる。

鰐口の出土地点は、805年頃に<sup>でんぎょうだいし</sup>伝教大師が三苦に建立されたといわれる<sup>はんにようじ</sup>般若寺の跡付近である点を考えると興味深いものがある。

## 12．観音堂

三苦購買店前（三苦六丁目7番）にあって、本尊観世音菩薩を中心に左右に不動明王、準胝観音の三体が祀られている。1870年頃、堺義博氏（三苦六丁目10番）の曾祖父喜三郎氏が建立されたといわれている。現在の観音堂は1958年、道路拡幅に伴い改築されたもの。

また、その隣の堂内には地藏様二体と破損一体が祀られている。当時は三苦集落の南西方面の入口に近く、この方面の守護神として祀られたものと思われる。



三苦購買店前の観音堂

## 13．<sup>もんじゅう</sup>文珠菩薩



文珠菩薩

共同納骨塔前から綿津見神社に通ずる道路の左側（海岸側）の小高い丘の上に祠がある。通称「お文珠さま」と呼ばれる文殊菩薩は、学問の神様で字が上手になるといわれ、以前は沢山の筆が「お文珠さま」の前にお供えされていたといわれている。毎年1月・5月・9月の25日は「お文珠さま」のお祭りで、その日は三苦中の子供たちが集まって、「お文珠さま」を井戸水で洗ったり、参道の小

石を三苦海岸の新しい小石と取り替えたりして清掃した。清掃が終わると各隣組に分かれて各自の家から米や醤油を、また、お金も少し持ち寄ってご馳走を作り、先ず「文珠さま」にお供えをした後、みんなで会食した。歌ったり、鬼ごっこや試胆会（肝試し）などを楽しく遊ぶ。子供たちにとっては、年3回の文珠さまのお祭りは、何よりも楽しい行事だったらしい。

## 14 . 青面金剛碑

碑面の裏には「享保二年（1717年）八月十三日一同」と刻書されている。

新宮の湊から森の屋敷（三苫小学校北側）の稲荷社前、共同納骨塔前を通過して松原の中の「久野貞右衛門墓碑」（1715年）の前を通りぬけて「山ノ内」（三苫二丁目北側、字名としても残っており、昔この三苫・奈多海岸の大松原の監視官の駐在地と考えられる）の前を通り、奈多の志式神社へ通ずる道がある。この旧道が新宮湊～三苫～奈多を結ぶ最初の公道であった。

「青面金剛碑」は、この道に沿って堺澄夫氏（三苫六丁目19番）の敷地の角、三叉路脇に立っている。三苫の北側の守護神だったかも知れない。和白地区では17番目に古い石碑といわれている。



青面金剛碑

## 15 . 庵縛日羅夜叉咩碑

昔、青面金剛をお祈りするためにあったと思われるところに、昭和54年12月吉日、「庵縛日羅夜叉咩」と刻書した石碑を青面金剛碑の傍らに建立された。

この「庵縛日羅夜叉咩」とは青面金剛にお祈りをするときの「ご神言」といわれている。



庵縛日羅夜叉咩

## 16. 七 橋

筑前風土記拾遺（青柳種信著・天保年中1830～1844年）に『この村に七橋と云う事あり 夕尺の橋二所・塩田橋・光畝町橋下の前橋二所・池尻橋これなり 中にも夕尺橋は村の前 新宮浦の方に行く道の側に小なる石橋あるをいう かまど山（宝満山の中腹）の修験者入峯の時 必ずここに来りて修法する也 古来よりの例と……云々』とある。今は橋としては使用されていないが、三苦小学校北東側から新宮町方面へ通ずる三叉路の道路端に現存していたが、三苦浜土地区画整理にともない「森の屋敷」へ移された。

## 17. その他史蹟石造物

### 正覚坊外石物 1 体

堺 憲一氏宅地内（三苦六丁目4番）の南東側道路面であって「寛文九年（1669年）十一月」と刻書されている。（昔は三苦集荷場敷地に祀られていた）

宝満山の修行僧「正覚坊」は、長い修行の途上病氣となり、衰弱しきった身体を先輩僧に引きずられるようにして、殿様道 - 塩浜 - 大砲道 - 奈多 - 三苦へとやってきたが、夕尺橋に到着する寸前でついに命を落とした。

三苦の人々はこの若い修行僧「正覚坊」の死をあわれみ、遺体を字松口（現在地付近）の松原に埋葬し、そこに「正覚坊」の石碑を建立して祀ったと伝えられている。



正覚坊碑



堺輝政氏宅の庚申天

庚申天 堺 輝政氏宅（三苦六丁目10番）寛政9年（1797）正月吉祥日、堺 輝政氏曾祖父 酒井太平氏が建立された。（酒井は堺の旧称と考えられる）

昔の三苦は丘陵地帯であって、幹線道路も丘陵地帯を通っていた。その後、集落の発展に伴い、住宅が次第に旧海岸線（三苦水道）へと下りてくると新道の必要が生じ、現在の消防格納庫前 集落の中央部 旧幹線道路へつなぐ第2の幹線道路が寛政年間に竣工し

た。これを記念し、その守護神として時の指導者 酒井太平氏によって建立されたものと思われる。

### 三庚申 綿津見神社境内

イ、「天文<sup>てんもん</sup>十四年（1545年）」の刻書がある庚申塚で、和白地区では二番目に古い庚申塚である。天文のころは割合と平和が続き、博多は貿易で大賑わいのころで、三苦も集落前の三苦水道が少しずつ干拓され、その護岸を祈って建立されたのではないだろうか。

ロ。「文化<sup>ぶんか</sup>十年（1813年）」の刻書がある。

ハ。「文化<sup>ぶんか</sup>十三年（1816年）四月吉日」の刻書がある。以前は消防格納庫の東側にあった。

イ。ロ。ハ。いずれも大正12年（1923年）の耕地整理によって現在地に移された。

### 庚申尊碑 三苦山の内（三苦二丁目北側）松林内

「天明<sup>てんめい</sup>五巳年（1785年）卯月（4月）上旬」の刻書がある。「奈多公民館だより白砂」には「天明4年（1784年）に奈多村に疫病が発生、併せて飢饉の年であって病死者、餓死者が続出したので、村人は鎮守様である奈多三郎天神に参籠して、悪病平癒を祈願したところ、不思議に平癒することができたので、村人は神様へのお礼にと、芦屋の大蔵組を呼んで歌舞伎を奉納したのが、奉納芝居の始まりで、『万年願』として今日も受け継がれています」これが7月の奈多祇園祭りの奉納芝居であろう。このころ建立された和白地区の石仏は、こうした背景のもとに、建立されたものであろうと推察されるが、山ノ内のこの「庚申尊」もその一つと思われる。



日露戦役記念碑

### 日露戦役記念碑

綿津見神社境内

明治39年4月1日の建立

## 綿津見神社の仏像群

綿津見神社の境内地には、福岡市有形文化財第75号に指定されている5軀の仏像群がある。玄界灘を眼下におさめ、西に志賀島、北に相島を望む宮山（旧字名）に位置する綿津見神社の仏像群である。

江戸時代の地誌である「筑前国続風土記附録」「筑前国続風土記拾遺」にも紹介されている神社境内の大日堂、虚空蔵堂に祀られている。

小振りながらも保存状態の良好な一木造の不動明王立像、吉祥天立像、風化が進んでい



不動明王立像 吉祥天立像



伝大日如来像

るが4尺（約121cm）を越える如来形立像（伝大日如来像）木造伝虚空蔵菩薩立像のこれら4像は平安時代（794～1192）後期の作とみられ、さらに南北朝時代（1333～1392）の作とみられる木造伝薬師如来像、袖を「8」の字形に彫出する点などは平安期の大宰府文化圏に入り得る作品であり、近年宗像、津屋崎で発見された平安後期の仏像と同系統と考えられるものである。

これらは、当地域における古代、中世の宗教文化を物語り、玄界灘沿岸の仏教圏を想定させる貴重な仏像群である。



伝薬師如来像



綿津見神社下には三苦浜の美しい砂浜が続く



## 三苦水道・三苦島

元九州大学教授 山崎光雄氏は、諸説から、昔博多湾より三苦を通して新宮町の湊に通ずる地域は三苦水道と呼ばれ、この水道で隔てられた三苦・奈多一体を三苦島と名付けている。

その昔、和白地区はこの三苦水道によって二分されていたといわれ、この三苦水道の東側（美和台側）を東浜、西側（三苦側）を西浜、そして相浦から塩浜を巡って下和白に至る海岸一帯を「桂浜」と呼んでいた。

この三苦水道・三苦島を検証してみると。

1. 天慶<sup>てんぎょう</sup>4年（939年）5月、とぎの大海賊藤原純友<sup>ふじわらすみとも</sup>の一党が突如として博多に上陸し、水城から大宰府になだれ込んだ。このときのことを記した太平記の一節に『さる程に純友は博多の津に寄せんとて 帆の下に櫓を立て もみにもんで馳ける程に 六月六日子の刻に 箱崎の沖を通るとて 渚をきつと見渡したるに 八幡宮の宝殿を本陣とし 松原に白旗四・五十流 官軍の将 六孫王経基の旗なり……云々』と記されている。

従って福岡在住の学者の方は「玄海灘から志賀島半島を迂回し博多の津を襲うとすれば、太平記の一節『箱崎の沖を通るとて 渚をきつと見渡したるに……云々』はおかしく、今日の地勢からも考え難い。そのころ（約1060年前）は香椎の海と湊（新宮町）の外海とが相通じている海峡（三苦水道）を純友の一党が航行して攻め寄せたのであれば、先の太平記の一節が納得できる」との説を立て、同感の聲がしきりであった。

2. 更に今日より約900年昔の夫木集<sup>ふぼく</sup>（和歌などを書いた歌集）に、香椎潟と相島との光景を連結して詠んだ和歌に、『香椎潟 夕きりかくれ 漕ぎくれば あへの島はに千鳥しはなく』（鎌倉初期の人小侍従作）とある。したがって今日のように香椎から遠い志賀島半島を迂回して相島に至る航路では、このようには詠み難いと思われる。

筑紫の郷土史家 中山兵次郎先生の説によると、1300年ごろの博多湾沿岸は、現況の等高線で5メートル位までは海であったと述べている。

また、新宮町をとり上げた朝日新聞（昭和34年7月31日付）の“海辺の社会学”によると、「玄界灘に面して磯崎鼻から弧を描く砂丘（中略）この砂丘も、その背面の新宮の家並も、2000年位前までは海の底だった。むかし磯崎鼻は島で、この島と陸地との間には博多湾へ通ずる水道があったという。それが陸続きになったのは、九

州北岸一帯の隆起と砂の積み重なりのためだと考えられている。この辺の土地は4000年の間に約10mも高まったというのだから、隆起は著しい。(後略)」と記されている。現在、三苦から湊に通ずる途中の海拔は3m前後であって、土地台帳の小字名などと対比すると、崎・浦・浜・塩・牟田などの名称で繋がっていることからして十分に肯定できる。

しかし、前記の説に対して「水道・島と言うことになれば、三苦と湊との境の丘陵地帯の土地はもう少し低く、土質も他の地区と同様に砂壤土でなければならぬはず。また、東西両側の山は同じ土質である。湊側が急勾配、三苦側が緩勾配の丘陵地をなしている点から見て、人工によって埋め立てたものとは考えられない。あそこは元もと東西陸続きで、湊側からの入江と三苦側からの入江が互いに背中合わせになり、夜になれば漁船が泊居をしたら双方からの漁火が見えていたためトモシアワセ(灯し合わせ)と言う地名が出来たのではないかと思われる。また、トモシアワセより一寸南寄りに塩入という所があるが、ここはかなり後この地方が干拓されていたものの、大潮の際にここまで溝に海水が逆流して、時には田圃へも流れ込んでいたのでしょう」と疑問を抱く人もある。

昭和34年7月31日 金曜日

# 海辺の社会科学

## 新宮

### 二千年位前は海底

隆起した海岸 玄界に面して

海防線から海をゆく砂丘、その上に建ちた松林は博多湾側の砂浜の中でもとりわけスゲールが大きい。ところがこの砂丘も、その背面の玄界の隆起も、二千年くらい前までは海の底だった。むかし隆起は急で、この地と隣縣との境には博多湾へ通じる水道があったという。それが隆起きになったのは、九州北岸一帯の隆起と砂の積み重なりのためだと考えられている。この辺の土質は四千年の間に約10mも高まったというのだから、隆起は著しい。一々、海が運んできた砂の積み重なりについては「筑前国志摩十記」に「天和年中海辺の町也……海辺をならして邑

の跡を形え外前に土塚を築き松を植え」とあるところから、約二千年前に隆起に築かれた土塚を起源に砂丘が発達したものであろう。

隆起開始の時期は明神初年、砂に埋れていたのを掘り出したというが、これは砂丘の発達を物語るものだろう。二千年位まで海岸線がいまの位置から二、三メートル込んだ夜間あたりだったのだから、新宮は、海原から湧き上った町、といえる。(前九大教授山岡光夫氏の説)



新宮町を取り上げた朝日新聞「海辺と社会科学」

## 三苦に塩田を開く

慶長7年（1602年）、黒田長政は命令して三苦村から湊村を分村させ、庄屋役を善兵衛に命じたと記されている（犬鳴山由来記）。慶長10年（1605年）の塩田開拓を予定したものであろうか。続風土記によると「慶長10年（1605年）黒田長政、粕屋・志摩・早良の諸郡に塩田を開く」とある。このときの塩田に三苦、湊、浦、泊、太郎丸、桑原、元岡、野北、芥屋、姫島、馬場、青木、姪浜の13カ所が挙げられている。

三苦の塩田は今も字塩田として地名が残っており、耕地整理以前は干魃の時には塩害が甚だしかったようである。塩田のあった位置は、JA福岡市東部三苦支店前から三苦駅を結ぶ道路の途中水路から北側一帯の地域であると考えられる。

塩田についての三苦の古老の方々の話をまとめてみると次のとおり。

1. 字光畝町（JA福岡市東部三苦支店の付近）の一角に「しまぐり」と呼んでいる場所がある。塩田の焼けた石が邪魔になるので、干拓の際、島の様に積んでいたところではないとか考えられている。【堺登美次氏談】
2. JA福岡市東部三苦支店前から三苦駅を結ぶ通りの途中（スーパー大栄付近）に「井樋の上」という字名がある。また、その北側一帯を俗に「塩屋の上」とも呼んでいた。これらから考えると塩田の南側には石垣堤防が築かれ、井樋から海水を塩田に引込む入浜式製塩が行われていたのではないかと考えられる。

黒田長政は播州赤穂地方にも住んで居たことがあり、製塩法について、また塩が非常に利益のあがる産業であることも熟知していたようだ。そこで城や城下町造りに多額の経費を使いながら、その一方ではこうした産業振興にも並々ならぬ努力を払ったのではないだろうか。三苦の塩田開発は藩の事業として行ったのであろうから、糟屋郡一帯から多数の農民たちが公役として狩り出され、三苦は大変な賑わいだったものと想像される。
3. 西浜（県道より西側・海浜公園道路三叉路付近）一帯には焼石が非常に沢山あって、所どころにうず高く積んであったのを記憶している。塩焚がこの付近で行われていたのは間違いないと考えられる。大正12年（1923年）耕地整理の時、東浜一帯（県道より東側・託乗寺の前方付近）は塩分が多く出て耕地に適しそうに

ないことから、糸島に同じ様な所があるとのことで耕地整理の役員が視察研究に行ったこともあった。また、「井樋の上」からは木の樋が出土した。【吉浦弥太郎氏談（故人）】

この三苦塩田の開発で、奈多や和白からかなりの人々が製塩事業に従事されたことと推測され、出来た塩は舟で黒田の倉庫に運ばれたことであろう。

### 開発が進む三苦



## 三苦の溜池

三苦の耕地両側の丘の上に大小の溜池が構築されている。これは当時の三苦集落前の干拓地で水田化が進展したため、農作物の灌漑用として構築されたもので、三苦農業の発展に大きな役割を果たしてきたものである。

当時は一つの土木事業が計画されると近隣町村の農民たちが動員され、三苦の溜池にも糟屋郡内の人が公役くやくに従事し、郡奉行の監督の下で強制されたと伝えられている。

### 釘ヶ浦池（大池） 三苦八丁目

筑前風土記・天保年中（1930～1844年）の書に「その池塘ちとう（池の堤）・釘ヶ浦（三苦八丁目）にあり 水面一町五反五畝（1.55ha）」とある。

構築 天和元年（1681年）  
水面積 1町5反5畝（15,500㎡）  
水掛かんがい（灌漑）面積 21町（21ha）

### 清水池 三苦7丁目三苦小学校北側

構築 貞享二年（1685年）  
水面積 9反7畝（9,700㎡）  
水掛かんがい（灌漑）面積 13町（13ha）

釘ヶ浦池の堤防の上に建てられている記念碑に次のような記録がなされている。

表面

釘ヶ浦・清水溜池災害復旧記念碑  
昭和三十七年（1962年）三月一日  
福岡市大字三苦町内会

裏面

釘ヶ浦池は天和元年（1681年）清水池は貞享二年（1685年）の創築なり  
偶々昭和三十四年七月十四日九州北部海岸を襲いたる稀有の豪雨は瞬時に増水し  
その限度を越え遂に堤防崩壊せしも 町民



釘ヶ浦溜池堤防にある釘ヶ浦・清水溜池災害復旧記念碑

必死の作業効を奏し決壊を喰止めたり その改修内容は釘ヶ浦百五十万円・清水八十万円にて石垣及全堤防の内肌付、余水口等修築せり

右側面

和白町長 小林市助 同助役 今林久二 三苦区長工事委員 永吉恒幹  
 工事委員 堺 義美 農業委員工事委員 堺 新一郎 同 岩熊常雄  
 農業委員 末信嘉平 同 吉浦弥太郎 同 堺 藤三郎

### 高田池 三苦七丁目

構築 <sup>げんろく</sup>元禄元年(1688年)  
 水面積 2反5畝(2,500m<sup>2</sup>)  
 水掛 <sup>かんがい</sup>(灌漑)面積 2町5反(2.5ha)

### 山の口池(新池) 美和台五丁目

構築 <sup>げんぶん</sup>元文元年(1736年)  
 水面積 3反5畝(3,500m<sup>2</sup>)  
 水掛 <sup>かんがい</sup>(灌漑)面積 3町8反5畝(3.85ha)

### 曾根崎脇池 美和台三丁目

構築 <sup>えんきょう</sup>延享3年(1746年)  
 水面積 1反(1,000m<sup>2</sup>)  
 水掛 <sup>かんがい</sup>(灌漑)面積 不明

### 永浦池 美和台五丁目東側

構築 <sup>ぶんか</sup>文化4年(1807年)  
 水面積 8反5畝(8,500m<sup>2</sup>)  
 水掛 <sup>かんがい</sup>(灌漑)面積 15町(15ha)

構築以来300年の永きにわたり三苦の農業を護り続けてきた溜池も、近年の急速な福岡市東部ベッタタウンとしての発展によって、農地は次々にアパートやスーパーマーケットと変わり、溜池の利用も減少し現在は温室苺の灌水用として活用されている。これも時代の変遷かと感慨深いものがある。

## 三苫宮の下護岸工事

明治40年（1907年）6月から始った三苫綿津見神社宮の下の護岸工事は、明治41年高潮の被害を受けながらも、明治42年8月に竣工した。

この三苫海岸護岸工事は、戦後も年次計画で営林局の手で行われたが、明治42年竣工のものが最初と思われる。これを記念する「護岸工事記念碑」は、三苫集荷場の地にあったが、集荷場建設の折、三苫共同納骨塔前に移設された。

碑によると、当時の糟屋郡長は新納 久、和白村長 安河内利三郎、三苫区長 堺 初太郎、建設者 大字三苫と記録されている。なお、「三苫海岸の満潮干潮の差は約六尺（約182cm）位なり、竣工した護岸工事は百二十間（約218m）」と記録されている。



三苫海岸 護岸工事記念碑

# 三苫の農業

## 1. 水田

三苫別家古文書写しには、永正<sup>えいしょう</sup>8年（1512年）正月23日付 御田千徳丸当地行注文に『一、三苫郷竜王田地尻壹段九日田』と記載され、天正<sup>てんしょう</sup>年間（1573～1591年）の指出前之帳には『湊村を含めて田七町（7ヘクタール）余・分米六百五十八石（118.7トン）余、畠三十町（30ヘクタール）余・分大豆百三十一石（23.6トン）余』と記載されていて、古くから米づくりが行われていたようである。大正8年（1919年）牛馬を操っての土地の深耕技術と農業後継者育成・心身鍛練を兼ねた競犁<sup>けいりかい</sup>会が始められた。その代表的な糟屋郡競犁<sup>けいりかい</sup>会は全国一を誇っていたという。

水田の深耕技術の向上と共に、水田裏作として菜種、馬鈴薯や玉葱が栽培されるようになった。しかし、地形的に見た場合、北・西・南の三面を海に囲まれていて、稲の開花期の潮風害とその土質、それに排水不良の湿田であったため、米づくりは全国平均の下位にあったと想像される。このため、大正12年（1923年）に大掛かりな耕地整理事業が行われ、水稻はもちろんのこと、裏作においては畑同様となり、都市圏への野菜供給地三苫となった。

三苫は、海岸に近い低地で、字名に東浜、西浜、塩田、塩入や「灯し<sup>とも</sup>あわせ」などの地名が残っており、昔は海域か海辺であったと考えられる。水稻成育中に日照りが20日も続くか、灌漑水が不足したときなどは塩害と思われる成育障害が発生した。昭和初期に塩抜き排水工事が行われると、その後は塩害が無くなり、水稻はもちろんのこと水田裏作の菜種、馬鈴薯や玉葱などの作柄が向上して、三苫の農業に一大福音をもたらした。

しかし、昭和5・6年には日本国内に米が余り、価格が暴落。昭和7年の5.15事件や3年後の2.26事件などの政情不安。そして昭和12年の盧溝橋<sup>ろこうきょう</sup>事件以来、若者は軍人として召集され、老人と女性によって牛馬を駆使しながら農業を支えることとなった。

昭和20年8月の終戦後は、農地解放や同26年の農地の交換分合によつての農地の集団化と経営改善、これに付随した道路と水路の改良工事によつて農業の近代化が図られた。

昭和30年代からの高度成長によつて所得が倍増し、肉体労働を要する農業が嫌遠され、後継者難などから離農者が増加したりもした。その結果、農業経営を縮小し土地の有効利用を図るため、農地以外に転用する人が増え、農地は大幅に減少した。



## 2 . 養 蚕

明治42年、8戸による養蚕業が始まった。大正時代に入り国の輸出品の第一に挙がるのが生糸であった。そのため日本は国をあげて養蚕に力を注ぎ、三苦においてもこれに追従して、当時の養蚕と製糸関係の本場であった京都から養蚕技師 細見兼松氏（故人）を招へいした。細見氏は三苦に住み着いて、蚕の成育中は各戸を巡回するなど、指導に力を注がれた。それにより養蚕業は農家の貴重な現金収入となった。当時、100円紙幣は繭代金でないと得られなかったという。

昭和5年（1930年）細見兼松氏は和白村養蚕功労者として、閑院宮殿下に単独拝謁を賜った。しかし、年3回の養蚕は、生きた幼虫を育てることであり、米作とその裏作との間に昼夜を徹しての給飼や、その飼料の桑の葉を買い求めに、遠くは対馬や朝倉方面まで足を伸ばしたと伝えられ、なみなみならぬ苦勞のあとが忍ばれる。

## 3 . 苺

大正時代に全盛を誇った養蚕も、繭代金の暴落などによって終りを告げ、昭和初期には新たに始まった苺栽培に代わっていった。

新宮町湊の堺 卯三氏（故人）が夏大根を千代町の青果市場に出荷される折に、さかい重（大型の木製箱食器）に苺を入れて出荷されたのが始めて、当時、車力（荷車）1台の大根とさかい重一箱の苺の仕切り金額が同額であったので、これは有望な換金作物であると分かった。堺 卯三氏と親戚関係にあった堺 駿策氏（故人）が苺苗を譲り受けられ、堺 新一郎氏（故人）とともに、大正15年（1926年）に試作されたのが、三苦での苺栽培の起源である。

当時の苺は、品種名も不詳だが、新宮町が一足先に増反されたので「新宮苺」というようになり、別名オランダ苺とよばれることもあった。

昭和3年（1928年）前出の二人によって市場出荷がなされ、苺の有利性が再確認されてから営利栽培が始まった。昭和5年（1930年）には苺組合が誕生し、昭和13年（1938年）には最盛期を迎えた。苺の代金が三苦農家の最高の収入源となったが、第2次世界大戦などで戦時体制が一段と進み、昭和17年（1942年）には食糧管理法が制定されると、苺は栽培禁止となり、苺組合も立ち消えとなった。

戦後は統制経済下ではあったが、苺は裏作的に栽培できるので再開され始め、昭和22年（1948年）宮崎早生種（米国原産のパーソンズビューティ）が導入されると、2～3年後には三苦全体に行き渡り、従来の新宮苺と入れ代わった。苺組合も再編されて出荷は

もちろんのこと資材の斡旋も行うようになった。

その後、静岡の石垣苺・福羽種が導入され、促成は福羽種、露地は宮崎種となり安定生産がなされるようになった。昭和30年（1955年）農業用ビニールの出現により、福羽種の離段栽培は急速に伸び、三苦は苺の産地として広く紹介されて、苺の視察団がバスで大挙して訪れるようになった。



ビニールによるトンネル栽培

苺の改良品種が出回り、興津4号やダナー、宝交早生などと代わり、清浄栽培も強く打ち出された。昭和37年（1962年）には畑地灌漑施設が完成、昭和39年（1964年）には西日本鉄道と提携して、観光農業としてクーポン券で苺狩りを楽しませ、翌40年からはハウス栽培へと変わっていった。このころには苺の売り上げが三苦農家の収入のトップを占めるようになった。

そのうちに他の産地も年々殖えつづけたために、産地間の競合も十分考慮しなければならなくなり、栽培方法も改善され、短期株冷やジベレリン処理、昭和50年（1975年）には電照栽培が始まり、続いて連棟式のハウスが導入された。兼業農家は次第に減少し、専業農家になっていったが、昭和54年（1979年）からは完全共同出荷となって系統の共販への加入が行われた。

その後、主流を占めていた宝交早生も、果肉が堅く日持ちが良くて美味しい新品種の「はかたとよの香」の出現によって品種の世代交代がなされ、「はかたとよの香」が100%



ビニールの連棟式ハウス

栽培されるようになり現在に至っている。  
【堺 泰作氏（故人）・  
堺 義美氏（故人）の  
記録から】

## 4 . 足踏式脱穀機と唐箕<sup>とうみい</sup>

大正7・8年頃から稲の架け干しが始まり、足踏脱穀機の使用が始まった。それまでは千歯<sup>せんば</sup>という道具を使い、腕力で稲の籾をこさぎ落していたが、この脱穀機の導入で作業は非常に楽になり、夜おそくまで納屋（農家の作業場）で石油ランプの灯のもと、「ガーラン、ガーラン」と音を立てて足で脱穀機を回しながら脱穀作業をしたものである。

足踏式脱穀機とともに普及したのが唐箕<sup>とうみい</sup>である。唐箕は手で回し、風を吹き付け、穀物の中のゴミや“しいな”（実の入っていない籾）を選別して取り除く道具で、左手で唐箕をおさえ右手でハンドルを回して、脱穀した穀物のゴミなどを吹き飛ばし、下の方から出てくる穀物を“唐箕<sup>とうみい</sup>じょうけ”で受け、片足でそのショウケを揺った。【末信源藏氏（故人）想い出から】

足踏脱穀機・唐箕は和白郷土史料館に展示



唐箕 足踏式脱穀機

## 5 . 競犁会<sup>けいりかい</sup>始まる

競犁会<sup>けいりかい</sup>が始まったのは和白村時代の<sup>けいりかい</sup>大正8年（1919年）で、当時は三苦地区でも一大行事であった。競犁会の目的は確固たるもので、農業を志す若人の<sup>しんこうりほう</sup>深耕犁法（<sup>すき</sup>犁で深く耕す）の改良と、その心身を鍛練することであった。具体的には年令により3段階に区分し、甲組が年長者で19歳以上、乙組が16歳以上、丙組が13歳以上とに分かれ、その組毎に技を競うものである。

その内容は一定時間内に巾約1.5mの土盛の畝3本を、牛馬を駆使して仕上げ、制限された時間内で畝3本の出来栄を競うもので、その所要時間の割出基準は甲組は1.88mの距離に対し4分、乙組は5分、丙組6分であった。出場者には青年団の幹部の面々が、1週間にわたり熱心に指導した。本人もまた、全身全霊を打ち込み、日一日と上達して行く中で当日を迎えていた。

競犁会当日は、他の町村から来所された審査員により、出場者の牛馬の操作姿勢態度40点、出来型40点、深耕の程度20点を基準に審査し、甲・乙・丙と各組毎に1等1名、2等3名、3等5名といったように表彰された。これは稲収穫後の恒例の一大行事であっただけに受賞者の賞状には「糟屋郡進農会長」の氏名が記されていた。【堺 義美氏（故人）の記録から】



競犁会風景

## 6 . 三苦の耕地整理事業

大正12年（1923年）8月より起工され、2ヵ年の歳月を費やして大正14年4月に竣工した。それまでの三苦の農業は湿田が多く、しかも塩分の多い生産性の低い農地であったが、この耕地整理事業によって急速に近代的農業経営へと脱皮し、生産性は飛躍的に増大して三苦地区の経済的發展に大きく貢献した。

### 事業の概略

起 工 大正12年（1923年）8月

竣 工 大正14年（1925年）4月

残務整理終了 昭和4年（1929年）4月

総面積 53町1反4畝歩（約53ha）施工区域内の畑地含む

事業費 16,761円

組合長 堺 千代吉氏（故人・元村長で奈多居住であったが三苦出身であり、所有地

が三苦地区内に保有されていた)

副組合長 永吉 秀吉氏 (故人・永吉正隆氏の祖父、当時の三苦区長)

会 計 堺 代次郎氏 (故人・堺 澄夫氏の祖父)

2ヶ年にわたる工事で初年度は業者の請負工事であったが、2年目は三苦区の直営工事となった。

現在の消防格納庫から三苦駅に至る道路を境に、南側から始まり、翌年は北側に当たる上方の工事。土の運搬は竹製の丸ショーケに紐を4ヵ所取り付け、更に返し紐が底につけてあり、担い棒で担ぎ目的地に着くと担い棒を肩から外すと同時に、返し紐を強く引くとショーケが返り中の土が出る仕組みになっていた。また、棕呂モッコという用具もあって、特殊な土や石などを運ぶ場合に使われ、大型で二人で担ぐようになっていた。

工期は米作に支障を来たさないよう、11月に始まり5月に終わるように配慮されていた。この大改良事業も指導者・地区民総結束の熱意で、将来のために払われた犠牲も大なるものがあり、その後の生産の拡充に大した功績となった。【故堺 泰作氏 (故人) の記録から】

## 7 . 三苦土地改良事業

福岡市大字三苦字畑田・黒山地区 (三苦二・三丁目) 一帯を対象に、国有林を含めた約125,000㎡の土地改良事業 (区画整理及び畑地かんがい) は、かねてから地元農民の強い要望であった。

昭和41年 (1966年) 2月、土地改良法の下に県知事の認可を受け、堺 駿策氏 (故人) を理事長として事業に着手し、昭和42年に事業の完成をみるにいたった。

事業概要は次のとおり。

### 区画整理

面 積 125,000㎡

関係者 93名

総工事費 1,166万円

内 農林漁業資金 932万円

自己資金 234万円

道路延長 2,948m

水路延長 1,977m

なお、道路幅員は、幹線6m・支線4m

### 畑地かんがい施設

面 積 40,000㎡

関係者 39名

総工事費 181.7万円

内 農林漁業資金 97.2万円

市補助金 52.29万円

自己資金 32.41万円

貯水槽容量 150 t

揚水機 タービン5.5kw

噴射パイプ 径50mm 60本

完成後は、本地区が福岡市のモデル地区として、苺を主体とした新しい観光農業の発展が望まれた。しかし、現在では、ほとんど宅地化されて完成当時の面影はなくなってしまった。



綿津見神社境内の  
勲七等松浦到書の耕地整理事業記念碑

# 博多湾鉄道汽船株式会社

## (現在の西日本鉄道) 宮地岳線

大正12年(1923年)8月、今の西鉄宮地岳線和白～宮地岳間の工事が起工された。営業開始は同14年7月1日で、当初は蒸気機関車に客車1両、荷物車1両の編成で運行し、三苫は無人駅であった。それから間もなく苺の栽培が始まると、福岡の青果市場への苺の出荷にも利用出来るようになった。

昭和4年には蒸気機関車から新鋭の電車に替わり、スピードアップも図られて益々便利な交通機関となった。懐かしい思い出の数々ある博多湾鉄道だが、この工事には多数の人々が従事した。それらの人々は和白の駅前から塩浜の東はずれの、通称枇杷<sup>びわ</sup>の木谷と呼んでいた付近に飯場を作り住んでいたようだ。

三苫方面の工事を担当していたのは次のようだとされている。

1. 近藤組(三苫六丁目4番 堺 桂氏納屋)この組は託乗寺裏山の掘割り作業をした。近藤夫妻とその長男夫妻(夫は土砂崩れのため死亡)他に数名居たようである。作業員は主に土地の人を募集していたようで、三苫の住民はこの組で働いていたようである。
2. 黒田組(三苫六丁目16番 箱田家の納屋)この組は永浦方面(新宮町との境永浦付近)の掘割り作業をした。黒田氏夫妻(長男は和白小学校に入学)の他に隣の家に1組の夫婦が居た。永浦の畑に作業員の飯場を作り人が住んでいて、畑の隅に井戸を掘り、水を取っていたようだ。

なお、託乗寺の裏山を掘割った時、多数の棺桶(?)が掘り出されたが、いつ頃のものか分からなかったようである。三苫潟の干拓や製塩作業に他所から来ていた人達の墓か、立花城をめぐる大友、毛利の合戦で海へ逃れんと、三苫、新宮の方へ来た落武者の墓なのか、何れにしても多数の棺桶が発掘された事は事実である。また、その棺桶が点々としていた一帯は松茸の産地で、多数の狐が住みついていたという。

【堺 駿策氏(故人)・堺 泰作氏(故人)の記録から】



開業当時の博多湾鉄道

---

# 第5章

## 奈多村の歴史

---

奈多村字図



『奈多村の歴史』は、郷土史研究家 今林松美氏（故人）が生前中、永年に亘り多くの資料を収集され、また郷土の先輩達の話聞き、奈多の歴史としてまとめられたものです。

今林松美氏の意志を尊重し、多少の追加等はさせて頂きましたが、そのままの文章で編集させて頂きました。様々なご意見等、多々あるかとは存じますが、何卒ご理解頂きますよう、お願い致します。



# 古代、中世、近世

## 1. 奈多の地名の由来

奈多と云う地名がいつ頃、どうしてつけられたか。このことについては「筑紫の日灘の国」「浪常に立つ浪立つ国」「海辺で浪の多い国」などいろいろの説がある。筑豊沿海誌には『浪常に立つ浪立ちの国なれば 奈多と云う』とあるが、仙覚萬葉抄という本の奈多の章に『其浦 波之音無止時依云奈多』と記されているとのことからこの説が奈多の地名の始まりと考えられる。



奈多海岸



奈多の浜から志賀の島を望む

## 2. 奈多に伝わる古歌

仁和の頃（885～889年）七条の後に仕え、のちに宇多天皇の寵をうけて「伊勢の御息所」といわれた歌人の伊勢守藤原継蔭の娘で「伊勢」という歌人の

奈多の海あおきなぎさの浜千鳥

ふみおくあとに浪や立つらむ

という歌が夫木集24にある。また夫木集24には

秋の夜の汐干の月の桂瀉

山までつづく海の中道（読人不知）

という歌も残されている。天禄3年5月（973年）の歌合会では、村上天皇の皇子の「御時一宮」の歌で

奈多の浦になつそう海松を

なぎさの波ぞ年はたえける

と詠まれており、奈多の沖約1300m位の所から広い海松の林があり、大古の時代は大陸と続いていたといわれる証ではないだろうか。それから、

香椎瀉夕霧かくれ漕ぎくれば

あえの島には千鳥しは鳴く

という「読人不知」の歌がある。約千年位前であろうといわれているが、香椎の浜から和白の入江、桂崎から三苦水道を経て新宮湊、そして玄海へと出て行く白帆をかけた小舟を偲ぶ時、相ノ浦の艦綱の松の碑も納得して頂けるのではないだろうか。

また、これは少し新しくなるが細川幽斉の筑紫紀行の中に、

名にしおう籠の都のあととめて

浪をわけゆく海の中道

と云うのがあり、宗祇の紀行文の中にも

浪風をおさめて海の中までも

道ある国にまたも来て見む

とあるので、古きよき時代は多くの文人達の往来がしきりであったことが偲ばれる。

## 3. 丸瀬山

奈多の先住の地と云われている丸瀬山（玲瓏塚）から海の中道へと足を延ばしてみると、塩屋から東へ約3.5km位の処に、高さ約22mの小山がある。奈多の人々は此処を玲瓏塚と呼んでいるが、現在の西方、牟田方に人々が住みつくようになる前から、ここはいわゆる

る「あが」と呼ばれる人々の生活拠点であったといわれている。此处からは黒曜石の矢じりや魚具、土器などが今でも出土している。ここは古代の人々が海上の平安を祈った斎所跡ではないかと思われる。ここから出土した土器は、遠賀川後期に属するもので、他では見られない特有の色合いがあり「あが」と呼ばれた人達が黒川の土で焼物を造っていたと伝えられる。今に残る「あが」、「あがどう」と云う呼び名の古きよき時代を思い浮かべるのも楽しいことであろう。

又、塩屋は古い時代は奈多の地内で、漁業権もこの塩屋辺が境界であったようである。この塩屋の東側寄りの地点を、昭和56年に福岡市文化課が発掘調査を実施したところ、1000～1300年前の立穴式住居や、当時の鉄器、土器、漁労具、女性の髪飾り、位の高い人が身につける帯飾りの金具など沢山の出土品があり、塩屋と呼ばれる製塩所があったことも判明したが、特に注目されたのは、この遺跡から出土した「皇朝十二銭」で、当時、奈良の平城京、大阪の難波京と共に第三の都といわれた筑紫の大宰府と、この奈多とのかわりに思いをはせるのも楽しい。

皇朝十二銭 = 日本で最も古い貨幣で、万年通宝（1235年前）や貞観永宝（1125年前）、延喜通宝（1085年前）となど12種類の貴重な貨幣

## 4. 海の中道

奈多と海の中道、この海の中道には秘められた数多くの歴史がある。細川幽齋の筑紫紀行の中に『立ち出でて見るに 沙の遠さ三里ばかりも 海を分けて島に續きたり とりわきて細き所は十町ばかり 広き所は十四、五町もありと見えたり 文珠などもおわせしは橋立のこと思いくらべらりき』云々とあり、大正年間に発行された筑豊沿海誌にも、「この地、左右に海を受け、東西三里、その間悉く白砂青松の長州なり、異邦の書に『白沙塗』と書けるもむべなる哉」とある。又、頼山陽が西海を旅した折の作「天草灘」の詩は有名だが、私達が住む奈多の、海の中道の詩もあるので紹介しておく。

「海の中道」 頼 山陽

松林横載大洋潮 萬豊波間碧一條

此景何縁在西海 直須奴僕命天橋

太古の時代は別として、今から約2000年位前は東に和白地区の丘陵があり、和白潟から新宮湊へかけて、内海と外海を継ぐ三苦水道があって、三苦島、大岳島、志賀島の三島であったと九州大学の山崎光夫先生は「北九州沿岸の推移」の中で述べられている。その後、今のような海の中道となった理由として、「一般に砂丘は或る障害物を基点として発達するもので、この地域は季節風が卓越する処で、海水が運ぶ土砂が障害物を基点として

次々と砂丘を形作り、島と島をつなぎ、今日のような海の中道を造りあげるに至った」と述べられている。西紀57年に倭奴国王が後漢の光武帝から授かった金印がどうして志賀島から発見されたのか、これは今日も尚、謎のようである。

360年頃、こうして造りあげられた海の中道の拠点としての奈多という、私達の「ふるさと」の歩み来た道をこれから尋ねて見たいと思う。

746年、筑紫の観世音寺が建立される。この時、本尊として祀るため中華より赤銅の阿弥陀像を船に積んだが、奈多沖で嵐に逢い、今にも危ないというとき、志々岐大明神を船中に勧請し、平安無事を祈った。神の加護により無事に帰りがくことができたので、その後、奈多海岸に社を建てたと伝えられている。又、一説によると三郎天神という神様は荒ぶる神様で、社が沖向きに建ててあった為、奈多沖を通る舟は半帆にして海上平安を祈り航行したと伝えられているが、後年、現在のように東向きに鎮座されるよう建て替えられたとのことである。



## 5. 三郎天神御縁起抜書

『中天竺の麓からしやくあしろの国 石竹の郷と申すところの王 じんきん天王と申し奉る 御母はきうり山のろく ちの姫と 二懐人ましまし六年目に御誕生 めのと取り上げ見奉れば加美は天まんやしゃの如く 足手は木竹身は黒く御まなこは明星の如く 御魂は五十八と申し伝わる 七歳の御時 水行を夜日遊ばし給う この時の御名をすい野む王と申也 十三歳の御時 天竺 きしゆく 上人の御ま子となり給い 学文はもとよりそう

めい えい智にて即ち神となり給う この時の御子の名を天大力菩薩と申す 悪神故大國に渡し申す この時の御名を五大力菩薩と申し奉る ここも悪神故日本に渡し申す 四國土佐の國秦の郡堀こし川の水上に恵の木七本あり こずえに社ありけるがこの木のもとに石川の明神とておわしますが まるの守護せる地を日月と現わし 夜日 大きく照らし給う いかなる神にましますや 神の日く 我は天竺の神なるが日本に飛び来る その時石川の明神のたまわく さらば秦文申すべしと 悪しきそうもうありければ 小弓に小矢をさしそえて 三郎天神と御名を下し給う 則ち秦の郡七千町歩の処 三郎天神の御領地と申伝也』

奈多は古くから玄海灘と内海の漁業権を持っていた。香椎宮の祭日には、奈多の漁民は神功皇后との由緒に因み、御瀬、古瀬、神海、四ツの網代で獲れた大鯛を献じ、御神幸には猿田彦の鉾を持って参列する。奈多松原の西に吹上の崎といって、神功皇后が神楽を奏した処と伝えられている地があるが、11月19日の「奈多神楽」における早魚神事との関連もあり、志式神社の「おくんち」の項で述べることにする。

## 6. 志式神社

志式神社の御祭神

・火明神 ・火酢芹神 ・豊玉姫神 ・十城別神 ・雅武王 ・葉山姫神の六祭神といわれている。

由緒

神功皇后が、三韓遠征の折、奈多の吹上の地に軍議所を設けられた時、ここで神楽を奏せられ、外敵から守るための「守護神」として祀られたの説がある。先にも述べたように初めは北向きに建てられていたが、後年、現在地に東向きに建て替えられている。当初、三郎天神と称されていたが、聖武天皇の御代（740年代）に五嶋の志々岐大明神を勧請し、御陽成天皇の慶長2年（1597年）に二社を合祈、志々岐三郎天神と称していた。明治5年11月3日の神社号制定により、志式神社として今日に至っている。

吹上浜

筑前旧跡記によると『吹上浜は 志賀島の東にて 奈多の西にあり 神功皇后の神楽を奏し給う地なり』と記され、神楽記によると『不知火の筑紫の吹上浜にて神楽を奏するものならば などや軍率調事やあらんとや 藤原の大臣は太鼓を打ち 皇后自ら お琴を合わせらる 群臣十二の楽の調子を揃え 糸竹呂律の声々調べ半ばに及びしに 磯良明神遙

か波間に出で給う…云々』とある由だが、今その処を躍坂、又の名を「神楽岸」と呼んでいる。



志式神社

#### 奈多浦志々岐大明神之事

正徳5年（1715年）乙未正月21日、寫書として文書が残っている。要約すると「聖武天皇の御守、天平18年（746年）筑紫の觀世音寺建立の折、本尊にしようと中華より赤銅の阿弥陀像を船に積み、奈多沖にさしかかった時、海上の風波荒く非常に危なかったが、肥前の国五嶋の志々岐大明神を船中に勧請し、風波の難をのがれるよう祈願した処、無事に帰り着くことができたので、その後、この奈多の地に社を建てたと伝えられていますが、この神様も荒ぶる神であったので奈多沖を通る船は、半帆にして航海安全を祈って航行したと伝えられております。」

三郎天神は、古くから火災、盗難などの災厄を除く神様として有名だが、元禄16年（1703年）には、奈多新開築堤の功労者である大野忠左衛門貞勝が御供米を寄進、又、天保年間（1840年頃）徳川家慶の臣、内田伊勢守の伝命で筑前藩主の黒田長博が斯社で火災除難の祈願を行っているが、昭和11年3月の広田内閣成立の時は、巖父の徳平翁がお礼にとお参りをされているのを記憶されている方も多いと思う。

#### 祇園祭と奉納芝居

毎年、7月19日・20日は祇園祭が行われるが、この地方では珍しい奉納芝居が興行される。この芝居の起源は、天明4年（1784年）に奈多村や近郊は大飢饉で疫病も発生し、病死者、餓死者が続出した為、村人は鎮守様である三郎天神に参籠し、悪病平癒を祈願したところ、村人の祈りが神様に通じたのか一日毎に病気も平癒し、又、もとの平和な村に戻る事ができたことから、村人は神様へのお礼にと芦屋から大蔵組を呼び、歌舞伎奉納をしたのが始まりで「萬年願の奉納芝居」として今日も継承されている。

祇園祭で奉納される芝居の舞台は、古くは組み立てられていたが、明治28年に糟屋郡

山田村猪野の大神宮の野舞台を譲り受け、現在地に移設された。戦後の昭和23年に茅の屋根の損傷がひどい為、原材料の茅を探したが近郊では集まらないのでセメント瓦に葺き替えられたが、昭和35年に九州大学の太田清六教授に見て頂いたところ、「惜しいですネ、これだけの野舞台ですから茅葺きでしたら文化財に指定しますがネ」と言われた言葉が思い出される。志式神社は遷座祭の都度、修復、改修工事がされてきたが、社殿の改築は慶長2年（1597年）、延宝6年（1678年）、正徳6年（1716年）、元文2年（1737年）、宝暦6年（1756年）などの記録もある。現在の社殿は大正8年（1919年）に改築され、拝殿は昭和になって銅板葺で改築されて現在に至っている。



奈多志式座での祇園芝居風景

#### 奈多くんち（宮日）

11月19日、20日は奈多くんちの祭りであるが、19日の日没から伝統の「夜かぐら」が奉納される。この舞台も伝統の約束ごとがあって、木臼十二を土台にしてこの上に野舞台前の棧敷の床板十二枚、畳十二枚、屋根を覆うのは舟の帆二枚と決められていたが、最近では木臼もなくなったので、規定の寸法に合わせて土台は鉄骨を組み立てている。この神楽の中に「天神尋ね」「献魚包丁式」「ひれ舞い」が奉納される。この一連の奉納神事を通称「はやま」（早魚）と呼んでいるが、福岡県神社誌によると「千年来の典故なるべし」と記されている。この早魚の起源は、神功皇后が三韓出兵の折、この奈多浜に軍議所が設けられ、その時に皇后の料理に、先祖の人々がたずさわったことによると伝えられている。

#### 早魚神事

早魚神事は、現在では奈多四町内を二組に分けて隔年毎に前方、西方と牟田方、高浜に分かれての奉納神事となっているが、古い時代は網元対網元の競争で、生きた大鯛を早く料理して神前に供えた方にその年の漁場の権利が与えられたので、村人の生活がかかった競争神事であった。その為、一つ間違うと血をみることも多かったという。正に村内を二分する競争神事であったが、最近では古式を伝承する神事として継承されている。

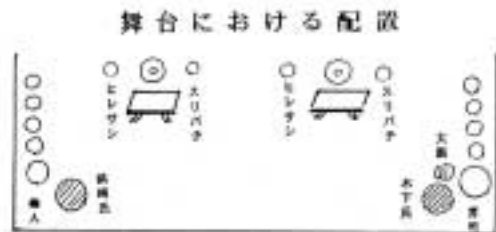
この早魚神事に奉仕する若者は、当番町の24才と25才の若者中から、当日の夕方「く

じ」で料理人、ひれさし、すり鉢の三人が選ばれる。このくじは当番町の代表者や世話人立ち会いのもとに引かれ、三人の役が決まると、先輩の指導により練習に入る。早魚は俎、包丁、まな板、箸、お八寸（お式）と大鯛を使う。昔は息子が早魚年になると、母親は、はた織機で反物を織り上げて11月19日の夕方を待った。当日息子がくじで奉仕者に決まると、母親は反物を裁ち、縫い上げ



早魚神事

て夜半の奉仕着として着せたということである。その頃（今から五、六十年前迄）は、娘の嫁入り道具には、はた織機は欠かせないもので、どの家でも納戸か縁側には必ずはた織があった。奉仕者の着衣は袷付袴一枚、じゅ絆一枚、角帯一本、白足袋一足という定めがあり、着付けは男衆がする。早魚の順序は、十九日の日没くじで奉仕者を定める。早魚宿で先輩の指導で古式の説明を受け練習に入る。夜半少し前になると神楽の進行に合わせて神楽座からの使者が来て汐かい（みそぎ）に行く。大鳥居前で一糸纏わぬ真裸となり、玄海の荒海で襖をして、その足で拝殿前で裸参りをする。早魚宿で奉仕着に着替え、町内会長、世話人と共に神楽座へ。魚改めの儀と盃事。一応の仕技を神官、座元の尾形（木下家）、小枡屋宮総代等へ披露する。二組揃って舞台入りをして本番となる。二組の奉仕者は、“私達はこんな立派な大鯛を神に捧げます”と決められた“姿みせ”の所差をして観衆にアピールする。神官の「見事なお魚ご料理召され」の声のあと太鼓の「ドン」の合図で料理にかかる。このあと早く「鯛のひれ」を座元に届けた方が勝ちとされているが、今日では如何に正しく古式に添っての所差が披露されたかが重要となっている。このあと神官により「ひれ舞い」があり、翌朝、この「ひれ」は玄海の荒海に納められるが、「ひれ」が丘に上がったことはないと言われている。



観衆



## 7. 海印山 西福禅寺

寺地 東区大字奈多887の1

宗派 臨済宗 東福寺派

由緒

1. 『承天寺の記録』による

イ. 『聖一国師』の開山...と伝えらる

中世歴代の事蹟は不明

江戸時代の万治2年(1659年)9月、

了印和尚が再興し今日に及ぶ。



『海印山 西福禅寺』を正面より拝す。

ロ. 延宝7年(1679年)7月11日、黒田光之承天寺へ奈多の立山6万6千坪を寄進す。

2. 『粕屋郡誌』によれば

開山 聖一国師と云い、弘安3年(1280年)庚辰正月創立

その後、弘治2年丙辰(1556年)了印と云う僧再興せり...と

大正2年(1913年)奈多浦大火の際類焼の厄に遭い、移転新築せり。[境内345坪、檀徒230戸]

3. 川添昭二氏『承天寺の歴史』

イ. 円爾弁円〔聖一国師〕は駿河国安倍郡するが あべ藁科の生れ、5才で久能山のくのう堯弁ぎょうにつき

ロ. 嘉禎2年(1235年)入宋、仁治2年(1241年)帰朝、帰朝後円爾弁円の在福期間は足掛け3年足らずの短期であったが、旧仏教側から弾圧を被るほどの活発な活動を行っていたのである。

ハ. 円爾弁円は弘安3年(1280年)10月17日に歿すが円爾弁円の直弟・門流の博多を中心とする化導は中・近世の博多文化の展開に重要な役割を果たした。末寺の相次ぐ建立は、その指標的なあらわれであると共に、寺領支配を通じて民衆の経済・精神生活に新たな側面を開いた。

ニ. 円爾弁円は7月15日の博多山笠の始祖と伝えられ、饅頭まんじゅうや博多素麺そうめんの製法の初伝者と伝え、博多織の始祖という満田弥左衛門とも関係づけられ、滅後700年を経た今でも博多の人々の生活の中に息づいている。

西福禅寺の『聯芳塔』について

昭和45年11月西福寺裏丘の東北隅に建立された『聯芳塔』には、下記の歴代住職の芳名が刻まれている。

1. 開山 勅謚聖一大宝鑑広照神光国師大和尚

2. 二世 (当山中興)了印孚公禅師

寛文3年（1663年）中興の祖となり堂宇再建。寛文11年（1671年）10月8日歿

3. 三世『石水寿堅座元禪師』 元禄8年（1695年）11月26日歿
4. 四世『文海恒伝禪師』 宝永7年（1710年）2月3日歿
5. 五世『松屋竹公禪師』 宝永8年（1711年）3月19日歿
6. 六世『正禅徹宮禪師』 享保2年（1717年）2月10日歿
7. 七世『要宗津公禪師』 享保6年（1721年）7月10日歿
8. 八世『建堂座元禪師』 元文4年（1739年）4月22日歿
9. 九世『全室寿完禪師』 寛保元年（1741年）8月24日歿  
この方は地元、今林金作さん方の家出身と伝う
10. 十世『雪溪欽公禪師』 宝暦元年（1751年）8月24日歿
11. 十一世『悦宗悟公禪師』 宝暦11年（1761年）3月8日歿
12. 十二世『良室久公禪師』 明和3年（1766年）
13. 十三世『宝州山公禪師』 明和7年（1770年）6月21日歿  
〔当山再中興〕明和3年の火災に類焼したのを再興す。  
地元、今林家から出家された名僧の誉高ほまれかった和尚さん。
14. 十四世『黙堂寂座元禪師』 安永7年（1778年）5月23日歿
15. 十五世『大有慶公禪師』 寛政4年（1792年）9月19日歿
16. 十六世『仁峯思公禪師』 文政4年（1821年）11月12日歿
17. 十七世『真浄文公禪師』 文政9年（1826年）7月27日歿
18. 十八世『荊州義公禪師』 天保12年（1841年）8月7日歿
19. 十九世『玄峯知状禪師』 慶応元年（1865年）5月19日歿
20. 二十『雪溪樹公禪師』 明治24年（1891年）2月1日歿
21. 二十一世『正道覚和尚大禪師』 大正15年（1926年）3月20日歿  
前住東福 当山中興  
大正2年（1913年）3月、奈多の大火事に類焼。御当主が7年の苦勞の後、大正9年現在地に寺を移して見事に再興され今日の基礎を築かれた。師は京都の名門京極きょうごく家の出と伝う。
22. 二十二世『滴水海和尚大禪師』 昭和33年1月21日歿  
前住東福
23. 二十三世 前住東福 当山『実巖真和尚大禪師』9月29日歿

その後は昭和50年に現住職の手によって『鐘楼・納骨堂落慶』と共に700年遠忌が盛大に行なわれた。その様子は中外日報の記事を引用させて頂く。

『中外日報の記事』

イ. 臨濟宗東福寺派は昭和54年に開山聖一國師の『700年大遠忌』を迎えるので、大本山東福寺では遠忌大法要を厳修する計画で準備に着手しているが

- 口．同派で聖一國師によって開かれた名刹の一つ奈多の『西福寺（戸田宣齊住職）』では、全国にさがけて昭和50年11月3日『開山大遠忌』を厳修
- 八．記念事業としてこの日のために進めて来た 本堂・庫裡の増改築 山門・鐘楼・納骨堂の新築などの諸工事をすべて完成し11月2日東福寺派『恵鏡管長』を導師に盛大な落慶法要を厳修する。
- 二．戸田住職は約10年前からこの遠忌準備に着手し、先ず 本堂の改築、続いて 庫裡・隠寮の改築を行ない、戦時中に供出して梵鐘がなくなり鐘楼も老朽化していたので新たに 約2トンの大梵鐘を新鑄すると共に 鐘楼も新築、更に檀徒のため鉄筋二層の納骨堂『常楽閣』の建設も行ない、今回の工事経費は約1億2千万円である。



『西福寺』を中心に聯芳塔・平和塔等の位置図

## 平和塔

西福寺の御好意により境内の東北の地、東に立花の秀峰を遠望し、北に玄海の潮騒を松籟とときく高台に昭和56年3月移転改築を行なったので、『記録碑』の碑文とともに紹介する。

### 『平和塔建設記録碑』の碑文

「日清日露戦以降、大東亜戦に亘り『只一筋に祖国の平和と子孫の幸福を念じ』遠く異郷の地に散華された御英霊の遺徳をしのび、これに応えるは郷土の私共の責務と信じ、平和塔建立を計画推進することとなり、即ち、三苦字高浜の国有林を借地し和白村当局、各種団体有志により、昭和23年12月竣工式と慰霊祭が挙行されたのであります。爾来三十有余年、彼岸の中日を例祭日として慰霊の誠を尽くして参りました。昭和30年には、戦友の郷友会で戦没者の『奉名塔』が建立され、昭和35年8月福岡市に合併、和白町の解消を機に平



平和塔

和塔維持奉讃会<sup>ほうさんかい</sup>を結成し、町管理を引き継ぎ、和白郷友会が慰霊祭を奉仕する事になりました。

昭和46年国有林借地の払下げの報に接するや、自治会長会の協議により、広く郷土の方々に呼びかけ募金活動の結果、土地代六百九拾六萬円を上廻る八百四拾萬円の御芳志を戴き、次いで昭和53年払下げ条件満了を機に、出資者への償還<sup>しょうかん</sup>を完済<sup>かんさい</sup>し、平和塔移転場所御英霊安座の適地を選定の処、奈多、西福寺のご好意により、東に立花の秀峰を遠望するこの境内の台地に、移転建設を完成し、昭和56年3月の佳日、装いも新たな平和塔の御霊前で奉讃会・移転改築委員会・郷友会共催で、盛大に竣工式と慰霊祭を挙行し得ましたことは、英霊に対し尊崇の念高き表われと、心から厚く感謝申し上げます。茲に平和塔移転建立の概要を記する所以<sup>ゆえん</sup>は、今日まで御英霊に対し、心からの御奉仕に感謝申し上げると共に、御英霊の精神を体し、末永く郷土愛・祖国愛に徹する人々の益々多からんことを信じ、撰文彫鏤する次第であります。

昭和56年3月20日」



境内地に建立の「平和塔建設記録碑」

## 8. 奈多の漁業・農業

よく知られている筑豊沿海誌（大正6年〔1916年〕）より意識抜粋すると、

「奈多濱は奈多浦のあるところ、白砂青松の長洲三里に連なり、風光秀麗なること、須磨・明石に比して多く遜色を見ず。神功皇后の漁場と推察すべき、御瀬・古瀬・こをかい・四つの網代などをいう、名称が今なお現存するのみならず、当時香椎宮に献魚の古例、今に行われ来たり、而して最も古く引き初めしものを、鯛漕網とし、尋で起きるものを鰻地曳網及び田作地曳網とす。玉筋魚大網は安政年間に始まり、更に文久年間に玉筋魚房大網を姪浜より伝習せり。鯛揚繰網・鯛地曳網・飛魚流し網・追い網等々 亦一般に行われる。網を以てその主要漁具とす。

なかんずく、鯛網の名は古より、西浦（西区）と並び称され、今尚晩春の候なれば、鯛網見物として、四方より来たり遊ぶもの頗る多し、鯛・鰻・玉筋魚の漁業最も盛んなり。

また、副業に農を営むもの多く、甘藷などの特産あり、風光明媚なるこの地、松林の中に松露<sup>しょうろう</sup>の名産あり且つ空気中のオゾンを含むるを以て、衛生に適せり、むべなる哉、富豪の徒、相い競うて別荘<sup>べつそう</sup>を営むもの年々その多きを加える。」

## 9. 奈多の七不思議

いつの頃から奈多の七不思議といわれるようになったのか、つまびらかではないが、識者の随筆や地方探訪記などにもよくとりあげられているので、ここでも紹介する。

火事がない。 盗難がない。 難産がない。 雀が歩く。 砂が鳴く。 穴蜂がいない。 波の音が聞こえぬ。以上の七つだが、どうしてそうした事が伝えられたのか定かでない。

火事がない...昔の奈多は漁村特有に道巾が狭く、家は殆ど藁屋根で軒先も互いにくつつくように建っているのに火事がない。不思議な処だといわれていたが、大正2年3月に157戸が焼失するという大火にあっている。

盗難がない...家と家との境界が入り込んでいて曲がり道も多く、泥棒に入っても逃げ道に迷っているうちに捕まってしまったという話がある。

難産がない...昔の奈多は殆どの家が半農半漁であったので、奈多のお嫁さんは働き者で非常に健康であったとのこと。また、産気づいた時に「早魚」の切り身をお小湯でいただくと、お産が軽いとの言い伝えもある。

雀が歩く.....言葉の表現の誤りからこうした事がいわれたのか、古老の話ではお宮の雀が浜を歩くと砂が鳴くと古くはいわれていたとのこと。

砂が鳴く.....奈多の外海岸は、全国でも数少ない「鳴砂の浜」だが、これは原石が石英で、海が美しいとよく鳴るが、砂が汚れると鳴らなくなる。いつ迄も美しい奈多の浜で「キュッ、キュッ」と言う音色を聞かせて欲しいものだ。

穴蜂がいない...昔の奈多は春ともなれば、一帯に紫雲英と菜の花が一面に咲き競い、蝶や蜂が飛び交っていた。にもかかわらず、穴蜂の巣も無く不思議な処だといわれたものだが、この土地は砂地であり、穴蜂の巣造りが出来なかったことに起因する。

波の音が聞こえぬ...漁村と云えば波音を枕辺に聞くものだが、内海は波静かであり、外海は防風保安林で波音が遮られているので、里人の耳に波音は届かないことから「漁村であり乍ら、波音が聞こえない不思議な処だ」といわれた。

## 10. 筑前八所松原

江戸時代の文書の中に「筑前八所松原」として、次の松原が記されている。

花見松原　古賀松原　上府松原　楯松原（下府）　奈多松原　白浜松原

舞松原 地蔵松原のハカ所だが、舞松原や地蔵松原は、今日ではその残影を探すのに苦勞する。奈多松原もまた戦後の松喰虫の被害が甚大で瀕死一步前の状態であり、皆で力を併せてこの松原を守り育てねばと思う。



奈多の松原

## 11. 博多八景

博多近郊古図（文化9年）の写書の中に博多八景が記されている。

- 荒津夜雨（西公園）
- 博多帰帆（袖の湊）
- 名嶋夕映（妙見島暮影）
- 奈多落雁（雁ノ巢）
- 宝満山暮雪（宇美）
- 箱崎晴嵐（日照り雨）
- 横岳晚鐘（太宰府の鐘）
- 分杉名月（若杉山の秋の月）

以上のハカ所に、その頃の文人達が詩歌に託して美景表現を創っている。

## 12. 奈多の宝塚

幕藩時代の終わり頃、奈多内海岸には、糟屋や宗像南部からの福岡藩への御用米の集積場があった。馬は三俵、牛は二俵の米俵を背にこの奈多の浜に集められた。場所は今の宝塚の海岸で、ここには浜田屋（現在、製麺所の今林京三氏）、牟田方の古枅屋酒造場（今の浜崎洋介氏）が回漕業をされていて、御用米倉から船一隻に三十八俵を積んで荒津の福岡藩の米蔵へ運んだとの事である。（古枅屋、故人の浜崎宗之助氏談）

## 13. 奈多落雁

打ち寄せる波にもなれて呼びかわし  
奈多の白州におつる雁が年  
数里白絹流海風 無邊中洛玉沙空  
桃雲雁宇知多少 呼喚回翔落上芳

この詩歌は、謙という方の作だが、何回も繰り返し復唱していると、昔の雁の巣、小瀬抜のあの松原の中に汲われていくような心地になる。「雁の巣」は本当に良い地名であると思う。

以下、年代順に、奈多の歴史を追ってみよう。

### 1281年（弘安4年）

弘安の役が起こり、香椎、和白方面の守備は大友泰時の部隊であった。志賀島を占領した蒙古軍を攻略するために、和白、奈多、海の中道を通り志賀島へ向かったという。この頃は三苦水道の陸地化が少しづつ進んでいた頃である。

### 1334年（建武元年4月30日付）

後醍醐天皇の綸旨に、「香椎宮殿上大宮司職 同給免有次名 田畑 山野屋敷并 奈多有次名田等」とあり、大宮司 氏光に安堵されている。多々良浜の合戦で足利尊氏が菊池氏を破る。また、この年は楠正成が湊川の戦いで戦死をした年でもある。

### 1350年～1450年頃（正平～安永年間）

倭寇が盛んに、明国や今の韓国を侵した時代だが、その倭寇の船印は中央に八幡大菩薩、右に春日大明神、左に志々岐大明神と染め抜いた大旗をかかげていたという。これは平家水軍の流れを汲む私達の先祖も、これに加わっていたのではないかと考えられる。また永禄年間には、倭寇は明国まで足を伸ばしているが、この倭寇の中に先にも述べたように、平家水軍の流れを汲む人々がいたので、これらの荒男の束ね役として、今林左右工門大夫範興の嫡、七郎を山田郷より奈多に差し向けて住まわせている。その時の文書が今林の祖である大綱に伝えられている。

『筑前之国 宇美之庄に居住 今林の左右工門大夫範興の先祖 同国 山田のこんどう  
とごうす 嫡に無隠候 甲乙存知のことに候わんぬ 就中 大夫は宇美の今はやしの  
ゆえに 今林の左右工門大夫とごうす

仍 七郎ことは愚身一家のことに候 そのみちがいあるべからず候 苦くは子孫若輩の  
ともがらそんちなからんや 此子孫のしるしして 七郎 所につかわし候 如件

干時永亨六年十一月十五日

今はやし左右工門大夫範興 書印』

## 1470年代（永享年間）筆捨松

ちょっと聞き慣れないことだと思われるかもしれないが、雪舟禅師と云えば、南宋画から日本の水墨画の新境地をひらいたことで有名でだが、その雪舟禅師が西海（九州）を旅し、薬王寺に泊まっていた折、薬王寺の住職から所望されて、この奈多浜の美しさに筆をとった。しかし、仲々筆が進まず、遂に「拙僧輩の筆にては表現し難し」と筆を投げたといわれる「雪舟の筆捨松」が薬王寺にあるとのこと。

## 1560年頃（永禄年間）

立花城主、西大友左右衛門道載と、奈多の塩売り弥太郎の女房「桂」をめぐっての悲しい物語は、歴史小説家で故人となられた長谷川伸先生が「浪音悲し奈多の白浜」として書き下してあった。昭和30年頃だったと思うが、この小説について、創作物語か史実に基づいての作かを問い合わせたところ、「あの作は、東尋坊の悪僧と、塩売り弥太郎の何れかをとらんとし、弥太郎のこを取り上げたと思いますが、大友戦記が大友軍記の何れかにありしを探りし記憶あり、史実は歪曲していませんし、古くは謡曲、徳川期の随筆でも読んだ記憶があり、昭和初期の随筆もありましたので、御地では古くは伝承されていたのではないか……云々」との返事を頂いた。



### 1571年（天正9年）

豊前杵築の奈多八幡宮神官の家来が奈多に移住し、浜崎家の祖となると伝えられている。また、高浜の護宝寺の祖も国東から今林妙仙という人がこの地に移り住み、天台宗を広め田畑の神祀（荒神）を始めたのもこの頃だと現住職の上野順晃師も話しておられる。

### 1587年（天正15年）

豊臣秀吉の九州討伐の年だが、立花城を攻めていた島津勢は、小早川の大軍が小倉に着き、立花へ向かっているとの報せに、香椎宮や近くの民家に火を放って逃げ帰った。この時、島津の兵はこの奈多に来て、三郎天神社に祀ってあった赤銅の阿弥陀像を盗み取って帰るが、いずこかで捨てられたとのこと。

### 1588年（天正16年）

香椎で焼け出された木下一族のうち、今の御方（木下家）が奈多に移住する。武内宿彌との縁故から、木下家の裏山に武内社を祀ってあるが、西方の子ども会の夏祭りも毎年7月14日に武内様としてお祭りが行われている。



武内神社

### 1597年（慶長2年）

志式神社としての最も古い棟書として残っているものに「慶長二年丁酉歳 社主新宮惣之市 志々岐三郎天神 奉葦替社殿一宇大漁満足三月吉日」とあることから、この時、三郎天神と志々岐大明神を合祀し、このあと「志々岐三郎天神」と称えるようになったという。またこの年の2月に、長崎で処刑された二十六聖人は、船で芦屋に上り、宗像～新宮～奈多と海の中道を歩いて、志賀島から船で長崎に向かったのが1月の30日だったと伝えられている。

### 1605年（慶長10年）

この年の浦触れによると「なだ」と見えているが、村高は「旧高旧領」で109石余で村位は中（續風土記）

### 1659年（万治2年）

長崎警固の役目を持つ福岡藩では、大砲の習練の為、幕府の許可を得て奈多の白浜を教場と定め、石火矢役人が、しばしば練習の大砲を放った（新訂 黒田家譜）。宿舎は西福禅寺と役所で、若殿様は役所に泊まり、家来達はお寺で寝泊まりをした。ご存知の方は少ないかと思われるが、雁の巣クラブ前バス停の内海側に少し小高い丘があり、ここに大砲をすえて、白浜の標的に向けて発射訓練がされたとのことで、小瀬抜に住んでおられた栗川健次氏もこれを聞き伝えておられる。

### 1660年（万治3年）

黒田家の臣、加藤弥左卫門成昌（鉄身）は、藩命により白砂斥齒の地といわれた地に、苦勞を重ね風砂止め、養土の移植等に努め、遂に松の植林に成功した。斥齒の地であり風波に枯死の連続であったが、これを乗り越えて今日の白砂青松の海の中道の美景が完成された。これに続いて三苫の植林も進められ、時の責任者、黒山勝左衛門の功を讃えて小字名に「黒山」の地名が残されていると聞いている。

### 1663年（寛文3年）

西方の旧公会堂(旧魚市場)のあった処に、了印孚公禅師によって、奈多西福寺が中興される。



西福禅寺

### 1700年（元禄13年）

奈多村、村内の古枅屋酒造場（浜崎洋介氏方）が、この頃、最も盛業であったとのこと。

### 1703年（元禄16年）

黒田家の権臣、大野忠左衛門貞勝、藩命に依り「奈多、塩浜開」を施工。全て藩財を用い、奈多の住民からの負担を取らず完工した。和臼、三苫の人々を移して塩浜村を起こし、堤防内に塩田三十町歩を開いた。



新開堤防

### 1733年（享保18年）

近郊一帯は大飢饉となる。奈多の庄屋浜崎は、年貢取立不行届のかどに依り、奈多村追放となる。

現在、子孫の方は唐津市内で商売をされていて盛業とのことである。

### 1738年（元文3年）

高浜入口の地藏堂（中央のお地藏様）が建立される。

### 1746年（延享3年）

志々岐三郎天神宮に、狩野法眼弟子の上田主勝の筆になる絵馬「舞」が奉納される。

### 1775年（安永4年）

奈多村前瀧に濱田屋（米、雑貨）が創業される。（現在の浜田屋製麺所）

### 1784年（天明4年）

いわゆる天明の大飢饉の年で、奈多村と近郊では餓死者が続出する。奈多村では疫病まで発生し、且ってない最悪の年となった。村人は氏神様に参籠し悪疫退散の祈願をした。村人の願いが神に届いたのか、一日毎に天候も旧に復し、悪い病気も一日毎に癒え、また平穏な村に戻ることができた。村人が神様への御禮として芦屋から大蔵組を招いて、奉納の芝居を催したことは今日も継承されている。

### 1790年（寛政年間）

民家は、西瀧、浦瀧、牟田瀧、出来町、ショウジガミ、前瀧の6ヵ所がある。【續風土記、付録】

## 1810年（文化年間）

民家160軒が一カ所に集落をなし、漁業を生業とする。田畑高は約104石で、うち8町余は入海を隔てた、唐ノ原村片男佐（今の香住ヶ丘校区一帯）にある。【続風土記拾遺】

## 1819年（文政2年）

今林彦四郎が、初めて奈多に甘藷を植え奈多藷の栽培が始まる。

## 1825年（文政8年）

奈多村の人数、978人（男562人、女416人）出生者32人（男17人、女15人）、死者16人（男7人、女9人）。【箱崎明石家文書】

奈多松原は年2回、良品の松露が収穫され、松葉は薪とし、また甘藷の収穫も多く、海陸の産物に恵まれ村人の暮らしは豊かである。【続風土記拾遺】

奈多浜では砂鉄を産し、鑄鉄とするほか、小刀や包丁の研磨粉として用いられる。【続風土記】

## 1850年（嘉永3年）

大暴風があり、続いて嘉永5年にも大風、大雨があり御開の土手（今の奈多団地と宇美線の間の道堤）が大破決壊し村内一面の海となる。

## 1853年（嘉永6年）

暴風雨に依り、貧窮のどん底につき落とされた奈多の窮状を見かねた、博多の三商こと、大山忠平（茶忠）、石橋七蔵（酒造業の鳥羽屋）、藤崎貞次（菊野屋）が銀主となり、奈多宝塚から塩浜の船通しの間、八百間の内海岸堤防の第1期工事に着手、4月15日に工事関係者800余人によって盛大な入場、鍬入式が行われた。

## 1858年（安政5年）

第1期工事が安政3年に完工したのに続いて、第2期工事の下和白海岸（二ノ開）までの550間の工事にかかり、延長1350間の大工事が完成した。



奈多新開堤防工事の手形

# 近代～現代

## 奈多の小字

明治以来長年に亘って親しまれた大字、小字だが、平成3年8月に町界町名が実施された。旧呼名の小字を紹介する。

- |           |            |   |          |
|-----------|------------|---|----------|
| 1. 番 追    | 一番地        | ～ | 二百四十八番地  |
| 2. 開      | 二百四十九番地    | ～ | 五百七十八番地  |
| 3. 前 田    | 五百七十九番地    | ～ | 六百八十一番地  |
| 4. 宮ノ下    | 六百八十二番地    | ～ | 九百九十三番地  |
| 5. 堂 岸    | 九百九十四番地    | ～ | 千百三十一番地  |
| 6. 魚祭 網   | 千百三十二番地    | ～ | 千二百三十三番地 |
| 7. 宮 山    | 千二百三十四番地   | ～ | 千二百四十二番地 |
| 8. 中裏付    | 千二百四十三番地   | ～ | 千二百九十七番地 |
| 9. 丸瀬山    | 千二百九十八の二番地 |   |          |
| 10. 小瀬抜白浜 | 千二百九十九番地   |   |          |
| 11. 白 浜   | 千三百番地      |   |          |
| 12. 小瀬抜   | 千三百一番地     | ～ | 千三百六十一番地 |
| 13. 雁 巢   | 千三百六十二番地   | ～ | 千四百二十八番地 |
| 14. 裏 付   | 千四百二十九番地   | ～ | 千七百六十三番地 |
| 15. 宝 塚   | 千七百六十四番地   | ～ | 千八百番地    |
| 16. 御 開   | 千八百一番地     | ～ | 二千二百 七番地 |
| 17. 新 開   | 二千二百八番地    | ～ | 二千五百九番地  |

浜地として別途二千五百十番地～二千五百十八番地がある。これは安政堤防完成後に奈多団地の大ゴセの中に新しく出来た畑地や、雁の巣レクリエーションセンター内海岸の一部が含まれている。

奈多の小字図



## 1872年（明治5年）

戸籍制度ができて人口調査が実施される。当時の和白白地区の戸数457戸 人口2,316人（現在の和白白、美和台、和白白東、奈多三苫の5校区）その頃の奈多村の戸数241戸、人口1,247人（男631人 女616人）

漁家数130戸

船舶数81隻（商船1隻、漁船62隻、小漁船8隻）

網 数193網（鯛網5、鰯網4、流網32、鯨網22、アゴマカセ16、ハツ網7、地引網4、夾網8、ヒラス網4、底網50、カナギ網38、鯨網3）



鯛網風景

## 1873年（明治6年）

米相場が急騰した為、筑前竹槍一揆が起こっている。この年は明治新政府が発行した大政官札と藩札とを引き換えさせる為、大蔵省は検査権助の中村義臣外2名を、佐賀、三潁、大分、小倉、福岡の5県を廻らせていた。一行がやっと任務を終え帰路につく時に、新政府の官員と云うことで、一揆勢に追われ最後は多々良河畔で遭難することになるのだが、この事について唐ノ原の夢野久作氏の処におられた紫村一重氏が「筑前竹槍一揆」の中で詳しく記されている。以下要点を抜すいすると、

「中村義臣一行が奈多に着いたのは、6月20日の夕暮れでしたが、やっと浦役所を探し当てて中に入ると、ひと騒ぎあった後とみえ、がらん洞になった役所の片隅に、2、3人の浦役人らしい人が、何かコソコソと話し合っていました。突然の見知らぬ来訪者に役人衆も驚きました。一行が身分をあかして『福岡返船を出して愜しい』と頼みましたが、役人衆は『今、村に居るのは女、子どもと年寄りばかりで、とても福岡までは...』と断られ、一行はすっかり困り果ててしまいました。途方にくれている三人を見かねて、今林清左衛門と、安河内又三の二人は、すぐ近くの木賃宿、西藤弥平さん方へ案内し、一夜の宿を頼むことにしました。すると宿の主人、西藤弥平さん（現在の武氏の曾祖父）は、それは難儀な事だと、快よく一行を迎え入れてくれたので、三人は久し振りにお湯にも入り、酒食のもてなしも受け、すっかり生気を取り戻し、何日振りかの床に身体を休めました。ところが間もなくあたりが騒がしくなり、竹槍で武装した一揆勢が鐘や太鼓を打ち鳴らしながら、『この奈多に警官が逃げ込んでいる筈だ、出さんと浦中を焼き払ってしまうぞ!』と、一軒一軒探し始めた。宿の主人は中村義臣一行に急を告げ、裏の松山へと逃がしてやりましたが、その二日後に下原で発見され、引廻された上、多々良河畔で一揆勢の犠牲となりました。中村義臣一行にとっては牟田方の西藤弥平さん方での夕食が最後の晩餐となりました」

この明治6年に、奈多の踊舞台を借用して、奈多下級小学校を開設する。（師匠は手習師匠の寺島勝臣氏）また、この年には、奈多浦と志賀間で長期に亘る漁業紛争が起る。

## 1875年（明治8年）

奈多、和白地区で菜種の栽培が始まる。

金持ちの家で菜種油を使つての、ランプの使用が始まるも、一般の家庭では、ローソクと行灯を使用。

『星を頂きて家を出で、月影を踏んで帰る。ようようにして足を滌ぎて、夕餉を取る。腰一ツ伸ばす間もなく夜業に従う。行燈とて多くは魚油を用い、座敷用は菜種油にして、又神佛にも点じた。勝手元は魚油を使うされど暗きこと言うべきもなし。男子の夜業するは、土間に松の根株の肥えた木を山より取り来たり之を焚く、然うして、沓作り、縄ない、筵づくり、女は米搗き、麦搗き、又は糸引き、衣寿きの業あり、その定めとして

男夜業	秋冬一季中	小縄、千尋 沓七十五足（一夜五足）
女夜業	秋冬一季中	一夜に米搗き一斗 麦荒搗、中搗、仕上のうちどれか一斗 または糸引十匁又は、篠巻綿半切』

## 1877年（明治10年）

西南戦争が起こり、奈多からは徳重喜作他数名が従軍した。鹿児島島の私学校を見て帰り、「子弟の教育には、独立した校舎でなければいけない」と、校舎の建築を呼びかけるが『学校より格好せれ』と言う老人が多く、実現せず。この頃から奈多諸の耕作が盛んとなる。

## 1878年（明治11年）

鰯の大漁に湧く。



昔の奈多の浜



昔の奈多の浜

## 1881年（明治14年）

奈多、和白地区にランプが普及する。

これまでは一般家庭は行灯、灯心、ローソクであった。

この頃、奈多外海岸に鯨が近づく。村中をあげて捕獲にかかるも鯨は網を破って逃げ、がっかりしていたが、その翌日、また鯨が近づいているとの浜見からの知らせで、今度はカズラ網を補強して村中総出で捕獲にかかり、遂に鯨捕獲に成功する。



### 1882年（明治15年）

鯨が獲れた益金を学校資金として寄附したので、福岡県は賞詞と銀盃を贈ったが、奈多の鯨学校といって、有名になった。正しくは「奈多小学簡易科」であるが、その時の福岡県の賞詞は次の通り。



鯨が捕れた時の福岡県の賞詞

### 1887年（明治20年）

出来町入口の藤尾船大工さんの横に奈多駐在所が開設される。初代は伊丹房雄巡査であった。

### 1889年（明治22年）

2月 大日本帝国憲法が発布。

4月 上和白村、下和白村、塩浜村、三苦村、奈多村の5か村が合併し、和白村が発足する。

上和白村	64戸	336人
下和白村	49戸	262人
塩浜村	35戸	188人
三苦村	92戸	490人
奈多村	262戸	1,363人
合計	502戸	2,639人

この年から、奈多、和白地区の綿花栽培が減少した。

1892年（明治25年）

奈多外海岸の石積み波止工事に着工。この年の早魃で米1升が10銭となる。また、この年は博多の川上音次郎のオッペケペーが流行する。



奈多村時代の地券

1893年（明治26年）

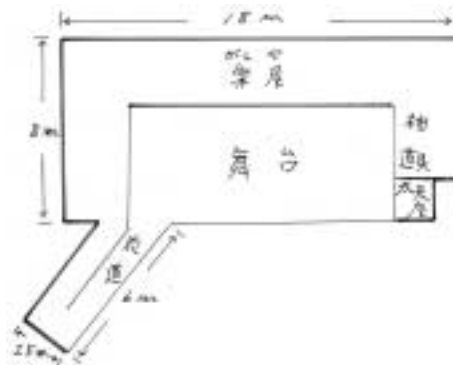
この年の春の青柳高等小学校（糟屋郡北部の各村の通学区）卒業生は男16人、女2人でこの和白村からは古枡屋の浜崎宗之助さん一人であったとのこと。

1895年（明治28年）

奈多宮山の志式神社前に糟屋郡猪野より野舞台を移設。この舞台は廻り舞台となっていて、舞台を廻す時は青年が床下に入って、長い棒を肩にしてロクロを廻した。現在は固定されている。



奈多の志式座



### 1898年（明治31年）

奈多白浜で福岡連隊の実弾射撃演習が行われた。

### 1899年（明治32年）

明治25年に着工した、外海岸の波止工事百間が竣工する。

### 1900年（明治33年）

学校制度が変わり、和白二反田に和白高等小学校が建つ。（通学区は和白、香椎、新宮、立花の5カ村）

### 1901年（明治34年）

奈多くんちの神楽奉納が宇美神楽に変わる。前年迄は郡内の神官が奉納。



奈多おくんち神楽「<sup>えびす</sup>蛭子舞」

### 1902年（明治35年）

5月、奈多～土井間、12月に奈多～西戸崎の鉄道工事に着工、明治37年1月に奈多駅（現在の雁の巣町内公民館前）、12月には和白駅も開設される。明治38年には宇美迄開通し博多湾鉄道時代となる。尚、奈多～西戸崎間の汽車賃が8銭、奈多～香椎間は7銭であった。

### 1903年（明治36年）

小学校が1村1校制となり、塩浜古川（現在地）に和白尋常小学校が建つ。  
12月に奈多前方の今林儀蔵氏方に奈多郵便受取所が開設される。

### 1909年（明治42年）

奈多、和白地区で養蚕業が始まる。

熊本専売局長、浜口雄幸（のちの首相）塩浜の塩田を視察来村。

## 1910年（明治43年）

9月に入り、塩が専売制度となり、塩浜の塩田が廃止される。

博多湾鉄道所有の奈多宝塚の松林を、別荘地として坪50銭で売り出す。

奈多外海岸に防風保安林として6年継続の植林が始まる。

## 1912年（明治45年）

和白尋常小学校に高等科を併置、和白尋常高等小学校となる。

## 1913年（大正2年）

3月13日、奈多大火災が発生。304戸中、152戸が焼失、損害約20万円と報ぜられた。このあと、奈多再建の為、唐原村内にある奈多村の分村である片男佐（現在の香住丘）の共有山林を博多湾鉄道の太田清蔵氏や荒津長七氏に売却し、奈多の各戸に100円を配分して再建にあてられた。

片男佐山林分付	
今林半五郎	100
今林惣次郎	100
今林次郎	100
今林庄助	100
今林清蔵	100
今林長七	100
今林文吉	100
今林吉吉	100
今林輝七	100
今林正吉	100
今林宗助	100

片男佐を売却した時の控帳

## 1914年（大正3年）

奈多、和白地区に電燈がつき始める。

## 1915年（大正4年）

奈多、和白地区の養蚕業が60戸を越え、景気上昇する。

## 1916年（大正5年）

奈多消防組（和白村第1部）が組織される。初代組頭 今林半五郎氏、小頭 今林惣次郎氏、浜崎百松氏であった。

### 1917年（大正6年）

和白海岸に許斐硝子工場が建ち、1升瓶、ラムネ瓶を製造する。  
奈多郵便受取所が、和白郵便局と改称される。

### 1919年（大正8年）

志式神社の神殿、拝殿、社務所が新築着工。盛大に御遷宮が行われる。  
この年、名島に九州電力名島発電所ができる。

### 1920年（大正9年）

第1回国勢調査が行われる。和白村人口（現在の5校区）は3,122人であった。因みに香椎村は2,548人。筑前新宮駅が開設された年でもある。

### 1921年（大正10年）

5月から和白～新博多間の鉄道工事が始まる。（現在の貝塚線）

和白の許斐硝子工場従業員と、奈多青年との間に争が起こり、半鐘が打ち鳴らされ流血騒動となる。

奈多字中裏付に長命研究所（ソーエラン）が建つ。九大の宮入博士の発明された駆虫薬で、東京警視庁が「日本一」の折紙をつけたので一躍有名になったが、後に第二次大戦の戦況悪化により、台湾からの主原料である海人草の入荷がストップしたので、遂に昭和18年に閉鎖された。

### 1923年（大正12年）

奈多宝塚に海水浴場が開場する。

和白～宮地嶽の鉄道工事着工（現在の津屋崎線）。この工事で三苦託乗寺裏側の切り割り工事で事故が発生し、当時いろんな噂が流れた。



宝塚海水浴場

## 1925年（大正14年）

奈多の江切（いな取り）の最盛期で、志免の海軍炭坑の抗夫さん達で賑わった。  
東京愛宕山からのNHKラジオ放送が始まり、博多にデパートの第1号玉屋が建つ。  
第2回国勢調査では、和白村（現在の4校区）人口3,523人であった。  
奈多に味噌干し加工が始まり、牟田方の茂平鯨が白浜に打寄せられて歌が出来たという。

## 1928年（昭和3年）

昭和天皇即位の大典。奈多4町内会では町内毎に花車を造り、町民総出で和白村内を巡回し、大盛況だったとのこと（どんたく隊）

## 1929年（昭和4年）

宮地嶽線が汽車から電車に切り替えられる。  
和白～志賀島間の新県道工事に着工。竣工は昭和11年11月であった。

## 1931年（昭和6年）

和白村役場に専用電話がつく。「和白1番」の木札も現存している。現在では和白公民館に606 - 3001番として引き継がれている。

## 1933年（昭和8年）

女子訓育院の敷地を和白村が寄附。その後、愛国女子学院となり、昭和21年から和白青松園として今日に至っている。

和白郵便局で電話交換業務を開始する。村内の加入台数8台。

## 1934年（昭和9年）

福岡陸上飛行場の建設用地が雁の巣に決定する。  
和白村役場庁舎を改築。予算額3,830円也。

## 1935年（昭和10年）

1月7日、雁の巣飛行場建設起工式。

## 1936年（昭和11年）

6月6日、頼母木通信大臣臨席のもと、福岡陸上飛行場の開場式が挙行された。  
和白～雁の巣間の舗装工事が終わる。

宇美～西戸崎線の奈多駅を廃止し、奈多中裏付に雁の巣駅を新設。奈多東口駅ができる。



雁ノ巣飛行場



雁ノ巣飛行場

### 1937年（昭和12年）

支那事変における和白村内の、この年の戦死者3名。

### 1938年（昭和13年）

3月、女子訓育院は愛国女子学院となる。

この年も支那事変の戦死者3名。

### 1940年（昭和15年）

塩浜の「カネン手」に、渡辺鉄工所の試験飛行場が開設される。

雁の巣の山田マキ女史より、和白尋常高等小学校へ電話「和白局22番」が寄贈される。

この年の航空運賃、雁



試験飛行場の塩浜すべり

の巣～大阪30円 雁の巣～東京55円であったとの事。

支那事変の戦死者3名。

### 1941年（昭和16年）

小学校が、国民学校と改称される。

紀元2600年事業として、雁の巣飛行場が30万坪拡張され国際空港となる。

12月8日、大東亜戦争（第二次世界大戦）に突入。この年の戦死者3名。

### 1942年（昭和17年）

村内の戦死者7名となる。

### 1943年（昭和18年）

ビルマのパーモ長官、雁の巣に飛来し大歓迎を受ける。

村内の戦死者14名となる。

### 1944年（昭和19年）

博多湾鉄道が国鉄に編入され、奈多東口駅が廃止される。

村内戦死者が59名と増大、戦局危うくなる。

### 1945年（昭和20年）

郷土防衛の為の赤城隊が、和白村内に駐屯する。

雁の巣飛行場が空襲を受け、奈多の民家も16mm機関砲の銃撃を受ける。

5月に席田飛行場が開場する。

8月15日無条件降伏。雁の巣飛行場は米軍が接收、日航の幼年工宿舎（現在の雁の巣病院）も米軍人の宿舎として接收される。

第6回国勢調査、和白村人口6,063人（現在の和白地区5校区）

この年の戦死者57名。



B 29が来襲し爆弾を投下する



## 1946年（昭和21年）

愛国女子学院は和白青松園となる。

戦死者5名が確認発表される。

## 1947年（昭和22年）

戦後教育基本法が改正される。6,3,3制に伴う市町村自治体の義務教育施行により、4月に海軍送信所跡地に町立和白中学校が開校する。



和白中学校

## 1948年（昭和23年）

和白中学の鉄筋講堂で第一回の成人式が行われる。

上和白（現在のゴルフ場附近）へ台湾引き揚げの田中重雄さん他が入植される。

5月に、第1回村民野球大会を開催、ステテコチームやドンゴロスのグローブで15チームが参加する。

## 1949年（昭和24年）

昭和天皇、和白青松園に海外引揚げ幼児を慰問され、村中をあげて奉迎する。

御歌

よるべなき幼児どもも

うれしげに

遊ぶ声きこゆ

松の木の間に

高浜の丘に戦没者慰霊塔（平和塔）が建ち  
祭典が行われる。



昭和天皇、青松園を慰問される

### 1950年（昭和25年）

新開築堤記念碑（木柱）が建ち、孫の大山忠平翁来村。

米軍関係の女性で、自主的グループとして「ホワイト リリークラブ」が発足する。

第7回国勢調査、和白村人口6,872人と発表される。



新開築堤記念碑と大山忠平翁

### 1951年（昭和26年）

高浜の松林の緑の中に奈多愛育園が建つ、園長はヘレン・ハーダー宣教師。

奈多で、2軒の漁家が海苔養殖を始める。

カナギ網漁、減り始める。

### 1952年（昭和27年）

奈多4町内公民館（今林久二総区長）が住民の勤労奉仕と募金によって建つ（現在の奈多中央公民館）。



奈多中央公民館

朝鮮動乱に伴う米軍輸送基地として、雁の巣福岡空港に米軍航空隊が駐留。駐留軍との対応調和のため雁の巣駐在所、粕屋保健所が建つ。

### 1953年（昭和28年）

6月の大雨で村内大洪水となる。「28水害」と指定された大洪水は、奈多地域内でも住

宅が浸水。公民館前から海面の様に満水で、塩浜、和臼まで完全に水に覆われた。鉄道と堤防（沖の土堤）まで、表面が所々みえるだけの光景は、太古年代の塩浜、三苦水道時代を思わせた。奈多集落には、裏山からの汚水が麓の家々に流入し、家財の保全に大わらわの様で、殊に高浜の山ノ上の集落は完全に床上浸水し、池の中浮家の状態であった。和臼青松園裏山一体も大池の様で、排水路もないため高浜地域前道路を掘削して排水する外なしと、消防団総動員で排水対策をおこなった。消防団は他の地でも浸水家屋に対する救助活動等により、人的被害もなく対応された様である。

西日本新聞社後援で、和臼海水浴場が開場する。

県道志賀島線の舗装工事が完了する。

### 1954年（昭和29年）

福岡高等無線学校（福岡工業大学の前身）、下和臼炭坑跡で地鎮祭。創立者桑原玉市氏。雁巣に村営住宅10戸落成。

9月に米軍の雁巣基地で第315空輸部隊の航空ショーが開かれる。

奈多の海苔養殖漁家9戸となる。

11月、和臼小学校体育館講堂（未完）で町制施行式典が施行される。

### 1955年（昭和30年）

1月、和臼剣道会発足。

4月、上和臼二反田の笠村氏方の一部を借り受けて和臼幼稚園開園。初代園長、堺 謙太郎氏。

10月、第8回国勢調査、和臼町人口7,985人と発表される。

### 1956年（昭和31年）

テレビ放送が始まり、和臼町内で7世帯がテレビを購入したとのこと。

奈多海岸一帯、玄海国定公園の指定を受ける。

和臼町、国の財政再建団体の指定を受ける。

当時の和臼町助役 今林久二氏の努力により奈多漁港改築5ヵ年計画（工費7千万円）に着工。補助事業として発足し、今日に継続されている。



奈多漁港を望む

## 1957年（昭和32年）

3月、和白沖の畑に新開町営住宅が建つ。

4月、明林高校（立花高校の前身）が開校する。

11月、NHKラジオ「早起きどり」の全国放送で「奈多の早魚」について、浜崎宗之助氏、今林松美氏の二人が取材に協力、説明する。（取材は郷土史家の梅林新市氏）

この秋から一部農家で動力耕運機の使用が始まる。

## 1958年（昭和33年）

1月、和白体育協会発足、初代会長に吉浦弥太郎氏（町議会議長）就任。



体育協会主催 相撲大会、マラソン大会

## 1959年（昭和34年）

1月、朝日国際マラソン（平和台～雁の巣折り返し）始まる。

和白幼稚園雁巣分園が開園。

11月、志式神社境内で海苔養殖の為の「女相撲大会」。行司は今林松美氏。

## 1960年（昭和35年）

8月、奈多駅開設。郷土出身のミス・ユニバース日本代表の古野弥生さんから運転手に花束贈呈。このあと古野さんを囲む会を開く。

8月27日、和白町、福岡市へ合併。明治22年以來の村・町の歴史をとじる。福岡市和白出張所開設。初代出張所長 今林久二氏他職員10名。

9月1日、福岡市合併に伴い、出来町を高浜町、和白駅前を和白と改称。

10月1日、第9回国勢調査、和白校区人口8,601人となる。

## 1961年（昭和36年）

奈多の海苔養殖漁家百戸を超える。

「奈多早魚神事」、福岡県無形文化財の指定を受ける。

国道3号線和白三叉路付近から奈多方面へかけての工場・事業所の建設が進む。

## 1963年（昭和38年）

和白地区の電話架設台数260台となる。

## 1964年（昭和39年）

福岡電波学園高校が西戸崎より現在地へ移転。

博多老人ホーム、高宮より三苦黒山へ移設される。当時は老人ホーム社会福祉施設等の老人収容施設は「うば捨て」場の感があり、博多老人ホームの開設でも、田中順海所長は地元町内会の了承協力の必要を求められ、再三の協議で承諾を得て国有林を払い下げ建設された。

9月、東京オリンピック聖火リレーに和白スポーツ少年団の柔道、剣道、なぎなたから16名が参加する。



東京オリンピック聖火リレーのメンバー

## 1965年（昭和40年）

7月、全国スポーツ少年団リーダー研修会が本栖湖の研修センターで開催され、和白スポーツ少年団より柔道 三角俊一、剣道 堺 学、薙刀 今林美枝子の3名が推薦されて参加する。

10月、第10回国勢調査で和白校区人口10,953人と、初めて1万人を超える。

福岡航空管制所が中裏付（通称 鯨山）に開所する。

## 1967年（昭和42年）

11月、雁巣飛行場跡の米軍基地返還町民決起大会を開く。

## 1969年（昭和44年）

和白地区の電話架設台数、千台を突破する。

## 1970年（昭和45年）

2月、NHK「ふるさとの歌まつり」(九電体育館)に奈多の早魚神事を特別公開する。

4月～6月、市文化課は下和白4ヶ浦遺蹟調査に続いて6月から高見の調査にかかる。

6月、和白館区内の老人クラブ連合会結成。

10月、雁の巣米軍基地の一部使用が許可され、雁の巣レクリエーションセンター施設の建設が始まる。

第11回国勢調査、和白地区人口13,139人となる。

## 1971年（昭和46年）

4月、和白出張所が連絡所に縮小された。志賀町が福岡市に合併され、博多湾に隣接する旧粕屋の箱崎、多々良、香椎、和白、志賀各町村はすべて福岡市となる

## 1972年（昭和47年）

雁の巣米軍基地の施設が撤去され、日本への返還終る。

旧和白町役場庁舎が解体される。跡地には福岡市東消防署和白出張所が設置され、福岡市和白出張所を併設。

福岡市立雁の巣児童体育館建設。基地周辺児童健全育成施設として開館。



雁ノ巣児童体育館

## 1973年（昭和48年）

1月、海の中道海浜公園計画が発表される。

2月、下和白ニュータウン（美和台）の申込入居が開始される。

4月、奈多創生園が開園。地元関係との再三の交渉により老人福祉施設市東部第1号として国有林払い下げにより開設された。

12月、和白小学校100周年記念式典が行われる。

### 1974年（昭和49年）

2月、高美台団地の分譲始まる。（3LDK、700万円で120戸）

4月、美和台小学校開校。

6月、和白に福岡朝鮮初中級学校が竣工する。

11月、西方町内公民館が落成する。

### 1975年（昭和50年）

1月、福岡市和白下水処理場（奈多新開）開設、稼動開始。福岡市東部の住環境開発整備のため、水処理施設の開設を海面に近い奈多新開に選定。地元自治会、並びに関係者に計画説明開催。数回繰り返すと共に他都市の施設視察、見学等により地元代表者等の説得と、地域将来も考慮して地元の了承と地主関係の協力のもとに昭和47年9月起工、49年10月竣工。50年1月開設稼動し、其後施設が充促整備され処理区域の拡大と整備がなされて来た。

第12回国勢調査で和白、奈多地区人口10,265人、美和台9,790人、和白東5,711人、計25,766人となる。

### 1976年（昭和51年）

和白東小学校が開校。（生徒数727人）

### 1977年（昭和52年）

3月、奈多団地東側第1、第2棟入居開始。奈多団地開発は、下水処理場開設地の隣地に連続地域で汚物処理施設があることの嫌悪を予測して、市の開発要望による市住宅供給公社中高層分譲住宅の開発計画により、用地買収、宅地造成がなされていた。建築工事起工は昭和50年5月。

福岡航空管制部が小瀬抜へ移設される。

美和台公民館が開館する。



奈多団地造成前の風景

### 1978年（昭和53年）

4月、19年毎の志式神社御遷座祭が盛大に行われる。

5月、和白体育協会20周年式典が行われる。和白東公民館が開館する。

### 1979年（昭和54年）

サニー奈多店が開店、奈多フレンドも開店する。（奈多団地内）

従来、市外通話扱いであった電話が市内通話扱いとなる。局番606-0000。

### 1980年（昭和55年）

4月 和白丘中学校が開校する。

10月 第13回国勢調査で和白校区15,89人、美和台校区10,631人、和白東校区10,016人、計35,736人となる。

### 1981年（昭和56年）

4月、奈多小学校が開校する。

奈多団地10,088戸が完成する。

奈多校区自治連合会、奈多校区体育協会が和白校区から分離、発足する。

奈多漁業共同組合、博多湾北部海域漁業権補償交渉で福岡市と妥結（海苔）

10月、国営海の中道海浜公園が開園する。



## 1982年（昭和57年）

10月、奈多海苔養殖漁業終る。

## 1985年（昭和60年）

5月、福岡市奈多公民館が開館する。初代館長 今林松美、主事 今林武光、管理人 迫がある、補助要員 今林ミチ子、今林瑛子の皆さんでスタートする。

10月、第14回国勢調査、世帯数2,620、人口9,767人。



福岡市 奈多公民館開館



## 1988年（昭和63年）

3月、中央区高宮より筑紫少女苑が雁巣の小瀬抜に移設される。

## 1989年（昭和64年、平成元年）

3月、三苦～雁の巣間のパークウェイが開通する。

海の中道に水族館が開館し、イルカショーが始まる。

10月、雁の巣レクリエーションセンター内に、ダイエーホークス2軍の球場が開場する。

## 1990年（平成2年）

奈多小学校創立10周年記念式典が挙行される。

10月、第15回国勢調査、奈多校区世帯数2,899 人口10,461人（男4,879人、女5,582人）



奈多小学校

**1991年（平成3年）**

11月、奈多校区自治連合会、奈多校区体育協会が創立10周年記念式典を挙げる。

**1992年（平成4年）**

7月、雁巣レクレーションセンター内に福岡市少年野球場が開設される。

**1994年（平成6年）**

異常湧水で時間給水続く。

**1995年（平成7年）**

6月、奈多公民館開館10周年を祝う会を挙げる。

語り部として直接お話をお聞きした人々

稲光 種麿氏（明治10年生～昭和36年没）志式神社宮司

浜崎宗之助氏（明治11年生～昭和33年没）古枅屋、元和白村長

今林 信雄氏（明治?年生～平成2年没） 奈多漁業について

井田 さだ氏（明治32年生～昭和58年没）大網祖父の話

今林 久二氏（明治42年生～平成13年没）元福岡市議会副議長 元奈多公民館運審委員長

参考文献

和白文化研究会「わじろ」（末信源蔵氏）

糟屋郡誌（大正13年 粕屋郡役所）

筑豊沿海誌（大正6年 筑豊水産組合）

立花口史（立花口郷土史会）

筑前史料 書（昭和53年刊）

日本歴史年表（昭和45年版）

奈多歴史年表（今林松美編）

肥筑豊州誌（昭和46年刊）

筑前戦国史（吉永正春氏）

筑前竹槍一揆（紫村一重氏）

奈多大網古文書（今林章男氏蔵）

筑紫史談（大正年間刊）

海の中道の女（長谷川伸氏）

N H K 報告資料（梅林新市氏）

福岡県神社史（大日本神祇会 昭和19年刊）

福岡市漁村史

---

---

# 資料編

## 和白塩・石像物

---

---



当時の塩田（前方は博多湾）

## 藻塩焼く製塩時代

- (1) 志賀の海人の塩焼く煙風をいたみ 立ちのはのぼらず山にたなびく
- (2) 志賀の海人の一日もおかず焼く塩の からき恋をも我はするかも
- (3) 志賀の海のけぶり焼きたててやく塩の からき恋をも我もするかも
- (4) 志賀の海人の塩焼衣なれぬれど 恋とふものは忘れかねつも
- (5) 志賀の海女は藻かり塩焼き暇なみ けぶりの小櫛取りも見なくに
- (6) 志賀の海女の磯に刈りほす勿告藻の 名は告りてしを何か違い難き

以上は萬葉集に歌われた「志賀の海人」の歌である。(3)(5)は岩波写真文庫【塩の話】の中で、「この二首は石川朝臣君子の作と言われ、大変有名で当時から広く愛誦されていた様です。しかも当の石川朝臣は筑紫には一度も下って来た事はない様ですから、此等の歌は奈良の都で作られたものに違いありません。志賀の海人や、塩焼きは当時非常に有名で、恋歌等の枕言葉として使われていたのも、又当然であると考えられます」

昔の歌に歌われた『志賀の海人』は、今日でいう志賀島の志賀だけに止まらず、海の中道から奈多、和臼、香椎、多々良と続く博多湾岸一帯を指していると一般に解されている。

歌に出てくる「焼く塩」とは、どんな製塩法だったのであろうか。一般的には、海藻に海水をそそいで乾かし、その藻を焼いた塩灰を更に海水にとかし、塩分の強い海水を作り、それを煮つめて塩を作ったといわれている。これに対して九州大学の或る塩研究家は、藻塩焼くというのは次のが本当だと説明されている。

「当時は製塩用専門の土器があった。高さ20cm～30cmのトロフィ型の土器で、据える台の方が円く引っこんだ凹んでいるのが特長。雁ノ巣から出土する土器が此に似ていると聞くから、私は雁ノ巣土器は志賀の海人が焼いた製塩用土器ではないかと考えている。又、当時塩焼きの最良の燃料は松ヤニの出る松で、これを焼くと炎は1m位も燃え上がる。それに製塩用土器の高さはせいぜい30cmぐらい。これでは火がもったいないので、その火をおさえて効率を高める為に、海藻をその土器の上に覆いかけていたのである。灰にして濃度を高めた等とは信じられない。太宰府時代には製塩用土器時代は既に過ぎ、石釜時代(平たい底の浅い能古石製の残っている)に入っていたのではなかろうか。萬葉和歌に『一日もおかず焼く塩...』とあるが、土器だったら一日もおかず焼く必要はあるまい。石釜だったら石を冷却させぬために一日も塩焚きを休めなかった...と考える方が理に合っている」

この雁ノ巣土器は、雁ノ巣で製塩が行われたというのではなく、製塩用土器が雁ノ巣から出土していたという意味である。又この雁ノ巣の出土土器については、実際にそこで土器が製作されていたとか、いや此処で志賀大神を祭る祭儀が昔行われていて、その際使用された祭儀用土器が放置されていた等の説があり、九次の先生の説もそれら諸説の一つと

考えられる。

### 1. 三苦遺跡群

「今回発掘した古代の集落跡の内容を振り返ってみよう。2間×2間の総柱建物は倉庫跡、生産遺構は工房跡と推定できる。性格は不明だが掘立柱建物やその他の柱穴も古代人の活動の場であったに違いない。製塩土器の出土は、集落内の土器製塩と結びつけられるのだろうか。このように集落の施設をあげると、海に生業を求めた人々の姿が垣間見られるようだ。だがこれは単に漁村的な集団というよりも採集と加工が制度的に組込まれたように思えてならない。臆測をお許しいただければ、海産物を塩で加工し倉庫に保管する。鍛冶工房で採集具を製作し、管理も行われていた。このように考えると、鴻臚館の時代に述べられた「贄」としての生鮮食品を貢納していた「厨戸」のイメージと重なるものがある。いまは一つの意見を提起するに止まるが、今後周辺域の開発と引替に考古学情報の増加が予想される」(以上、発掘指導の福岡市文化課の報告書より。)

実は後述の通り、この遺跡の直下は三苦水道と称し、弥生時代は博多湾と玄界灘の海水が互いに満ち引きしていた。

### 2. 奈多、雁ノ巣砂丘遺跡

弥生後期の土器片をはさむ「雁ノ巣砂丘遺跡」「奈多砂丘遺跡」は、海の中道遺跡から東へ約5km、荒波に洗われた砂丘の断崖面に黒ずんだ遺物の色含層がむき出しに見えることから証明できる。(「福岡の古代を掘る」の朝日新聞社編より)

### 3. 梅ヶ崎山遺跡

昭和59年、協栄年金ホームが梅ヶ崎山に建設される際の整地作業中に発見されたもので、その時出土した製塩用土器は同年金ホームに展示されている。

### 4. 海の中道遺跡調査

博多湾北海岸に点在した塩焼く煙の代表は、平成2年9月から朝日新聞社と海の中道遺跡発掘調査実行委員会が進めてきた『海の中道遺跡』の発掘で表面に出てきた製塩跡である。朝日新聞に発表された調査報告から抜粋すると、

『遺跡は奈良・平安時代、くわしくは8世紀後半から11世紀中頃まで、およそ参百年の間続いた大規模な専業漁村である。1979年から81年までの建設省の委託による発掘から数えて、今回で4回目である。遺跡の規模は海岸沿いに長さ四百米に及ぶ広大なものである。釣針、魚網用のおもり、製塩土器、製塩用の炉等々の古代製塩技術の復元について、

かなりの成果が上がった。』

「萬葉集」に「藻塩焼く」と歌われた製塩法、即ち海藻を焼いた灰を海水に溶かして濃度の高い海水を作り、その上澄みを煮詰めるという製塩法が果たして実際に行われたのか、考古学者はこれまで懐疑的であったが、愛知県松崎貝塚からウズマキゴカイなど、海藻に付着する生物の灰が多量に発見されたのに続き、海の中道でも同様な発見があったので、古代に「藻塩焼製塩法」が広く行われていた事は確実となった。又、海の中道では、塩を煮詰める容器として、土器のかわりに滑石製石鍋を使った時期のあることも分かってきた。



さらに朝日新聞社が発表した報告書の中に「萬葉集にその光景が詠まれながら考古学会では異端視されてきた、海藻を焼いて塩を作り『藻塩焼き』が古代に実際に行われていた事を示す遺物も、貝塚から大量に出土している。そこで発掘現場そばで海藻くずや燃料の



朝日新聞「福岡の古代を掘る」より

マツボックリを拾い集めるなど、昔の製塩状況を再現し、『古代の塩づくり』に挑戦し、見事に成功した。同委員会は、九州での塩づくりは古墳時代前期からとされてきたのを、約600年も逆上って弥生時代前期から始めていたと推定し、古代製塩史に新たなページを書き加えた...云々」

## 黒田藩政以前

奈多の『塩売弥太郎』物語

奈多に「塩売弥太郎」の話が残されている。

立花城主 大友道載（鑑載か？）はその最愛の妻 桂子をなくし、憂々たる日々を送っていました。或る日、家臣の鞘形市郎次が不思議なことに、亡くなった奥方 桂子と顔形ち、

年令もそっくりで、名前も桂という美人妻が奈多に居る事を発見した。これが塩売り弥太郎の妻だった。驚いた鞆形は早速この事を城主に報告した。

数日後、弥太郎の妻は忽然と姿を消した。狂ったようになった弥太郎が、また何日かたった後、もとのように籠を荷負って塩売りに行く姿が見られるようになった。新宮の下府、上府、立花の村々に「塩っぼう、塩っぼう…」と、弥太郎の声が流れていたが、実際は懸命に居なくなった妻の姿を追い求めているのだった。

そうした或る日、宗像大宮司の家来 鳥羽助四郎が弥太郎を尋ねて来て、「私は宗像大宮司氏貞の家臣、主命で立花城に密偵として潜入中、敵に発見され危ういところをあなたの妻君に救われた。あなたの妻君は今、立花城におられます…」と聞かされる。

弥太郎は一時宗像方に身を隠し、立花城主の奈多海岸での宴会の機会をねらい、宗像勢の協力を得て、ようやく妻を奪い返すが、桂は『心は汚れておりませぬ。然し体がけがれております、どうか御許しを！』と走り行く舟の中から玄海灘に飛び込んで死ぬ…。

この物語は今から450年位前の話だが、当時和白の浜辺で焚かれた塩がかなりあったことを物語っている。

すでに「藻塩焼く」の時代ではなく、石と泥土で作った竈で鉄鍋に海水を入れて焚いていたものと思われる。こうした製塩の遺跡が「焼け石」や「焼け土」として残っている。以下の場所では戦後しばらくまで焼け石が見られた。(旧「字名」、藩政以後のものも含む)

上和白地区………汐入、浜久保、古賀堀、浜田、唐尾

下和白地区………田開、蒲池開、唐尾、古塩浜

三苦地区………西浜、塩田、東浜、光畝町

奈多・塩浜地区…塩取浜、一の開、二の開

## 黒田藩政以後

黒田藩政時代になると製塩法も大分進歩し、海岸の一部を堤防でせき止め、内側に海水を導入、それを井戸式の溝にため、蒸発させて濃塩水を作る方法から、広い塩田いっぱいには砂をまいたりかき集めたりして濃い塩水を作る、所謂『揚浜式塩田』へと改良大規模化されてゆく。

### 上和白地区の塩田

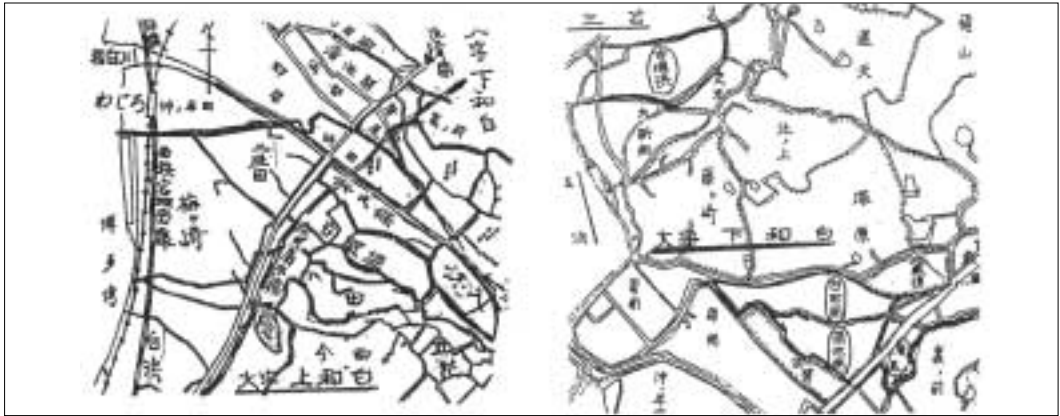
上和白地区内でも製塩業が行われていたらしく、和白川の河口から約700m、JR鹿児島本線を越えたあたりから上流、川の周辺に「浜田、浜久保、古賀堀、汐入」の水田内に多数、塩釜に使われた焼石を発見することができる。

### 下和白地区の塩田

和白ヶ丘町内の(古田開、蒲池開、唐尾)相ノ浦集落附近(和白六丁目)の(古塩浜)



地区は、奈多浜の築堤による大規模塩田工事着工のころまでは、製塩が続けられていたものと考えられる。



元禄初年ごろの上和白・下和白村の塩田跡

### 三苦地区の塩田

『続風土記』によると、黒田長政が粕屋、志摩、早良の諸郡に塩田を開くとあり、その時の塩田として三苦、湊、浦、泊、太郎丸、桑原、元岡、野北、芥屋、姫島、馬場、青木、姪ノ浜が挙げられている。更に、黒田長政公入国以来、約130年「寛保元年（1741年）三苦村干潟に土手を築き、新田を作することを許可す」の文書がある。塩田変じて田畑となりつつあることがわかる。

## 元禄築堤による塩田

### 大野忠左エ門貞勝の築堤

元禄築堤と称しているのは、今日JR香椎線に沿ってその南側を走っている道路で、通称「沖の土堤」と呼んでいる。この元禄築堤の考案施工の責任者が大野忠左エ門貞勝である。

この工事はすべて公費を以てし、村民に苦役を課せず、故に遠近より人夫多く集り、たちまちにして成就した。

元禄2年（1689年）、永年浦奉行として懈怠なく勤めた大野



元禄築堤（1703年）後の塩田・新田絵図

忠左衛門貞勝は、更にその手腕を認められ、藩の財政を司る裏伴役に抜擢され、元禄16年(1703年)裏糟屋郡奈多浜の干潟を開拓して塩田並びに田畑にした。この塩田の守護神として、宝永3年(1706年)海浜に龍王の祠を建てて海神を祀った。5年後の宝永8年、元禄築堤による製塩の成功を感謝し、龍王祠に「六歌仙」を奉納した。この六歌仙は今も四社神社に大切に保管されているが、それには次のように誌されている。

讃 日野中納言資茂卿

尽 衣笠守 守高

宝永八年卯年卯月吉日 前権職 大野氏 貞勝

『福岡藩郡役所記録』宝永元年2月6日(1704年)

『裏粕屋郡和白潟後の新田 塩浜を田に振替え申し付けた反別を決め候事

裏粕屋郡和白潟塩役所後の新田 今後塩浜を振り替えて開に仕り度い由 大野忠左衛門  
詮議の上申し聞き候

右一作地床不定に付き 年々秋反別に候 凡そ三ヶ年の反別相極候処 六升余に相当り  
候 今後塩浜に申付に依り定め反別相究め候

畝数反別覚。

一、田数 貳町六反壹畝貳歩 下和白村御支配。

一、田数 貳町六反九畝四歩 三苦村御支配。

定反別 壹斗代

合田数五町三反六歩

徳米五石四斗六升二合 口に芳二

右之通相極め 徳米年々塩方より御郡方へ相納め 一作米の御年貢に上納仕る可き事』

大野貞勝は元禄築堤による塩田工事を進めると共に、このために製塩不可能になった下  
和白、三苦地区の塩田を農耕田へと改作事業も併行して実施した。

塩浜集落の誕生

「福岡県地理全誌」に『福岡藩の権臣大野忠左衛門貞勝 下和白 三苦両村の海浜に廣  
き斤地ありしを 藩財を用いて海浜三十町歩を開く 後年改めて新田となす 因りて一村  
を立て塩浜と名付く』とあり、宝永元年(1704年)には塩浜集落が誕生した。

また、久保田市右衛門氏(故人)は次のように話しておられた。

「塩取りを研究されていた久保田兄弟が塩質の良い博多湾を選び、日当たりの良い場所  
に住居を一軒構えました。しかし、そこは夏は南風が激しく塩焚きには向かない、仕方な  
く少々遠いが唐尾に塩焚き小舎を建てられました」

塩焚きを決意した久保田兄弟は、唐尾に小屋を建て製塩を始めた。そのうち「大砲道」  
(塩浜～和白小学校前道路)が1658年に1～2年かけての大工事で完成した。その道路用

土砂が勝ヶ崎南端の崖を潰して採土され、かなりの平地が出来た。その渚の景勝の平地を整地して久保田兄弟の家が二軒できた。1660年頃のことであった。

久保田與三左衛門

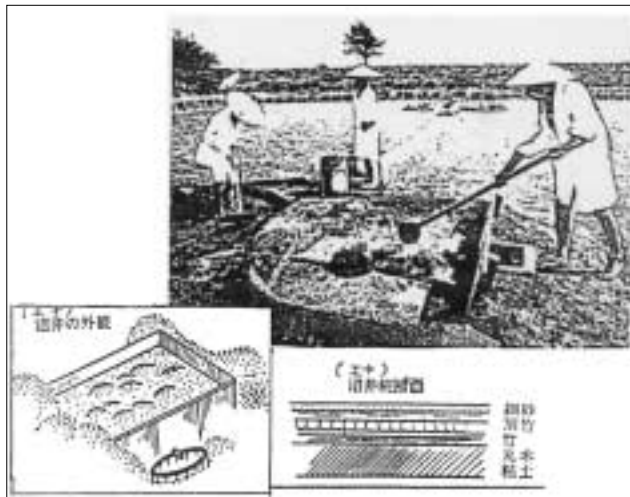
塩浜民話「與三兵衛はドンギラギン」の主人公、與三左衛門（通称與惣兵衛）さんは、元禄9年（1696年）に死去、丁度そのころ奈多浜の元禄築堤の大工事とそれに伴う堤防内側干拓の大作業が、各地から多勢の人夫を集めて進行中であった。元禄堤防用の土砂も勝ヶ崎の海岸の崖の土砂が使われた。既に久保田兄弟の住居が建てられていたが、久保田秀男氏邸の庭の井戸は水清く水量も豊富だったので、この井戸を中心に多勢の人夫達の小屋もでき、現在の塩浜集落の基盤が作られていった。

この塩取浜での製塩を末信留吉氏（故人）は明治初期の思い出として次のように話しておられた。

「塩取浜の塩田は、塩田の中に直径2間（約4m）ぐらいの丸い井戸が掘ってあり、エナと呼んでいた。その周囲に引いてある溝から潮水がエナに溜まる。このエナの海水を桶



与三兵衛氏墓標



にくみ上げて、肩にになって塩田一面に撒水していた。この塩取浜の塩汲みは中々の重労働だった云々...」

お話のように、この絵図ではエナ（沼井）は丸い井戸状ではなく箱型のものである。エナの外觀と縦断面で、汲み込まれた塩水が強い日光によって濃度の濃い塩水となって、横のクダから流れ落ちる姿がよくわかる。

## 最後の塩田開発事業、奈多塩浜築堤工事

1) 嘉永2年（1850年）

この年は、大雨大洪水のため元禄築堤（沖の土堤）は数箇所決潰し、塩田、田畑は荒廃する大騒ぎとなった。古老の言い伝えによると、「憐れむべし当年の塩浜を無防備の潟州とし、荒天一度襲来せんか、海水奔騰して田畑を浸し、そのいたましい被害の実況は、想い起す元禄以前の惨状のようで、人々は互いに海を眺め悄然たるばかりであった...云々」

という有様であった。

## 2) 嘉永3年(1851年)

当時奈多、唐原、和白三ヶ村遠干潟地を拝領していた矢野六太夫は、この際この沖に更に突き出して一大築堤をし、塩田を拡張した方が有利と判断し、藩に願い出て許可を得た。矢野氏は松本平内に工事責任者になってくれるよう依頼した。松本平内は藩の御咎めを受けて隠居身であったが、六太夫の切なる願望により陰の力となって協力する事になった。



三苫の塩田まで博多湾岸より約1500m、海拔は1.8m、下和白の唐原まで約700m、海拔は2.8m、大風高潮あれば、旧和白町の田畑が水面下になる

設計実施の請負人には、周防楯浜の村武甚左衛門と塩屋喜久蔵が選ばれ、楯浜から和八という専門家が和白の現場へやって来て、詳細な見積りを始める等、計画も具体化した。

## 3) 嘉永4年(1852年)

新春早々着工の計画であったが、黒船騒動で矢野六太夫が長崎出張、藩財政がいよいよ窮乏して工事まで手が延びなかったのか、遂にこの年は着工出来ないまま越年した。

## 4) 嘉永5年(1853年)

元禄築堤も完全補修されず、新しい沖への堤防も手のつかない状況のまま、再び大風高潮が襲来、奈多～下和白の元禄築堤は徹底的な大破損を蒙った。「その海水の及ぶ所は、遙かに下和白、三苫の田畑を浸し、折角作り立てた作物は一望漠々、見渡す限り焦茶の田園と化し、人々は草木の根をかじり、或いは立花村あたりまで米や野菜を借りに行く有様であった...云々」と伝えられている。

不思議なのは、これ程の惨事があり、而も沖の築堤計画中だった矢野六太夫の名前が全く出てこなくなった事である。或いは矢野が藩政多忙で直接自分がたずさわれないため、工事の責任者を郡奉行に依頼したのかも知れない。この矢野六太夫に替って登場してくるのが、粕屋、宗像両郡の郡奉行をしていた肥塚次郎右衛門と云う人物である。肥塚も矢野六太夫が依頼した松本平内の沖の土堤築造計画は知っていたので、早速、松本平内を訪ね、協力を懇請した。平内の覚書の中には次のように書かれている。

『肥塚次郎右衛門の依頼によって奈多新開築立にかかる 身分柄 固辞いたしたく候ども 其辺は屹度道を開き可被申に付 安心いたし かかり候様談有之.....云々』

## 5) 嘉永6年(1854年) 奈多塩浜築堤開始

藩財政の窮乏を知っている平内は財源を民間に求め、藩の御用商人である大山忠平氏に

協力を求めた。大山氏は石橋七蔵、藤崎貞次の両氏に計画を相談し、博多の三豪商が資金協力する事で話がまとまった。かくして「築堤願書」は、御勘定奉行生田吉右衛門、財事元締小河専太夫を通じて、立花弾正の裏印を得て許可された。



newly established salt field development site was set up, and the chief engineer was appointed to Wada Monbuemon, and the assistant engineer was appointed to Yamada Sotaroemon.

嘉永六年奈多新開築堤に当り、只今の雁ノ巣宝塚の地に仮に役所を置いた事のわかる地図

その他の役人が任命され、松本平内の組内として、着工の部署手配が完了したのは4月12日だったと云われている。

#### 6) 安政2年(1855年)

一の浜(一の開)の第一期工事(雁ノ巣~塩浜船通し)も完成に近づいて、内側の塩窯施設も進捗していった。工事の総監督 松本平内は、前借米御指紙仕組失敗後、隠居を仰せつかっていたが、この年御咎め御免となった。奈多築堤の大工事が成功裡に進捗していた事も大きな理由であったに違いない。(ちなみに松本平内氏は、現在北九州市戸畑区の素封家、松本健次郎氏の曾祖父に当り、安川男爵家の裏表といわれる)

第一期工事は8月中旬完工し、内側には20町歩の塩田と11釜ほどの塩焼釜も完成した。これにより第二期工事(塩浜船通~和白川)も12月より着工された。

#### 7) 安政3年(1856年)

予想以上の成功に喜んだ藩側から第三期工事(和白川~槇の鼻=今の片男佐)の計画が持ち上がった。しかし数ヶ月に及ぶ大阪その他各地での大山忠平の金策は困難をきわめ、第三期工事の夢は消え去った。安政2年に始まった第二期工事は、資金難の中にも営々と続けられた。この頃の工事の模様を、高浜の浜崎百松氏(故人)は次のように話された。

『堤防工事には坪当り六十人ぐらいで請負い、郡内全域から農民達が人夫として狩り出されていた。堤防用の土は片男佐の槇の鼻を崩して舟で運び、石は遠く糸島から運ばれました。当時の石屋さん達は、前方の下の方、郷部小屋と呼ばれていた小舎を作って住んでいたが、その中には奈多から嫁さんをもらって住み着いた人もいました。』

#### 8) 安政4年(1857年)

新開築堤の推進力の中心だった大山忠平が、3月12日、その生命を打ち込んだ干拓事業の途中で亡くなった。資金の大黒柱の死去と、今後どのくらい資金が必要か、その前途に不安を感じたのか、或は大山忠平と同様に、家族親戚一同の猛反対に恐れをなしたのか、

恐らくそれら総てが原因で、資金柱の一人、菊野屋貞次も手を引いたらしい。残るは松本平内と鳥羽屋七藏。こうした中に工事は着々と進められて行った。

#### 9) 安政5年(1858年)

新開築堤の総監督 松本平内は、その後再び藩の財政担当官として重要視されたが、安政4年ころより病状思わしくなく、7月に大阪から帰国すると間もなく病床につき、同27日遂に71歳でその多端の生涯を閉じた。

次々と柱を失った新開築堤工事は、最後に残った鳥羽屋七藏を中心として営々と進められ、無事「塩浜船通し～和白川の間」350間の第二期工事を、この年の暮れ近く完成する事が出来た。朝日新聞の記者、永島節郎氏は「博多と福岡」と言う本に、次のように書かれている。

『堤上巾三間乃至四間。堤下基盤十四～十五間。高さ一間半乃至二間の築堤が、外面を堅固な石垣として延々千三百五十間、或は二十三町(土木管区の調査実測によると千三百七十七間半=筆者注)三ツの屈折を描いている壯観は……これを対岸の槇の鼻から遠望すれば、或は小さい万里の長城か、或は在りし日の元寇防塁の再現か、兎にも角にも偉観四隣を押し……それはただに当時の人々の目を驚かしたばかりでなく、今日何人かその大工事、大構築に一眼驚異の目を開かない者があるであろうか。蓋し幕末随一、否福岡藩有数の一大工営であらねばならぬ……』

こうして新開大築堤は、嘉永6年4月着工以来、幾多の災害困難と戦い乍ら、六年という歲月苦楽の積み重ねを経て年末に竣工した。

#### 10) 安政6年(1859年)

この年の年頭に、藩庁から次のような褒詞が最後まで頑張った鳥羽屋に下された。

鳥羽屋七藏

金 千五百六拾兩

裏粕屋郡奈多、塩浜、下和白、三ヶ村抱洲開汐除土手 先年大風雨 にて及大破候に付同所地先潟塩浜新開仕整申付置候処 入用金之右之通り出金致し 外側築立相済御開にも取掛り 格別精出し候段 奇特之至り 及御沙汰候 依而格別以て俵代迄五人扶持被下候 猶又速に致成成就候様出精可致行事

未正月

その後の事について、前記永島節郎氏は同書の中で、次のように書いている。

『かくて築堤は出来あがった、築堤が出来上ると、築堤内の一大整地が行われ、ここに水路を特設した新しい塩田ができ、さきに中国、九州からやって来て築堤工事に働いた人々は、安政六年二月、全事業の完成と共に互に懷を豊かにして郷里に帰郷したが、帰れない人々は新居を構え、多望なる奈多、塩浜に塩を焼たり、甘藷を作ったりして土着し

たいという事で、この千三百五十間の築堤内には、当時既に二十町歩の埋地が出来、日に月に塩窠の数も加わり、二ヶ所に開かれた船入れには荷役船は勿論、多数の漁船も出入して、永年波浪浸害に悩み抜いた和白、塩浜、奈多の三ヶ村も始めて安堵の喜び、生活の潤いを神に感謝したに違いない……』

この10月藩庁は再び褒詞を、最後まで出精尽力した鳥羽屋七藏に下された。

#### 鳥羽屋七藏

裏粕屋郡奈多、塩浜両村抱塩浜開立に付 追々余分の出銀等致居り候段相達候 此節 依頼右塩浜其方受持分被召上候 依之別段の以御詮儀俣代迄被下置候五人扶持 永代被下 苗字名乗候儀 指免猶又御 料理頂戴申付候事

十月

以上で築堤大工事は無事完了、製塩は藩営とされた。この塩田の塩は非常にきめ細かく『和白塩』と呼ばれ藩財政に大きな貢献をした。この新しい塩田は、元禄築堤により出来た「塩取浜」の製塩法とは異なり、末信留吉氏（故人）の話によると『一の開の塩浜分は立派な塩田で、三ッ並び毎に低い堤防で仕切られていた。その各ブロック毎に一間から一間半くらいの浅い引溝が引いてあり、その溝から潮水を柄杓で汲んでは塩田に撒布し、濃度の高い潮水をとるようにしてあった。それで井戸式の潮取浜の塩田に比べると、作業は非常に楽だった』という事であった。

#### 11) 慶応2年(1866年)

新開築堤によって新しく「一の開」「二の開」が開発され、二ヶ所で製塩作業が開始されたが、第二期工事で出来た「二の開」塩田は塩つきが悪く、この年遂に廃止され畑作へと転向していった。

#### 12) 明治13年(1880年)頃

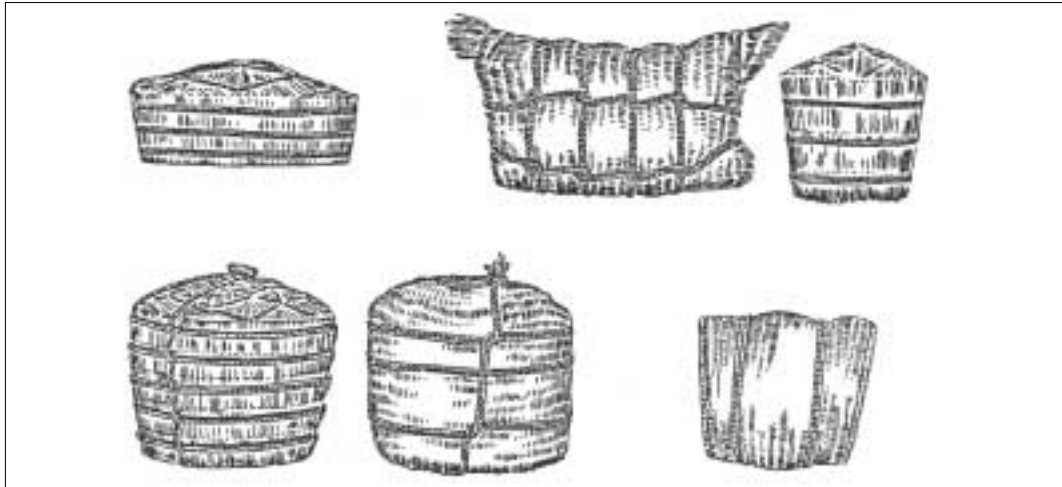
このころが和白塩の全盛期だった。当時の記録によると塩田面積9町6反、内訳は「一の開」が5町8反、塩取浜が3町8反ばかりであった。この両塩田の塩を焚いた釜跡には、最近まで石炭の焚きかすが黒く砂土と混合して、一種独特の地域を造成して残されていた。

製塩作業は大体田植えがすんでから始まり、10月一杯ぐらいで終わったようである。冬は塩の付きが悪いので休業していたと伝えられている。

出来た和白塩はかます吠に入れた。この塩吠は塩をつめ込むと高さ30cm、巾が40cm四方くらい。これを梅の花型に荒縄でしばった。塩吠には何も印は書かなかったが、梅花型の塩吠が、良質塩として有名な『和白塩』のトレードマークとなっていた。

和白塩の吠は小型だったので、これを編む材料の稲藁も、出来の良い山つきの長い藁は不向きで、秋落地帯の塩浜の短い藁が適していた。或いは塩浜には短い稲藁しか出来なかったのも、小型の塩吠しか作られなかったというのが本当かもしれない。しかしながら、

この小型梅花型が優良塩のトレードマークだった事は事実である。



塩俵の様々な包装（大日本塩業全書より）

### 13) カネン手波止場

カネン手波止場とは、「元禄築堤」和白駅から奈多団地へと走る畑添いの道で、丁度中央部で「く」の字型に曲り、五丁川樋門となっている「新開築堤記念碑」が建っているあたり。奈多団地から来ると、樋門橋を越え、ぐるっと和白方向へ向う道路の右側一帯は、海水が入り込んで船を引上げて泊らせる入江になっていた。

このカネン手波止場について、浜崎百松氏（故人）は次のように話しておられた。

『この新開築堤が出来た時、この波止場が作られた。ここが和白と博多を結ぶ最高の舟着場、今で言えば交通センターか駅みたいになりました。以前は奈多の宝塚から積出されていた貢納米や和白塩も、次第に便利の良いこのカネン手波止場へ移るようになり、ここに大きな倉庫や酒屋、この外二、三軒の家があった。その酒屋は阿部勘兵衛さんといった。

明治七年の地租改正で租税が現物納から金納制になり、裏糟屋郡の米が集らなくなって貢米を運んで来る人々も来なくなり、次第にさびれていった。酒屋さんも今の福岡市の消防署支所附近へ引越して行き、昔の賑やかさは消えた。店がまだ盛なころは近くの塩田で裸体に赤ベコ姿で塩取り水作業をしていた塩浜の人達が、赤鬼のように陽にやけて、この酒屋へ来て「角打ち」しとんだったが、仕事も激しかったろうが、酒も仲々盛んで、酒店も大繁昌だった云々……』

### 14) 明治34年（1901年）

この年、博多湾鉄道（今のJR香椎線）が塩取浜の塩田の真中を通ることになり、用地買収問題が起こった。塩田の真中を、真っ二つに横断されては大変だと大問題となった。しかし、お上に弱く且つ純朴な、当時の農村人、結局は線路の南側に、塩焚用の巾一間の道路を鉄道側で作るという条件で妥結した。



これで塩取浜は線路の北側は塩田として利用できなくなった。



15) 明治42年(1909年)

塩が専売制となり、政府は不良塩田の取り潰し、優良塩田の助成を行うこととなり、この年、当時熊本専売局長官だった浜口雄幸(後の有名なライオン首相)が、調査のため塩浜に来村した。

その結果、塩浜の塩田は規模が小さく、引合わないとして廃止される事となった。そして翌43年9月を以て、製塩作業は廃止された。

当時の塩田面積は7町8反、年産額1,193石だったと伝えられている。

こうして、二千年に近い歴史をもつ、志賀ノ浦、奈多、三苦、塩浜、上下和白の製塩の歴史は終りをつげた。

#### 参考文献

大山文書(大山家より福岡市博物館へ寄贈された文書)

- (1) 由緒書(2) 上坂日記(3) 鋤初之式(4) 御新開手形紙申受摺立一切員数改手控
- (5) 奈多浦出方日記(6) 土手繕普請入目覚日記(7) 大阪行銀談不調帰国御届手控
- (8) 奈多浜築堤図(9) 新開諸品買上値段高下口と掛合状
- (10) 奈多塩浜築堤に関する書状(11) 奈多塩浜堤に関し口達控
- (12) 御新開御手形御改御判申受ル為メ指出候証拠之事
- (13) 請取(預手形九千七百枚)(14) 奈多新開築堤秘話(15) 奈多新開築堤手形

## ふるさとの石像物

### 旧上和白地区

(現在の和白1、2、3、4丁目 和白東1、2丁目 高美台)

#### 1) 弥勒菩薩(和白東 岩崎 巖氏邸内)

筑前国風土記拾遺に『弥勒堂村西に在り ミロク田という田字有り』と書かれている。昔、明覚寺にお預けしてあったが、岩崎家の人々が次々と原因不明の病気になるので、ご祈祷して頂いたところ「もとの所へ帰りたい」とのお告げがあり。昭和26年ミロク様を明覚寺より頂いてきて、もとの場所より4m程南に御堂を移築し、7月23日を例祭として、お祀りしているとのこと。糟屋郡北部新四国千人参り「番外」の札所。



弥勒菩薩の御堂

#### 2) 地藏堂(小金丸 清邸内)

昔は小金丸三六氏との邸境に祀られていたが、今は小金丸清邸内入口右側。「たちえ地藏菩薩」「延命地藏菩薩」「ひざり地藏菩薩」の三体が祀られている。毎年7月24日、近所の人々が集まって、お祭りをされている由。糟屋郡北部新四国千人参り「番外」の札所。

#### 3) 小型の五輪の石塔(上和白明覚寺内庭)

西暦1500年頃の石像と推定されるも不明。筑前国続風土記拾遺に『永禄十年(1567年)九月八日 怒留湯入道 和白の山上に宿陣せしことあり その地定かならず 今 向村(公民館のある地区)の前なる田字を陣造りという この遺名にや そこに立花井とて出水有り 里民いう 昔 立花の出城有りし時 陣用に汲みせし泉なりといえり 側の畠中に五重の石塔あり 由来不詳』とある。



明覚寺内庭の五輪の塔

#### 4) 白川稲荷社

「汐井路」を東に進むと右手に「白川稲荷」の鳥居が見える。石段を登ると、小高い丘の上に御手洗家がある。同家は

「黒田藩の財政を支えてきた博多の豪商、禁制の貿易が発覚して、一族全部が処刑された伊藤小左衛門（1667年）」ゆかりの家。御手洗正行氏によれば、昭和14年頃、小左衛門の霊を静かにお祀りしたいと母が言い、此处に移って白川稲荷様をお祀りしているとの事。



御手洗氏邸内の稲荷社

#### 5) 薬師堂境内（字薬師ヶ浦）

「お汐井路」の最奥、小径を少し上がると左側に小さい溜池が沈んでいる。昔から雪が降って他の溜池等が凍っても、ここだけは一度も凍った事がない。村人達は此の地域を「湯の浦」と呼んで来たという。

続風土記付録に「薬師谷に温泉址という古池が、側に薬師堂が、カタハラに貴船社、中和白に観音堂がある...」と記す。

・薬師堂 本尊薬師如来像、1700年頃からと推察される。左下に手洗鉢『安永六酉（1777年）四月吉日 当村若者中』と刻書あり。粕屋郡北部新四国千人参り76番札所。

・地藏堂 当初、船越 博氏の屋敷裏三叉路の竹林の中にあっただが、大正14年頃、薬師堂の左側に移された。昭和初年頃までは、薬師様と共々上和白全村でお祭りを行って来たが、現在では毎年7月28日、上和白上組、下組で「お籠り」をして祭っている由。

・一字一石の塔 薬師堂の傍らに横たわる石塔。表面に『奉納大乘一字一石塔、安永三甲午年八月吉祥日』、裏面に『法命還山自休居士謹拝寫 俗名 当村住安河内孫右衛』と刻書がある。高さ120cm程の丸型の自然石。



薬師堂境内に安置のお地藏様

#### 6) 大神神社境内石像（高美台二丁目）

・庚申尊天（左） 自然石に享保三年（1718年）の刻書があり「お汐井路」と明覚寺に通ずる三叉路に、貴船神社と共に鎮座されていたが、大正14年、県の指導により、貴船社と共に現在地へ移し祀らる。

・庚申塔（中央） 『享和三年八月吉日（1803



大神神社境内の庚申様

年) 中和白若者中』との刻書あり。当初は中和白(和白東二丁目)の集落の東端に「明治43年11月建之」の「日清、日露戦役記念碑」と共に鎮座されていたのを、庚申尊天と共に移し祀られた。

・庚申登(右) 享保三年(1718年)八月吉日の刻書あり。庚申尊天と同様の経暦の塔であろう。



安河内八郎氏旧邸内の幸神天

#### 7) 幸神天(安河内八郎氏邸跡)

中和白山道 下和白の大神神社 殿様道 字高見、宮ノ前を径由して(平山、下原の昔の参勤交代路)に通じる三道の三叉路に当たる要地に鎮座。『寛政十二年庚申(1800年)十月若者連中』の刻書がある。

#### 8) 六地藏(安河内勝男氏邸)

安河内卯蔵氏(故人)の話では、「1850年頃、上和白のあぜ道で苦しんでいた修行僧を、祖先が家へ連れ帰り看病した。その僧が『此の付近に祀ってある観音様のサワリらしい。付近の観音様を手厚く祀ってください』と哀願した。驚いた私の先祖は方々の観音様、お地藏様、字「古賀堀」にあったおしせ地藏様など6体の石仏様を集め、安河内家墓地の入口に御堂を建ててお祀りした」という。



安河内勝男氏邸内安置の六地藏

#### 9) 観音堂(安河内 亮氏邸斜め上の山)

和白東二丁目19番、中和白住宅地裏山の展望説競の高台にある。続風土記付録に「ナカワジロに観音堂がある」と記されていることから、1750年頃にはあったものと思われる。御堂前には天保13年(1842年)奉寄進の石灯籠がある。

#### 10) 康神霊(安河内 亮氏邸横)

御堂敷は明覚寺の所有で、「康神霊」と珪化木に記されている。

11) 庚申尊天 (安河内鹿良氏邸内)

上和白から中和白への入口『大木戸』と称する三叉路から現在地に移された。「寛延三庚午年(1750年)三月中七日」の刻書がある。傍らに「明治四十年三月康河内邑次郎建立」とあることから当初の路傍から移されたことを物語る。



安河内鹿良氏邸内の庚申天

## 旧下和白地区

12) 塞(さや)の神(福岡工業大学前)

福岡工業大学グラウンド側の小丘の上にある。平家方にその人ありと知られた悪七兵衛景清の娘、人丸姫を祀る。姫は自分の性の苦しみから父である景清に首をはねられたために、花柳病、陰茎に悩む人の祈願をかなえてくださるという。



福工大前の塞の神

13) 久保田與三左衛門墓碑(長楽山 円相寺境内)

塩炊きと狸の話「與三兵衛はドンギラギン」の主人公。当初は下和白墓地にあったが美和台団地造成にあたり、円相寺裏へ移された。

14) 不動尊像2体(長楽山 円相寺境内)

昭和56年に始まった美和台団地の拡張工事で発見され、円相寺へ移された。どちらも痛みがひどく、一体に僅かに元禄とおぼしき「元」の一字が残る。

15) 円相寺境内石仏(長楽山 円相寺境内)

・弘法太子堂 糟屋郡北部千人参り「奥の院」、堂内には地藏尊と弘法大師蔵が安置されている。

・観音像2体 旧相ノ浦墓地「太田武墓地」の向かって右側にあったが、美和台団地造成の折に移された。小型の弘法大師像と観音像。

・安貞大徳墓碑 円相寺二代目住職安貞和尚の墓碑。天和～貞亨の頃。



円相寺内の大師像と観音像

## 16) 安河内 元氏邸内3仏

- ・不動明王像 元禄11年(1698年)の建立、昔はこの不動様の前で子供達の「夏祭り」が行われた由。
- ・阿弥陀如来像 大正元年(1912年)に安置された。
- ・薬師如来像 大正7年糟屋郡の野より移された。糟屋北部千人参り40番札所。



安河内元氏邸内の薬師如来像

## 17) 地藏尊像(字地藏後)

和白丘二丁目、県道26号線沿いに寛政年間(1798年頃)と思われる数体の地藏尊像がある。所謂「殿様道」に面し、昔は「六地藏」と称せられていたという。字名「地藏後」と呼ばれるほど有名であったらしい。



字地藏後の地藏尊像

## 18) 庚申天塔(安河内昭氏邸南三叉路)

和白丘中学東南方、正徳4年甲午(1714年)の刻書あり。当時は病魔、病鬼を追い払い、道行の安全を祈るため、黒田藩が集落の入口等に道祖神建立を奨励していた。



和白丘中東南の庚申天塔

## 19) 入定塚(長楽山 円相寺境内)

和白丘三丁目付近にあったが住宅開発によって円相寺に移された。土地の人は「せいぞう様」と呼ぶ石像。約150年ほど前、修行僧が即身成仏されたという。



太田 武氏邸裏手の観音堂

## 20) 相ノ浦の石仏と観音堂(相ノ浦)

- ・相ノ浦前三叉路「庚申天」
- ・観音堂 太田 武氏邸の裏手。堂内中央に大師像(元禄期?)、左に観音菩薩、右に三体の座像。大師像以外は明治中期のもの。糟屋郡北部新四国千人参り77番札所。
- ・波切不動尊蔵 観音堂の右側にあり、彫字は読めない。
- ・長楽寺 吉松誉安貞大徳墓標 波切不動尊碑の前。年月ははっきり見えないが、貞亨年間(1685年頃)正月。



太田 武氏邸裏手の観音堂

21) 大師堂 (和白駅前)

和白駅前通りにあり、糟屋北部千人参り78番札所。大正12年6月吉日の記載あり。「弘法大師」「十一面観世音像」「不動明王」が並んで配置されている。



和白駅前的大師堂

塩浜地区

22) 観音堂 (塩浜西の入口)

塩浜 (学校道) 西側入口にあり、糟屋北部千人参り72番札所。観世音菩薩、弘法大師 (安永8年、1779年) 地蔵菩薩、薬師如来の四仏が祀られている。毎年、高浜の「上野上人」を招き、5月8日に「観音様祭り」、7月23日には「祇園祭」として地蔵尊祭りを公民館で行っている。



塩浜 観音堂

23) 鞆の神 (久保田為雄氏邸内)

通称「勝ヶ崎」の鼻先に祀られていた。勝ヶ崎の名は神功皇后の三韓征伐以来、この鞆の神に詣れば戦に勝つとの言い伝えから起こったという。1600年頃より以前に祀られたものと思われる。



久保田為雄氏邸内の鞆の神

24) 庚申塔 (四社神社境内)

宝暦7年 (1757年) と刻書されている。塩浜の氏神である四社神社御遷宮祭を機に現在地へ移された。

25) 龍王祠 (四社神社境内)

塩地守護のために宝永三年 (1707年) に建立された。当初字「白浜」にあり、年1回の日籠りが行われ、子供相撲を奉納していたが、昭和3年に現在地へ移された。大野貞勝が奉納した「六歌仙」は今も大切に保存されている。。



四社神社内の龍王祠

26) 波切不動尊 (「一の開」築堤)

慶応2年 (1866年) 4月。新開字「一の開」築堤上にあり、かつては築堤の安全を祈願して、奈多高浜「清林」さんを招いて盛大に日籠りが行われていた。

## 三苦地区

### 27) 正覚坊石碑 (堺 憲一氏邸角)

堺 憲一氏邸東北隅三叉路に面し、寛文9年(1669年)11月の刻書がある。宝満山の修行僧「正覚坊」の石碑と伝えられる。

### 28) 庚申天 (堺 純太郎邸三叉路)

三苦中央部三叉路にあり、寛政9年(1797年)正月の刻書。

### 29) 青面金剛石碑 (永吉政昭氏邸三叉路)

三苦旧貫線道路中央付近三叉路にあり、享保2年(1717)丁酉8月13日の刻書。

### 30) 観音堂 (購買店前四叉路)

三苦購買店前にあり、観音尊像3体が祀られている。



三苦購買店前の観音堂

### 31) 三苦大師堂 青面金剛石像 (永吉政昭氏邸裏)

旧般若寺跡と伝えられる。大師堂は1720年頃の建立と伝えられるが、当時は三苦の第一号貫線道路の三苦への入口にあたり、村の北入口を守護される石仏であった。昔はここに大樹があり、昼尚暗く、夜独りで歩くと「馬の脚が下がってくる」といわれた。



永吉政昭氏邸裏の青面金剛石像

### 32) 森の屋敷稲荷社 (字高田)

三苦字高田、通称「森の屋敷」にあり、豊漁祈願と紛失したものが出てくるというので参拝する人も多かったという。

### 33) 綿津見神社境内3仏

- ・庚申天 文化13年(1816年)4月吉日の刻書
- ・庚申天 文化10年(1813年)の刻書
- ・庚申塚 天文14年(1545年)の刻書。和白地区で2番目に古い庚申塚。



森の屋敷稲荷社



34) 綿津見神社境内2神

・若宮様 コンクリートの小祠に鎮座。祭神は仁徳天皇で農耕の神。

・三宝大荒神碑 若宮様の隣に祀られる。竈の神。



綿津見神社境内の若宮様

35) 黒津神社 (綿津見神社境内)

磨き石の小祠に鎮座。祭神は「武内宿彌」。久山町山田にある「黒男神社」と同一神で希有の神社。

36) 須賀神社 (綿津見神社境内)

磨き石の小祠に鎮座。日本地名大辞典に「ヤマノカミにある舞神社(祇園)では、奈多の三郎天神(志式神社)に神技を奉納する神官が、同社で舞楽を奏した後、三郎天神へ行った」と記してある。この舞神社が須賀神社のこと。

37) 虚空蔵菩薩 (綿津見神社境内)

810年頃伝教大師最澄の作と伝えられる。

38) 文殊菩薩 (参道崖上)

三苦公民館より綿津見神社への参道左側の海岸断崖上にある。通称「お文殊さま」。



虚空蔵菩薩

39) 久野貞右衛門墓碑 (三苦生協団地海側)

40) 庚申尊碑 (字山ノ内松林中)

三苦字「山の内」の松林の中にあり、天明五己年卯月上旬(1785年)の刻書。

41) 庚申尊碑2体 (旧村営避病院跡東側)

・庚申尊 現在の「高浜2組」の南側に和白村当時、村営の避病院(隔離病舎)があった。その竹藪の中に庚申尊碑があり、天明5年(1785年)乙己初冬吉辰の刻書があったというが、現在不明。



松林内の庚申尊碑

・庚申碑 避病院の北裏手を走っていた「大砲道」に沿って、牟田口正登氏邸内にある。  
 建立年月等の刻書もなく、いつの頃のものは不明。

## 奈多地区

### 42) 南無青面金剛碑 (高浜入口)

奈多高浜町の東入口にある。正徳6年(1761年)丙申6月吉日の刻書。奈多には「三ツ井と七庚申」の言い伝えがあるが、典型的な集落入口を守護される庚申様で、台座には格助、弥平、伝七、新七などの刻書がある。



牟田口正登氏邸内の庚申碑

### 43) 地蔵堂 (高浜入口四叉路)

「高浜青面金剛」の西側四辻にある。文化3年(1738年)の地蔵尊を中央にして、十一面観世音菩薩(文化7年、1816年)等3体を祀る。「糟屋郡北部第79番、新四国金花山天皇寺、十一面観世音菩薩」と書かれた札がある。



高浜入口の青面金剛碑

### 44) 六地藏仏 (西福寺裏墓地入口)

奈多西福寺裏山、旧墓地西南端入口にある。天明元年(1781年)頃祀られたのではないかと推定。六地藏と呼ばれているが、十仏が合祀されている。



奈多入口の地蔵堂

### 45) 西福禅寺周辺の石仏

#### ・おすが地蔵 (西福寺裏墓地入口)

六地藏の西隣に祀られている。「いぼ地蔵」が小瀬抜にあつた頃、栗川 栄氏の伯母の「おすがさん」が一体のお地蔵様を併せて祀っていた。昭和14年雁ノ巣飛行場拡張の折、現在地に祀られた。



西福寺裏山の六地藏仏

#### ・いぼ地蔵 (西福寺裏山西方約50m)

石祠の中に祀られている。小瀬抜のいぼ地蔵(52)が雁ノ巣の栗川利雄邸内に移る時、一部が分祀されたものらしい。お地蔵様に供えてある円い小石で子供のイボをさすると、たちまちイボが落ちると有名で、イボが落ちるとその小石を清



おすが地蔵

めて再びお地藏様へお参りして返納したという。

・弘法大師像（いぼ地藏の東側）

笠蓑を背負い杖を手にした50cmほどの立像で、台石正面に「修業」、裏面に昭和18年5月浜崎宗之助他6、7名の名が彫られている。

・百度石（いぼ地藏の前）

表面に百度石、裏面に昭和7年6月、西戸崎 筋永...の彫書。



弘法大師像

百度石

46) 石像群八十八体（西福寺境内北端）

最古の仏像は明和2年（1765年）の刻書がある。

糟屋郡新四国千人参り80番札所。正面中央の弘法大師を祀る祠には「新四国白牛山国分寺千手観世音菩薩 明和8年（1771年）」の額が掲げられている。当初は西方の今林



西福寺境内の石像群八十八体

市三郎氏（故人）方北側にあったが大正2年3月13日の奈多の大火事で西福寺が焼失、現在地に再建されたとき東裏地（現在の平和塔前）に移された。昭和49年の西福寺改修工事に当たり、再度現在地に移された。

東から「一番釈迦如来 霊山寺」「三番釈迦像 金泉寺」「五番虚空蔵菩薩 今林伊助」などと刻書がある。



稲光宮司家前の庚申天碑

47) 庚申尊天碑（西方参道稲光邸前）

稲光宮司家前の崖の麓にあり、延亨...（1745年頃）の刻書がある。

いわゆる「奈多の七庚申」の一つで、集落西北方の守護神。

48) 六地藏仏（前方裏山中腹）

以前は前方の今林熊雄氏邸前に祀られていたが、ある時この地藏様を祀る御坊さんに「山の方へ上りたい」とお告げがあり、昭和の初年頃、父熊蔵氏が現在地に祀られたとの熊雄氏の談。紛失物の所在を教えて頂けると参る人が多かったです



前方裏山の六地藏

の事。

49) 猿田彦命碑 (前方須賀神社前)

「延享2 (1745年) 丑歳十月吉祥碑」の刻書。奈多七庚申の一つで前方入口の守護神。猿田彦命を祀ってあるところは、和白地区ではこの須賀神社境内だけである。

50) 志式神社境内の四仏

- ・南無青面金剛碑 正徳6年 (1716年) 丙申六月吉日の刻書。台座には蓮花が刻まれている。
- ・奉命庚申尊天碑 天明3年 (1783年) 八月吉祥日の刻書。
- ・庚申大菩薩碑 建立の年月は読みとれない。

尊天 上半分は読みとれない。正徳3年 (1713年) 五月吉日の刻書。志式神社野舞台西側山林中にある。



志式神社境内の四仏

51) 大乘妙典一字一石塔 (志式神社お潮井道)

玄界灘崖上左側にある。裏面に「天保10年 (1839年) 己亥吉祥日 海印山西福寺 当山敬誌 庄屋今林宇七 同 吉田忠治 願主今林藤右衛門 当浦氏子中...」と刻書。

大阪在住の今林藤助氏の話では、「供養塔ではなく祈願塔で、先祖の漁師の人達が海上安全と豊漁を祈り、お潮井を供えて祈祷された塔」とのこと。



大乘妙典一字一石塔

52) 雁ノ巣地蔵尊2体 (栗川利雄氏邸内)

雁ノ巣東の栗川利雄氏邸の表と裏に各一体づつ祀られる。二体とも御神体も刻書も施されていない。

- ・表に祀られている地蔵尊

字「小瀬抜」の入口に霊験あらたかな「いぼ地蔵様」と手厚く祀られていたが、昭和14年の雁ノ巣飛行場拡張により集落の立ち退きを命ぜられ、栗川惣助氏 (故人) が家とともに現在地に引き移られた。

- ・裏に祀られている地蔵様 (やや長い石一体)

昭和30年頃、栗川利雄氏の借家人の某氏が、



栗川利雄氏邸内の地蔵尊

時々「風に逢う（原因不明の病気にかかる）ので御上人様に  
祈禱をお願いしたところ「俺はお前が通る道端に何百年も前  
から祀られていた地蔵であるが、彼の地が整地されると祀っ  
てくれる者がいなくなった。世に出たい。出してくれ...」と  
のお告げがあった。皆と相談の結果「センダン」の大木の根  
元にあった、それらしい石を探し出し、「この御石様ですか?」  
と再度お尋ねすると、「それでよか」との御答があった。そ  
こで栗川家の裏口に台座をつくり、その上に安置したという。

### 53) 亀ヶ池・亀栖池祭祀場碑（海ノ中道旧町村境界）

雁ノ巣と志賀西戸崎との境界近くの松原の中にある。昭和  
45年の建立。「古風土記」に、「打ち上げ浜の西方三十町ばか  
り 松を植ゆれども打ちあぐる浪 吹き寄する砂に埋もれて  
生立せず 今尚不毛の地なり この地に亀ヶ池 亀栖池あり  
これ志賀大神亀を放ち玉ひし所という」とあり、この池は志  
賀明神の水軍が神功皇后の招きに応じて結集し、両者が手を  
結んだ地として有名で、当時はまだ海岸だったのだろう。こ  
の故事により祭祀場として志賀神社から建立された由。



亀ヶ池、亀栖池祭祀場碑

西 暦	年 号	日 本 史	郷 土 史
BC200頃		水稲耕作始まる	
57		倭奴国、後漢より金印を受ける	
239		邪馬台国女王卑弥呼、魏に朝貢	
350		このころ大和朝廷の統一	
		古墳文化時代 土偶・埴輪	
360			・神宮皇后征西による三苫、八大竜王社（綿津見神社）や轡水の伝説
			・猿（えん）の塚古墳（1基）
550			
552		仏教伝来	
590			・宮の前古墳（3基） 高見古墳群（4基） 和白ゴルフ場内古墳（3基） 上和白製鉄所跡 上和白氏神・大神（おおみわ）神社
604		憲法十七条	
645	大化 二	大化の改新	
673	弘文 元	壬申の乱	
701	大宝 元	大宝律令	
710	和銅 三	平城京（奈良）遷都	
724	神亀 元		・香椎廟創建 和白郷70町歩、三苫郷70町歩
794	延暦一三	平安京（京都）遷都	
800	延暦一九		・香椎四党の一つ三苫重春、三苫に移居
805	延暦二四		・最澄（伝教大師）帰国、立花山麓に独鈷寺、三苫に般若寺建立
901	延喜 元	菅原道真、大宰府に左遷	
903	延喜 三	菅原道真 没	
939	天慶 二	平将門の乱・藤原純友の乱	
941	天慶 四		・朝廷軍小野好古、博多湾で純友軍と戦う
1167	仁安 二	平清盛、太政大臣に	
1185	養和 四	壇ノ浦の戦、平氏滅亡	・三苫般若寺建立はこのころとも
1192	建久 三	鎌倉幕府	
1274	文永一一	元寇（文永の役）	
1280	弘安 三		・聖一国師、奈多堂岸に西福寺開山
1281	弘安 四	元寇（弘安の役）	・大友泰時、奈多から志賀へ蒙古軍追討 三苫水道陸地化か
1330	元徳 二		・立花城攻防戦
1333	元弘 三	鎌倉幕府滅亡	
1334	建武 元	建武の中興	
1336	建武 三		・多々良浜合戦
1339	延元 四	室町幕府	
1467	応仁 元	応仁の乱	
1543	天文一二	ポルトガル人、種子島に漂着、鉄砲伝来	
1567	永禄一〇		・和白の戦 陣造り古戦場
1568	永禄一一		・桂ヶ崎山（塩浜の裏山）での戦
1571	元亀 二		・立花道雪、立花城督（守護代の城主）となる
			・大神神社に燈明田を奉納
1573	天正 元	室町幕府滅亡	
1578	天正 六		・大友勢、耳川の戦で敗退
1579	天正 七		・立花道雪、龍造寺と和議

西 暦	年 号	日 本 史	郷 土 史
1583	天正一一	織田信長 没(本能寺の変)	
1587	天正一五	豊臣秀吉 関白に	
1592	文禄 元	朝鮮に出兵(文禄の役)	・湯谷山 薬師堂(薬師如来)
1596	慶長 元	太閤検地	
1597	慶長 二	朝鮮再征(慶長の役)	
1600	慶長 五	関ヶ原の戦い	
1602	慶長 七		・黒田長政 「三苫村から湊村」を分村
1603	慶長 八	江戸幕府	
1605	慶長一〇		・黒田長政 三苫・湊他13カ所の塩田開拓
1615	元和 元	大阪夏の陣	
1635	寛永一二	参勤交代	
1637	寛永一四	天主教徒の乱(島原)	
1639	寛永一六	鎖国令	
1647	正保 四		・龍華山明覚寺開山 一草堂再興 三苫託乗寺開山(般若寺改め)
1659	万治 二		・奈多の白浜で黒田藩石火矢役人が大砲の訓練
1660	万治 三		・黒田家家臣加藤弥左工門成昌白砂斥鹵に松植林成功
1681	天和 元		・釘ヶ浦池構築(その後5カ所の池構築)
1687	貞享 四	生類あわれみの令	
1698	元禄一一		・元禄築堤工事開始
1702	元禄一五	赤穂浪士討ち入り	
1703	元禄一六		・黒田家家臣大野忠左工門貞勝「奈多・塩浜開き」施工
			・三苫村・下和白村の海浜埋め立て、塩田開発 塩浜村誕生
1716	享保 元	享保の改革	
1783	天明 三	天明の大飢饉	
1784	天明 四		・三苫八大龍王社「風除け相撲」始まる
1789	寛政 元	寛政の改革	・高浜入口(現)の地蔵堂建立
1805	文化 二		・沖の土手破損、三苫付近まで水没
1817	文政 元		・託乗寺七世願念 死没 門徒次第に離散
1831	天保 二	天保の大飢饉	
1832	天保 三		・託乗寺 再興
1838	天保 九	天保の改革	
1843	天保一四		・四社神社境内に「若宮様」一字建立
1849	嘉永 二		・洪水・飢饉続発
1850	嘉永 三		・恩開き堤防決壊
1853	嘉永 六	ペリー来航(浦賀)	
1858	安政 五	安政の大獄	
1859	安政 六	長崎・神奈川・函館 開港	・沖の堤防大事業完了
1860	万延 元	桜田門外の変	
1862	文久 二	坂下門外の変 生麦事件	
1864	元治 元	長州征伐 英仏蘭米艦隊、下関砲撃	
1866	慶応 二		・波切不動尊
1867	慶応 三	大政奉還	
1868	明治 元	五箇条の御誓文	
1871	明治 四	廃藩置県	

西 暦	年 号	日 本 史	郷 土 史
1872	明治 五	戸籍制度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・奈多村241戸1247人</li> <li>・筑前竹槍一揆 観潮小学校開設 踊舞台 下級小学校開設</li> </ul>
1873	明治 六		
1874	明治 七	佐賀の乱	<ul style="list-style-type: none"> <li>・郡役所開設 郡区町村制により三苦・上 和白・下和白・塩浜の四ヵ村発足</li> </ul>
1877	明治一〇	西南戦争 西郷隆盛没	
1878	明治一一		
1882	明治一五	日本銀行設立	<ul style="list-style-type: none"> <li>・出来町入口に奈多駐在所開設</li> </ul>
1885	明治一八	初代総理大臣 伊藤博文	
1887	明治二〇		<ul style="list-style-type: none"> <li>・神理教神功教会発足</li> <li>・奈多白浜で福岡連隊実弾射撃演習</li> <li>・観世音堂建立</li> <li>・和白高等小学校建設</li> <li>・和白村和白尋常小学校新設</li> <li>・宮下の護岸工事開始(明治42年竣工)</li> <li>・塩田廃止</li> <li>・高等科を併設し和白尋常高等小学校となる</li> <li>・奈多大火災 全戸中半数を焼失</li> <li>・塩浜共同風呂</li> <li>・高藤池新設</li> <li>・高藤溜池堤防決壊</li> <li>・名島発電所開設 競艇大会始まる</li> <li>・筑前新宮駅開設 第1回国勢調査実施 和白村人口6,122人</li> <li>・名島水上飛行場開設</li> <li>・白川稻荷神社建立 博多湾鉄道汽船株式 会社宮地嶽線開通</li> <li>・三苦消防組設立</li> <li>・箱崎宮大鳥居建立 宮地嶽線電化</li> <li>・福岡陸上飛行場(雁ノ巣)開場</li> <li>・上和白大水害</li> <li>・福岡大空襲(6月)</li> <li>・和白新制中学校開校</li> <li>・和白公民館開設</li> </ul>
1888	明治二一	市町村制施行	
1890	明治二三	第一回帝国会議 府県郡制施行	
1893	明治二六		
1894	明治二七	日清戦争	
1897	明治三〇	八幡製鉄所	
1898	明治三一	戸籍法施行	
1899	明治三二		
1900	明治三三		
1903	明治三六	日露戦争	
1904	明治三七		
1907	明治四〇	日韓併合	
1910	明治四三		
1912	明治四五		
1913	大正 二		
1914	大正 三	第一次世界大戦勃発 対独宣戦 (第一次世界大戦に参加)	
1915	大正 四		
1916	大正 五		
1919	大正 八		
1920	大正 九		
1923	大正一二	関東大震災	
1924	大正一三		
1925	大正一四		
1927	昭和 二	金融恐慌	
1928	昭和 三	普通選挙実施 張作霖爆死	
1929	昭和 四		
1931	昭和 六	満州事変	
1932	昭和 七	上海事変 満洲国成立 五・一五事件	
1936	昭和一一	二・二六事件 日中戦争	
1938	昭和一三	国家総動員法 配給制	
1939	昭和一四	国民徴用令 日独伊軍事同盟	
1941	昭和一六	太平洋戦争	
1943	昭和一八	学徒動員	
1944	昭和一九	本土空襲	
1945	昭和二〇	原子爆弾投下(広島・長崎) 無条件降伏	
1947	昭和二二	日本国憲法制定	
1948	昭和二三		



西 暦	年 号	日 本 史	郷 土 史
1951	昭和二六	サンフランシスコ講和条約	・ 託乗寺鐘楼落成
1952	昭和二七		・ 福岡カントリー倶楽部和白コース開場 和白鉱山チタニウム原鉱石採取開始
1954	昭和二九	ビキニ環礁水爆実験	・ 町政施行 和白町発足 三苫海岸護岸工事始まる 和白鉱山閉山
1955	昭和三〇		・ 福岡無線学校（現福岡工業大学）開校 和白町立幼稚園開園
1957	昭和三七		・ 明林高校（現立花高校）開校
1960	昭和三五		・ 和白町、福岡市へ合併
1964	昭和三五	東京オリンピック開催	・ 博多老人ホーム開園
1966	昭和四一		・ 畑田・黒山地区土地改良工事
1970	昭和四五	万博開催	・ 美和台・高見台団地宅地造成工事
1972	昭和四七	沖縄復帰（沖縄県発足） 日中国交 正常化 浅間山荘事件	
1973	昭和四八	第一次オイルショック	・ 朝鮮学校初等科開設
1974	昭和四九		・ 美和台小学校開校
1976	昭和五一		・ 和白東小学校開校
1978	昭和五三	第二次石油危機	・ 和白東公民館開設
1980	昭和五五		・ 和白丘中学校開校
1981	昭和五六		・ 奈多小学校開校
1989	平成元年	昭和天皇崩御	・ 京塚古墳発掘調査
1993	平成 五		・ 永浦地区区画整理事業
1995	平成 七	阪神淡路大震災 地下鉄サリン事件	・ 三苫浜土地区画整理準備組合結成
1996	平成 八		・ 三苫小学校開校
1999	平成一一		・ 三苫公民館開館
2000	平成一二		・ 三苫浜土地区画整理組合設立認可 三苫遺跡群第5次発掘調査（翌年完了）
2005	平成一七	福岡西方沖地震	・ 福岡西方沖地震 各地で被害 ・ 三苫浜土地区画整理組合解散精算承認

## 和白郷土史研究会のあゆみ

昭和35年（1960年）8月私たちの「ふる里」が福岡市に合併以後、昭和43年ころから、緑多き白砂青松の故郷の山野に、美和台、高美台、奈多団地と住宅の開発が進んできました。このままの姿で推移すれば、先祖の偉業や伝承の数々は消滅し忘れ去られることになるのではないかと、ということから昭和50年より岩崎三男先生、末信源蔵会長を中心に努力を重ねられ、在郷同志十数名によって昭和59年6月に和白郷土史研究会が発足しました。以来会員一人ひとり研究発表の成果を次の世代に役立つ研究集録にしようと企画されました。

昭和63年2月から「郷土の民族資料」の蒐集活動に入り、農業、漁業関係の古い器具や生活用具等約400点を蒐集、校区の老人クラブの皆さんや研究会の会員及び和白・奈多公民館の協力によって奈多愛育園跡に陳列することができました。平成6年、和白武道館の建設に伴い、二階に待望の「郷土資料室」（床面積140㎡=42.3坪）も整備され、毎年、小学生や見学希望者の要望に応じて稲の脱穀や石臼での粉挽きなど、一昔前の暮らしを体験する貴重な学習機会を提供しています。



平成2年3月には、会員の研究結果より小冊子を刊行することとなり、以下の「ふる里のむかし」を編集発行しました。

- |     |         |            |         |
|-----|---------|------------|---------|
| 第一集 | ふるさと和白  | 「筑前竹槍一揆」   | 平成2年9月  |
| 第二集 | ふる里のむかし | 「石像物編」     | 平成4年6月  |
| 第三集 | ふる里のむかし | 「和白の塩」     | 平成5年8月  |
| 第四集 | ふる里のむかし | 「上和白村の歴史」  | 平成9年8月  |
|     |         | 「下和白村の歴史」  | 平成10年6月 |
|     |         | 「私たちのまち奈多」 | 平成11年7月 |
|     |         | 「三苫村の歴史」   | 平成13年3月 |
|     |         | 「塩浜村の歴史」   | 平成14年4月 |



和白郷土史研究会のこのような会員相互の研究成果の収録と郷土の民族資料室の蒐集活動は、平成12年度の福岡市教育委員会表彰において団体の部で表彰を受けました。受賞の功績は次のとおりです。

「多年にわたり社会教育機関団体として郷土の歴史や文化に関する調査研究及び資料収集とその活用に努められ地域文化の振興並びに青少年の健全育成に寄与された功績は顕著であります」

上述のような活動をもとに、平成15年4月より、既刊の第一集から第四集までを集大成し発刊しようという気運が高まり、会員の努力によってこの度の「ふる里のむかし わじろ」を発刊することができました。

## あとがき

和白郷土史研究会では、変わり行く和白の歴史を研究し、郷土の若い人々にこれを伝承して、少しでも郷土に関しての意識を深めて頂き、祖先に対する感謝の心を高めるためのお役に立てばと願いながら、これまで多くの先輩諸氏の話聞き、或いは古くに伝わる古文書を求めて、学習をかさねて参りましたが、その集大成としてこれまでの研究成果を本書にまとめ発行することになりました。

研究学習を進めるなかで、諸先輩の方々にご協力を頂きましたことを厚くお礼申し上げます。

また、本書発行に対しましては各校区自治協議会の深いご理解と、多大なご支援を頂きましたこと、心から深く感謝申し上げます。

平成18年2月吉日

和白郷土史研究会一同

### 和白郷土史研究会会員

上和白  
小金丸友吉（故人）  
岩崎 三男（故人）  
野口 騰（故人）  
小金丸重生  
小金丸美隆  
安河内卯一  
小金丸瑞穂  
前田 幸利  
仲村みどり

下和白  
末信 源蔵（故人）  
安河内寛行（故人）  
安河内美博（故人）  
小金丸種尚  
山崎 泰雄  
佐藤 悦路  
中村 和子  
安河内福雄

塩 浜  
久保田俊彦  
今林 秀幹

太田 武  
安河内光俊  
久保田永太  
三 苫  
堺 駿策（故人）  
堺 義美（故人）  
堺 廣治  
堺 憲一  
落石 武  
堀内 繁  
堺 徳昭  
濱 謙次郎  
堺 雅子

奈 多  
今林 金伍（故人）  
浜崎 重雄（故人）  
今林 松美（故人）  
今林 実雄  
今林 武光  
山本 孝  
石井 秀子  
末永 慶次

### 協 賛

和白校区自治協議会  
美和台校区自治協議会  
和白東校区自治協議会  
奈多校区自治協議会  
三苫校区自治協議会

和白郷土史  
「ふる里のむかし わじろ」

平成18年2月15日

編集 / 発行 和白郷土史研究会

福岡市東区和白3丁目28番31号

装丁 / 印刷 DesignroomFD